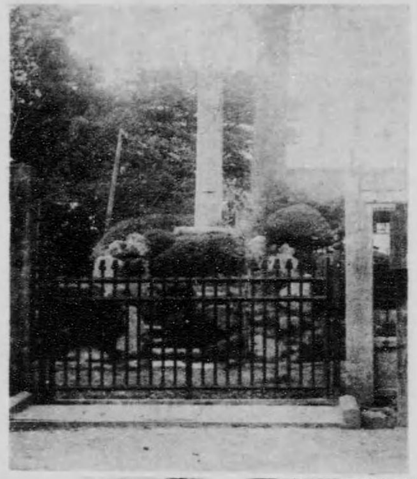
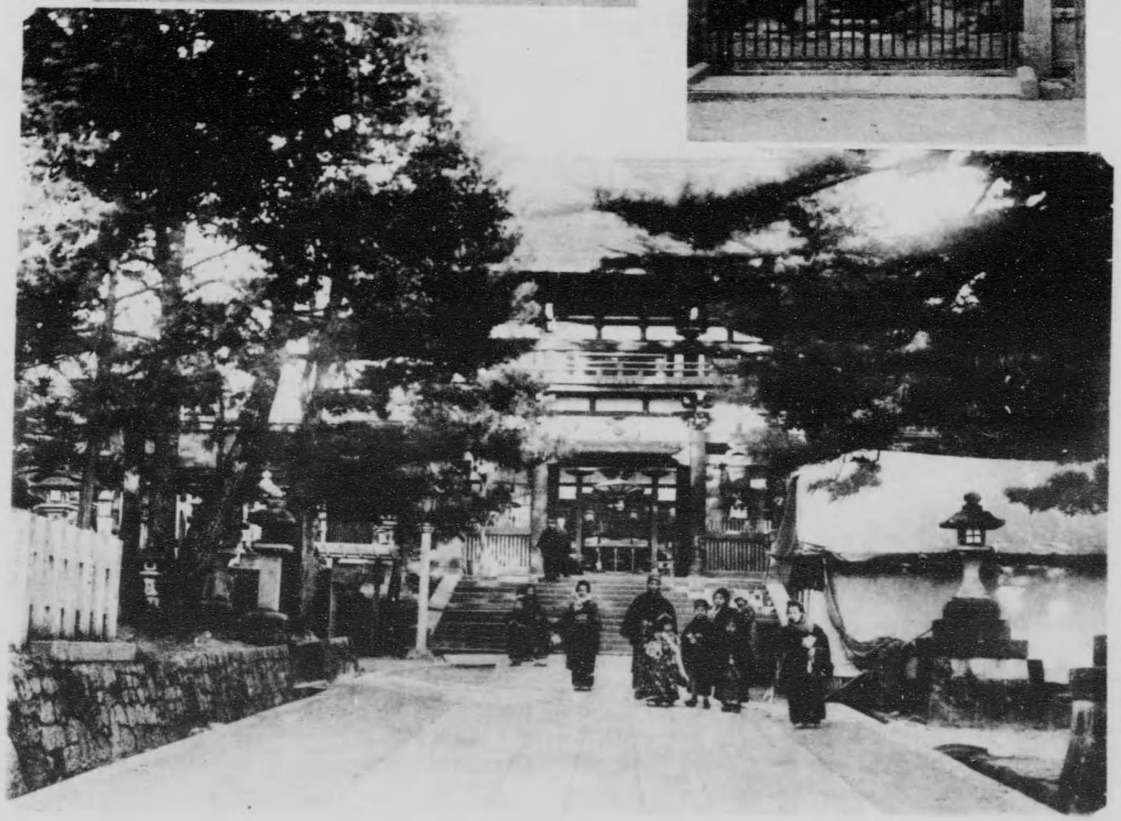
御香宮神社

文珠九助碑



伏見稲荷社大鳥居

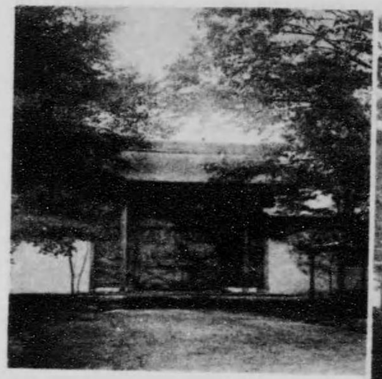
寺田屋事件記念碑



伏見稲荷神社山門

藤の森神社

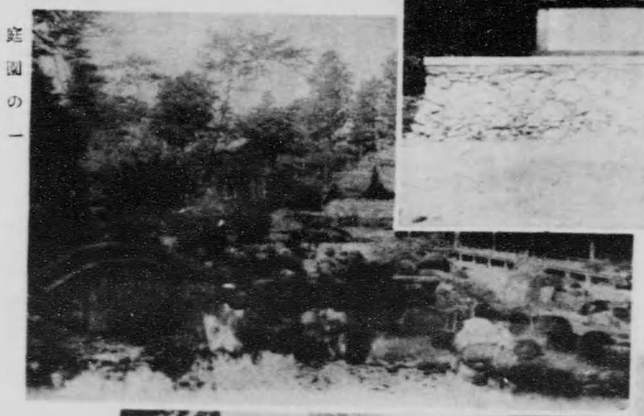
温厚慈仁に富み且つ義侠の質なれば伏見町民は挙つて九助を慕ひ萬事その指導に從ひたれば九助は選ばれて町内の年寄役も嘉納ありて密に久光に依嘱さるゝ所ありたり。此時に當つて薩藩士有馬新七、田中謙助等は關白九條尚忠、京都所司代奏氏の墓なりとも云ふ。華表の内なる馬場の西畔に七基の塚あり、是れ早良親王蝦夷征討凱旋の日敵將の首級及び兵器を埋めたるものなりと傳ふ。



勅使門

醍醐寺藥師堂

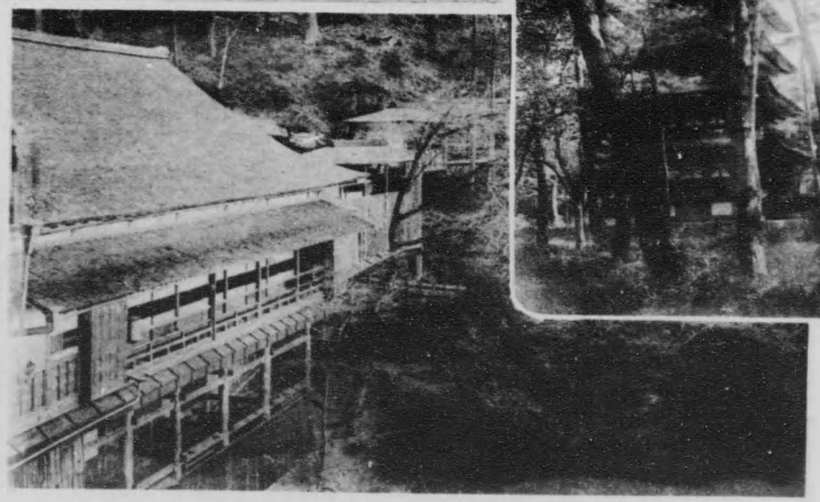
山門



庭園の一

五重塔

庭園の二



上醍醐寺

◉醍醐寺（京都市外）

醍醐寺は京都市外宇治郡醍醐村に在り眞言宗の本山にして亦修驗者の本山たり醍醐村は素と僧聖寶即ち理源大師の開ける所にして、當年の區域は東方醍醐笠王祠は離れて竜取にあり、此祠は往昔「祈雨勅願所」たりし由緒ある古祠たり、而して觀音堂は第十一番の巡禮札所として殊に開ゆ。

◉三寶院と其勅使門及林泉（京都市外）

醍醐寺を以て當山派修驗道の司令と爲せり因て醍醐流は三寶院の所務となり、又聖護院の熊野入を順峰と言ふに對し、三寶院は金峰よりするを以て逆峰と呼びたり

秀吉は嘗に醍醐寺及三寶院の造營に力を盡せるのみならず、深雪と名けたる櫻

●醍醐寺（京都市外）

醍醐寺は京都市外宇治郡醍醐村に在り眞言宗の本山にして亦修驗者の本山たり

醍醐村は素と僧聖寶即ち理源大師の開ける所にして、當年の區域は東方醍醐笠取の二山を籠め近江石間寺に亘れり醍醐寺の寺塔は上下二區に分れ、其建造盛大を極め、明治維新前まで寺領四千石を食み、此寺ありて醍醐の大邑を成せり、今は笠取村を分離し小栗栖、石田、日野の三村を醍醐村に合併す。

寺は貞觀年中僧聖寶の創建に係る、延喜年中官寺となり、延長天暦年間に及んで大に堂塔を修し、法華堂の如きは特に清涼殿を賜はり、爲めに壯嚴を極むるに至れり、其他無量壽、理性、報恩寺の仔院を置き、座主を立て、一山を統べたり。

龜山天皇の二皇子入りて當寺の座主に補せられ給ふ、道性、聖雲の二僧正是れなり、爾後皇子親王の代々入寺せらるゝに至り遂に三寶院を以て一山の門跡と爲せり、座主滿濟僧正は足利義滿と親善にして准三宮に昇る、義演僧正亦豊臣秀吉に知遇せられ之も准三宮となる、文明の兵亂により一山荒廢に傾きし時豊臣氏大に修理を加へ、山上山下舊觀に復するを得たり、現存する堂塔中豊臣氏時代の建造物として觀るべきもの多しと雖も、掲ぐる所の本堂、藥師堂等は其最なるものと稱さる。

其位置を上醍醐の山頂に占め、下二十町を隔つる所に三寶院を置き、東は二谷一嶺を踰へ近江の岩間寺まで區域とせる醍醐寺は、堂塔に至りても亦限極的に一區域中に造營せず、之を八方に點在せしめたり、觀音堂、五大堂、祖師堂、光臺院、經藏等は上記の本堂及藥師堂と共に、本山區域に現存する建造物にして、皆な天正年間の重修なりと言ふ、清瀧沙迦羅龍王祠は離れて笠取にあり、此祠は往昔「祈雨勅願所」たりし由緒ある古祠たり、而して觀音堂は第十一番の巡禮札所として殊に聞ゆ。

●三寶院と其勅使門及林泉（京都市外）

三寶院は下醍醐に在り。

院は醍醐寺座主の住院にして「三寶院門跡」と稱し來る、醍醐寺七世勝覺僧正之を創建し、承久三年を以て竣工す、第廿五世滿正僧正の時當院に住し一山を檢校して公武の信任厚く、遂に一山の座主門跡となる、義演座主の時即ち慶長三年秀吉此に觀櫻宴を開く爲め、金剛輪院の殿堂數宇を造營せしむ、聚樂邸より樹石を移し最も雄麗の構營を爲す、今存する殿堂是れなり、明治三十一年特別保護建造物となる。

當院の勅使門始め都ての建造物は、其營構儼として眞に海内稀覯と傳へらる、就中玄關奏の間、庫裏、表書院、寢殿、純淨觀、護摩堂、林泉門の如きは、容易に模擬し得ざるものに屬すと、而して「九山八海」の林泉に至りては何人も驚異する所、秀吉は當時絲櫻の蔭に左の一首を咏せり。

名も知らぬさくらは寺をあらはして
いつか忘れん花のおもかげ

聖寶好修練、經歷名山靈地、金峰之險徑、役君之後、榛莽無行路、實攀葛葛嵩而踏開、自是苦行之者相繼而不絶、是れ元亨釋書に見ゆる聖寶僧正の行爲一端なり、當時白河法皇は聖護院を導師と爲し熊野より入り給へるも、金峰山踏開ありてより山伏は二派となる、後世其流末往々相爭ふ所ありて、慶長十八年江戸幕府制令して三寶院を以て「小野六流の正嫡」と爲し修驗道の根本と稱せしめ、山伏を分ち眞言天台の兩宗に依囑し、醍醐寺を以て當山派修驗道の司令と爲せり因て醍醐流は三寶院の所務となり、又聖護院の熊野入を順峰と言ふに對し、三寶院は金峰よりするを以て逆峰と呼びたり

秀吉は曾に醍醐寺及三寶院の造營に力を盡せるのみならず、深雪と名けたる櫻樹を醍醐に栽えしめ、其風光を美ならしめたり、醍醐寺に近き長尾邊は秀吉觀花の所として傳へられ「花見山」の字あり。

中原　廣俊

艶陽三月欲闌程　一訪巖扉出洛城
山寺門深春草滿　暮山梯遠碧雲横
櫻桃李色花空盡　佛法僧音鳥獨鳴
塵境隔蹤人事少　松風澗水響彌清

藤原　定家

手向して春やゆくらんちはやふる
長尾の宮の花のゆふしで

●醍醐陵と勸修寺（京都市外）

醍醐寺及三寶院を記せる序に醍醐天皇の山科陵と勸修寺の事を附記せん。

陵は山科小野陵と稱され、山科村大字小野村隨心院の東二町字古道に在り、

夏草のことしけき世にまよひても
なほ末たのむ小野の古道

の古歌に見ゆる小野の古道は此地にして、醍醐寺より北五町を隔つ、又山科村大字勸修寺に在る「勸修寺」は眞言宗に屬し三寶院と同じく法親王入寺の門跡なりしを以て或は山階宮と稱せり。

現在の殿舍は寛永年中寢殿書院成り、延寶年中皇居内侍所を賜はり佛殿と爲す延喜二年濟高僧都長吏職を拜したるより相承三十二世濟範法親王に至り明治維新に及ぶ、濟範法親王復飾あらせられ山階宮晃親王とならせらる、其法親王入寺の事は後伏見天皇の皇子寛胤法親王に始まる、當寺は天皇昌泰三年承俊律師に勅し太后御願に任せ創建し給ひしなり。

庭園の一

淀城址

●男山八幡宮（山城）

歴史の所謂石清水八幡宮は、今の官幣大社男山八幡宮にして、八幡町の上方男山に鎮座す、其頂上を鳩ケ峰と言ふ。

鳩ケ峰は葛城山脈の末梢を爲して、丹波山塊の一端天王山と相對し、此處に山崎の峽隘を作る、山崎の地、西國より京師に入る第一重關たりし事は、山崎合戰之を證して餘りあり、山麓より本社まで登る間に名勝舊蹟多し、數百級の長き石階を登れば石階の上に巍然たる二之門屹立す、門は破風造りにして左右に廻廊を繞らし、神殿及拜殿は其中に在り、神殿は木造の瑞離を以て之を圍み、離は組格子の上部に花鳥を彫刻し五色を彩り金銀を鏤め其燦爛人目を眩せしむ、今ま特別保護建造物の一なり、又神殿の雨樋は黄金鍍にして世に名高く、此れ豊臣氏の寄進に係る。

祭神は應神天皇、神功皇后、玉依毗賣命の三座にして、境内社宇多く攝社に若宮、若宮殿、水若宮、往吉社、狩尾社等あり、若宮は神殿の東北に立ちて仁德天皇を祀る、若宮殿は其東に位し宇禮媛命を祀れり、住吉社は神殿の西南に鎮し此西四町餘の所に狩野社鎮座す大國魂命を祀る。

本社の沿革を記せば清和天皇の貞觀年間南都大安寺の僧行敬　勅許を得て宇佐八幡宮神靈を勸請したるを以て其始めとす、社は實に我國神佛混淆の嚆矢たりき、山中今猶僧堂殿堂多し、境内名勝の殊に顯著なるものは石清水、景清塚、楠公手植の樟樹、御前の橘等にして、石清水は攝社、石清水社の傍らにありて、清泉混々萬古凋れず、本社の例祭は毎年一月十五日を以て執行す、又九月十五日には男山祭を執行し神輿渡御等ありて雜沓を極む、殊に一月十五日より十九日に至る五日間は放生會と稱し大に賑ふ、伏見稲荷神社に次で最も賽者の多きは本社なり。

●天王山（山城）

山勢雄偉にして最も眺矚に富める天王山は、八幡山と相對し一帶の淀江其中間を流れて布帆風に飽き漁歌岸に起り、楊柳青青沙鷗翱翔するの狀詩も亦如かず畫も亦及ばず、附近の風光專ら此山に集まり絶景實に乙訓郡に魁たり。

古來英雄の此地を爭へる事少なしとせず、山頂今猶山崎城址を存す、元弘建武に在りては赤松一族此處に義兵を擧げ、文明年間に至り山名赤松等城を築きて勢ひ當るべからざるものありき、天正十年に及んで明智光秀此山を以て金城鐵壁と爲し、力戰苦鬪せるも豊臣秀吉に一蹴せられ、遂に志を達せずして死せり、近く明治維新の際勤王諸士此に據りて會津桑名の兵と激戰し力及ばず自刄せること世の知る所なり、其眞木和泉守保臣等十七基の石碑は風雨に打たれて樹間に立つ、光秀の天王山に據るや必勝を期待し、其將三宅綱朝をして勝龍寺城を守らしむ。

勝龍寺城は乙訓川を東に帶び、久我畷西岡路を左右にし山崎以北の要害なり、初め暦應二年細川頼春之を經始し、文明の亂には皇山義就此に居り、永祿年中岩成左通城を以て織田氏に降る、天正年間細川藤孝長岡莊を賜はり此に修築し、十年明智光秀守兵を置き酣戰の時天王山の大兵と共に敵を挾擊すべく準備せり、然るに戰ひ敗れて綱朝自刄し守兵皆な散亂す、壘壕の跡今猶依然たり、藤原敦基の秋日勝龍寺述懷に曰く

長河西畔小山東　爰有佛堂造化功
初趁郊居同隱客　未知土俗訪田翁
欺雲稻穗兩岐白　經雨蓼花千片紅
別墅幽閑誰作伴　唯看牧豎與村童

●淀城址（山城）

淀町の西北に當り東西五町南北三町餘の所に凹字形を爲せる地是れ淀城址なり、今は當年の石壁濠池を存するのみ。

往昔は北岸納所村に屬寨を置き、其間に小橋を架し、淀川を西面に控み、南方巨椋湖の水を引き亦木津川の水を城南に注ぎ入れ巨椋宇治の二水を此處に會せしめたり、淀城は岩成佐通之を築き、織田信長と戰ひ細川藤孝の爲めに占領せられ、天正の末年豊臣秀吉修繕を加へ淺井氏即ち淀君を此城に居らしむ、元和九年德川家康伏見城を毀ち其遺材を以て之を增築し、後松平定綱、永尙政、石川憲之、松平光熙、松平乘邑を經て、爾來稻葉氏居城がたりし明治七年を以て廢毀に附せり。

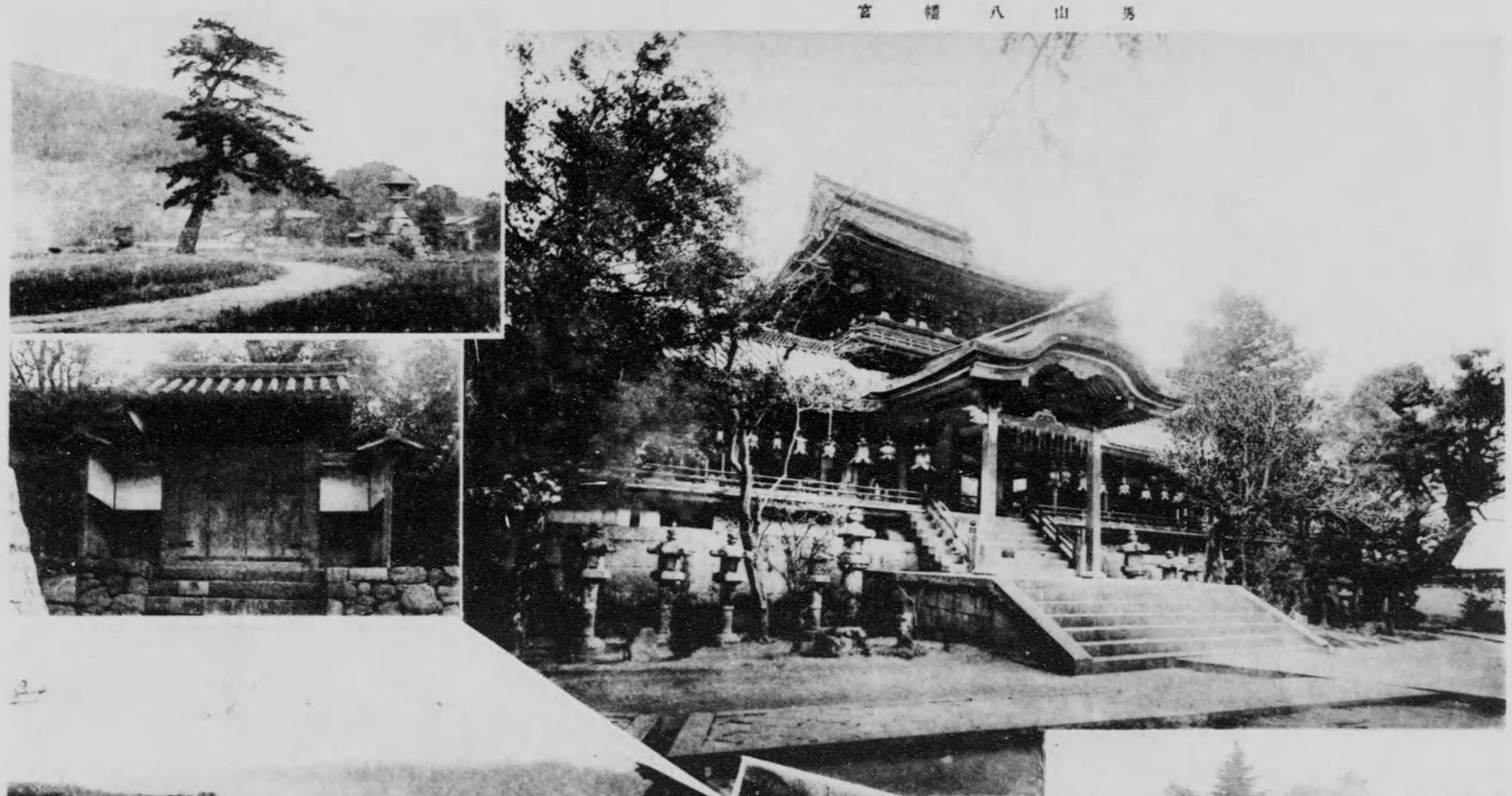
●淀の川瀨の水車（山城）

昔は淀城の外に巨大なる水車を設け、水を城中に引けるより『淀の川瀨の水車』の名は世人に膾炙せしが、城廢毀に附せられて後、當年の面影を留めず、農民之に倣つて隨處に水車を設けたるもの、今猶淀川沿岸に散見す、亦淀江風致の一たり。

●寶積寺と妙喜庵（山城）

龍神より聖武帝に捧げたりと傳ふる『打出小槌』を寶什とする寶積寺は天王山の南半腹にり、一に寶寺と稱せらる、當寺の本像は立像八尺餘の十一面觀世音にして、聖武帝行基菩薩合作に係ると傳ふ、堂前に八層の石塔及三層の石塔あり前なるは聖武帝の御塔なりと稱す。

寶積寺の下、山崎驛の東側に在る『妙喜庵』は明應年中山崎宗鑑幽居の地にして、後、寺院となれり。豊太閤千利休に命じて茶を修められし茶室今猶存す、其軒頭に太閤『袖摺之松』あり。



天王山

男山八幡宮

妙喜庵

寶積寺

淀の水車

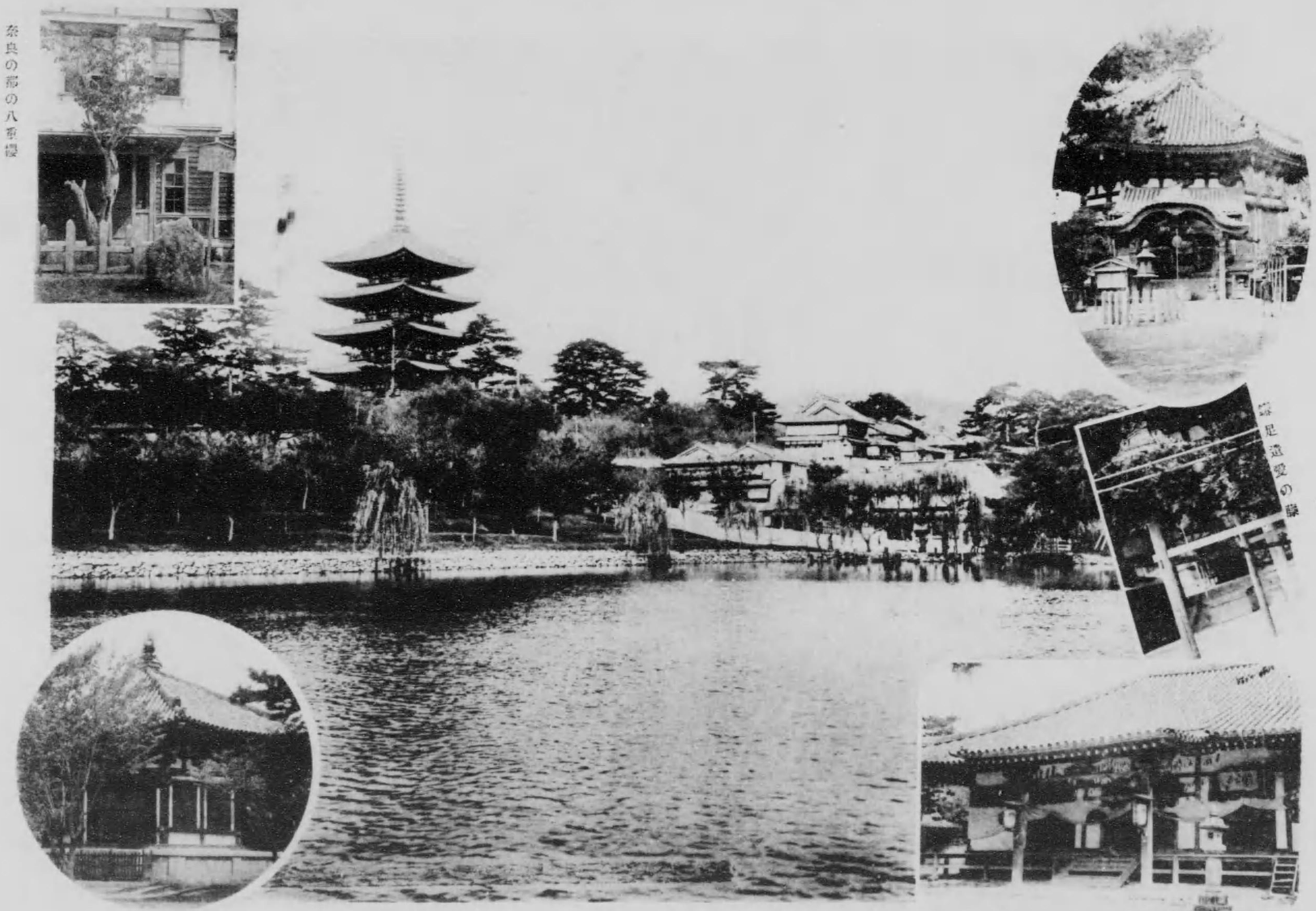
淀城址

上ノ四五

五日を以て執行す、又九月十五日には男山祭を執行し神輿渡御等ありて雜沓を極む、殊に一月十五日より十九日に至る五

初趁郊居同隱客　未知土俗訪田翁
欺雲稻穗雨岐白　經雨蓼花千片紅
別墅幽閑誰作伴　唯看牧豎與村童

喜庵』は明應年中山崎宗鑑幽居の地にして、後、寺院となれり。豐太閤千利休に命じて茶を修められし茶室今猶存す、其軒頭に太閤『袖招之松』あり。



奈良の郡の八重櫻

南圓堂

藤尼遺愛の藤

北圓堂

興福寺及猿澤池

菩提院大御堂

●猿澤池と興福寺（奈良）

春日山の遠翠與福寺邊の近碧と相俟つて其風光を誇るものは猿澤池なり、周圍の彌勒菩薩、六祖、立像四體の四天王無盡界妙憧世親無著等の諸像は當寺大殿に在り、又板面に刻める十二神將十二枚と唐國渡來品として有名なる泗濱浮磬及華原磬を藏す。

寺東方に古松あり高さ數丈、清陰を數百歩の地に散布す、札して『華之松』と言ふ華之松より十數歩を隔てゝ五重の寶塔立てり、晩翠と相映帶して綺麗なること繪の如く、下は猿澤池に臨み、微風水を吹

●猿澤池と興福寺（奈良）

春日山の遠翠興福寺邊の近碧と相俟つて其風光を誇るものは猿澤池なり、周圍百八十六間に亘り櫻樹處々に點在し、楊柳池水に臨み鳥々として碧潭と親む、花季に至れば萬朶の花清淺の水と相映發し花氣水氣と相氤氳す、興福寺は此池の爲めに活き、猿澤池は亦興福寺ありて光景一段を極む。

興福寺は元山階寺を白鳴元年に於て高市郡厩坂に徙し『厩坂寺』と改號せるを和銅三年に至り藤原不比等又之を奈良に移して興福寺と改めたり、爾後當寺より春日神社を保管したるを以て俗に春日寺とも稱せり。

創建當時に在りては境域最も廣濶にして堂塔雜舍百七十五宇を有し、彼の朝廷の興したる東大寺に相對し其規模の宏壯なる、人をして瞠目せしむるものありしも、中世以降或は兵燹雷火の之を犯すありて、興廢一ならず。今は漸く往古盛觀の三分一を有するのみ、而して明治維新に及び春日神社を當寺より分離せしむると同時に其寺祿三千餘石を公收して僧侶を還俗せしめたり、當寺の廢頽此際を以て極まり殆ど墟土となり、十數年を經て再興の說起り幸に全滅の厄を免れたりと雖も、五重塔の如きは一時銅鐵商の手に歸し無風の日を相し將さに一炬に附して崩壞せられ、其金屬を灰中に收めんとせし事ありしと、近年藤原氏の華族相集まり興福會を起し寺門維持の途を求め、明治廿一年を以て金堂を復し莊嚴を加へ諸佛を此に還置せるも多くの寺寶は春日神社と分離する時に於て概ね散失し、今は國寶に編入せられたる二天王像絹本二幅慈恩大師像絹本掛一幅を始め住吉慶恩筆法相秘事圖卷外數百點を有す、長半丈六の本尊釋迦如來及脇士藥上藥王其他座像の彌勒菩薩、六祖、立像四體の四天王無盡界妙憧世親無著等の諸像は當寺大殿に在り、又板面に刻める十二神將十二枚と唐國渡來品として有名なる泗濱浮磬及華原磬を藏す。

●南圓堂（奈良）

興福寺古建造物の一たる南圓堂は西金堂の南面に在り、八角寶珠形の堂宇にして安不空絹索觀音を本尊とし他に四天王像千手觀音像阿彌陀如來像等を安置す。

其堂前の銅造燈臺一基は既に國寶となれり、而して南圓堂は他の北圓堂、西金堂、東金堂等と共に古建造物として注意を惹く、其西金堂は即ち興福寺の大殿にして俗に赤堂と呼ぶ、東金堂は聖武天皇の神龜三年上皇の除病延命の爲めに創建せる所、後、七回の火災に罹り現堂は應永二十二年の改造に係る、中に藥師日光月光三銅像始め梵天帝釋十二神、文殊維摩、四天王等の木像を安置す、文殊維摩は有名にして是又國寶に編入せられたり

南圓堂前の藤は藤原鎌足遺愛の藤として名あるのみならず、其古株繁枝、他に比すべきものなし、故に奈良八景の一に算へられ其名最も著る。

●北圓堂（奈良）

堂は養老五年八月の造營にして六回の火災に遭ふ今の堂は永承三年の改築に係り境内最古の建築として『三重塔』の建立に先つこと五十年、其建築は藤原時代に於ける優等の物に屬す、定朝作彌勒菩薩釋迦如來座像あり、又四天王立像は延曆のものとす、南北圓堂と相並んで建築の齡を保ち居るは三重塔及五重塔なり、三重塔は南圓堂の南に在り康治二年鳥羽天皇御宇創建の儘に存し、內陣の佛畫、堂內彩繪の模樣等猶ほ當時莊嚴の面影を見る、是又特別保護建造物の一なり、興福寺東方に古松あり高さ數丈、清陰を數百步の地に散布す、札して『華之松』と言ふ華之松より十數步を隔てゝ五重の寶塔立てり、晩翠と相映帶して綺麗なること繪の如く、下は猿澤池に臨み、微風水を吹いて漣漪を織り日色笑めるが如く塔に反照して塔の櫺扉に奇紋を浮動す、實に是れ畫家拋筆の光景たり。

●奈良の都の八重櫻（奈良）

古への奈良の都の八重櫻は、興福寺內に於ける櫻種にして、一條天皇の時上東門院此櫻を山城の京に召されしに伊勢大輔は『今日九重の歌』を獻じたるより世の稱ぬく知る所となれり、其八重櫻の古幹より新に枝を發し、年々花咲くと言ふ櫻樹は五重塔下に在りと傳へられ。櫻花爛熳の季は此方面に人集まりて物色す。

植繼も變らじ奈良の八重櫻　古蕉

●菩提院（奈良）

菩提院は一に大御堂と稱し、俗に十三鐘と言へり、天平年中僧玄昉の建立にして、現存のものは應永年間の再築なり、十三鐘とて寺僧勤行の合圖に六つ時と七つ時とに撞きし鐘は元、此に在りしを今は南圓堂前に移せり、當院の本尊は無量壽佛にして其側に觀音を廚子に安置す、兒觀音と言ふ、當院亦興福寺境內の古建造物たり。

興福寺は法相宗の本山にして亦藤原氏の氏寺たりしだけ、屢々火災に罹りしも、今殘存せる建造物及寺寶中より國寶に編入せられ、特別保護を加へらるゝもの少なからざること上記の如し。今殘存する『南大門址』なるものは往古每年二月此前庭に於て春日神事の猿樂あり庭上薪を積んで篝火となせるより薪能の名ありき寬文二年幕府側令あり金春寶生金剛三座の猿樂に命じ料米每年五百石を給せり。

奈良の都の八重櫻

●春日神社（奈良）

官幣大社春日神社は奈良市街の東春日山の麓に鎮座す、福護景雲二年の創建にして、社殿の宏壯華麗なるは今又言を須ひず境域三十萬零六百餘坪其東北に正殿四宇あり、祭る所一は武甕槌命一は經津主命一は天兒屋命一は比賣神なり、樓門は南に向つて立ち又南門の谷あり、桁行五間梁行之に半ばし、廻廊長さ百五間幅二間五尺其左右を遶る、

社殿は二十一年目に改造する定めなるを以て慶長十七年より算するも既に五十餘回を經たり、現今のものは明治十七年の修造に係り特別保護建造物中の一とす而して古來燈籠の多きを以て聞え、其數三千基餘を算す、毎年節分の夜を以て悉く之を點火し美觀極まりなし、燈籠中寒蟬、秋戸、雲朴、臥鹿等最も著明にして皆な世の模型とする所なり。

若宮は攝社にして長承四年の創建に係り、同じく特別保護建造物の一なり、殊に神樂殿は藤原時代より其儘今日に殘れるものとして其名著しく、且つ白衣緋袴の巫子常に伺候して優美なる倭舞を奏するを以て名あり、拜殿の欄間に掲げたる歌仙の繪畫は、後光明天皇の宸筆と傳ふ此社の祭禮は俗に『御祭り』と稱し、大和一國の大祭として今は毎年十二月十七日を以て之行ひ頗る殷賑を極む、附近に柚木燈籠あり、保延年間關白忠通の寄進にして七百六十餘年の古物なり、手水屋は若宮の南、石階の下に在り、御供所にして大國主命と其妃を祀り俗に走元の夫婦大黒と稱す。

梁川　星巖

雲端雙闕古神京　憶昔春風飈霓旌
囿沼已荒槐柳合　衣冠何在甕墳平
一溪豐草幼々鹿　千樹殘花哈々鶯
行盡借香山下路　流泉鳴珮最關情

●嫩草山（奈良）

山容水態の温雅優雅なる奈良は、其風物芳醇の如く、人をして熙々睡りを思はしむ。

滿山悉く短草にして殆ど絮氈を敷けるが如き嫩草山は樹木蓊鬱として壯嚴犯すべからざるの相なる春日山と點映の宜しきを得て優美親むべきものあり、此山一名鷲山と呼ばれ、山巓の眺望極めて佳なり、高さ三百四十米突、山容三層を爲し其上るに從つて風景漸次遠く展け、大和の平野山城の連山皆一眸の下に集まる、元來此山興福東大兩寺の境界なりしが、所屬の爭より遂に東都五大寺の預りとなり、双方立會の上之を燒拂つて和解せし事ありしより、今に至るまで毎春芝草を燒拂ふを例とせり、絶頂鷲塚あり、塚は車塚の形にして塚側の埴輪露出し今猶其破片を得べし、大山守皇子の墓なりと傳ふ、此山巓に立ちて眺望すれば平城當時の光景は千歳後の今日に在りて、猶宛として眼前にあるが如く、廢址臺塔は林間に隱見出沒す。

●三笠山下の鹿（奈良）

三笠の山に出でし月かも　詠によりて名高き三笠山は春日若宮より登るを順とす行くこと二丁餘にして紀伊神社あり奥院形と稱する燈籠を据へたり、更に四町餘にして大杉あり、高さ六十二尺周圍三十尺を有して頗る偉大なり、之より猶ほ登ること三町少し右に蝙蝠巖あり、之れ往昔春日祗を堀りし地なりと稱す、元の道に戻り更に行くこと四町頂上に本宮神社の小祠あり其他附近に七本杉、氷池日月磐等の勝地あり。

三笠山は御蓋山とも書す、萬葉集に高按の三笠山とあるは、即位朝賀の時など大極殿に高御座を飾りて天皇の在はします上に御蓋のあれば御笠山は此語を冠らせたりと言ふ、而して三笠山、芳山、花山等は總稱春日山なりき、其芳山は最も高くして標高五百米突を有せり、之に登るには三笠の勝地日月磐よりするを順とす登ること二十餘町、中水谷を經て鳥居前に至れば嫩草山は左に、上水谷を右にして風景佳絶、其下十六町餘を隔て、鷲瀧あり高さ四丈餘幅一丈を有して清冽甚だ愛すべし、更に本道を左すること二十町餘、高山神社あり、鳴雷神社あり、瀧坂街道を進めば溪流深谷の間を縫ひて紅葉の美甚だ賞すべき所あり、此沿道附近岩石に佛像を彫刻せるもの頗る多く、盡人窟、朝日觀音、寢佛等あり。

春日神社の神鹿は其數最も多く、猿澤池畔より神苑の邊に逍遙して賽人を迎ふ人に馴るゝこと畜犬以上なり、此群鹿の三笠山下に集まるもの甚だ奇觀にして人之を呼べば首を垂れて來り親まんとす實に是れ好個の畫材たり。

梁川　星巖

風華想見晁常侍　皇國諸生唐客卿
山色依然三笠在　一輪明月古今情

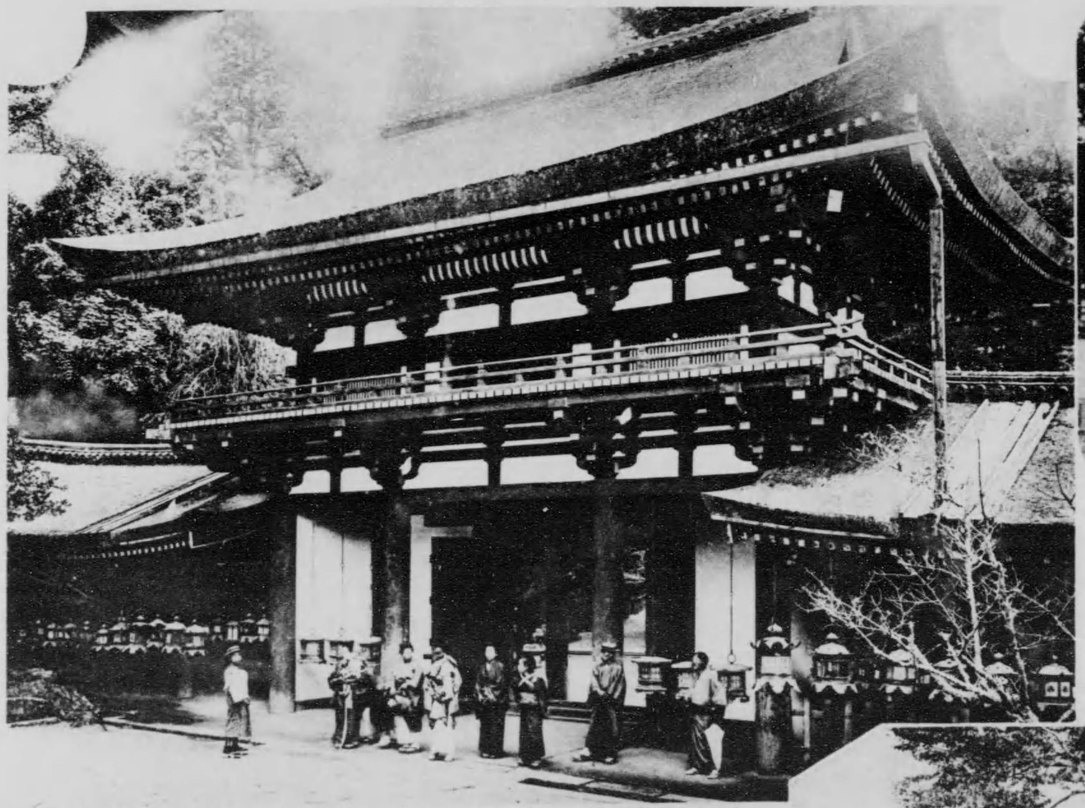
紀貫之

名のみして山はみかさもなかりけり
朝日夕日のさすを言ふかも

●手向山神社（奈良）

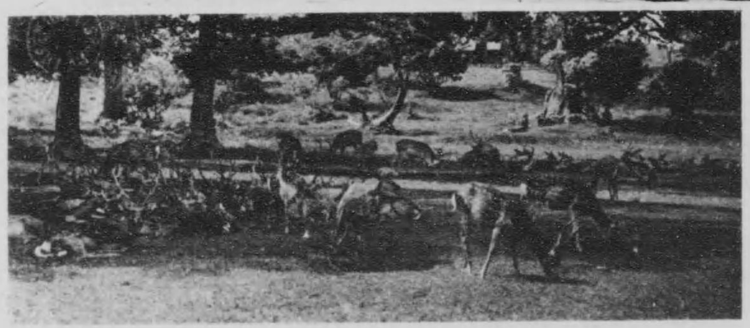
手向山八幡宮は東大寺の上方三日月堂に隣せる所に在り、聖武天皇の勅願によりて豐前宇佐八幡を此所に鎮祭せるものなり、天平勝寶年間の創建にして今の社殿は元祿四年の再築に係る、境内一萬四百二十餘坪、社畔老楓多く深邃愛すべし秋色闌なるに至れば滿梢錦を裁するが如く人をして嘗家の和歌を三誦せしむ、社前に猊大數基ありて其一に運慶作の銘あり又春日祗を以て作れる八幡形と稱する石燈籠在り文治二年僧勇專奉納と銘せり

春日神社楼門

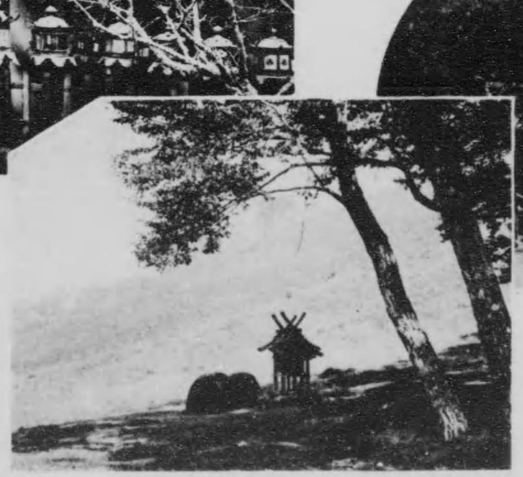


春日神社廻廊

山向孚



春日の神鹿



嶽草山

大黒と稱す。

榮川　星巖

雲端雙闕古神京　憶昔春風飈霓旌
囿沼已荒槐柳合　衣冠何在壟墳平
一溪豐草幼々鹿　千樹殘花哈々鶯
行盡借香山下路　流泉鳴珮最關情

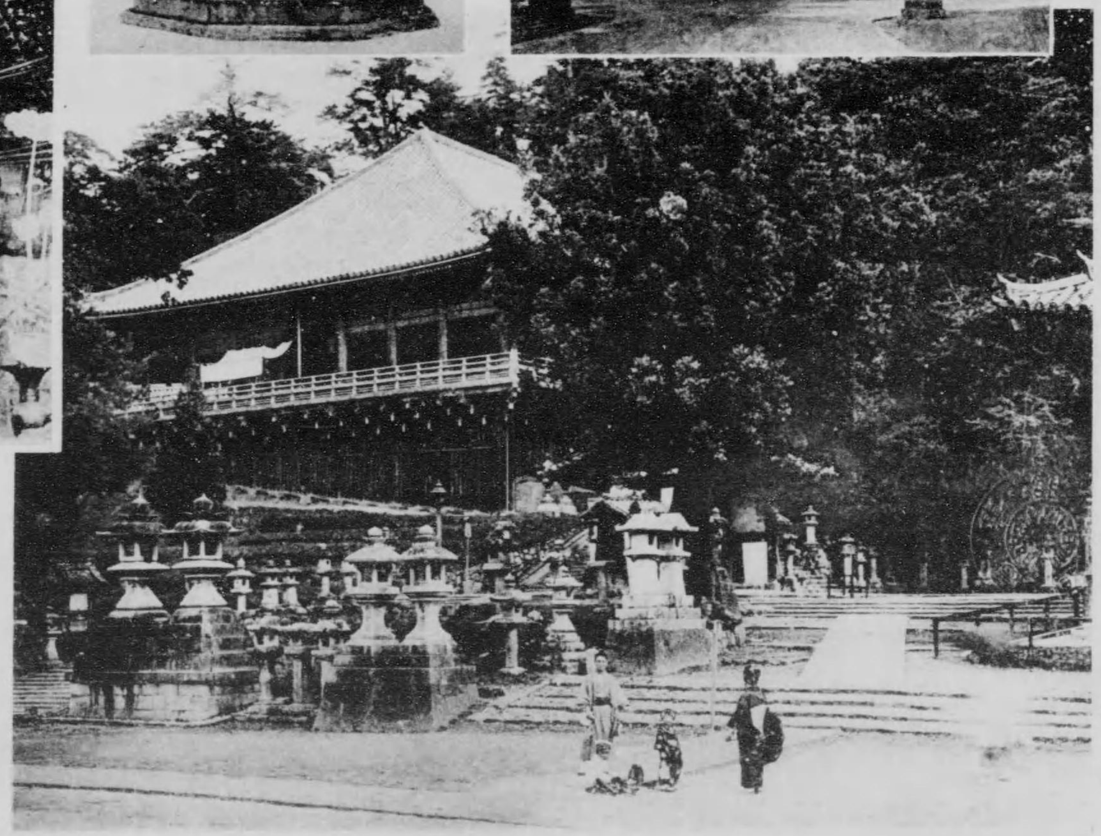
往昔春日砥を堀りし地なりと稱す、元の道に戻り更に行くこと四町頂上に本宮神社の小祠あり其他附近に七本杉、氷池日月磐等の勝地あり。

三笠山は御蓋山とも書す、萬葉集に高按の三笠山とあるは、即位朝賀の時など大極殿に高御座を飾りて天皇の在はしま殿は元祿四年の再築に係る、境内一萬四百二十餘坪、社畔老楓多く深邃愛すべし秋色闌なるに至れば滿梢錦を栽するが如く人をして背家の和歌を三誦せしむ、社前に現大數基ありて其一に運慶作の銘あり又春日砥を以て作れる八幡形と稱する石燈籠在り文治二年僧勇專奉納と銘せり

東大寺盧舎那佛

大佛前の燈籠

東大寺山門



東大寺二月堂

東大寺鐘樓

●奈良の大佛（奈良）

東大寺は聖武天皇の御宇神龜五年其勅願に依り草創せられたる巨刹にして、開基を良辨僧正とす、宗旨は八宗を兼學し就中三論華嚴を以て其本旨とせり。

世に著名なる『大佛』は當寺の本尊にして、其佛前の青銅製蓮葉の如き直徑三尺數寸なるも、之を仰視すれば普通蓮葉ほどの觀を爲す、其蓮華臺は高さ一丈徑六丈八尺、花片大小五十餘枚皆な金銅製にして、花片に三千世界圖を鐫れり。

大佛の面は長さ一丈六尺廣さ九尺九寸餘地ありと傳へらる、其佛前の青銅製蓮

四八

樓在り、鎌倉時代の建築にして構造巧妙を極め、中に高一丈三尺餘口徑九尺餘厚さ八寸周圍二丈を有する巨鐘を懸く、鐘は天平勝寶四年の鑄造に係り延慶年間に於て再修を加へたるものなり、鐘樓は亦是れ特別保護建造物たり。

●奈良の大佛（奈良）

東大寺は聖武天皇の御宇神龜五年其勅願に依り草創せられたる巨刹にして、開基を良辨僧正とす、宗旨は八宗を兼學し就中三論華嚴を以て其本旨とせり。

世に著名なる『大佛』は當寺の本尊にして、殿舍の高さ十五丈六尺、東西二十九丈に擴がり、南北十七丈に亘る、像は盧舍那佛の座像にし其長け五丈三尺五寸、天平十五年聖武天皇始めて行基僧正に勅し天下の衆庶に勸進せしめて此像の鑄造に着手し給ひ、爾後改鑄すること八回、同十八年にして漸く其成功を見るに至れり。

此大佛を鑄造するに方りて原料とせるものは熟銅七千三萬九千五百六十斤、白錫壹萬二千六百三十八斤、鍊金壹萬四百三十六兩、銅五萬八千六百二十兩にして、其鑄造用の炭壹萬六千三百五十六石を耗せりと言ふを以て其偉大なるを窺ふべし

而して此像最初の鑄造以來屢々破損し初回には齊衡五年五月に於て其頭自ら墮落し、次回には治承四年平重衡の戰亂に當り殿舍兵燹に罹りて頭部銘解し、後源頼朝の時に及んで之を再興す、第三回目には松永久秀の兵火に依りて、佛殿烏有に歸し、佛の頭首又共に燒失したり、然るに時恰も亂世に屬し人の再び修補する者なかりしが、幾多の星霜を經て當國の豪士山田道安自ら淨財を喜捨して之を補繕す、即ち現在の大佛是れなり。

然るに其時は唯だ佛像を修補したるのみにして佛殿の再興なく其雨露に曝さるること凡そ壹百三十餘年、元祿年間當寺の住僧公慶僧正の代に至りて始めて殿舍再興に志願あり、乃ち勅を得て貴賤の捨財を得て建立し今日に及べり。

佛前に什物を安置し、聖武天皇の宸額あり『金光明四天王護國之寺』と大書す、偉大なる大佛の掌上に數十人を載せて尚餘地ありと傳へらる、其佛前の青銅製蓮葉の如き直徑三尺數寸なるも、之を仰視すれば普通蓮葉ほどの觀を爲す、其蓮華臺は高さ一丈徑六丈八尺、花片大小五十餘枚皆な金銅製にして、花片に三千世界圖を鐫れり。

大佛の面は長さ一丈六尺廣さ九尺九寸眉長さ五尺四寸五分、目長さ三尺五寸、鼻前徑二尺九寸四分、口長さ三尺七寸、耳長さ八尺五寸、肩長さ二丈八尺七寸、胸腹長さ各一丈八尺、臂長さ一丈九尺、肘より腕まで一丈五尺、左の手大指四尺八寸、中指五尺八寸、螺髮九百六十六各高一尺徑六寸なりと言ふ。

●東大寺總門（奈良）

東大寺の總門たる南大門は往年颶風に倒れたるを正治元年に於て修築せり、一に古門と稱し高十三間半、運慶快慶作二大仁王像を置く、共に長二丈六尺五寸、雄大にして生くるが如し、附近に狛犬の彫刻あり陳和卿作と稱し彫鑿精巧を極め、頗る奇古にして仁王像と共に國寶に屬せり、南大門亦特別保護法に與る、此門の西北に眞言院あり又勸學院は大佛殿の西に在りて弘法大師灌頂の道場として著る、正倉院西に在る轉登門は一に景清門と稱せられ、別項に掲ぐる手向山祭儀を行はれし所なり。

●國寶の銅燈籠（奈良）

大佛殿前に高一丈五尺餘の古色蒼然たる銅燈籠在り、其八方の銅扉に伎樂菩薩及走り獅子の形を鐫り、精巧緻密の痕を留む、天平以前の作に係るものとして名あり、今や國寶に列し東大寺中の代表的古器と稱さる。

●東大寺鐘樓（奈良）

大佛殿より左して石磴を登れる所に鐘樓在り、鎌倉時代の建築にして構造巧妙を極め、中に高一丈三尺餘口徑九尺餘厚さ八寸周圍二丈を有する巨鐘を懸く、鐘は天平勝寶四年の鑄造に係り延慶年間に於て再修を加へたるものなり、鐘樓は亦是れ特別保護建造物たり。

●二月堂（奈良）

鐘樓と隣せる松柏幽邃の高丘に在る二月堂は、元羅索堂と稱し創建は天平勝寶四年なるも、今の堂は寛文九年德川家綱の再興に係る、本尊は銅作十一面觀世音にして別に入身の暖みありと稱する小觀世音在り、毎年三月一日より二週間修二會の行法を營む、此堂は蒼崖に倚りて空外に懸るが如き構造、危磴斜めに走りて其堂に通ず、欄干に凭つて下瞰すれば九衢の堵觀歴々として指點の中に在り、其鏘然たる鈴響ぼ松上を度り衆人の心を冷靜にす。

二月堂と相並んで峙立するものは三日月堂なり、此堂は天平五年良辨僧正の開創せるものにして、大佛殿の建造に先立つこと十五年、實に奈良第一の優雅なる古建築たり、是又屢々大破し修繕を經たるを以て外部は鎌倉時代に修補せしもの多けれど、内陣は依然として其舊形を存し、人をして天平時代の建築を髣髴せしむるに足れり。

堂に安置する所の佛像は不空羅索觀世音像及脇士日光月光二佛、四天王乾漆立像四體、他に不動、辨天、地藏、吉祥像等在り、本尊の寶冠及後面の執金剛神は稀世の物なりと言ふ。

天皇を始め皇后太子及大臣等皆な受戒せられたる戒壇堂は大佛殿西方二町に位す、元大佛殿の前庭に在りしを此所に徙されたるものなり、堂内に塑造の四天王立像を安置す、天平時代傑作の一にして亦國寶に算せらる。

●正倉院（奈良）

本邦古美術の寶庫と稱せらるゝ正倉院は奈良大佛殿の西南二町に在り。間口二十間、奥行六間許、高さ八間半、校倉にして三稜の材木を井桁に組みて建てらる一棟三門ありて三區に分れたれば、俗に三倉とも云へり。扉前に廊を設け、中央に階段を置き、屋根は瓦葺なり。天平勝寶八年孝謙天皇、御父聖武天皇の遺物を收藏せしめられたる所なり。此地往時屢々兵燹に罹りたるも正倉院のみは幸にして火災を免れて今日に傳ふるを得たり。古來御物は勅封せられたるが、桓武天皇の御宇に始めて蟲干の御事ありたりと傳ふ。

正倉院の寶物は孝謙天皇及び光明皇后が聖武天皇の冥福御祈願の爲め、東大寺盧舍那佛に御愛器を献納して後世に遺し給へるなり。而して寶庫の開閉は勅旨を待つて行はるゝ事となれり。建久四年源頼朝請ふて開封修繕したる際、寶物を綱封倉に移し、明年三月竣工して寶器還納せり。寛正年間足利義敎始めて蘭奢待、紅沈香を截り、天正年間織田信長の請に由て蘭奢待を截りたる事あり。蓋し蘭奢待、紅沈香鴨毛吹繪の屏風等は正倉院寶物中の最も著名なるものなり。明治十七年正倉院を宮内省圖書寮に屬せしめられ十九年修繕を加へ、國寶として嚴重に保護せらるゝ事となれり。

●鳥毛立女圖屏風（奈良）

是れ正倉院寶物中の著名なるものなり紙本粉地着色にして各扇の大さ竪四尺六寸、横一尺一寸あり。其名稱の如く鳥毛を貼付して畫中人物の頭髮、衣服及び樹葉等に不思議なる裝飾を施し、一種特殊の異彩を放つ、而かも其羽毛今は全く脱落して舊觀を認め難きは頗る遺憾なるが同じ正倉院御物中、天平勝寶八年六月聖武天皇御追福の爲め毗盧舍那佛に献じ給ひし光明皇后東大寺献物中に鳥毛帖成文書、鳥毛篆書の二屏風あり、之を以て大體の樣を想像し得べし。然して該畫は一疊六扇にして一扇に美人一人づゝを畫く頰邊紅粧を施せる肥豐健全の面貌姿態は正に當時美人の典型を反映したるものなるべし。

●般若寺（奈良）

奈良坂の南、轉害門の北方九町に在り當寺の附近を般若坂又は般若野と稱す。眞言宗の古刹にして白雉五年孝德天皇の朝蘇寺我日向臣の創始にして、聖武天皇の御宇官寺となれり多くの春秋を閲みして荒廢したるも鎌倉時代に再建せる金堂樓門、經藏等は現存せり。一説に當寺は延喜年間草創にて觀賢僧正の開基に係り忍性律師中興せりと云ふ庭上に石造の十三重塔あり高さ五丈是れ聖武天皇の建立にして培の地底に宸筆の紺紙泥大般若經を埋藏す、蓋し寺號に因て起る所以か、塔前に笠卒塔婆あり。弘長中宋人伊行吉の建造する所なりと云ふ。又嵯峨天皇の宸筆に係る般若寺の勅額を藏す。元弘元年大塔宮護良親王當寺に來りて黑塗の經櫃内に潛匿して敵手を逃れ給ひたる事は太平記に載せられて人の知る所なり。

●聖武天皇御宸翰（奈良）

是れ帝室の御物に係る、此御物に就て東大寺献物帳には左の如く記されたり、

一雜集一卷（白麻紙、紫檀軸、紫羅標、綺帶）右平城宮御宇後太上天皇御書聖武天皇、御歸は首、文武天皇の第一皇子に在しまし御母は藤原宮子、大寶元年御降誕あらせられ和銅七年六月立太子となり神龜元年御歳二十五にて帝位に即き給ふ、天皇深く佛法を尊信し給ひ、諸國に命じて國分僧尼寺を建立せしめられ、又御親ら經文を書寫して之を各僧尼寺に納め給へり。又佛法興隆の御祈願を發せられ天平十三年盧沙那大佛像の建立を企てさせられ、十五年詔を下して十七年より工事を始め天平勝寶元年に至りて全く竣工せり。大佛殿は十九年に工を起し天平勝寶四年に至りて成る。斯て同年四月大佛開眼供養會を擧行し給ひ、天皇之に行幸し給ふ。現今の奈良東大寺の大佛是れなり。天皇大佛開眼供養の日、佛前に北面して自ら三寶の奴と稱し給へりと云ふ。又此他に諸寺院を建立し土地を寄附せられたるもの頗る多し、後ち平城の都を難波に遷し給ふ。天皇世を知し召し給へる事二十五年、位を皇太子に讓り、自ら太上皇と稱させ給ふ。後ち佛門に入りて御名を勝滿と稱し天平勝寶八年五月二日崩御あらせらる、寶算五十六。

●光明皇后御筆蹟（奈良）

光明皇后の御筆蹟杜家立成雜書要略同樂毅論は今帝室の御物として保存せらる。東大寺献物帳に頭陀寺牌文并杜家立成一卷（麻紙、紫檀軸、紫羅標、綺帶）、樂毅論一卷（白麻紙、瑪瑙軸、紫紙標綺帶）右二卷皇太后御書）と記されたるものなり。

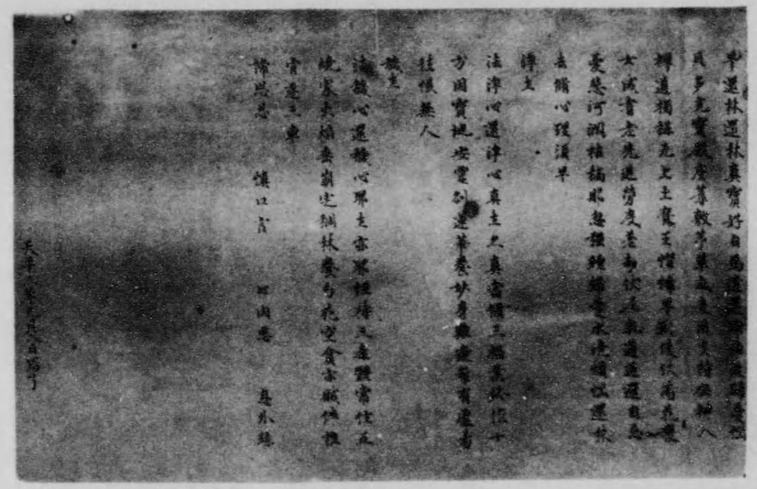
光明皇后は藤原不比等の第二女にして名は光明子聖武天皇の未だ儲君の位に居給ひし當時、納れて妃と爲され、平元年、冊立して皇后と稱され給へり。皇后平生深く佛法を信じ無邊の慈悲濟度を行ひ給へり。天平寶字四年六月七日崩御あらせらる御齡六十御陵は大和國佐保山に在りて、東陵と名づく。

因に光明皇后は崩後檀林皇后と謚號し奉れり、世に光明皇后の御歌なりとして傳ふる詠あり、曰く

もろこしの山のあなたに立つ雲は
こゝに焚く火の煙りなりけり

嵯峨天皇勅額

聖武天皇宸翰



（中）光明皇后御筆蹟
（下）磐若寺

（中）正倉院
（下）磐若寺十三重塔及笠卒塔婆

烏毛立女屏風圖

葉等に不思議なる裝飾を施し、一種特殊の異彩を放つ、而かも其羽毛今は全く脱落して舊觀を認め難きは頗る遺憾なるが

誕あらせられ和銅七年六月立太子となり神龜元年御歳二十五にて帝位に即き給ふ、天皇深く佛法を尊信し給ひ、諸國に傳ふる詠あり、曰く

もろこしの山のあなたに立つ雲は
こゝに焚く火の煙りなりけり

寸、横一尺一寸あり。其名稱の如く鳥毛を貼付して畫中人物の頭髮、衣服及び樹葉等に不思議なる裝飾を施し、一種特殊の異彩を放つ、而かも其羽毛今は全く脱落して舊觀を認め難きは頗る遺憾なるが

天皇、御諱は首、文武天皇の第一皇子に在しまし御母は藤原宮子、大寶元年御降誕あらせられ和銅七年六月立太子となり神龜元年御歳二十五にて帝位に即き給ふ、天皇深く佛法を尊信し給ひ、諸國に

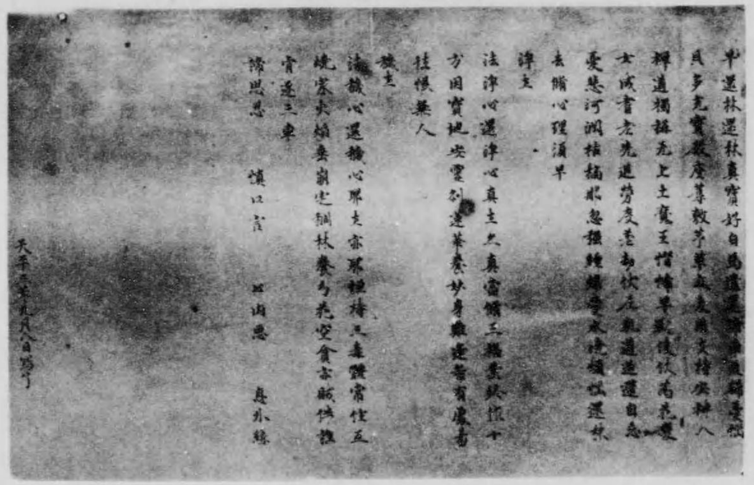
因に光明皇后は崩後檀林皇后と諡號し奉れり、世に光明皇后の御歌なりとして傳ふる詠あり、曰く

もろこしの山のあなたに立つ雲は
こゝに焚く火の煙りなりけり

嵯峨天皇勅額

鳥毛立女屏風圖

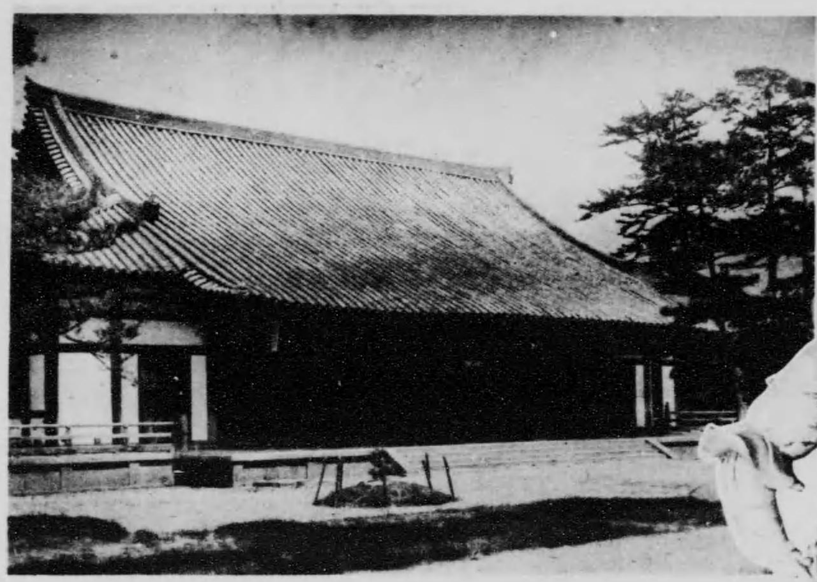
聖武天皇宸翰



（中）正倉院
（下）磐若寺十三重塔及笠卒塔婆

（中）光明皇后御筆蹟
（下）磐若寺

藥師如來像



藥師寺金堂

十二神將像

佛石家頭塔

新藥師寺

十輪院魚養墓

藥師寺東塔

●新藥師寺（奈良）

一名香藥寺と稱す。奈良市高畠に在り聖武天皇背て眼病を惱ませ給ひし際、其る、別に十一面觀音像、四天王木像等あり。西院は慶長元年七月大地震の爲めに破壞し今其址地に文珠堂を建立せり。現今の講堂は文化二年の建築にて背て玆に境内に古雅なる石佛多し、經藏は空虛なれども其扉の兩面には四天王を描き床下石臺には十六善神を刻す（因に云ふ、此經藏は所謂校倉式の構造にて明治十五年中東京上野の博物館に移し建つ）近來十

●新藥師寺（奈良）

一名香藥寺と稱す。奈良市高畠に在り聖武天皇嘗て眼病を惱ませ給ひし際、其平癒御祈願の爲め、行基菩薩に勅し、東大寺大佛殿造營の殘材を用ひて造立せしめ給ひし寺なり。本堂は依然として尙創建當時の舊觀を存し居れり。本尊は丈六の藥師如來にして行基菩薩の作なりと傳ふ。本尊の脇士なる日光、月光は秦度利の作に係る。南門、東門、庫裡、參籠所等あり、其中、本堂、鐘樓、南門の三つは特別保護建造物に編入せられ居れり。又十二神將（秦度利の作）及び佛涅槃圖は國寶たり。當時の奥には織田有樂齋の嗜好に成れる茶室存せり。

●藥師寺金堂（奈良）

藤師寺は所謂南都七堂伽藍の一にして生駒郡都跡村大字六條なる砂村にあり。法相宗の大本山なり。天武天皇白鳳九年の創建に係る。素と高市郡岡本に在りしを元正天皇の御宇に平城右京に移し聖武天皇の天平年中に至つて造營完く竣成を告げたり。享祿二年兵燹に罹り一時諸堂宇悉く烏有に歸したりしも漸次再建するに至れり。金堂は延寶二年再建する所にして結構頗る壯大を極む。本尊は金銅藥師如來の立像にして長五丈四尺、幅一丈二尺の石壇上に安置せられ。脇士日光月光總て三尊なり、黑紫黝然として光澤あり寺傳に據れば養老年中、行基菩薩の鑄造に成ると云ふ、其他十二夜叉神、並に二體の觀世音を安置す。此觀音の一體は孝德天皇の勅願に依り、他の一體は後水尾天皇の御願に基つきて彫刻せしめ給へるものなり。

東院は養老五年長屋王の建立に係り其後屢々修繕を加へたり。本尊觀音は百濟國王の獻ずる所にし閻浮檀金を以て造らる、別に十一面觀音像、四天王木像等あり。西院は慶長元年七月大地震の爲めに破壞し今其址地に文珠堂を建立せり。現今の講堂は文化二年の建築にて嘗て茲に最勝會を執行せられたり。舍堂の西南に一小宇あり、高さ一尺八寸の佛足跡を安置す、上面縱二尺五寸許、横三尺餘、上面に足蹠を刻す、長さ約一尺六寸石の四側に銘文及び佛像を刻す、此の佛足石の後方に佛足石歌碑なるもの在り歌二十一首を鐫せり、其第一首は左の如し

美阿止都久留伊志乃比鼻伎波阿米爾伊太利都知佐閇由須禮知々波々賀多米爾毛呂比止乃多米爾。

●藥師寺東塔（奈良）

藥師寺所在の六重塔は、天平二年聖武天皇の創建に係る著名なるものにて、高さ十一丈五尺あり、三層塔婆なるも、每層裳階の設けありて、俗に之れを六層と云ふ。塔頂の九輪擦柱には舍人親王の筆に成れる銘文を記したり。此塔は天平の創建當時より今に至るも未だ一回の火災にも罹らず。依然として舊時の壯觀態樣を保ち居れり。塔露盤銘之文云

維清原宮馭宇天皇即位八年庚辰之歲建子之月以中宮不念創此伽藍而鋪金未遂龍駕騰仙太上皇奉遵前緒遂成斯業照先皇之弘誓光後帝之玄功道濟詳生業傳曠劫式於高躅敢勒貞金魏々蕩々藥師如來大發誓願廣運慈哀猗歟聖王仰延冥助爰飭靈宇莊嚴調御亭々寶刹寂々法城福崇億劫慶溢萬齡。

●十輪院魚養墓（奈良）

是れ元興寺の一子院にして新元興寺と本元興寺との間に在り、一南光院とも稱す、眞言宗にして弘法大師嘗て當寺に住したる事ありと云ふ。護摩堂の本尊石彫りの地藏尊は大師の作に係ると傳へらる境内に古雅なる石佛多し、經藏は空虛なれども其扉の兩面には四天王を描き床下石臺には十六善神を刻す（因に云ふ、此經藏は所謂校倉式の構造にて明治十五年中東京上野の博物館に移し建つ）近來十輪寺の地を割きて興善寺を建立せり。

朝野魚養の墳墓境は當寺の境内に在り墳前に沒字碑を建つ。魚養は天平年中の人にして書道に通じ筆札を善くす、南都七大寺の額榜は魚養の揮毫に係ると云ふ魚養は下忍海原連と云ひ、嘗て遣唐使となりて赴任し唐土に於て妻を娶り一子を擧げて歸朝したりと云ふ。

一說に依れば弘法大師は當寺に住したる際魚養に就きて筆道を學びたりと云ふ

宇治拾遺物語に魚養の事を載す、素より附會の傳說に過ぎざるも序を以て左に抄す。

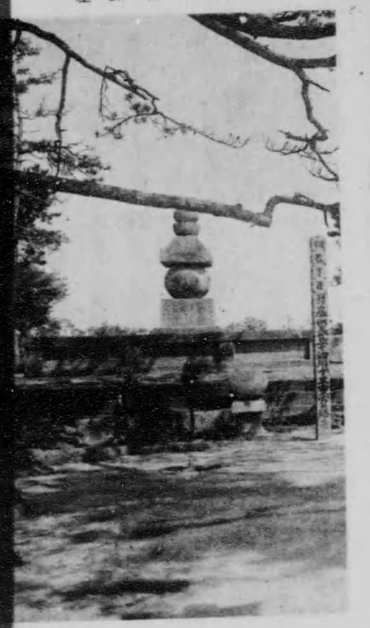
今は昔遣唐使の唐土にある間に妻を設けて子を生させつ其子未だ幼き程に日本に歸る妻大に恨みて其兒の頸に簡を結付て海に投じぬ。父或時難波の浦邊を行くに沖の方に白き物見ゆ海近くなる儘に見れば四つばかりなる兒の涙に付て寄來り馬打ち寄せて見れば大なる魚の背に乘れり從者に抱き取らせて見ければ頸に簡あり遣唐使某が子と書けり、さは我子にこそありけれ然るべき緣ありてかく魚に乘りて來るなんめりと憐に覺へていみじう悲くて養ふ、遣唐使の生けるにつけて此由を書き遣りたりければ母も今ははかなきものと思ひけるに斯くと聞きてなん希有の事なりと喜びける、魚に助けられたりければ名をば魚養とぞつけたりける云々。

●頭塔家石佛（奈良）

大和誌曰在奈良上淸水町俗傳僧玄昉頭顱或曰贈從二位大納言良岑安世墓安世以天長六年五月始作水車勒農刊民七年秋七月薨年四十六

藥師如來像

十輪院魚養墓



興正菩薩墓

當麻神社

●菅原寺（奈良市外）

奈良七大伽藍の一とし著しく知らる其他生駒郡伏見村大字西大寺といふ。蓋し當寺あるを以て名けたるなり。當寺は一名高野寺と云ふ。天平神護元年孝謙天皇勅して之を創建せられ、僧常騰をして開基せしめらる。當時は廣さ三十二町、中に四十九院、三百餘個の堂宇峙立し、寺領全國に散布して二十一萬に上れりと云ふ。後、衰頽したるを思圓上人（興正菩薩）再建し、元龜二年兵燹に罹りたるを以て漸次修築を加へ今や寺域六千九百八十一坪、本堂、多寶塔、愛染堂、浴室、僧院、觀音堂等尚存立せり、本尊觀音は丈六の立像にして鳥羽院の勅願に基き竣工の後、京都に在りしを興正菩薩當寺に遷したる者なり。又同堂の四天王は當寺建立の當初、鑄造せしものにて、天皇親ら玉手を以て熟銅を攪拌して其功を助け給ひし靈像なりと傳へらる。因に、當寺の坊中に古來豊心丹なる藥を鬻ぐ、是も道宣律師嘗て入唐の際其方劑を傳へ來ると云ふ。

夫木抄

さりともと西の大寺頼むかなそなたの
願ともしからしと

扶桑略記に曰く天平破護元年、高野天皇造西大寺供養七尺、金銅四天王像、神護景雲三年、天皇奉造西大寺彌勒淨土、在添下郡平城宮右京一條三坊、四年破却西大寺東塔心礎、其石大一丈餘厚一丈餘東大寺之東館盛山之石也、天皇不念之、破爲崇、即復捨淨地、不令人馬踐之、云々

●奥の院興正菩薩廟（奈良市外）

西大寺奥の院は愛染堂の稱なり。即ち是れ當寺中興の僧興正菩薩の廟なりとす

興正菩薩は忍性律師と稱し、行德一世に高く、公武の歸依最も深厚なりし、嘗て鎌倉の命に依て當寺を管理したり。彼の蒙古襲來の際、勅旨を奉じて男山八幡宮に詣り愛染明王を祈りて異賊降伏の修法を爲したりき。當時に愛染堂あるは蓋し之が爲めなり。又奥の院に五輪塔數一基存す、是れ興正菩薩の墳墓なり。

さりともと西の大寺頼むかなそなたの
願ともしからしを　　般富門院

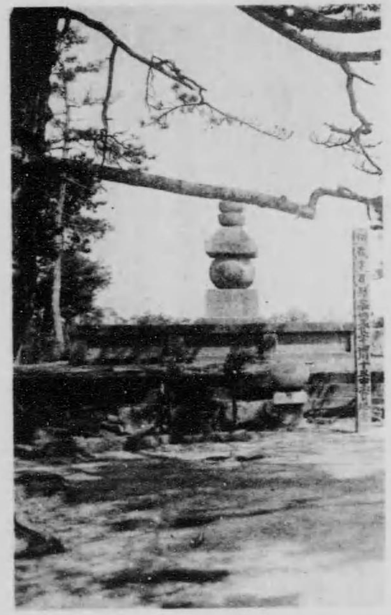
●田道將軍墓（奈良市外）

生駒郡都跡村字尼ケ辻なる菅原伏見東陵の東側池中に在り。菅原伏見東陵は是れ即ち垂仁天皇の御陵しにて巍々たる山上に設けられたる所謂深壕高陵、俗に蓬萊山と云ふ。垂仁天皇崩御あらせられ玆に奉葬せる明年田道間守將軍、常世國より歸り來りしも天皇の崩御後にて復命するを得ず、乃ち天皇の御陵に向つて大に慟哭し終に自殺を遂ぐ。或は蓬萊山の北圓塚なるもの田道の墓ならんかとも言ふ

田道間守は天日鉾の裔にして父を清彦といふ。垂仁天皇に仕ふ。垂仁天皇十九年、勅命を奉じて非時香果實を常世の國に求む。非時香果實は登伎士以能迦玖能木實にて後世の所謂橘なり。常世國とは韓國若しくは漢國南方の沿岸を指稱するなり。間守、其國に到りて木實を探り、其枝に實れる儘のもの若しくは果實のみのものを獲、景行天皇元年に至りて歸朝せり然るに圖らざりき垂仁天皇は既に崩御し給ひたる後なりければ、獲來りし果實を四綾四矛に分けて太后に献り、四綾四矛を垂仁帝の御陵に捧げ獻り「常世の國の登伎士玖能迦玖能木實を持ち參り上りて侍ふ」と白し、叫び哭きて遂に陵前に自殺を遂げたり。

或は曰ふ。垂仁帝が田道間守を常世の國に派遣せしめられしは、果實を求むる爲めにあらずして、其實は南洋諸島の形勢風土を視察せしめられしものにて、領土擴張の聖意に基くとの說あり。果して如何にや。

西大寺



興正菩薩墓

蓄源神社

菅原寺

田道將軍墓

上ノ五一

に使に預ることゝなれり、念ふに祖業の意茲に在らざるべし、願はくば居地の名に因て土師を改めて菅原姓と爲さん事を請ひ勅して之を許されたりと云ふ。

古今集

いさこゝに我世は經なん菅原や伏見の里のあれまくもなし

●西大寺（奈良市外）

西大寺奥の院は愛染堂の稱なり。即ち是れ當寺中興の僧興正菩薩の廟なりとす

興正菩薩は忍性律師と稱し、行德一世に高く、公武の歸依最も深厚なりし、曾て鎌倉の命に依て當寺を管理したり。彼

云々

●奥の院興正菩薩廟（奈良市外）

て侍ふ」と白し、叶び哭きて遂に陵前に自殺を遂げたり。

或は曰ふ。垂仁帝が田道間守を常世の國に派遣せしめられしは、果實を求むる爲めにあらずして、其實は南洋諸島の形勢風土を觀察せしめられしものにて、領土擴張の聖意に基くとの說あり。果して如何にや。

鑑眞和尚墓

唐招待寺金堂

孝謙天皇勅額

法輪寺三重塔

（中）唐招待寺三面僧坊
（下）山背大兄皇子御墓

法隆寺三重塔

●唐招提寺（大和）

南都七大寺の一として知らる、生駒郡平寶字年間の建立にして其の南方十三間を禮堂とし、北方十五間を舍利殿となせり、此舍利殿は卽ち往時の三面僧房の一部殘存せるものにして、頗る注目すべき

該小池を菩薩池と號けたりと云ふ。萬葉集に左の歌を載せたり。

池神の力士舞かも白鷺の梓くひもちてとひわたるらむ

●唐招提寺（大和）

南都七大寺の一として知らる、生駒郡都跡村に在りて大字五條村に屬す。此地素と新田部親王の邸宅なりと云ふ。寺域壹萬千四百二十三坪あり。天平勝寶八年聖武孝謙兩帝の勅願に依りて唐僧鑑眞大僧正の開基せるものなり、創建當時より千二百年來未だ一回の火災にも罹らず、諸堂宇、經藏等今尙ほ依然として舊時の觀を保ちつゝあり。奈良朝時代に於ける美術を研究せんとするものは法隆寺東大寺と共に貴重なる好個の古刹と謂ふ可し其講堂は平城宮内の朝集殿を遷したるものにて彌勒菩薩を安置す、唐の軍法力の作と傳ふ。鑑眞律師常に此堂に於て戒律を講じたりと云ふ。

金堂は唐僧如寶の建立する所にして七間四面屋根四柱本瓦葺、特種の構造に成る。本尊は丈八の釋迦佛なり、而して其背光中に千體の佛像を刻み、背後に二千體三千佛を描けり。食堂は藤原仲光の家を徙したる者なりとぞ。舍利殿は佛舍利三千粒を本尊とし、南方の禮堂は毘首羯磨の作に係る赤旃檀の釋迦像を本尊とす五層塔は大同四年江沼小並等勅を蒙りて之を造る。絹索堂は藤原清河其舊宅を喜捨して建立し不空絹索觀音及び二十八部衆を安置す。開祖鑑眞の遺像は御影堂に存し、中興の祖覺盛和尙の廟は西方院阿彌陀堂に在り、當寺は今戒律宗の本山たり。左に當寺堂宇の創建年代を記す。

金堂、鼓樓　天平勝寶八年
講堂、舍利殿、禮堂　天平寶字三年
經藏、寶藏　弘仁二年

●唐招提寺三面僧坊（大和）

唐招提寺の三面僧房は僅に今其の一部を存す。當寺の東室講堂は長さ三十間天平寶字年間の建立にして其の南方十三間を禮堂とし、北方十五間を舍利殿となせり、此舍利殿は卽ち往時の三面僧房の一部殘存せるものにして、頗る注目すべき價値あり。今の世、三面僧房の殘れるものは、僅に法隆寺の東西南房あるのみ。

●法輪寺（大和）

昔は法琳寺と書したり。生駒郡富郷村大字三井に在り。法隆寺の北方八町に所在する三重塔及び妙見堂卽ち是れなり當寺は上宮妃三種媛の祈願に基き山背大兄の創建に係る。其塔婆は創建當時の遺構にして、今特別保護物に加へらる。尙當寺には百濟國傳來の木造觀音一體を存す舊記に據れば當寺は三井寺又は法林寺と名くとあり。金堂、講堂、大塔、食堂等ありて其建築の樣式は法隆寺に似たりと記せり、右の文中大塔とあるは卽ち現存せる三重塔なり、當寺は眞言宗にして今東寺に屬せり。

●法起寺（大和）

法隆寺の東南約十二町、富郷村字岡本に在り。當寺は法輪寺と同じく山背大兄王の創建に係る。素と聖德太子岡本宮の所在地たりと云ふ。推古天皇の十五年に創建せられ、爾來幾百千年を經過し漸次朽廢に傾きたるを延寶六年具足戒律師之を再興せり、今、本堂及三重塔を存す、就中三重塔は聖德太子當時の制を窺ふに足るものにして近來特別保護物に編入せられたり。傳ふる所によれば聖武天皇の御宇當寺の銅像六體盜人の爲めに盜み取られ求め尋ぬれども得る所なかりしが、數月を經て平群驛の西方に小池あり夏季六月の候牧童等池邊に遊びたる折柄池中に木片の浮び其木の頭に一羽の鷺の停り居るを認めしを以直ちに牽き上げ見れば何ぞ圖らん觀音の銅像なりしと、是より該小池を菩薩池と號けたりと云ふ。萬葉集に左の歌を載せたり。

池神の力士舞かも白鷺の梓くひもちてとひわたるらむ

●山背大兄墓（大和）

法隆寺村大字法隆寺に在り。世に北岡墓と稱す、卽ち山背大兄皇子の墓なり延喜式には此墓は平群郡に在り兆域三町南北三町と記せるものなり。

●鑑眞和尙墓（大和）

唐招提寺の開祖鑑眞和尙の墓は同寺の背後に在り。昔は此墓の附近に孤山の松醍醐の泉ありて皆是れ鑑眞和尙の遺跡と稱されたるが、風雨千數百年、今は址なと消滅して其俤だに殘ぬるに由なし。

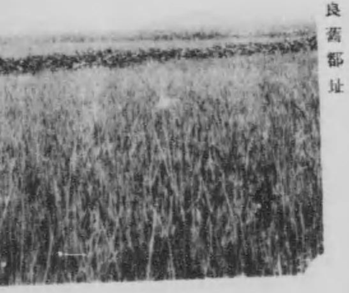
鑑眞和尙は本姓淳于氏、律宗の開祖唐國揚州、江陽縣の人、十四歲の時大雲寺の智滿に從ひて沙彌となり、大寶二年十二月祥彥、道興の二弟及び榮叡普照等八十餘人の徒弟と共に日本に來航せんとして前後五回風波に妨げられたる末遂に天平勝寶六年五月筑紫の太宰府に着し翌年四月入京す。其際佛舍利三千粒、阿育王塔樣銅支提、止觀、玄義、文句、菩提子三斗、晉王右軍眞行書一卷を献す、後ち宮廷の信仰厚く、聖武上皇は鑑眞に就て菩薩戒を受け給ひ皇后、太子、公卿以下同じく受戒者四百三十餘人に及べり、次で唐招提寺を創建せり、蓋し是れ本朝の戒法最も燦盛を極めたる時代なりとす。斯て鑑眞は天平寶字二年大和尙の號を賜ひ同七年五月六日享年七十七を以て示寂す。

唐招提寺に鑑眞和尙の御影を拜し御眼のしひさせ給ふを思ひつづけて

若葉して御目のしづく拭はゃや　芭蕉

神功皇后御陵

法華寺十一面觀音像



奈良舊都址

●神功皇后御陵（大和）

狹城盾列池上陵と云ふ。大和國生駒郡平城村大字山陵村の北にして秋篠寺の東方八町に在り。此地を御陵山と稱す。御陵は丘に倚りて南面せり。長徑二百間に亘り瓢形を爲す。周圍に壕あり。其北方缺け、東方は損せり。

神功皇后は、御諱を息長足姫尊と申す御幼少より聰明にまし〳〵仲哀天皇の二年皇后に立ち給ふ。筑紫の熊襲叛するに及び天皇之を討たんとて征途に上らせられ幾干もなく病に罹りて征旅中に崩御あらせらる。皇后深く秘して喪を發せず、臣下をして鷹襲を征討せしめられ、親ら男裝して新羅征討の師を起させられ、戰はずして新羅の降を容れ凱旋し給へり。斯くて後、應神天皇を奉じて攝政七十年御壽壹百を以て崩御あらせらる。

●孝謙天皇御陵（大和）

高野陵と云ふ。狹城盾列池後陵の南方に在り。陵制卑小なるも高塚と稱し周らすに壕を以す。一書に西大寺東北の古墳これ也とあり。西大寺は古來高野寺と稱し今に至るも此稱變せず。高野は元來彼地の名にして而して、孝謙天皇の別稱なり、孝謙天皇を世に高野天皇と稱するを以ても知るべし。

みわたせば高野の野邊のうつき原みな白妙にさきにけらしな。（萬葉集）

孝謙天皇は聖武天皇の皇女に在しまし御母は光明皇后なり。聖武天皇皇子なきを以て天平二十一年立ちて位に即き給ふ天皇位を大炊皇子に讓り薙髮して法基尼と稱し給ひしが大炊皇子廢せらるゝに及び重祚して稱德天皇と稱され給ふ。神護景雲四年八月四日崩御あらせらる寶算五十三。

●奈良舊都址（大和）

和銅三年、元明天皇、都を奈良平城に遷させ給ひてより七朝七十有餘年間、玉の宮居として奠め給ひし都の遺址は、今の生駒郡にして奈良の西方一面の平野こそ寔に舊都の址なれ。今其區劃せる條坊の遺跡僅に存するを見る。往時奈良の都は九條の橫衢を置き中縱街を朱雀大路とし、左右兩京に別ち、各四坊を設けたり京二坊大路は三條以南に於て大安寺村の南に沿ひて存す、左京一坊大路は三條南北に於て佐保川西畔に沿ひて存す、朱雀大路は滅して跡なし。其他多くは廢滅して舊時の俤のみを忍ばしむるものあるに過ぎず。延曆年間、桓武天皇、都を京都に遷し給ひたる後は、一時に衰色を呈したるも而かも尙平城は別宮として存せられ、次で東大寺、西大寺の造立ありしを以て尙盛大を失ふに至らざりしも。五十一代平城天皇入御の後は全く廢絕に歸したり。天平十六年寧樂奈良の京の荒墟を惜める歌萬葉集に載せられたり、

くれなゐに深くそめにし心かも
世の中を常なきものと今ぞ知る

寧樂の京師の忘れいぬべき

平城の京都の移らふ見れば
誦し來つて漫ろに榮枯無常の感なき能はざるなり

平城　天皇

古里となりにしならの都にも
花はかはらず今はさきけり

三條右大臣

道しばの露よの月をふみならし
ふりにし都あれにけらしな

●奈良大極殿址（大和）

奈良平野の北方、一條の道路、市街を出でゝ一直線に田畝の間に通ずる所謂一條通りの終局點を法華寺といふ。其西方は往時宮居の存在地にして、今、大黑芝の名を存する所は即ち當時の大極殿址なり。此邊都跡村稱とし今は犂破して田圃となす、明かに廢墟を認め難きを遺憾とす。

あをによし奈良のいへには萬代
に吾もかよはん忘るゝと思へば

元明　天皇

あをによし奈良の都は咲く花の
にほふが如く今盛りなり

小野　老

舊都茫々古帝城　三條九陌自縱橫
繡田麥秀農人度　馳道蓬生賈客行
細柳低垂常惹恨　開花歷亂竟無情
千年陳迹唯蘭若　日暮幼々野鹿鳴

太宰　春臺

●法華寺（大和）

傳へて光明皇后の本願に依りて伽藍を建立せりと云ふ。添上郡佐保村大字法華寺に在り。寺前、東の方、法蓮より東大寺景清門に通ずる一徑は右京一條南路にして南の方佐保川に沿ふ田徑は左京一坊大路なり。本寺は往時奈良都時代には宮城境域に屬したるものゝ如し。素と藤原不比等の邸址なりしと云ふ。造立當時は當寺を國分尼寺となしたりしが、今尙ほ律宗を奉じて貴族尼住職し、門跡と號す、一說には東大寺を總國分僧寺と爲すに準じ、當寺を總國分尼寺と云ふ。今や佛堂殿舍甚だ頹廢に傾きたり。又當寺に安置する木彫立像の十一面觀音一軀は明治三十一年國寶に編入せられたり。

●海龍王寺（大和）

法華寺の東方に住す。一名角院と稱す天平三年光明皇后の創立に係る。一說に僧玄昉の建立する所なりと云ふ。本堂に安置せる十一面觀世音及び文殊菩薩は共に國寶に編入せらる。又寺寶として聖武天皇の勅額を藏す、當寺は鎌倉時代に西大寺の僧叡尊なるもの修造せりと云ふ。今西大寺末に屬す。

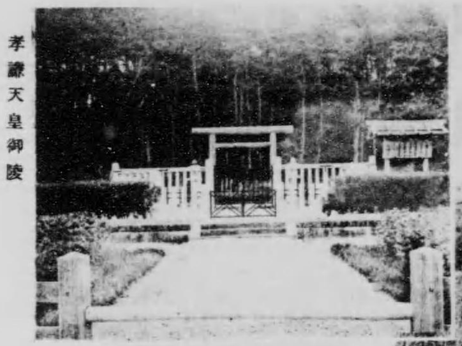
と稱し給ひしが大炊皇子廢せらるゝに及び重祚して稱德天皇と稱され給ふ。神護景雲四年八月四日崩御あらせらる寶算五十三。

●奈良舊都址（大和）

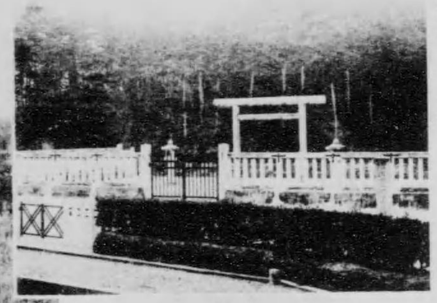
和銅三年、元明天皇、都を奈良平城に

奈良平野の北方、一條の道路、市街を出でゝ一直線に田畝の間に通ずる所謂一條通りの終局點を法華寺といふ。其西方は往時宮居の存在地にして、今、大黒芝の名を存する所は即ち當時の大極殿址なり。此邊都跡村稱とし今は墾破して田圃

僧玄昉の建立する所なりと云ふ。本堂に安置せる十一面觀世音及び文殊菩薩は共に國寶に編入せらる。又寺寶として聖武天皇の勅額を藏す、當寺は鎌倉時代に西大寺の僧叡尊なるもの修造せりと云ふ。今西大寺末に屬す。



孝謙天皇御陵



神功皇后御陵

奈良大極殿址

聖武天皇勅額

法華寺十一面觀音像

海龍王寺西金堂

法華寺

奈良舊都址

天萬國曼陀羅圖

法隆寺壁畫

中宮寺本尊彌勒菩薩像

法隆寺

玉蟲厨子

夢殿

聖靈殿

●法隆寺（大和）

其建初以來毫も舊形を改めざる法隆寺は我國未曾有の名刹なり。

所在は生駒郡法隆寺村大字法隆寺にして、初め聖德太子用明天皇の勅に依りて置して本尊とせり、又背後に多くの佛像を置ける傳法堂あり其佛像中の四天王木像は逸品と稱せらる。

●壁畫（大和）

法隆寺の壁畫として聞ゆるものは金堂黑漆地に畫き、其色綠青、黃土、朱等あり、樣式六朝風の韓化せられたるものと言ふべく、人體の寧ろ寫實の意を失はざるに反して自然景の著しく裝飾的便化を經たるを見る、蜜陀繪は同じく法隆寺の橘夫人厨子の繪などにも見ゆる此時代普

●法隆寺（大和）

其建初以來毫も舊形を改めざる法隆寺は我國未曾有の名刹なり。

所在は生駒郡法隆寺村大字法隆寺にして、初め聖德太子用明天皇の勅に依りて新堂を創建し、其後推古天皇元年より十五年に亘りて增築せられ、其規模の大なる當時此寺の右に出づるものなかりしと言ふ、疆域二萬二千四百餘坪、建造物二十一棟、金堂あり、講堂あり、東院夢殿西金堂始め幾多の殿堂境內に峙立して輪奐の美を極む、殊に東院は舊斑鳩堂にして建築の宏壯なるは言を俟たず、藏むる所の器具翫弄品の如きも皆な當時の儘に保存せられ、他の珍寶奇品累々として堂に滿つ、帝室に於ても特に之を尊重せられて其保管中に置き給ひ、濫りに衆庶の拜觀を許さず、又當寺の建造物は概ね特別保護に編入せられ、國寶は一百十九點の多きに及ぶ。

●夢殿（大和）

夢殿は上宮王院とも稱せられ、聖德太子の三昧定に入らせ給ひし所なり。

推古天皇初年の建築に係り、天平十一年に至り再築せられ、爾來貞觀年間の修理を經て今日に及べり、殿は廻廊の殆ど中央に位し、八稜形を爲し各面皆な二間三尺あり、中に本尊救世觀音、前立觀音阿彌陀如來、聖德太子の像を安置す、本尊は立木像金色にして長二尺六寸あり、太子等身の像と稱せらるゝは全體扁平にして左右に鰭狀の裝飾あり、寶冠は金銅透彫にして、蔓草の模樣頗る精巧實に天下有數の靈像なり、其精巧なる木像多くあり、殿の後方に御繪殿及舍利殿ありて御繪殿の壁には太子一代の事を描き、文以て之を記し、御繪殿略記又は障子五間略記と稱す、舍利殿には佛舍利一粒を安置して本尊とせり、又背後に多くの佛像を置ける傳法堂あり其佛像中の四天王木像は逸品と稱せらる。

●壁畫（大和）

法隆寺の壁畫として開ゆるものは金堂に畫けるもの即ち其れなり。

此壁畫は壁面着色にして、竪一丈一尺七寸横八尺三寸六分、其雄偉なる以て世界文化史上の異彩たりと激賞せらる製作の年代を確證し得ざるも、天智天皇の御宇即ち今より約一千三百五十餘年前を下らずと傳ふ、今や剝落汚損の甚だしきものあるに拘らず、大體に至りては儼として面目を當初の儘に存す、蓋し此壁畫の最も興味ある一點は假令幾分の支那化朝鮮化を免れざる所あるにもせよ、其藍本を殆ど直接に印度西域に仰げるに在りて佛菩薩の配列と言ひ、面相と言ひ、圖は四方大小十二ありて古來阿彌陀寶生藥師釋迦の四佛淨土及諸多の菩薩形として信ぜられたるが、或る學者は近時之に對して異說を發表せり、本書に載せたるは西壁阿彌陀の一圖也。

壁畫の在る金堂は偉大宏麗の建築にして、兩層を爲し、下に一階の裳屋を加ふ其形の整調、其規模の儼然たるを觀る者無限の壯美を感せずんばあらず、桁行九間二尺餘、梁行七間四尺餘なり、而して此堂の壁畫と共に其名著るゝものは『玉蟲厨子臺座蜜陀繪』なりとす、玉蟲厨子臺座蜜陀繪は板面着色繪なり、玉蟲厨子の高さ七尺餘、大棟に鴟尾を上げ下に須彌座を有する入母屋造宮殿にして、金銅透彫唐草の下に甲蟲の羽を伏せたるより後世玉蟲厨子の稱呼を得たり、繪は其三方扉（二天及菩薩圖）後壁（多寶塔圖）及須彌座の四面（正面舍利供養、後面須彌山圖、左右側佛本生圖）にあり、酸化亞鉛に油を混じたるものを媒料とする蜜陀繪を以て黑漆地に畫き、其色綠青、黃土、朱等あり、樣式六朝風の韓化せられたるものと言ふべく、人體の事ろ寫實の意を失はざるに反して自然景の著しく裝飾的便化を經たるを見る、蜜陀繪は同じく法隆寺の橘夫人厨子の繪などにも見ゆる此時代普通の技法なり。

當寺の南大門と同じく特別保護建造物たる中門は一に仁王門と稱し、桁行六間五尺梁行四間二尺餘、樓門造にして、其樓上に孝謙天皇の供養せられたる百萬塔を多く藏せり、仁王の像は止利佛師作と傳ふ、門を中心として昔の僧なる回廊左右に連り、北折して金堂及五重塔を包み直ちに其後方なる講堂に達し自ら一廓を形成す。

淡海　三船

南嶽留禪影　東州現應身　經世名不滅
歷世道彌新　尋智開明智　求仁得至仁
垂文傳正法　照武誅凶臣　茂實流千載
英聲暢九根　我皇欽佛果　廻駕問芳因
寶池香花積　鈞天梵樂陳　方知聖與聖
玄德永相隣

契　冲

いかるかの宮は昔の軒の草
おひこそかはれ人の心に

千　那

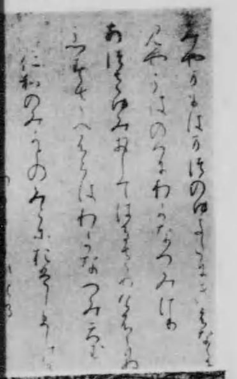
お袴のはづれなつかしべにの花

●中宮寺の曼荼羅（大和）

聖德太子御母后の爲めに創立せる寺を中宮寺と稱す、亦法隆寺村に在り、當時は斑鳩御所と稱し、後中宮尼寺と言ひ、尼宮門跡の一に列し皇族女僧入寺し給へり、本尊として彌勒菩薩を安置し、寺寶には『天壽國曼荼羅圖』あり、之れ推古天皇采女に勅して刺繡せしめ給ひしもの、下繪は東澤末賢、高麗加西隆、津奴加巳利の畫く所と傳へられ、我國最古の織物として名あり。

國曼陀羅圖

殿



紀貫之故郷の梅

●長谷寺（大和）

三輪山の背後は初瀬山にして『長谷の觀音』を以て名ある長谷寺は其山腹に在り豊山神樂院と號す、往古に在りては武内宿禰が山麓の淺瀬より寶塔を獲て之を西北隅の高處に祀り、山名を泊瀬豊山と改め、爾後年を歴ること三百餘歳道明上人此寶塔を石室に安んじ泊瀬寺と改稱するに至れり、後、天武天皇の勅を蒙りて精舍を今の觀音堂の地に造營し、斯くて聖武天皇の御宇に及び、詔を慈道僧都に下して廣く天下の衆庶に勸化し新に伽藍を興さしめ給ひ、天平七年を以て上棟し同十九年九月に至り供養式を擧行せり、而して本尊十一面觀世音は佛師聖文會聖主勳等が靈木を用ひて彫刻せるものなりしも、永承七年火災の爲めに佛體盡く灰燼に委し唯だ其面部のみを存し再營の時に之を體内に納めたり、然れ共此再營の像も亦喜保元年に燒失して又佛面のみを殘存したるより、承德年間三たび之を新彫せるも建保七年復た炎上し承久元年四たび之を造營せり。

三萬餘坪の境域を有する當寺は、山に據りて廻廊を通じ、本堂は廻廊の上端に在りて懸崖の上に架す、其廻廊の如きは三折九十二間の長廻廊にして他に多く見るを得ざる建築物たり、堂塔は慶安三年德川家光の建造に係り、俗に千疊敷と稱する本坊は寛文七年德川家綱之を創造せしむ、三十二の佛堂、十三の僧堂二十五の庵室及數多の堂宇境内に建てられて其構造頗る雄大なり、

千年以前の繪畫彫刻の好標本として名ある『千佛多寶塔』は開山道明上人作に係る竪三尺幅二尺六寸厚一寸の鑄銅板製にして、其鑄巧の精妙なる古代美術研究者を驚歎せしむ、鐘樓には『未來鐘』と稱する古鐘を懸く。

眞言宗新義派の總本山たる當時は西國順禮第八番の札所として名あるのみならず、堂塔の壯觀牡丹櫻及花の名所に數へらる、唯だ憾む櫻樹減少して當年の俤なきことを。

●紀貫之故郷の梅（大和）

長谷寺の廻廊を繞りて本堂に至らんとする間に瀟洒なる林泉あり、其小丘の處に『紀貫之故郷の梅』と札せる古梅一株他の樹木に超越して獨り當年の俤を留む、之れ曾識の當寺に移し植へたるか、貫之の人格を尚んで後人之を植へたるか、兎に角當寺林泉中の名樹たるを失はず。

貫之は紀望之の子なり、延喜年間御書所頭となる、越前權少掾、内膳、典膳、少内記等を歴任して大内記に進み從五位下に叙せられ、次で加賀、美濃等の介となり延長年間大監物右京亮を拜し又土佐守に任ぜられて任地に赴き、承平年中任滿ちて歸洛す、天慶年間に及んで玄蕃頭となり從五位に進み木工權頭に移り從四位に陞叙せらる。

貫之書を善くし又最も和歌に長じ其妙神に入る、嘗て勅を奉じて紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等と共に『古今和歌集』を撰し之が序を作る、後又萬葉集鈔、新撰和歌集を勅選せり、天慶九年五月卒す。

本書載する所の筆蹟は有名なる土佐日記を定家の臨模せるものにて前田侯爵家の秘藏に係る。

紀貫之

人はいさこゝろもしらずふるさとは
花ぞむかしの香に匂ひける

ことしより春しりそむる櫻花
ちるといふことはならはざらなむ

●藤原定家墓（大和）

大和藤原定家の終焉に關するとは小倉山莊の項に於て之を審かにせるが、長谷寺境内に藤原俊成の墳なるもの在りて定家の墓も亦此に在りと傳ふ、之れ俊成の墳ありしが故に、定家の墓を其塋域に設けたるか、他に奮緣ありて然るか今之が詳を記する能はず、思ふに定家曾識の地たるより此に墓を置けるものならんか。

定家の詠める『三輪が崎夕汐させば村千鳥佐野の渡りに聲うつるかな』の場所に就ては其說紛々たりと雖も、三輪が崎と稱する所は三輪町を出離れて長谷の方へ行くに三輪山の尾崎あり之を『三輪が崎』と言ふ、此の邊に山より流るゝ小溝あり土人之を佐野の渡と呼ぶ』云々は倭路記に見ゆる所にして『くるしくも降り來る雨か神の崎狹野のわたりに家あらなくに』とある長寸忌奥麿の歌は此佐野を詠めるならん。

●初瀬山（大和）

泊瀬山の稱ある初瀬山は三輪山に連れる山容優雅の山なれば古來詩材とせられ昔の歌人に泊瀬山泊瀬川として詠まれたるもの多し、雄略天皇の『臺暮利矩の播都制の山は、いてたちの宜き山、はしりでのよろしき山の、籠國のはつせの山は、あやにうらくはしあやにうらくはし』と詠じ給ひ『籠國のはつ瀬の山の山際にいさよふ雲はいもにかもあらむ』とは萬葉集に見ゆる歌なり。

●初瀬川（大和）

初瀬川は源を磯城郡上之郷村大字小夫の山溯に發し南流して長谷寺の傍らを過ぎ、更に西流に變じ朝倉三輪を經て又西北に屈折して山邊郡二階堂村に至り、玆に佐保川と合し大川即ち大和川となる、此間の流域凡そ十里『石走のたきち流るゝ泊瀬川たゆることなくまたも來て見む』と古歌に見ゆ、初瀬川は泊瀬川或は百瀬川と呼ばれたることもあり。

千年以前の繪畫彫刻の好標本として名ある『千佛多寶塔』は開山道明上人作に係る竪三尺幅二尺六寸厚一寸の鑄銅板製にして、其鑄巧の精妙なる古代美術研究者を驚歎せしむ、鐘樓には『未來鐘』と稱する古鐘を懸く。

紀貫之筆蹟

長谷寺本堂

長谷寺廻廊

紀貫之故郷の梅

ことしより春しりそむる櫻花
ちるといふことはならはざらなむ

●藤原定家墓（大和）

大和藤原定家の終焉に關するとは小倉山莊の項に於て之を審かにせるが、長谷北に屈折して山邊郡二階堂村に至り、茲に佐保川と合し大川即ち大和川となる、此間の流域凡そ十里『石走のたきち流るゝ泊瀬川たゆることなくまたも來て見む』と古歌に見ゆ、初瀬川は泊瀬川或は百瀬川と呼ばれたることもあり。

藤原定家墓

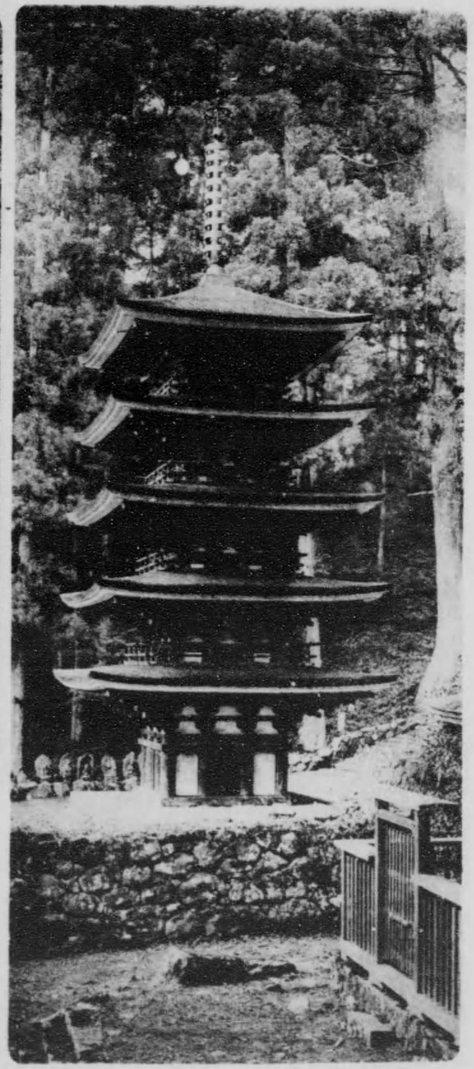
（下）初瀬山　（中）初瀬川

●室生寺（大和）

龍穴神宮寺と號せる室生寺は、宇陀郡室生村大字室生に在り。

當寺は弘法大師の中興に係り、此地方駐駕あらせられたる地なりと傳ふ、又神武天皇が八咫烏の向ふ所を尋ねさせられて、始めて宇陀に入り給ひし『穿邑』は高倉山の西なる宇賀志村なりと、高倉山は即ち天皇が國内の賊蕃を望み給ひし地に緒環塚は一の華表を出で右折したる街道の傍に在り、更に二の華表北に大三輪寺址在りて其所に若宮大直禰子神社在り、其北に狹井社在り狹井川絹々として流る神武皇后の在ませし宮址も此近傍なりし

室生寺



室生寺五重塔

大神神社

三輪山

●室生寺（大和）

龍穴神宮寺と號せる室生寺は、宇陀郡室生村大字室生に在り。

當寺は弘法大師の中興に係り、此地方一帶の山中に於ける名刹にして、域内幾多の堂塔を有す、地は山間の一盆地に位し川を帶び山を控へて最も風光に富む。

史蹟としては往昔神武天皇熊野より大和地方に入り給へる時、此方面を通御あらせられたる事史上に見ゆ、室生寺道としての二路は、名張街道大野より入るものと、他は高井より入るなり、大野に大野寺ありて『室生の北門』と稱し、寺邊に巨巖並列す其最大なるものに悉く佛像を刻み、高井より左に入れば途上に佛隆寺あり、之を『室生の西門』と言ふ、室生寺の本堂は一に灌頂堂と稱し弘法大師刀と傳へらるゝ如意輪觀觀音を安置せり、其他彌勒堂、金堂、奥之院等の堂塔排置よく散在す。

●特別保護の五重塔（大和）

室生寺の金堂は古建造物の一なりと傳へらる、又弘法大師作に係る五重塔は構造精緻を極め、明治三十一年を以て特別保護建造物となれり、後山を室生寺と言ひ、昔、噴火山にして今猶龍穴と稱する噴火口を存す、傍らに龍穴神社あり、雨乞の神として崇敬せらる。

此方面の史蹟

大和平野の中に於て其區劃を異にする宇陀郡は、概ね山嶺相連り道路險惡なり鄙衙所在地たる松山より伊賀伊勢に通ずる處は、往昔に在りて通行容易ならざりしを知るべし、神武天皇が兄猾を誅し給へる血原の地は名張道上田口方面と言ひ宇賀志方面なりとも傳ふ。

神末と稱する所に御杖神社あり、昔、天照大神が倭姫命を從へさせられて暫く駐駕あらせられたる地なりと傳ふ、又神武天皇が八咫烏の向ふ所を尋ねさせられて、始めて宇陀に入り給ひし『穿邑』は高倉山の西なる宇賀志村なりと、高倉山は即ち天皇が國内の賊勢を望み給ひし地にして今ま高見山と稱す。

伊佐奈村宇高塚に八咫烏の靈を祀れる八咫烏神社あり、續日本紀に慶雲二年九月丙戌八咫烏社を大和宇太郡に置いて祀るとあるもの蓋し之れなり。

而して神武天皇が八十梟帥を誅伐し給ひし所は、曾爾村の上方に聳ゆる國見岳なり、又此附近に古への漆部鄰あり。

●三輪山（大和）

孤峯峻拔にして老樹鬱蒼たる三輪山は三輪町の東に在り、眺望群山に異なり春日の三笠山と相對す、一に三諸山と言ひ神並山とも稱するなり、古歌に曰く

三諸つく三輪山見ればこもりくの
初瀬の檜原おもほゆるかも

●大神神社（大和）

三輪山下に鎮座する官幣大社大神神社は、三輪社とも稱され大物主命を祀れり、社域實に三百町を有し、拜殿、神饌所、社務所、神庫以下二十六宇の建物を列ぬ。

崇神天皇の七年二月を以て祭祀せられたる當社は、初め拜殿を神殿に代へ來りしが近時神殿を建造したり、後に滿山鬱蒼たる三輪山を負ひ、社殿の周圍亦老杉古檜を以て包擁せらる、殊に多くの櫻樹は苑内隨處に植へられて神韻綽々たり、又境内に探るべき名勝少なからず、玄賓庵は北方檜原溪に在り弘仁年間名僧玄賓の隱栖せし處、其北に檜原神社在り往古の笠縫邑の舊跡なりと傳ふ、更に其附近に海拓榴市在り昔繁華なる市場なりしと而して著名なる『印の杉』は安政年間雷火に罹りて今ま纔かに古幹を存するのみ、緒環塚は一の華表を出で右折したる街道の傍に在り、更に二の華表北に大三輪寺址在りて其所に若宮大直禰子神社在り、其北に狹井社在り狹井川絹々として流る神武皇后の在ませし宮址も此近傍なりしと言ふ、他に三光谷、双本の杉等の舊跡在り。

縣名勝志の古事記に見ゆる緒環塚記事は如左

活玉依毘賣、其容端正、夜半之時、有神相感、美人妊身、其父母欲知其人、誨其女曰、以赤土散床前、以閉蘇紡麻貫針、刺其衣裳、故如教、而且時見者、所着針麻者、自戸之鈎穴、控通而出、唯遺麻者三勾耳爾、即知自鈎穴出之狀、而從糸尋行者至美和、而留神社、故知其神子、故意富多多尼命者神君鴨君之祖也。云々

即ち大己貴命、玉依姫の許に通ひましゝ時、姫が命の行方を知らんとて、苧環の絲を着けし針を命の裳に刺して跡を留めさせ給ふ所に、其絲三諸山に留まり、其綰ぬる所の絲三輪殘れるを埋めたるより三輪の名の起る所以なりと傳ふるなり

三輪の名稱に就て和名抄の說く所に依れば『三輪の名義は古事記及姓氏錄舊事紀に績苧三縈の古諺を錄す、然れ共酒瓮をも水曲をも古言皆な三輪と言ふ、此地初瀨川の迂曲處にあれば水曲の稱先づ起り、其山に名け其社に及ぼし、遂に祭神の酒瓮に及ぼしたるものか、云々とあり、又倭路記の中に大三輪寺を記して『かたらに三輪明神の王子の入定の所あり、王子寶殿にとち入せ給ひし時の兩足の跡顯然とあり、開きて見るに其あと聊かふみかへたり、顯當を表し給ひしよし神秘などかたれり、大三輪寺は近世停廢したれど、其址に若宮存す。神子大田々根子の廟墳なりと云ふ』と見ゆ、大田々根子とは活玉依姫の生まれ給へる御子なりと傳ふ

畝傍山東北御陵

一の鳥居

一の燈籠

●橿原神宮（大和）

皇祖神武天皇が建國三千年帝業の基を開き給ひたる橿原の地は大和國高市郡白橿村にして、橿原神宮は實に畝傍山の東南に在り。本神宮は明治二十三年の造營に係り、特旨を以て京都舊闕の神嘉殿及び内侍所を賜はりて移造し橿原神宮と稱し官幣大社に列せり。境内一萬八千坪、北に畝傍の碧山を負ひ、西南の二方亦翠松に圍繞せらる、外域の中に一池あり、鏡ケ池と云ふ。池の北端に石橋を架し以て一の鳥居より二の鳥居に通ず、二の鳥居を入れば門ありて左右に土塀を遶らし是より以内を内廓とす、内廓の内に正殿、拜殿、幄舍、寶庫、神饌所、祭器庫、社務所等は建てられたり。正殿は西方に立ちて更に神垣を遶らす、東西十間、南北七間にして皇后の内侍所に模す、拜殿は其前面に在りて東西八間二尺、南北十三間二尺、其構造神嘉殿に擬すと云ふ、寶庫は正殿の背後千鳥ヶ池の畔に建てられ神饌所其他の建物と相連り、其盡くる所に櫻橘二樹を植えたり、宛も是れ舊内裏に模したるものゝ如し。

神武天皇が都を橿原に奠め給ひたる當時の狀況に『神皇正統記』は左の如く記せり。

天下悉く平ぎにしかば、大和國橿原に都を定めて宮作り、其の制度天上の儀の如し、天照大神より傳へ給へる三種の神器を大殿に安置し、床を同じくましまし皇宮神宮一なりしかば、國々の御調物をも齋藏に納めて官物神物のわきだめなかりき、天兒屋根命の孫天種子の命、天太玉命の孫天宮命專ら神事を掌り、神代の例に異ならず云々。始め神武天皇の都を橿原に營まるゝや其建築法大に進み、神代の比にあらず、先づ地に穴を堀り、其中に一巨柱を立てゝ之を天の御柱と云ふ其四方に小柱數本を建て、上に梁桁、椽を上げ、藤葛にて結び、草にて葺き、屋上に千木鰹木を設く、床甚だ富く、昇降するには階子を用ゐたりと云ふ。橿原の宮は實に斯くの如くにして營まれたるなり而して年代の久しき、皇祖當時の宮址は絶無に歸して、今や之を尋ぬるに由なし然かも連綿として三千年一系の皇統は彌榮えに榮へさせたまふ。

●畝傍山（大和）

皇神武天皇御陵所在の山として、其名を記憶せざる者なし。當山は高市郡白橿村の中央に位し一名を慈明寺山と稱す

大空に雁ぞ啼くなる畝傍山
三笠の山に紅葉しぬらし

と古歌に詠まれたるは此山なり。毎年二月朔日、十一月初子日の兩日には攝津の住吉神社より御供を此山に取りに來りしと云ふ。畝傍山は天香久山、耳成山と共に大和の三山と稱せらる。往時は山腹に畝火神社ありしが、今山頂に移せり、神功皇后を祀ると傳ふ。名けて畝火明神と云へり。此山より黑雲母、斜長石等の鑛物出づと云ふ。

○　神武帝皇后

宇泥備山ひるは雲飛ひ夕されは風吹ふ
かむとす木のはさやける。

○　富士谷成章

神代をもかけてぞしのぶ玉たすき畝火の山をけふし見つれば

●畝傍山東北御陵（大和）

是れ即ち神武天皇の御陵なり。區域周圍四百五十間、畝傍の山麓に位し四周繞らすに二重濠と瑞籠を以てす。本陵は後世其の所在を失ひ、元祿年間神武四の字存するに據りて其近傍に就き古塚を搜索し以て之を帝陵と爲したり。當時神武帝陵と爲せるものは四條の管内に存せる荒丘にして、今綏靖帝陵に擬せらるゝものなり。其塚山に就て一書には高さ七尺週三十間と記せり、德川幕府は之に據りて陵域を標す。寛政四年幕府の儒官柴野邦彦此地を巡視して神武帝陵を詠せる詩あり、其詩に曰く

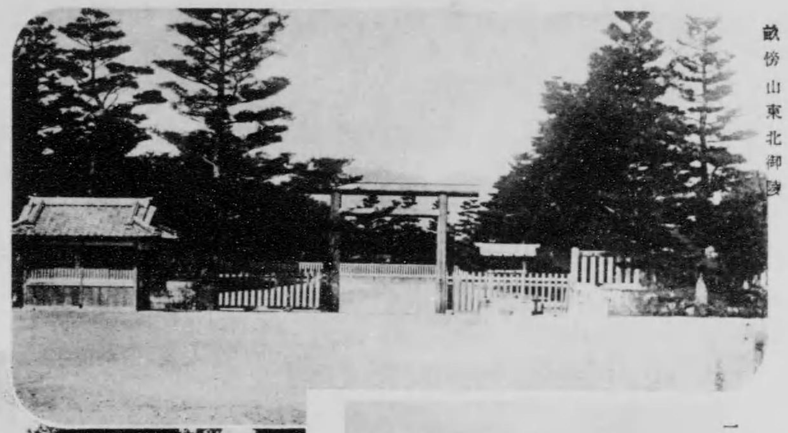
遺陵方向里民求　牛死孤松數畝丘
非有聖神開帝統　誰敎品庶脫夷流
庶王像設專金閣　藤相墳塋層寶樓
百代本支麗不億　幾人來此一回頭

文久年間に至り戸田大和守の調査に依りて始めて其兆域を封せられ、更に明治維新後規模を擴大し以て今日の壯嚴を致せり。左に神皇正統記に記す神武天皇の一節を摘錄す。

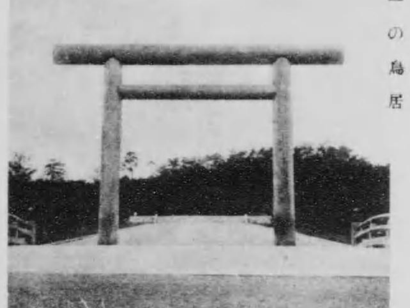
人皇第一代、神日本磐余彦の天皇と申す、後に神武と名け奉る、地神鸕鷀草葺不合尊第四の子、御母玉依姫、海神小童の第二の女なり。神日本磐余彦と申すは神代よりのやまとことばなり、神武は中古となりて唐の詞によりて定め奉る御名なり、又王神の代より、至りて尊きを尊と云ひ、其次を命と云ふ、人の代となりては天皇とも號し奉る、臣下にも朝臣、宿禰臣などと云ふ號出來にけり、神武の御時より始れる事なり。此天皇御年十五にして太子に立ち五十一にて父の神に代りて皇位に卽かしめ給ふ、今年辛酉の歲なり、筑紫日向の宮崎の宮にお在しましけるが兄の神達及、群臣に勅して東征の事あり、此大八州は皆是れ王地なり神代幽昧なりしに依て西偏の國にして多くの年序を送られけるにこそ天皇舟檝を整へ甲兵を集めて大日本に向ひ給ふ、道の序の國々を平げ大倭に入りまさんとせしに其國に天の神饒速日尊の御末宇麻志間見命と云ふ神あり外舅を長髓彦と云ふ、軍を起して防ぎ奉る皇軍屢々利を失ふ（中略）又金色の鳥飛下りて皇弓のはずに居たり其光輝りかゝやけり、是によりて皇軍大に勝ちぬ云々。

畝傍山

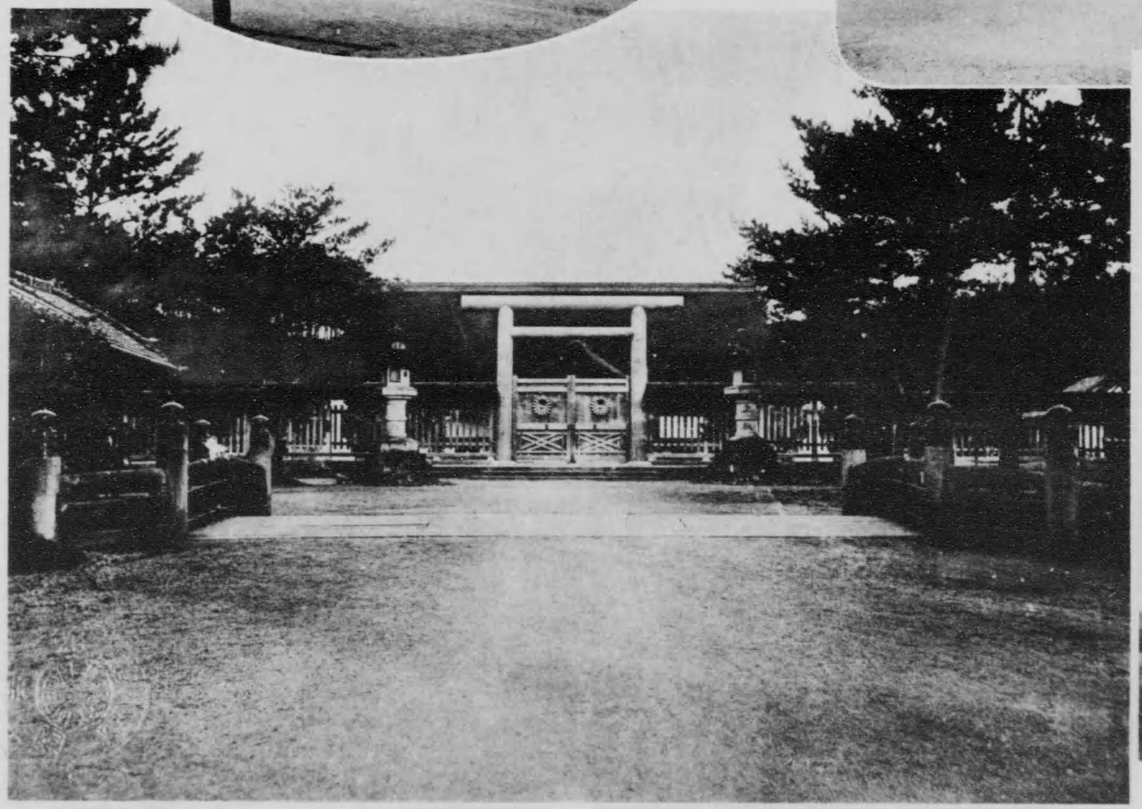
畝傍山東北御陵



一の鳥居

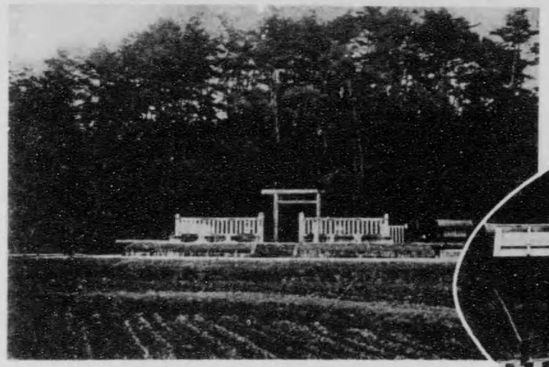


一の燈籠

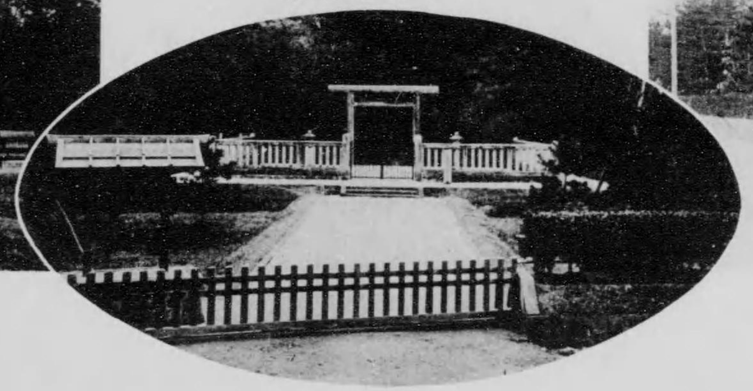


橿原神宮

王命の發大宣命を奉じ神事を掌り、神代の例に異ならず云々。始め神武天皇の都を橿原に營まるゝや其建築法大に進み、神代の比にあらず、先づ地に穴を堀り、其中に一巨柱を立てゝ之を天の御柱と云ふ世其の所在を失ひ、元祿年間神武田の字存するに據りて其近傍に就き古塚を搜索し以て之を帝陵と爲したり。當時神武帝陵と爲せるものは四條の管内に存せる荒丘にして、今綏靖帝陵に擬せらるゝもの云ふ神あり外身を長髓彦と云ふ、軍を起して防ぎ奉る皇軍屢々利を失ふ(中略)又金色の鳥飛下りて皇弓のはずに居たり其光輝りかゝやけり、是によりて皇軍大に勝ちぬ云々。

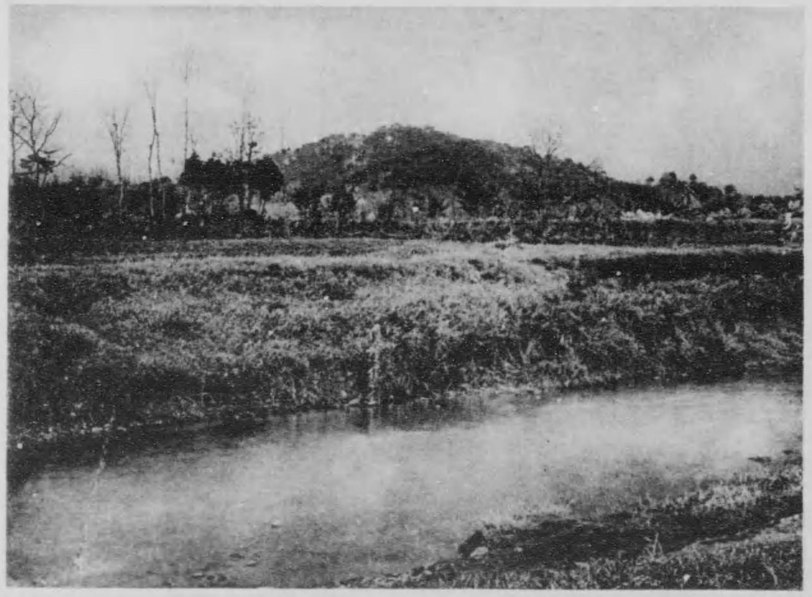


鷲德天皇御陵

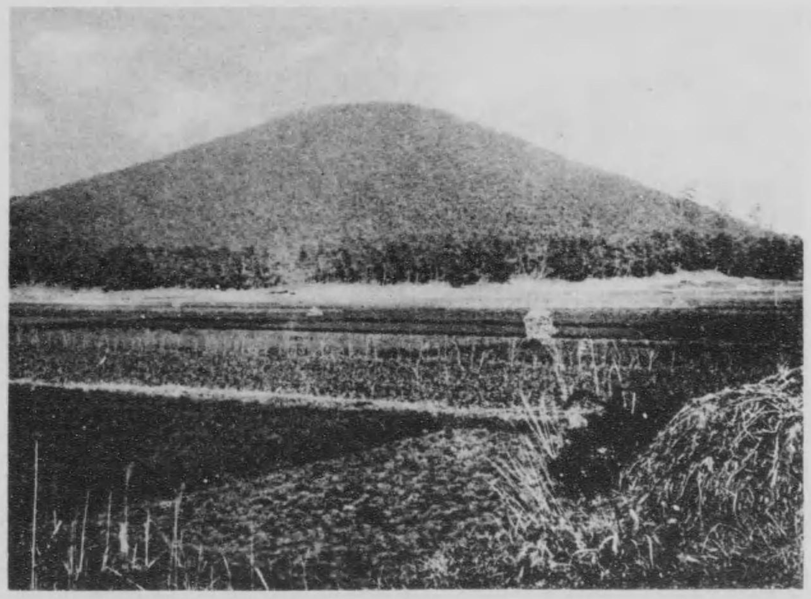


安寧天皇御陵

綏靖天皇御陵



天の香久山



耳成山

●天香久山（大和）

天香久山は素と香具山と書きたりしを今は香久山と云ふ、磯城縣香久山村に在り。此地山邊の諸村を合同して香久山村と稱す、山は大字戒外に屬し高さ約十七

來つゝかゝれば水は涸れなん
足引の山かつらのに今日行くと
我れにつげせば歸り來ましを
足引の山かつらのに今日のこと
いつしか隈を見つゝ來にけん
目なし川耳なし山に見すかす

神倭名川耳尊と申し、神武天皇の第三皇子なり。神武帝四十二年壬寅太子に立ち給ふ。神武帝崩御後鹿兒なる手研耳命政治を執りしが遂に皇位を望み密に綏靖天皇を害せんと謀りしを以て天皇は皇兄の神八井耳命と謀りて手研耳命を殺し次いで庚辰の年帝位に即き給ひ、大和國葛城

●天香久山（大和）

天香久山は素と香具山と書きたりしを今は香久山と云ふ、磯城縣香久山村に在り。此地山邊の諸村を合同して香久山村と稱す、山は大字戒外に屬し高さ約十七丈頂を天之指と云ふ、土質埴土なり。畝傍耳成の兩山と共に大和の三山と呼はる。神武帝時代より著明なる山にして前記二山と共に平野に鼎峙して、畝傍は高く、耳成は之に次ぎ香久山は中間に在りて低し、古への所謂埴安の池は此山に在り、此池の東北八町に池尻、池内の二村あり、以て其池の往時如何に大なりしかを想ふべきなり。神武天皇の時此山の土を取りて祭具を造らせ給へりと云ふ。山頂には香久山神社を鎮し、南麓に天の磐戸神社あり、又西方なる鴨公村には藤原宮の址存す。萬葉集に

いにしへの事は知らねを我見ても
久しくなりぬ天の香久山

●耳成山（大和）

是も亦大和三山の一にして香久山の南方に聳ゆる一小丘なり。高さ十餘丈山容頗る愛すべし。耳成山は一に耳無山又は山梔子山とも書し、俗稱天神山と呼べり。此山素と火山なりと云ふ。山中に樹甚だ多し、蓋し山稱ある所以なり、古歌に

みゝなし山の子えてしかな
思ひの色の下染にせん

と詠まれたるも之が爲めなり。又耳成山口神社は耳成村木原（耳成山頂）に在り、天平二年正倉院文書新抄格勅符三代實祿等に見ゆ、延喜式祈年祭山口神六座の一にて大社に列す耳成は本社鎮座するを以て土俗天神山と稱す。畝傍、香久山、耳成の三山に就ては古來神話的傳說の存するあり。彼の萬葉集に載せられたる。

耳なしの池の恨めしわきもこが
來つゝかゝれば水は濁れなん
足引の山かつらのに今日行くと
我れにつげせば歸り來ましを
足引の山かつらのに今日のこと
いつしか限を見つゝ來にけん
目なし川耳なし山に見すきかす
有せは人を恨みざらまし

の歌は即ち三山の傳說に關するものにて、天智天皇が長歌の反歌なる

香久山の耳無山に逢ひし時
立ちて見に來し伊南國原

とあるも亦是れ三山の傳說に關する歌なり。因に云ふ。耳梨川は耳成山の西方を流るゝ川にて一名目梨川とも云ふ

香久山の麓を古へ埴安と云ひしが今は此名消滅して香山畝尾の地名となれり、埴安神社は今香久山村大字八釣に在り、土神を祭る然かも健埴安と云へば或は皇子なるべしとの說あり、孝元天皇の御子に建波邇夜須毘古命と云へる皇子ありて母子茲地に住し給ひし事古事記に記したれば或は其名を取りて地名とせしものならんと云ふ、又埴安池は今香久山村大字南浦に僅に其幾分を遺存す、蓋し是れ太古大池の一片として偲ぶべきものなり。

埴安の池のつゝみのこもり沼の
ゆくへも知らに舍人はまとふ（萬葉集）

因に萬葉集に『埴安の御門の原』と詠じたるは、藤原宮のことなれば香久山の北面にて磐余と異所なるべしと云ふ

●綏靖天皇御陵（大和）

桃花鳥田丘上の陵を云ふ。高市郡白橿村大字四條に在り。田畝の間に一基の土堆を形成し瑞離を設けて之を圍めり。一說に綏靖陵は畝傍山の北に在りと爲す又一書には池尻八幡宮は土人呼んで綏靖帝の陵と爲すと云ふ。池尻は白橿村に屬し今の桃花鳥田阪の間に當れり。

綏靖天皇は第二代の天皇にして御名を神渟名川耳尊と申し、神武天皇の第三皇子なり。神武帝四十二年壬寅太子に立ち給ふ。神武帝崩御後鹿兒なる手研耳命政治を執りしが遂に皇位を望み密に綏靖天皇を害せんと謀りしを以て天皇は皇兄の神八井耳命と謀りて手研耳命を殺し次いで庚辰の年帝位に即き給ひ、大和國葛城高岡の宮に在します。在位三十三年にして崩御あらせらる、寶算八十四。

●安寧天皇御陵（大和）

畝傍山の西南白橿村大字吉田、御陰井の西北に在り、御陰井上陵と稱す、里俗安寧山と呼べり。

安寧天皇は第三代の天皇。御名は磯城津彦玉手見尊綏靖天皇の第一皇子にして御母は五十鈴依姫事代主の神の少女なり綏靖天皇の十五年御降誕あらせられ、同二十五年皇太子に立たせらる三十三年七月父帝崩御ありしを以て御歳十一歳にして即位あらせられ、都を大和國片鹽浮穴宮に遷させる、在位三十八年にして崩御あらせる寶算五十七。

●懿德天皇御陵（大和）

畝傍山南織沙溪上陵と云ふ。白橿村大字池尻に在り。

懿德天皇は御名を大倭、彦友尊と申す安寧天皇の第二皇子にして第四代の天皇なり、御母は渟名底中媛と申す安寧天皇の十一年東宮に立たせらゝ、此時御年十六辛卯の年二月帝位に即かせられ都を大和國高市郡輕地に遷し曲峽宮に居給ふ、天皇在位三十四年にして崩御あらせらる寶算七十七。

因に云ふ。天皇の御名は蓋し大和の地に都したまへるに基くものにして、天皇の以後、孝安、孝靈、孝元諸帝、皆大倭日子の御稱あり。斯くて遂に大倭を我國の總稱と爲すに至れるなり。

飛鳥大佛

談山神社十三重塔

●多武峰談山神社（大和）

藤原氏の祖、大織冠鎌足を齋き祀れる談山神社は磯城郡多武峰村なる多武峰上に在り。昔は多武をタムと呼びたりしも中世以降タウと云ふ、又談武に作り或は談峰、談山と書し、今の稱呼はトウの峰と云へり。而して神社は談山神社と稱す。神社は峰の北面に位し、櫻井驛より南の方二十町にして鳥居跡あり、夫より登る事五十町にして達す。藤原鎌足薨じて攝津の阿威山に葬りしを白鳳七年其長子僧定惠唐より歸朝して同年玆地に改葬し十三層塔を建立せり。大寶元年社殿を營み神像を安置し延長四年に至て談山權現の勅號を賜ひ、藤原氏の盛時に在りては崇重最も厚く、德川氏に至つても尙三千石の祿を有したり。境域壹萬五千四百七十坪、神殿は翠巒碧澗に圍繞せられ、幾多の石階の上に屹立す、正殿、拜殿、樓門透樓、寶庫、浮圖、拜所、假殿、比叡神社、總社、攝社、秡殿、社務所等あり。正殿は樓門の中に在りて四方二丈餘、拜殿は桁行九丈五尺、梁行二丈二尺あり。現今の拜殿は嘉永三年の建築にして當初定惠の神殿を造りしより十三回目なりと云ふ。神像は古來天下に事あれば破裂して其兆を示すと傳ふ、其都度勅使參向ある例にして著しく知らる。社殿の構造は頗る宏壯美麗にして、盛觀關西第一と稱せらる。明治七年別格官幣社に列せり。

因に云ふ、多武峰は一に談ひ山と稱す傳ふる所に據れば昔藤原鎌足、蘇我の入鹿父子を誅せんと畫策せる際、中大兄等と此山の藤花の下に謀議を凝したるより、斯くは山の名に呼ぶに至り、延いて談山と稱するに至れりと云ふ。

越鐵兜

園城寺古袈裟少　飛鳥宮空琅佩閒
唯有談峯神德在　夕陽金碧照寒山

●飛鳥大佛（大和）

奈良朝盛時の史蹟として記憶せらるゝ飛鳥寺は、今僅に其遺址を存す。之に隣りして其南に在るものを安居院とす。所謂飛鳥大佛なるものは即ち此の安居院に在り。飛鳥大佛は丈六の大佛像にして、當時の名匠止利佛師の作と稱せらる。安居院は眞言宗にして、鳥形山と稱す、蘇我馬子の本願に依つて創建する所、素と元興寺又は飛鳥寺と稱したるが、養老二年八月新京に移して新元興寺に併合し、故地には別院を遺して本元興寺と號し、治安年中まで存したりと云ふ。飛鳥寺は今は唯だ本寺の礎石數片を存するのみとなれり。往昔中大兄皇子が鎌足と蹴鞠の遊びを爲し給ひしは即ち此寺なり。

因に飛鳥寺は古、大官寺川原寺と共に三大寺と稱せらる。又遠飛鳥宮址は古へ允恭帝の宸居にて大字飛鳥に在り。

●當麻寺（大和）

北葛城郡當麻村丸子山麓に在り。一名禪林寺と稱す。用明天皇第四皇子麻呂子皇子、皇兄聖德太子の敎を受けて創建せりと云ふ。始め推古帝の二十年河內國山田鄕に建立せしを天武天皇の御宇、白鳳二年に至り此地に徙し、同十年伽藍悉く竣成せりとぞ。寺域一萬二千四百七十六坪本堂、金堂、講堂、層塔、樓門、寶藏經藏、鐘樓、僧舍、小堂等甍を接して並立し、光景太だ莊嚴なり。奥の院は當寺の上方九子山の半腹に在りて往生寺と號す。本堂、阿彌陀堂、相蓮接す。境內の法華堂は治承年間燒失せる後、源頼朝の造進に係る。東塔、西塔ともに三層の瓦葺にして近年特別保護物を加へらる。

芭蕉

二上當麻寺に詣で庭上の松を見るに
凡千とせも經たるならん大さ牛をも
隱さんに斯る非情も佛緣に引れて斧
斤の罰をまぬがれたるぞ尊し
僧あさがほ幾死にかへる法の松

●曼荼羅堂（大和）

是れ當麻寺の本堂にして觀世音を安置し曼荼羅堂の勅額を揭ぐ。此堂に懸くる所の曼荼羅は之を新曼荼羅と稱し、彼の中將姫の蓮糸を以て織成せりと傳ふるものは別に寶藏に襲藏せり。

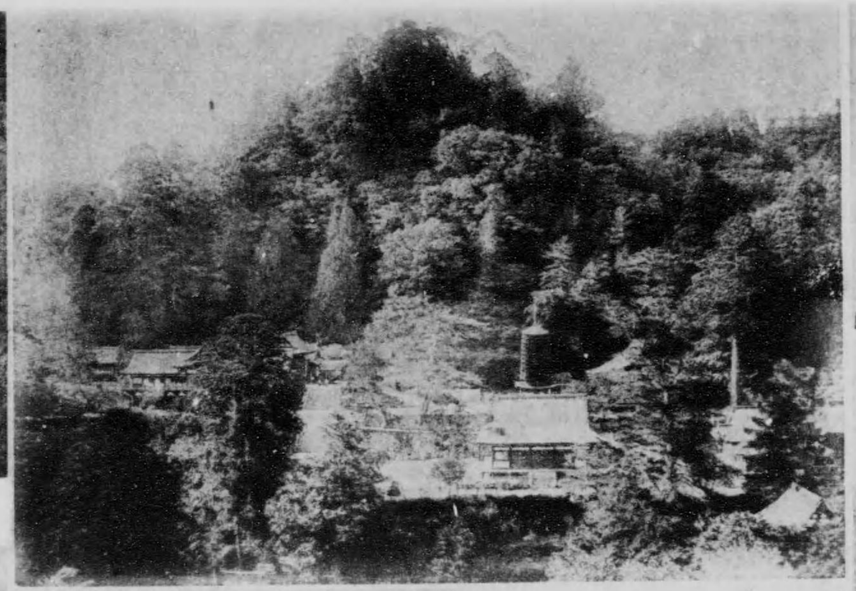
傳へ曰ふ。藤原豊〻の女、中將姫は父豊成の弟惠美押勝が橘奈良麿を讒したる罪に坐せられて筑紫に謫せらるゝに及び姫は深く之れを歎き、且つ父が反逆に與みしたりと云ふを愧ぢて、密かに家を遁れ、世を厭ひて當麻寺に入り其綠髮を剃り名を法如尼と改め、蓮糸を以て曼荼羅を織成せりと云ふ。又中將姫が曼荼羅を織りし際、其糸を染めたりと云へる井は當麻寺の門前四町を隔ちたる染野村の石光寺に在りて、染殿井と稱す。此寺の前庭に一株の櫻あり、姫染めたる蓮糸を此樹に懸て乾したりと傳ふ。

●曼荼羅圖（大和）

是れ當麻寺の所藏に係る。智光曼荼羅清海曼荼羅と共に日本三曼荼羅と稱せらる。昔時は當麻寺の曼荼羅堂中央壇の裏に揭げて白銀十兩を喜捨すれば何人にも開帳拜觀せしめしが德川末葉に至りて之を寶藏に收め容易に見る能はざらしめたり。此曼荼羅は實に本邦に於る淨土曼荼羅の根本圖にして阿彌陀佛の淨土を中央とし右邊に天舍城頻婆娑羅王の后韋提希夫人が太子阿闍世の惡逆によりて淨土往生を願求せる由來を畫き、左邊に日想觀其他の十二觀を現はし、下邊に九品往生圖を描けり。本圖原本は藕糸織着色にて竪一丈二尺九寸三分、横一丈三尺〇三分あり蓋し稀世の貴什と謂ふ可し。

當麻寺曼陀羅圖

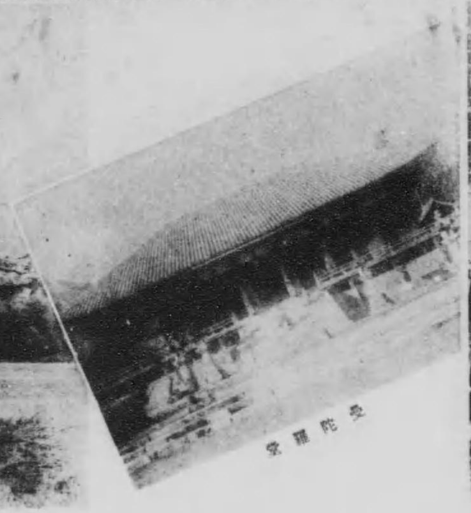
吉野山一ト目千本櫻花の景



飛鳥大佛

談山神社十三重塔

當麻寺全景



曼陀羅堂

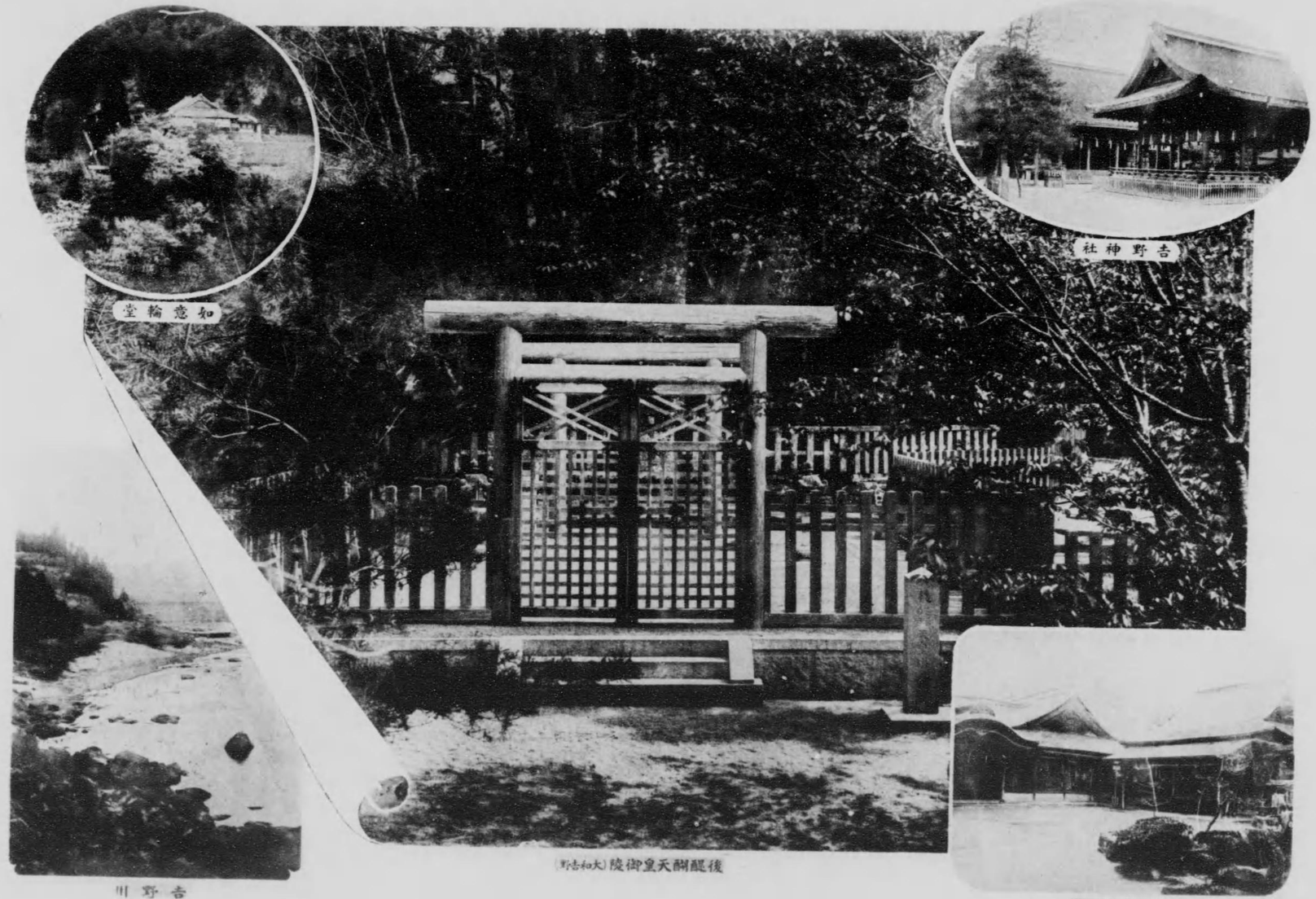
るより、斯くは山の名に呼ぶに至り、延いて談山と稱するに至れりと云ふ。

園城寺古袈裟少　越鐵兜
唯有談峯神德在　飛鳥宮空環佩閒
夕陽金碧照寒山　二上當麻寺に詣で庭上の松を見るに　芭蕉

凡千とせも經たるならん大さ牛をも

法華堂は治承年間燒失せる後、源頼朝の造進に係る。東塔、西塔ともに三層の瓦葺にして近年特別保護物を加へらる。

夫人が太子阿闍世の惡逆によりて淨土往生を願求せる由來を畫き、左邊に日想觀其他の十二觀を現はし、下邊に九品往生圖を描けり。本圖原本は藕糸織着色にて竪一丈二尺九寸三分、横一丈三尺〇三分あり蓋し稀世の貴什と謂ふ可し。



●後醍醐天皇御陵（大和）

後醍醐天皇御陵は吉野山藏王堂東北に在り『骨を玆に埋むるも魂魄は常に北闕を望む』と宣ひ劍を按じて崩じ給へる事を憶へば拜跪する者誰か俯仰顧望して襟を正さざらんや。

三島綏

群峰環繞綠峻嶒。櫻樹如雲護帝陵。
正統連綿千萬古。南山芳蹟曾不崩。

小牧　昌業

山鳥吉語意無憑。按劍空留三尺氷。
風雨千年猶有恨。萬花含涙擁皇陵。

●吉水神社（大和）

かに高嶽峻嶺を望み、近く吉野の清流を瞰下し、社殿雲際に聳へ千古變らざる自然の神苑は當年を偲ばしむる料たり。

●如意輪堂（大和）

かへらじとかねて思へば梓弓
なきかずに入る名こそ留むる

是れ小楠公の辭世にして何人も之を嚼

●後醍醐天皇御陵（大和）

後醍醐天皇御陵は吉野山藏王堂東北に在り『骨を玆に埋むるも魂魄は常に北闕を望む』と宣ひ劍を按じて崩じ給へる事を憶へば拜跪する者誰か俯仰顧望して襟を正さざらんや。

天皇英邁の資を以て回天の大業を企て蒙塵播遷具さに艱難を嘗めさせ給へるも曾て屈し給はず其亂臣國賊を勦滅せずんば熄まざらんと至尊の御身親ら萬難に當らせられたる事は我帝國史上の精華たらずんばあらず、當時輔弼の重任に當れる者其數寥々たりと雖も、克く上に誠忠を致せる文勳武勳に至りては後世に範たるべきもの多し、南朝五十有餘年に於ける哀史は亦一面に於て忠君愛國の源泉たるを意味す、而かも是れ天皇回天の大業に胚胎するものにして實に吾等國民の活模範たり帝德亦偉大なりと謂つべし。

天皇即位の當初當に國步艱難のみならず、大旱數月に亘りて遂に一滴の降雨を見ず炎雨地軸を枯らし田畑實らず萬民飢渴に迫り天の無情を怨嗟號泣す、餓莩野に滿ち飢人地に倒る天皇遙かに天下の飢饉を聞こし召され『天何ぞ無情なる朕不德にありせば朕一人を罪す可し、黎民何の咎ありて此災に遭するものぞ』と遜身帝德の天に背けるを痛嘆し君臣憂苦を俱にす可しと一日一飯の供御とせられ飢民窮人の施行の糧とせられ、尙檢非違使別當に命じ富裕の徒輩が利倍に蓄積したる米穀を點檢せしめ剩餘を飢民に惠ませ給へり其仁德亦大ならずや、後年鎌倉の失政を憐はせられ人心の離反を鑒み給ひ陰に討幕を企て給へるは英邁の帝としては最も急とせられたる叡慮なりし也。

御陵の上杉檜森然、鱗々然として天風に鳴る四顧閑閑遙かに人寰を隔つ、英靈此處に鎭まらせ給ふ。

三島 毅

群峰環繞綠峻嶒。櫻樹如雲護帝陵。
正統連綿千萬古。南山芳蹟曾不崩。

小牧 昌業

山鳥吉語意無憑。按劍空留三尺氷。
風雨千年猶有恨。萬花含淚擁皇陵。

●吉水神社（大和）

藏王權現堂の南方三町餘を隔て右折する所に坂路あり、之を下りて少し〳〵陟れば吉水神社なり、境内七百八十餘坪瀟洒閑逸して山中第一の名蹟たり。

初め金峰山寺の一仔院として『吉水院』と稱せるが明治七年改めて神社と爲し、後醍醐天皇を奉祀し忠臣楠正成を合祀す文治以來火災に罹らず古形を存するを以て院内遺蹟少なからず、後醍醐天皇の玉座は今猶儼然として存せらる。

花に寢てよしや吉野の吉水の
さくらの下に石はしる音

梁川 星巖

は天皇京都より此地に行幸あるや先づ吉水院に入らせ給へる時の御製なり。

今來古往事茫茫。石馬無聲抔土荒。
春入櫻花滿山白。南朝天子御魂香。

同

不知何處古行宮。鑾輿奉空羅綺風。
今日爲誰奉陵者。夕陽僧掃落花紅。

●吉野神社（大和）

後醍醐天皇を祭神とせる吉野神社は、明治二十五年の創建に係り、初め官幣中社吉野宮と稱され、後、吉野神社と改稱せらるゝや、社格も官幣大社となれり。

當社の攝社としては三社あり、一を御影社と稱して藤原資朝藤原俊基を祀り、二は船岡社と稱され兒島範長兒島高德櫻山玆俊を祀り、他は瀧櫻社と稱して土居通增得能通綱を祀れり、地は廣濶の淨域にして、全山の壯觀は悉く此に集中す、遙かに高嶽峯巒を望み、近く吉野の清流を瞰下し、社殿實際に聳へ千古變ちざる自然の神苑は當年を偲ばしむる料たり。

●如意輪堂（大和）

かへらじとかねて思へば梓弓
なきかずに入る名こそ留むる

是れ小楠公の辭世にして何人も之を嘖誦す、此辭世を鐫れる靈扉は今猶舊の如く保存せられ、鏃痕微かに當年を語りて亢奮を與ふ、櫻花を觀る者先づ如意輪堂を訪ふ、嗚呼楠公父子の忠魂千古萬古悄へざるなり。

其如意輪堂は吉野山中の塔尾に在り、南風號はず朝敵愈々加はるや正行は弟正時以下一族一百四十三名を從へ吉野の皇居に參内し、最後の御暇を言上せるに、帝は南殿の御簾高く揭げさせ給ひ『南度の戰に賊を破りしは神妙なり、大敵今ま勢を盡して向ひ來る由、今度の戰は天下安危の繫る所、朕汝を以て股肱と頼めり慎みて命を全くすべし』と宣らせらる、正行拜辭して後先帝の御陵に拜跪し終り、如意輪堂扉に如上の辭世を鐫り四條畷に驀進し高師直の率ゐる十萬餘の大軍と奮戰せるなり。

●吉野川（大和）

擧世碧流相點綴して雄大の畫圖を成すもの之を吉野に求むべくして他に求むべからず。

東西十三里一町南北十七里廿七町、面積百三十二方里强に亘る、吉野郡は、長河吉野川に俟つもの多し。

櫻花の勝區としての吉野山は潺々たる吉野川を有するを以て其勝最も現はる、之れ山、水を得水、山を得て共に風光を誦はるゝものにして、此山と此水とを訪ふ者は畫中の人たるを覺ふ『妹山背山の中を貫く吉野川と』形容せらるゝ櫻の渡は六田より遠からず花を吉野に訪はんとせば、六田渡よりするを便とす。

●吉野山の一目千本　（大和）

一條の春水靜かに流るゝ六田渡即ち柳の渡を過ぎ、一町毎に立てる石標を數へて其二十町目に出づれば、既に白雲靉靆裡の人となり、一歩一吟しつゝ長峰の櫻を左右に眺め、更に十町を攀登せる所、狹谷忽ち展開せられて滿山盡く櫻花、雲か霞かと疑はるゝ壯觀は、目を眩せしめ心を怕ばしむ、之れ所謂『一目千本』の櫻雲境なり。

疊疊春山別有天　花開花落鎭依然
可憐萬壑香雲暖　曾護南朝五十年

賴山陽

●藏王權現堂　（大和）

金峰山寺の總門たる二王門を入り、石階を上れる所に藏王權現堂在り、堂は即ち金峰山寺の本堂にして役小角の開基に係る、貞和五年高師直の兵火に罹りて燒失後、康正元年を以て再築せられ、慶長十九年に至り豊臣秀吉之を修覆す。

堂は方十八間の莊嚴華麗なる大建造物なり、木彫藏王權現の立像を本尊として安置す、往年大塔宮護良親王此堂に據らせられ賊徒勦滅を計らせ給ふ。

天子蒙塵度大瀛　親王敵濤據孤城
帳中不灑悲歌淚　塵下長懸節義名
土窟游魂千載恨　邦畿振旅一時榮
恨望故壘烟塵迹　魅谷風腥杉檜鳴

の賦今更に感を深からしむ。

●竹林院の庭園　（大和）

奥の千本の櫻花は亦一目千本と相下らず、藏王權現堂、東南院、勝手明神、竹林院、吉水院、如意輪寺等は櫻雲中最も眺矚に富める所なり、就中竹林院は奥の千本と相距る遠からざる地點に位し、吉野山中に於ける絶勝の地として許さる。

其庭園は小堀遠州の築げるものにして頗る奇巧を極め、院の宏壯なる堂宇と共に著る、庭中緋櫻及垂枝櫻あり、又當院には桃山百双の一と傳ふる屏風を始め、源頼朝が山僧に與へたる義經追討の令書等を藏す、因に義經山僧に追擊せられたる時、佐藤忠信奮戰して横川覺範を殺せる花矢倉の地は中院谷なり、其上方に義經の潜伏せし辰返しあり、山伏隠れあり、世尊寺址に存する梵鐘は保元六年の銘ありて世に『吉野三郎』と稱せらるゝ古鐘なり

●村上義光の碑　（大和）

南朝の忠臣たる村上義光の死は、他の悲壯的最期に比すれば、更に凄絶悲絶の最期なりき、當時皇軍振はず賊軍益々優勢を示し、吉野山の全部は渠等の蹂躙に任せ、皇居數次危からんとす、大塔宮護良親王躬ら一軍に將とならせ給ひ、義光等四五の諸將を從へ、僅か五百騎の兵を以て五萬餘騎の賊軍に當り給ひしが、味方の勢漸次戰死して、殘兵今や數十名を見るのみ。

宮は今や如何ともすること能はざるを覺悟し給ひ、藏王堂の御塵所、輝く錦旗の御下に座し給ひ、其大庭に殘兵を召し集め、最期の宴を催ふし給へり。

此日宮は赤地錦の直垂に緋絨の鎧を召され、龍頭の冑を戴き給ひ三尺五寸の小長刀を提げ、群がる賊軍中に突擊し給ひしが衆寡敵し難く、御鎧には七筋の矢立ち、御腕等に數個所の創を負はせられ、鮮血淋漓として流るゝをも拭はせ給はず自若として三杯の御酒を飲ませられ、次で將士に御杯を廻され給ふ、時に木寺相模は四尺三寸の太刀尖に敵の首を貫き、重傷を打忘れ『戈延哉を降らす事電光の如くなり、磐石岩を飛ばす事春の雨に相同じ』云々と朗吟して舞へり、宮も又微笑し給ふ、此時賊軍の喊聲愈々近づきしかば、宮は憤然として立上り給ひ『骨を原野に晒すとも奸賊を誅戮せずんば已まず』と仰せられ、殘兵を率ゐ勇氣凛然として敵陣に突入し給はんとす、村上義光急ぎ宮の御前に進み、其御鎧の端を掴み、暫らく御待せ給へ、味方既に大方討たれ殘る者數十名に過ぎず候、千金の御身を輕々しく敵手に委ね給ふ時に非ず、願くは某御身代りとなるべければ、一先づ此處を落させ給へ。

と赤心より宮を諫め奉り、宮の聡き入れ給はざるを再三諫め奉りて、遂に南方へ落し奉り、宮の甍かに落させ給へるを見、宮の御物具を押戴きて我身に着け、櫓に登りて賊軍に向ひ。

後醍醐天皇第二の皇子一品兵部卿護良今自及する所なり、汝等が武運盡きて腹切る時の模範とせよ。

と大音に叫び鎧を脱して櫓より投下し錦の直垂と小袖を膚脱ぎ、腹一文字に掻き切り腸を掴んで櫓の板に投げ、太刀を口に噛み俯して斃れたり。

其忠烈を表せる村上義光碑は長峰の櫻と一目千本間の『二十八町目』の石標上方に在り、又太平記の記する所に依れば義光の子兵衛藏人義隆は宮の御供して落ち逃中賊兵に圍まれ身を以て宮を落し奉り是亦賊手を免れ竹藪中に自及せりと見ゆ

●吉野の榮山寺　（大和）

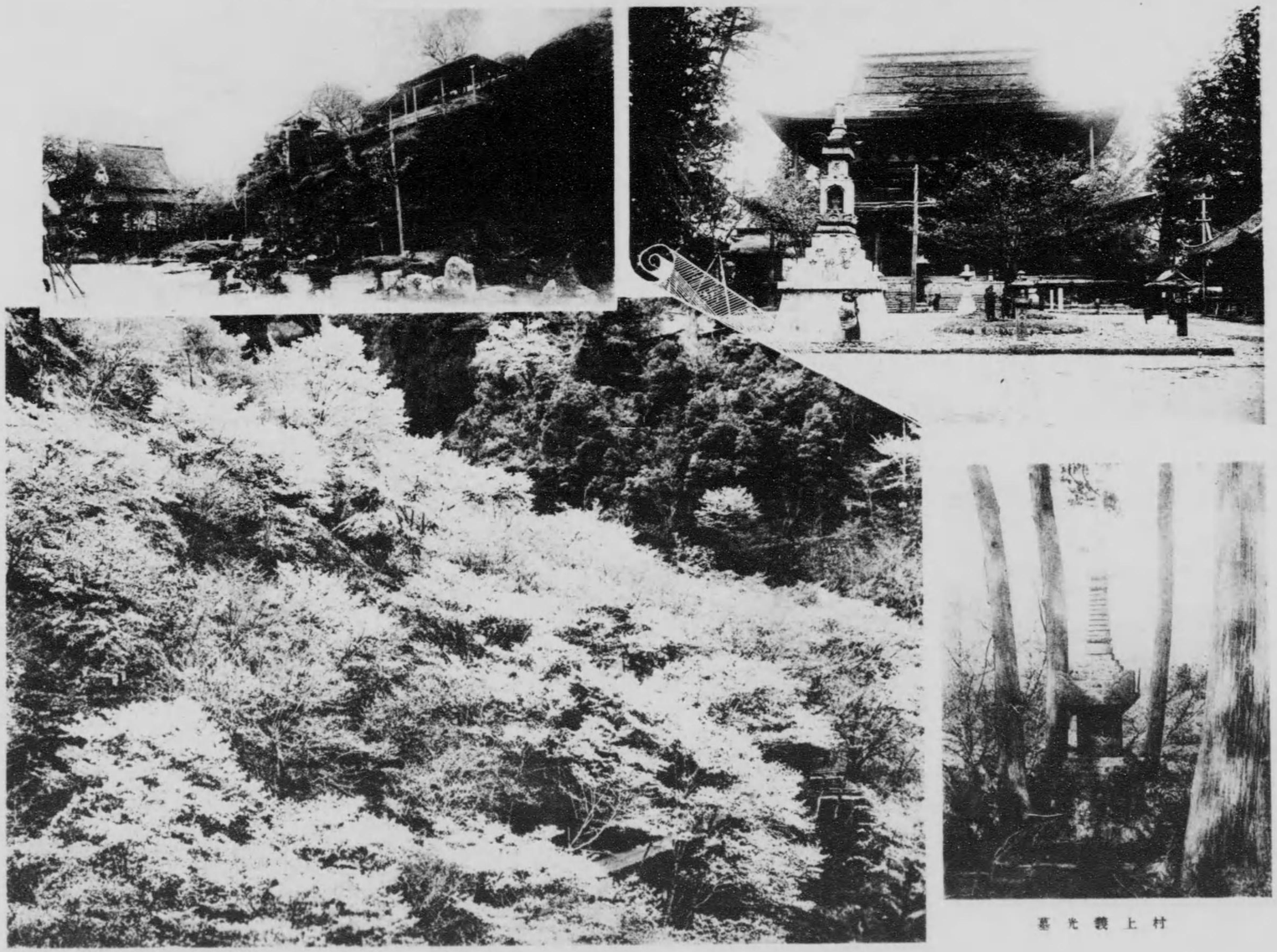
役小角の草創に係る榮山寺は、吉野川の北岸大字小島に在り、一に梅實院と稱す、養老三年藤原武智麿之を建立し、境内の八角圓堂は横佩豊成の造營と傳ふ。其天井、柱等に當時の彩畫を存せり、又小野道風筆の鐘銘を鐫れる古鐘は稀有の物として國寶に列し、寺の後方なる小丘には後阿陀墓及武智麿の墳墓あり、寺前を流るゝ吉野川は其三四町の流域間「音無川」と稱され、機岩並列して水潺洌、亦一景勝地として著る。

す、藏王權現堂、東南院、勝手明神、竹林院、吉水院、如意輪寺等は櫻雲中最も眺矚に富める所なり、就中竹林院は奥の千本と相距る遠からざる地點に位し、吉野山中に於ける絶勝の地として許さる。

其庭園は小堀遠州の築けるものにして模は四尺三寸の太刀尖に敵の首を貫き、重傷を打忘れ『戈延哉を降らす事電光の如くなり、磐石岩を飛ばす事春の雨に相同じ』云々と朗吟して舞へり、宮も又微笑し給ふ、此時賊軍の賊壁愈々近づきしかば、宮は憤然として立上り給ひ『骨を小野道風筆の鐘銘を鑄れる古鐘は稀有の物として國寶に列し、寺の後方なる小丘には後阿陀墓及武智麿の墳墓あり、寺前を流るゝ吉野川は其三四町の流域間「音無川」と稱され、纔岩並列して水清冽、亦一景勝地として著る。

竹林院庭園

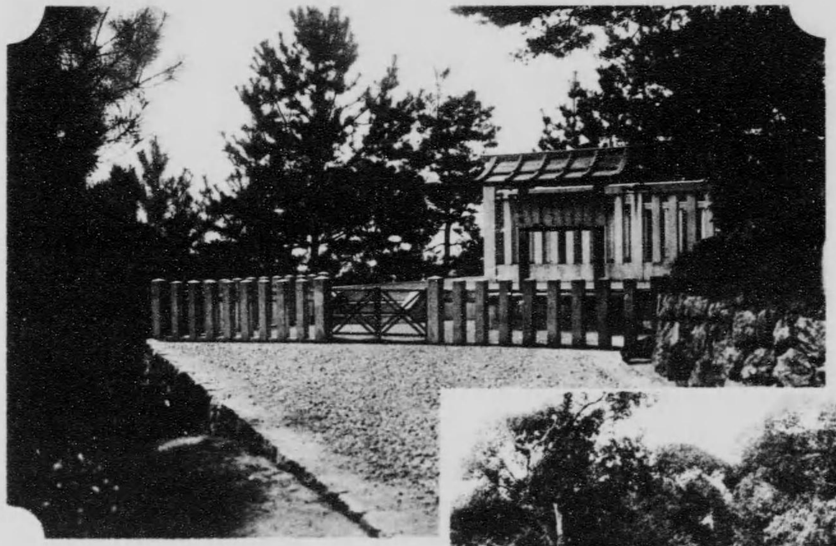
藏王權現堂



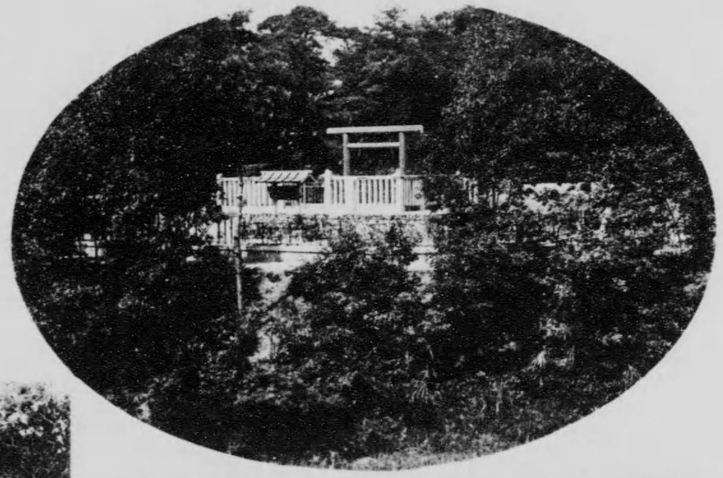
吉野山一ト圖千本

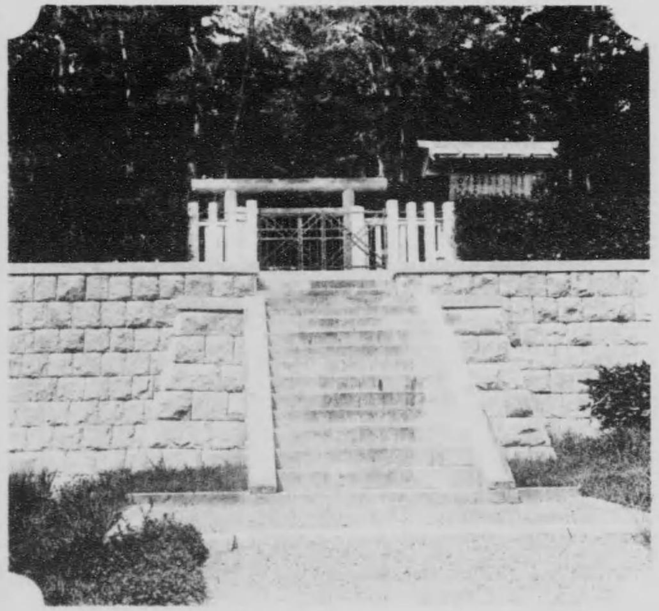
村上義光墓

孝德天皇御陵



用命天皇御陵





推古天皇御陵

聖德太子御陵

桃山の池

●推古天皇御陵（河内）

磯長山田御陵と稱し南河内郡山田村大字山田に在り。素と大野岡上に在りしを後ち茲科長大陵に遷したる由古事記に載す。

弑し太子と議して守屋を討たんと謀る。守屋亦死を決して戰ふ。此時太子は四天王の像を作り之を頭髮の裡に收め祈誓して戰陣に臨む。斯くて守屋等遂に敗死するに及び太子は頭髮中より四天王の像を取出し、之が爲に堂塔伽藍を建立せり。**大に衰へたりき。**

●孝德天皇御陵（河内）

大阪磯長陵と稱す。一に鷲陵とも云ふ南河内郡山田村に在り。今上野山と呼ぶ。御陵は高く二丈方五尺。『山陵志』によれば孝德陵は中尾陵北に在りて山田村の古

●推古天皇御陵（河内）

磯長山田御陵と稱し南河内郡山田村大字山田に在り。素と大野岡上に在りしを後ち茲科長大陵に遷したる由古事記に載す。

推古天皇は欽明天皇の第三皇女に在しまし二十三歳にして敏達帝の皇后とならせらる、三十二歳の御時天皇崩御あり、既にして崇峻天皇弑害に遭ひ給へるに及びて位に卽き給ふ。蓋し天皇は我國女帝の嚆矢なり。茲に郡を大和國高市郡小墾田に遷し、厩戸皇子を立てゝ皇太子とし給ふ。天皇の朝十五年七月大に外交を發展し、小野妹子を隋國に派遣して交通を開始し、以來諸制度の範を漢土に採るに至れり。在位三十六年御壽七十にて崩御あらせらる。

●聖德太子御陵（河内）

磯長太子陵と稱す南河内郡磯長村叡福寺境内の小丘、深林中に在り俗に御墓山と云ふ。御陵は太子及御母とを合葬すと傳ふ。叡福寺は推古帝の朝の創建に係り、太子十六歳の植髮等身像を以て本尊とす

聖德太子は豐聰耳皇子と號す。用明天皇の第一皇子にして母は穴穗部間人皇后と申す。皇后懷姙の際厩戸に至り勞せずして太子を擧げ給ひしを以て厩戸皇子と號く。太子長するに及びて文學を好み資性聰敏父帝深く愛し給ひ常に宮南上殿に居らしめられしより又上宮太子とも呼べり深く佛法を尊信し三寶に歸依し又大に佛法の眞理を究め熱心佛敎の興隆に盡瘁する所あり、蘇我の馬子亦佛法を信ず、當時物部守屋、中臣勝海等大に佛法の不可なるを論じ茲に双方確執し遂に兵を以て戰ふに至れり。既にして天皇崩御せられたるを以て、守屋は穴穗部皇子を立てんとす、馬子之を探知し兵を派して皇子を弑し太子と議して守屋を討たんと謀る。守屋亦死を決して戰ふ。此時太子は四天王の像を作り之を頭髮の裡に收め祈誓して戰陣に臨む。斯くて守屋等遂に敗死するに及び太子は頭髮中より四天王の像を取出し、之が爲に堂塔伽藍を建立せり。

崇峻天皇崩御あらせられ、群臣敏達天皇の皇后を立てゝ推古天皇と爲すに及んで太子は萬機を執り、且つ其元年を以て皇太子と爲る、三年僧慧慈高麗より來朝するに及び太子之に師事し、浮屠の號に倣ひ勝鬘と稱す、十一年太子冠位二十一階を制し、又憲法十七條を定め、其他諸種の制度を確定し且つ國史及び諸記錄を撰む、二十九年病を以て斑鳩宮に薨ず、享年四十九。

●用明天皇御陵（河内）

磯長中陵と稱す、南河内郡磯長村大字春日に在り。素と中尾、山田、大阪の諸陵及び太子墓と相望んで立ちたりと云ふ。用明天皇、初め御名は大兄皇子、後ち橘豐日尊と申す、欽明天皇の第四皇子にて御母は堅鹽媛、蘇我稻目の女なり。敏達天皇の崩御後立ちて第三十二代の帝位に卽き給ふ。二年疫病大いに流行し、天皇亦之れに罹らせられ、群臣に詔して宜く朕三寶に歸依せんと欲す卿等之れを議せよと、茲に於て物部守屋大に其不可なるを奏したるも蘇我の馬子は詔旨を贊成し僧侶を延いて宮廷に入る。是れ僧侶の宮中に入るの始めなりとす。天皇在位二年にして崩御あらせらる資算四十一。

因に云ふ。用明天皇の朝、蘇我馬子、物部守屋互ひに權を爭ひて相下らず、當時傳來せる佛法に就て守屋は之を排斥し、馬子之を納れんとし相軋轢し守屋派は勢ひ熾んにして佛像經文等を燒毀し且つ之を嚴禁なしたり、然るに馬子は迹見赤檮をして守屋派の股肱中臣勝海を射殺せしむ是より馬子黨勢力を得、守屋派の勢は大に衰へたりき。

●孝德天皇御陵（河内）

大阪磯長陵と稱す。一に釐陵とも云ふ南河内郡山田村に在り。今上野山と呼ぶ。御陵は高く二丈方五尺。『山陵志』によれば孝德陵は中尾陵北に在りて山田村の古冢北山と稱するもの是なりと云ふ。因に一稱を釐陵と云ふは、蓋し御陵地が釐の關附近に在るを以てなり。

孝德天皇、御名は輕、茅渟王の皇子にして第三十七代の帝なり、御卽位の初め中大兄皇子を立てゝ皇太子とし、阿倍倉梯麻を左大臣に、蘇我石川麻を右大臣に、中臣鎌足を內大臣とし、大に政務を整理し制度を革新し、年號を立てゝ大化と稱せり。是れ蓋し我國年號の始めなりとす。大化二年太極殿に於て朝賀を享けさせらる天皇在位十年にして白雉五年十月十日豐崎の宮に崩御あらせらる。資算五十九。

●狹山池（河内）

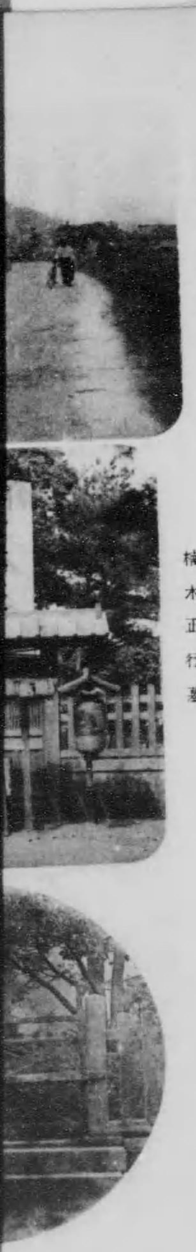
南河内郡狹山村、三都村の間に介在す、東西四町四十二間、南北六町二十間、周圍三十三町、池水二條となりて北流し各二里半にして大和川に合す、流域の村落灌漑の利を蒙むるもの極めて大なりと云ふ

該池は崇神天皇の六十二年勅して堀鑿せしめられしものにて、我國水利工事の濫觴なり、後天平寶字六年池堤決潰せしを以て延數八萬三十人の工夫をして修築せしめ、降つて永祿年間に至り安見美作守之を修繕し、慶長年間、片桐且元亦修補を加ふ。南河内郡の天野、小山田二川の水源は卽ち此池にして其下流は卽ち西川東川の二流なり。池中多く菱菱を產し味ひ頗る美なりとぞ。古來此の池を詠せる和歌尠からず。堀川百首に

春ふかみ狹山の池のねぬなはの苦しげもなく鳴く蛙かな

狹山池の北十町に大鳥、太間の二池あり各方三町許、是れを狹山下池と云ふ。

山の池



四條畷古戰場

楠木正行墓

●四條畷神社（河内）

是れ小楠公を祀れる神社にして北河内郡飯盛山麓に在り。明治二十二年土地の民、一同大阪府の手を經由して神社創建の事を願出で同年別格官幣社に列せるなり、即ち楠正行朝臣を主神とし配祀するに楠正時、和田賢秀以下當時殉難戰歿の將士を以てす。社地三千四百坪、四圍には高二丈五寸の石階を繞らし、神殿は石階數百段の上に巍然として建ち、結構頗る莊嚴を極む、附近には商賣雜店軒を連ね、「楠公燒」、「菊水煎餅」等楠公に緣因ある物品を鬻ぐもの多し。毎年五月五日を以て例祭とす。

○　宇都木靜區

含涙殿勲辭紫閣　誓將一死定中原
箕裘未繼多年恨　茅土長懷往日恩
老樹幾枝從北折　殘碑半面向南存
但憐寂寞秋山裏　無復捷書聞至尊

●四條畷古戰場（河内）

北河内郡四條村に在り。正平年間楠正行戰死の地として知らる。一說に四條畷は中河内郡枚岡南村大字四條にして飯盛山の南方約二里の地なりと云ふ。

史を按ずるに正平三年正月、北軍高師直、男山、交野より北河内に打て出で兵六萬を分ちて伊駒山の南方及び四條畷、飯盛山、外山の四ヶ所に配置し、師直自身は餘軍を率ゐて其後に備ふ。師直の弟師泰は別に一軍を以て堺浦に屯したり、之を見たる楠正行は枚岡南村大字六萬寺なる往生院に逆寄せなし、正月五日兵三千を以て四條畷より進み、敵を擊ちて京街道を押し行き、飯盛山の麓に至り、雲霞の如き師直の大軍に當り、屢々敵將師直を獲んとして敵の衆軍に阻てられて其志を遂ぐるを得ず、奮鬪力戰して終に茲に戰死す。

●楠木正行墓（河内）

四條畷神社を距る西の方九町、即ち四條畷に在り。後人樟樹を冢上に植え、傍に石を建て、刻して南無權現と云ふ。明治に至り墓所を重修し四方に石垣を築き柵を繞らしたり。其表門より進み行けば墳を高く築造せる中に碑を建て、贈從三位楠正行朝臣之墓と鐫す。是れ故大久保利通公の揮毫に係る。

因に云ふ。大久保公揮毫の正行朝臣の碑の建設されしは明治十一年にして、其以前に於ては唯だ「南無權現」の一小石ありしのみ、是れ或は當時足利氏を憚りて楠正行の文字を殊更に避けたるものなるべしといふ。然れども又一說には正行の墓は六萬寺村往生院に現存す、四條畷の墓は單に戰死の蹟に何人が供養の爲めに建てたるものにて、南無權現と鐫せるも、蓋し之れが爲めなりと云ふものあり。

●和田賢秀墓（河内）

楠氏の一族にして豪膽を以て知られたる和田賢秀（一に源秀と書す）は正行と共に四條畷の戰に於て壯烈なる死を遂げたり。其墓は正行の墓を距る東北約一丁の地に在り。一廓を爲せる墓域に三尺ばかりの墓石を建て、和田源秀戰死之墓と刻す。

史を按ずるに、正行兄弟、四條畷に於て戰死せる後、豪膽なる和田賢秀は只一人賊軍に紛れ込みて敵將高師直を刺さんとし、傍近く進み寄りたる際、曩に賊軍に降參せる湯淺某敵軍に在りて和田を見知り、潛に賢秀の背後に廻りて突然膝を伐り、倒るゝ所を駈け寄りて頸をかゝんとせり。此時賢秀眼を怒らして湯淺を一睨せり。湯淺は賢秀の首を打ち取りたるが、其日より病み付きて心身惱亂し、賢秀が最後の怒眼、目前に描かれて消滅せず、七日目に至つて終に悶死せりと云ふ。

●木村重成墓（河内）

壯烈なる戰死を以て大阪戰役史を彩りたる木村長門守重成の墓は中河内郡西郡に在り。墓には松樹を栽え、一基の石碑を建てたり。俗に無念塚と云ふ。墓面に長門守木村重成之墓の九字を刻す。

重成は豐臣秀次の臣木村常陸介の子にして幼より秀穎に仕へ常に大阪城中に在りたり、大阪の役起るや、誠忠熱烈屢々献策する所ありしも用ゐられず元和元年夏陣の役、若江口に於て關東方の井伊軍と激戰して遂に死す、享年二十五歳。

●後藤基次墓（河内）

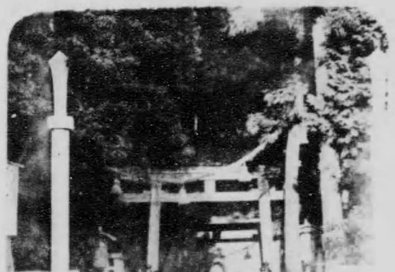
南河内郡玉手村附近なる田畷の間に在り。基次は當年大阪方の一方の勇將として知られ、幸田、木村、薄田等と共に奮戰屢々關東軍を破りたるも時利あらず、遂に此地に於て戰死す。

●枚岡神社（河内）

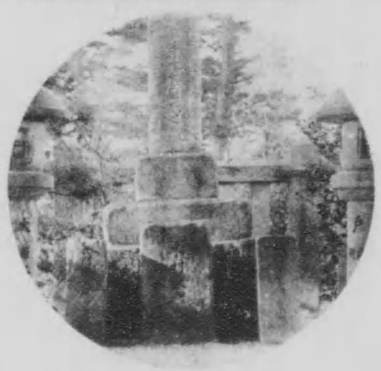
中河内郡松岡村大字出雲井に在り。官幣大社にして天兒屋根命、比賣神、武甕槌命、經津主神を祀る。本社は孝德天皇の白雉元年に創立せられ、光仁天皇寶龜九年に至りて春日社に祀らるゝ鹿島、香取の二神を配祀し、以來四座となり、神殿相並びて結構莊嚴を極む。其社地を古春日と云ひ、後山を枚岡山と稱す。近年山腹を開拓して梅樹、萩等を植えて遊園地となせり。毎年春秋二季大祭を行ふ。又一月には神前に於て粥占の神事を執行し以て其年の豐凶を卜す。本社一の鳥居は京街道に在りて本社より西方六丁を距つ。社内に御手洗あり、又若宮及末社猿田彦祠等あり。

當社後河内の一の宮として崇敬され居れり。

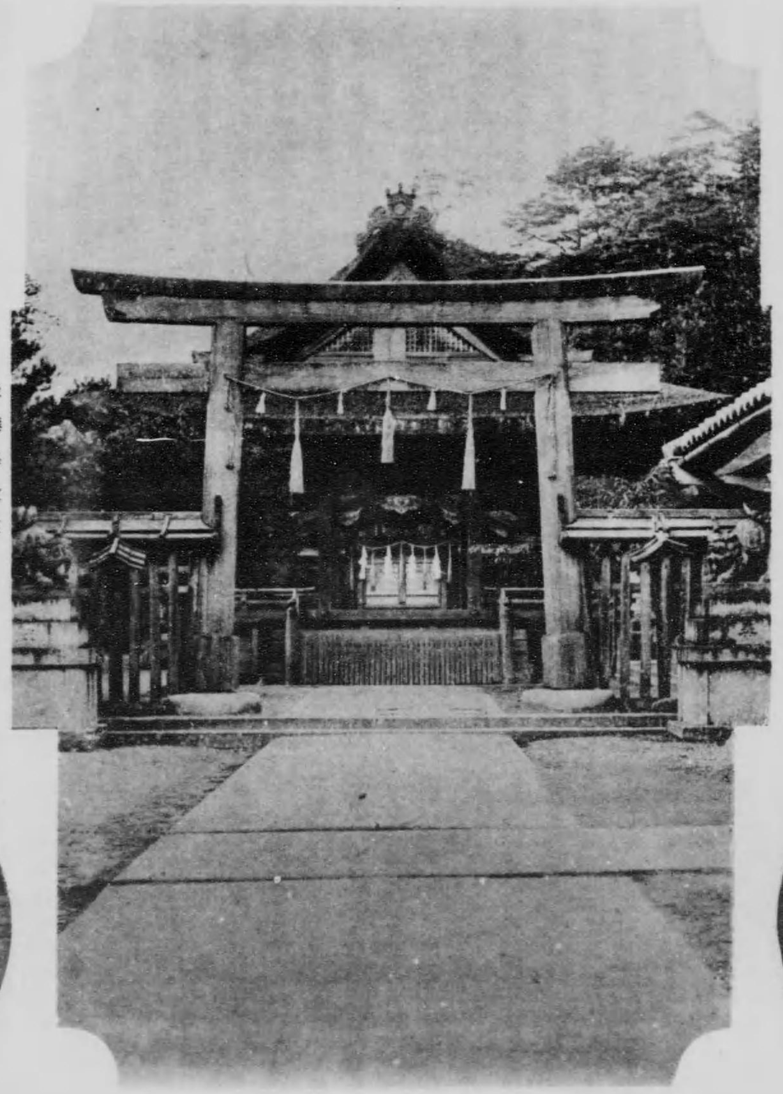
牧岡神社



後藤基次墓



木村重成墓

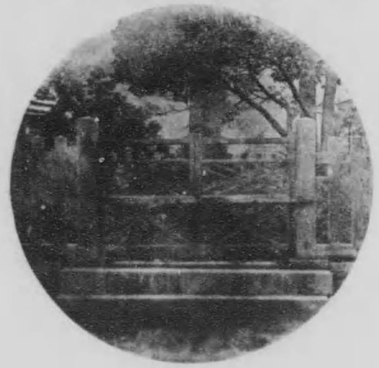


四條畷神社

四條畷古戰場

楠木正行墓

和田賢秀墓



を往生際に逆襲せなし、正月五日兵三千を以て四條畷より進み、敵を擊ちて京街道を押し行き、飯盛山の麓に至り、雲霞の如き師直の大軍に當り、屢々敵將師直を獲んとして敵の衆軍に阻てられて其志を遂ぐるを得ず、奮鬪力戰して終に玆に戰死す。

降參せる湯淺某敵軍に在りて和田を見知り、潛に賢秀の背後に廻りて突然膝を伐り、倒るゝ所を駈け寄りて頸をかゝんとせり。此時賢秀眼を怒らして湯淺を一睨せり。湯淺は賢秀の首を打ち取りたるが、其日より病み付きて心身惱亂し、賢秀が最後の怒眼、目前に描かれて消滅せず、又一月には神前に於て弱占の神事を執行し以て其年の豐凶を卜す。本社一の鳥居は京街道に在りて本社より西方六丁を距つ。社内に御手洗あり、又若宮及末社猿田彦祠等あり。

當社後河内の一の宮として崇敬され居れり。

●樟葉宮古址（河内）

樟葉宮の古址は河内國交野郡樟葉大字樟葉に在り、即ち京街道を淀川に沿ふて

今ま藤原定家の『任果てゝ登りける道にて渚の院の梅花を見てよみ侍る』として詠めるもの及他の一首を録す。

定　家

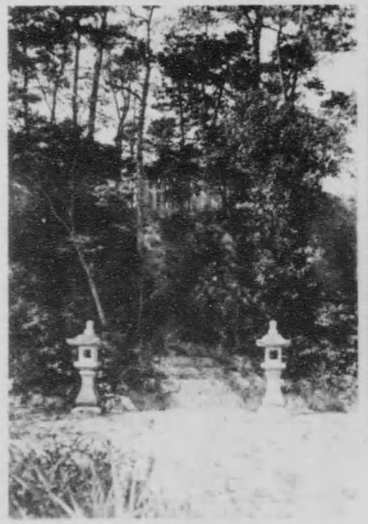
君戀て世をふる宿の梅の花
我の難工事たりしは言を俟たず。

は其浸水を城東に湛へしめ、以て防禦に利せんとし、且つ京街道を杜絶せしめんと謀り、東西兩軍の兵數百堤上に會戰し之を爭ひたる事ありしと言ふ、茨田堤築

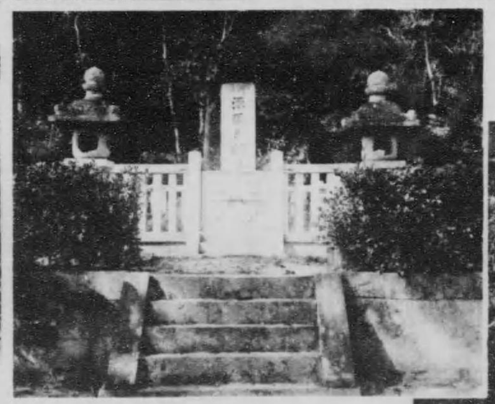
樟葉宮址

渚の森

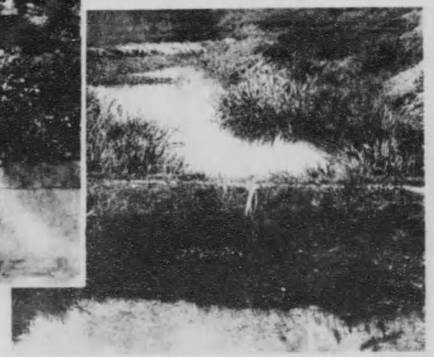
渚院址



源義家墓



源頼義墓



絶間の池

源頼信墓

●樟葉宮古址（河内）

樟葉宮の古址は河内國交野郡樟葉大字樟葉に在り、即ち京街道を淀川に沿ふて下ること半里の所なり、繼體天皇元年正月樟葉宮に行幸、鏡劍玉璽を收めさせられて位に即き給ふ、今は其舊址に標木を建てゝ紀念とす、續古今集に關白左大臣の歌あり。

くもらじなますみの夜の月
樟葉の宮の秋の夜の鏡影そふる

樟葉宮の古址に近き『交野の原』は今の枚野村大字禁野、渚、山田村大字中宮、甲斐田の總稱にして、現に『禁野』の字は桓武天皇此地に遊獵あらせられ、國の鳥獸を密獵することを禁せられたるより殘りたるもの中宮の邊を鳥立の原と稱せり、新古今集に『御狩する鳥立の原をあさりつゝ交野の野邊に今日も暮しつ』と言へる皆な此所を詠せるなり。又『交野離宮址』と傳へらるゝは中宮の百濟王靈社邊なるべし、靈社は延暦二年桓武天皇遊獵の行宮なりき、弘仁天皇の『過交野離宮感舊作』として凌雲集に載するもの如左

追想昔時過舊館　凄凉淚下忽霑襟
廢村己見人煙斷　荒院唯聞鳥雀吟
荆棘不知歌舞處　薜蘿獨向戀情深
看花故事誰能語　空望浮雲轉傷心

長明

交野なる百重が原をつかの間も
戀すやあらむ花のみやこに

●渚院古蹟（河内）

往古惟喬親王遊獵の折此所に行宮を營み、在原業平和歌を奉詠せし古蹟地渚院址は、交野郡牧野村大字渚に在り、今は此地に寺を建て觀音寺と言ふ、境内に駒留の松及五本櫻を存す、院址の後を『渚の杜』と言ひ其東を『渚の岡』と言ふ、此院の事伊勢物語にあり又古歌少なからず今ま藤原定家の『任果てゝ登りける道にて渚の院の梅花を見てよみ侍る』として詠めるもの及他の一首を錄す。

定家

君戀て世をふる宿の梅の花
むかしの香にそなほ匂ひける

仲忠

よもすがら土さの鈴鳴はふりして
渚の宮にさねつゝみうつ

●絶間の池古址（河内）

仁德天皇十一年茨田の堤決口兩所を築くに、築く毎に則ち壞る、天皇之を憂ふ、一夜河伯を夢む、告げて曰く、我を祭る に武藏の人强頸河内の人茨田之連衫子の二人を以て贄となさば則ち決口合すべしと因て二人を召して之を命ず、强頸先づ水に沒して死し、乃ち其堤成る唯だ衫子は二個の瓢を取りて水中に投じ誓て曰く神眞に我を得んとならば、瓢必ず沈め我繼で身を投せん、若し天邪崇りを爲さんとならば瓢必ず泛べ、我何ぞ徒らに死せんやと時に風忽ち起り瓢は將に沈まんとして沈まず遂に瀏々として遠く流る、衆役夫大に喜び、力を戮せて之を築き、其堤漸く成り衫子も亦恙なきを得たり、時の人兩處を呼んで强頸絶間、衫子絶間と曰ふ云々は日本書記の載する所なり。

此地方は淀川沿岸にして今猶洪水の患あり、太間の友呂岐村に屬するも元の三井郷の諸大字と東西に相距り西淀川の岸に在り、古は絶間又斷間と稱され、當時奔流は襞屋川門眞川兩筋に入り草香江に會したるならん其形狀尙ほ存す、六條院宣旨に『逢ふことは絶間の池のかきつはた隔つる中となりやしぬらん』と見ゆ、而して茨田堤は仁德天皇の時强頸、衫子の斷間二ヶ處を築成せし給へる後時々土功を要せる所にして、德川氏の世亦重修を加へ京街道と爲し、慶長十九年十月洪水あり附近數所に侵水したれば、大阪城は其浸水を城東に滿へしめ、以て防禦に利せんとし、且つ京街道を杜絶せしめんと謀り、東西兩軍の兵數百堤上に會戰し之を爭ひたる事ありしと言ふ、茨田堤築成の難工事たりしは言を俟たず。

岡本　黃石

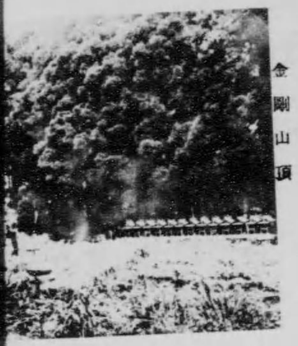
沙禽相喚水烟清　百里長流半日程
好是夕陽紅未了　船頭映出浪華城

此方面の舊蹟としては長尾驛の東南三町餘の所に王仁博士墓在り、近年其墓上に一碑を立つ、篆額は故有栖川宮殿下の御筆なり、土地高燥にして近く桃林の名所を控へ眺矚に富む、又有名なる天の巖船は巖船村の山間に在り、此山間各所に奇巖あり、巖船と總稱す、其奇巖中に於ける『石船巖』は獅子窟寺の東方、天の川の上流に沿ひ、大和街道に進みし傍側に在り、其高三丈餘長さ五丈餘を有し、溪流奔飛して巖石に碎くる光景は亦見易からざるの壯觀なり、天の巖船と呼ばれ又巖面に四體の佛像を刻せるを以て巖船佛とも稱す、山巔龍王祠に至り少憩すれば萬竅聲を收めて天地寂寞、太古の感あり。

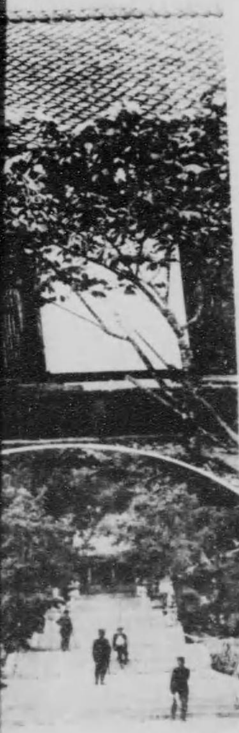
●源頼信一族の墓（河内）

長久年間源頼義の創建せる壺井寺は南河内駒ヶ谷村に在り、眞言宗にして該地方に於ける名刹なり、其本堂正面には定朝作阿彌陀觀世音勢至の三尊を安置し、觀音堂に在る金銅觀世音は源頼義感得の念持佛と傳へらる、域内に頼信、頼義、義家三人の墳墓を存す、元壺井の地は頼信別邸を營みし所たり、而して隣接地に在る壺井八幡宮は康平六年頼義の奉齋せる所にして應神天皇始め五神を祀る、即ち源氏の氏神なり、本社に義家の像を安んじ其奥に權現社在り天仁二年義家の創建に係り、頼信以下三人の靈を祀れり。元祿十四年德川綱吉上奏して正一位の神號を授く、祠前に壺井の靈泉あり。

義家墓



金剛山頂



観心寺

●金剛山（河内）

葛城山脈の高峰にして海拔四千五十尺大和河内の兩國に跨る、南河内郡千早村字千早より登ること二十八町にして頂上に達す、其間甲取坂、屏風坂等の嶮あり。頂上より東北二十八町に朝原寺あり、東南二十八町に猪石岡寺あり。頂上には行者堂あり、展望頗る佳絶にして近畿諸國目睫に集る、頂上より西に下りたる所に金剛寺あり一名轉法輪寺と云ふ、役の小角の開基にして古來修驗道有名なる靈場と稱せらる、本堂には法起菩薩及不動尊藏王權現を安置す、其他御影堂、大黒堂開山堂、求開持堂、僧舍、文殊窟、石寶殿等散在す。又附近に葛城神社あり、是れ古歌に『明くる詫しき葛城の神』と詠まれたるもの粂の岩橋を通ひしといふ傳說に有名なる葛城の神なり。

●天野山金剛寺（河内）

嘗ては南北朝時代、後村上天皇の一時行宮とし給ひたる地として名高き金剛寺は南河内郡天野村所屬天野山の半腹に在り、後村上天皇行宮の遺址は今の金剛寺の食堂に當れり、當寺は眞言宗にして聖武天皇の御宇行基菩薩の開基に係り、承元元年後白河天皇、高屋憲貞に勅して重修せしめ給ふ。斯くて今の金堂、食堂、御影堂等悉く成就せり、後ち延元元年後醍醐天皇の勅願所となれり、寺域は貳萬一千六十坪、樸門は東面して建ち、食堂、金堂、藥師堂、五佛堂、觀月亭等皆門内に在り。觀月堂は昔時後村上天皇茲に觀月あらせられし處にして唐破風の御殿造なり當寺に承久以後の國宣、後村上天皇の宣旨楠父子の文書等數多藏せり。又寶什兩部大曼荼羅は宮中修法の具にして北朝天子の御寄進に係ると云ふ。

●觀心寺（河内）

南朝史を繙くものは其名を記憶せざるものなき史蹟として著名なる觀心寺は檜尾山と稱し、南河内郡川上村大字寺本に在り。當寺は素と役行者の創建に係り、初め雲心寺と號したりしを空海上人觀心寺と改めたり、而かも道興大師に依つて興隆せるを以て同大師を開山とす。嵯峨天皇當寺を以て勅願寺と爲し給ひ、次で淳和天皇伽藍を造營あらせられたり。爾來歷朝の尊崇厚く、南朝の諸帝殊に深く歸依し給へり。建武中興の際後醍醐天皇楠正成を奉行として金堂を再建せしめる。是れ即ち現存せる堂宇にして明治三十一年特別保護建造物に編入せられたり。金堂竣工の後、正成大顯主となりて三層塔を建てんとし工事半ばにして天下再び亂れ正成湊川に戰死せしを以て造營は中止となり、該塔は初層の儘にて存す。今の建掛塔即ち是れなり。其他訶梨帝母天堂、拜殿、殊勝閣、靈應殿中門、南大門等あり。本堂の前に石あり、禮拜石と云ふ。弘法大師嘗て七星淨臨を拜禮したる石なりと傳ふ。當寺塔中の一に中院と稱するあり。是れ楠氏の香華院にして正時（正成の祖父）の建立に係る。此の緣故に依り正成幼時茲に來り寓して院主瀧覺坊に就て修學せしと云ふ。

正平十四年、賊將畠山國清、吉野の行宮を侵すや村上天皇は觀心寺を以て行宮とし給へり。同廿三年天皇崩御あらせられたるを以て當寺に葬り奉る。後豊臣秀吉當寺に二十五石を寄附し、秀頼又金堂を修理す。德川氏に至て大に衰へたり。明治初年高野山の所轄に歸せり。

●後村上天皇御陵（河内）

檜尾陵と稱す。觀心寺に在り。後村上天皇吉野行宮を出でさせられて觀心寺に在しましたるが、後ち住吉に行在せられて同地に崩御せらせられしとも傳へ、又觀心寺に於て隱れさせ給ひしともいふ。山陵志に載する所に依れば、後村上陵は檜尾山に在り、觀心寺の背後の山中に墳あり、廣さ二丈ばかり、寺僧歲時に奉祀するといふ。

後村上天皇は御諱は義良、後に憲良と申す、後醍醐天皇の第七皇子にして第九十七代の帝なり、始め陸奥太守として同地に居り給ひ尊氏の反するに及び北畠顯家と共に都に入り、延元四年三月吉野に於て後醍醐天皇の皇太子に立ち、同年十月吉野行宮に於て帝位に即き給ふ。正平七年賀名生に幸し、十三年觀心寺に遷らせられ二十三年三月同所に於て崩御あらせらる、寶算四十。

●楠公首塚（河内）

觀心寺の中なる上人廟の東方、後村上院御陵道の右方に在り。壇を築きて御影石の石柵を繞らし、石柵の中央七本に楠公の裔孫なる橘成位の銘文を刻す。是れ寛政五年の建設に係る其他柵外に篠崎小竹以下の碑數多く建てられたり。史を按ずるに延元元年五月正成湊川にて戰死の後賊將公の忠義に感じ其首を河内國千早なる楠公の家に送りたるを菩提寺なる故を以て更に觀心寺に葬りしものなり。寺說に依れば楠公の首級を持ち來りたるは尊氏の家士瀨川有隣と云へる者にて此の葬事を監督せしは公の家士安間七郎、生池兵衞の二人なりと云ふ。

菊地　溪琴

南朝古木鎖寒霏　六百春秋一夢非
幾度問天天不答　金鋼山下暮雲歸

岩崎　秋溟

潮自去來雲自停　可將往事付冥々
老松長議忠臣魂　落日鳴呼墓上青

う。觀月堂は昔時後村上天皇茲に觀月あらせられし處にして唐破風の御殿造なり當寺に承久以後の國宣、後村上天皇の宣旨楠父子の文書等數多藏せり。又寶什兩部大曼荼羅は宮中修法の具にして北朝天子の御寄進に係ると云ふ。

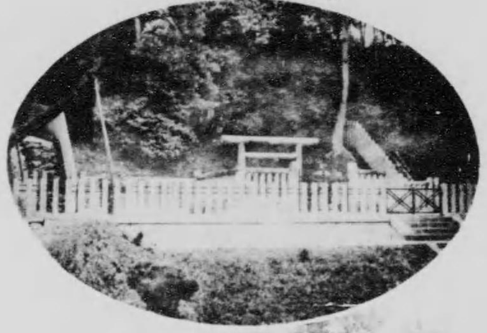
●後村上天皇御陵（河内）

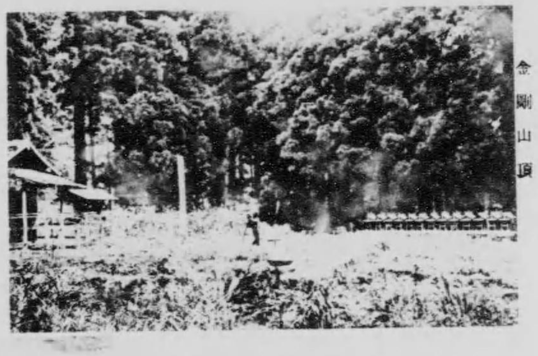
檜尾陵と稱す。觀心寺に在り。後村上天皇吉野行宮を出でさせられて觀心寺に

南朝古木鎖寒霏　菊地　溪琴
六百春秋一夢非
幾度問天天不答　金鋼山下暮雲歸

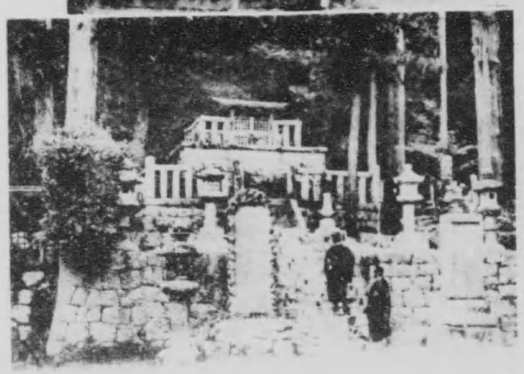
湖自去來雲自停　眉崎　秋濱
可將往事付冥々
老松長議忠臣魂
落日嗚呼墓上青

後村上天皇御陵





金剛山頂

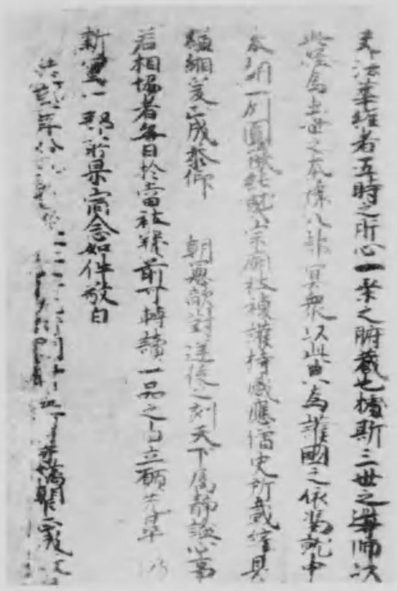


楠公首塚

天野山金剛寺

觀心寺

楠木正成筆蹟



楠公誕生地

赤坂城址

千早城址

櫻井驛楠公父子訣別の遺蹟

●赤阪城址（河内）

金剛山の西麓即ち南河内郡赤阪村にあり。赤阪は上下二ヶ所に分れ、上赤阪城體、一日二日には落ちまじかりけるぞ、暫く陣々を取りて役所を構へ手分をして合戰を致せとて攻口を少し引退き馬の鞍を卸し物具を脱ぎて皆帷幕の中にぞ休み

の塔あり、傍に石標を建て、延寶八年閏八月從五位下源總良建立と刻せり。

●櫻井驛古址（攝津）

●赤阪城址（河内）

金剛山の西麓即ち南河内郡赤阪村にあり。赤阪は上下二ヶ所に分れ、上赤阪城址は大字桐山に在り、下赤阪城址は大字森屋の東南に存す、二城址相距る直徑十五町許、俱に南方は峨々たる山に倚り、西北は溪谷に枕み、溪川其の間を流れて東條川に入る、頗る要害の地なり、元弘年間楠木正成兵を起して玆に築城せり。蓋し正成の居宅は水分村内に屬し己が館の上なる山上に築きて以て東國勢を引受けたるなり。左に赤阪城戰を叙する太平記の一節を抄す。東國の軍勢ども未だ近江國に入らざる前に笠置の城既に落ければ無念の事に思ひ一人も京都へは入らず、或は伊賀伊勢の山を經或は宇治醍醐の道を要りて楠兵衛正成が楯籠りたる赤阪の城へぞ向ひける。石川河原を打過ぎ城の有樣を見遣れば俄に構へたりと覺えたる其内に櫓二三十が程掻き双べたり。是を見たる人毎にあな哀の敵の有樣や此城我等が片手に載せて投ぐるとも投つべし。あはれせめて如何なる不思議にも楠が一日こらへよかし。分捕高名して恩賞に預らんと思はぬ者こそ無りけれ。されば寄手三十萬騎の勢ども打ち寄ると均しく馬を踏放ち〳〵堀の中に飛び入り櫓の下に立並びて我前に打入らんとぞ爭ひける。正成は元來策を帷幄の内にめぐらし。勝つ事を千里の外に決せんと究竟の射手を二百餘人城中に籠めて舍弟の七郎と和田五郎正遠とに三百餘騎を遣副へて、よその山にぞ置きたりける寄手は之を思ひもよらず心を一片に取りて只一揉に揉み落さんと同時に皆四方の切岸の下に着けたりける處を櫓の上矢間の陰より指しつめ引きつめ鏃を支へて射ける間、時の程に手負死人千餘人に及べり。東國の勢ども案に相違していや〳〵此城の爲體、一日二日には落ちまじかりけるぞ、暫く陣々を取りて役所を構へ手分をして合戰を致せとて攻口を少し引退き馬の鞍を卸し物具を脱ぎて皆帷幕の中にぞ休み居たりける、楠七郎、和田五郎遙の山より見下して時刻よしと両方より吶喊をどつと作て三十萬騎が中に駈入り東西南北へ破て通四方八面を切て廻るに寄手の大勢呆て陣を成し衆ねさしもの大勢なれど蜘の子を散すが如く石川河原へぞ退〳〵云々

●楠公誕生地（河内）

南河内郡水分村の領内山の井に在り。即ち水分神社を距る二丁許田圃の中なり境域凡そ三間四方、中央に石垣を築き、自然石の碑を建て、刻して楠公誕生地と云ふ。是れ楠木正成が呱々の聲を揚げたるの地蓋し此あたり昔時楠氏邸宅の址なりと云ふ。玆處より約二三丁を隔ちて楠公の井なるもの在り。水頗る清し今は農家の竹藪中に屬すとぞ元來この附近全體は下赤阪村にして當時は楠氏一族の根據地たりしなり。

●千早城遺址（河内）

千早城址は金剛山の支脈なる千早山の絶頂に在り、楠氏が南朝の藩屏として、數十年間據守したる史上著名の舊蹟にして、四面溪谷を有し、其深さ東百丈、西七十五丈、南八十丈、北三十丈、東西の間に一徑を存して金剛山頂に通ず其の途中に國見山あり。此地に至るには四道ありて一は三日市より觀心寺を經て千早村に出づ、此間百町、一は富田村より水分を經て千早に出づ、此間水分まで一里餘、一は五條町より千早村に出づ、此間約三里、一は金剛山上より下る、此間約三十町、千早村よりは川に沿ひ、八九町にして城址に達するを得べし。絶頂に楠公の祠あり、近年の造營に係る。本丸址の東南に正成の塔あり、傍に石標を建て、延寶八年閏八月從五位下源總良建立と刻せり。

●櫻井驛古址（攝津）

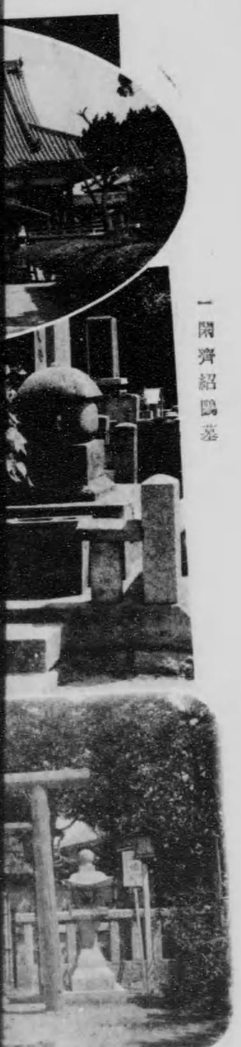
攝津國島上郡島本村なる櫻井の驛より山崎街道に沿へる數頃の地、路傍に一株の古松を見る樹下に一大巨碑を建て題して『楠公訣兒所』と記す。即ち是れ延元元年五月楠木正成が死を決して兵庫に出陣誰か當年の歴史を追憶して涙を禁せざるものあらんや。

過櫻井驛址　　頼山陽

山櫻西去碧井驛　傳是楠公訣子處
林際東指金剛山　堤樹依稀河内路
想見警報交奔馳　促驅羸羊餧猛虎
問耕拒奴織拒婢　國論顚倒君不悟
驛門立馬臨路岐　遺訓丁寧垂髫兒
從騎肅聽皆含涙　兒伏不去叱起之
西望兵庫賊氛惡　回頭幾度覩去旗
殷殲全躬支傾覆　爲君更貽一塊肉
剪屠空復膏賊鋒　頗似祁山與綿竹
脈々熱血灑國難　大澱東西野草綠
雄志難繼空逝水　大鬼小鬼相望哭
昔時此地櫻井寺　今有一刹存而已

●楠正成の筆蹟（河内）

是れ正成が自ら法華經に署したる奥書にして、正成が宗教信仰の如何を窺ふべき貴重の史料たり、惜かな法華經は散佚して傳らず僅に奥書のみを存す。此奥書の文意に據れば嚮に後醍醐天皇の勅を奉じて北條氏討伐の爲め出陣の發途に際し某社に戰勝を祈願し後日心事相協ひた戰勝を得たる上は毎日寶塔に於て法華經一品を轉讀すべき事を誓ひたるが今其祈願成就したるを以て法華經一部を新寫し當初自ら誓ひたるところを果すと云ふにあり。原本は湊川神社の所藏に係る。



一閑齋紹鷗墓

●妙國寺の蘇鐵（和泉）

蘇鐵寺として聞ゆる妙國寺は堺市材木町に在り、日蓮宗にして日珖僧正の開基に係る、寺域三千百五十餘坪、永祿年間油屋某なる者佛門に入りて常言と號し、當寺の諸堂を建立す、寺地は三好入道之康の寄進なり、豐臣秀吉、小西行長等當時の諸侯は皆な之が大壇那なりしと言ふ。

本堂には上蓮上人及開基日珖僧正の像を安置し、其西に三重塔あり又本堂の裏手潛り門を入りて方丈の前に至れば此所に有名なる蘇鐵樹あり、其幹の高さ三間餘大枝二十三本延袤二十八尺餘に亘り年を經ること四百有餘年なりと雖も、壯觀なる四株の大蘇鐵は各々翠色を變せず、樹下に數百本の古針を投じて其狀恰も枯松葉を搭き集めたるが如し、織田信長曾て此大蘇鐵を見て靈樹なりと評す、實に他に比すべきものなき稀有の大蘇鐵なり。

●土佐志士の墓（和泉）

妙國寺中に土佐志士の墓相列なりて常に香煙絶へざるものあり、是れ王政復古の時堺港の警固に任せる土佐藩士と、會ま投錨せる佛艦の兵と端なくも衝突を生じ、彼等傍若無人の暴行之を默許する能はず、遂に一刀兩斷の處置に出で立どころに佛兵數名を殪したる結果、佛艦司令官の激昂となり、佛公使の嚴重談判は加害者たる志士數名に自及を强ゆるに至り、妙國寺は是等志士屠腹の場合に當てられ、清淨の室忽ち鮮血淋漓たる悲劇場と變じ、立會の佛人をして『日本武士の最期』見るに忍びずと驚嘆せしめたり、而かも死の宣告に服し順次武士道的古法に則り屠腹せる志士の膽に敬服し畏怖せる彼等は其中途にして去り、急遽屠腹中止を懇請し來る、以て當日の光景如何に壯烈なりしかを知るべし、今ま簡短に此始末を記さん。

王政復古の結果として我政府は兵庫に在る諸外國人に對し通告を發すると共に彼我取締に關する事を示したるに、時々入港の軍艦商船の乘組員中動もすれば輕舉を敢てする者少なしとせず、茲に於てか是等取締の事に容易ならざりき、當時堺港の警固に任せる土佐藩笹浦伊之吉西村佐平次等部下數名を率ゐて糸屋町に陣屋を設け、專ら警戒に努めたり 先是、土佐藩士等松山征討より京都に歸る途中神戸に於て佛兵の暴舉に遭ひ、朝廷より下賜されたる錦旗を奪はる、之れ彼等多數の力を以て土佐藩士の少數なるを襲へる爲め、敵するを得ずして錦旗を奪はれたりとは言へ、土佐藩全體の憤慨となり朝廷に對し奉りて恐懼に耐へずと爲し、佛兵の暴舉を惡み錦旗奪還を念とせり。

時に英米佛の軍艦十六隻天保山沖に投錨し、其兵潛かに上陸し堺市に横行すとの報告ありしかば笹浦西村の兩人往いて之を取調べ、偶ま佛兵二人の上陸許可證を所有せざる者を發見し、之を退去せしめたり。

然るに又々二十艘の端艇に分乘して上陸せる佛兵等は壯んに市内を横行し、或は通行人を辱め、或は婦女子を凌侮し、其だしきは人家に侵入して物品を掠奪する等暴狀言語に絶す、市民の恐慌一方ならず急を警固陣所に訴ふ、笹浦西村等數名を率ゐて其場に臨み百方鎭制に努めたるも、彼等頑として從はず、斯くする中、隊旗を奪ひ去らんとせるより之を奪還するに彼等は多數を恃み、突如短銃を亂發するに至れり、笹浦等茲に至りては策の施すものなく殊に隊旗を奪ふが如き、最きの錦旗奪取と言ひ甚だ惡むべき所業なりと、激怒し我亦一齊射擊を開始し來り近づく者を一刀兩斷す、茲に一個の市街戰となりしが日本刀の閃光を見るや彼等隊を亂して逃れ去れり。

此椿事よりして佛艦司令官は急を佛國公使に告げ、公使は時を移さず强硬談判を試み『加害者二十名を極刑に處し、償金十五萬弗を出し、皇族及土佐侯自ら我艦に來りて謝す可し』と、此不當なる要求も皇族謝罪を除き他は盡く容るゝ所となる。

時は慶應四年二月二十三日、豪雨沛然として下る午前、我外國事務官總裁以下檢死官として臨み、佛國提督等之に立會し笹浦以下順次泰然自若の屠腹を了し、其十二人目の時立會者戰慄しつゝ中坐し、使を以て他九名の助命を懇請し來る、理由は『貴國武士壯烈の死を見るに忍びず』の數字に外ならず、嘻、吊すべき哉志士の魂。

●紹鷗と利久の墓（和泉）

茶人一閑齋紹鷗及千利久墓は共は堺市南莊の禪刹南宗寺に在り當寺は大林和尚の開基に係り弘治三年三好長慶其亡父天長追福の爲めに創立す、元正元年松永久秀の兵火に罹り元和元年再び兵燹に罹りて回祿せるを澤庵和尚之を再建するに當り喜多見忠勝小出吉英之に協力せり、寺域六千四百六十餘坪建造物に見るべきもの多し、由來當寺は高僧隱栖の所にして臨濟派に於ける名刹たり。

茶人紹鷗は堺の人、性は武野、一閑齋と號し其居を大黑庵と稱せり、初名を中村新五郎と呼び京に出でゝ宗陳、宗悟の兩居士に就て茶道を研究し又和歌を藤原公朝に學ぶ、仕へて從五位下に叙せられ因幡守に任せらる、後、辭して鄕里に閑居し其蘊蓄せる茶法を悉く門人千宗易即ち利休に授く、弘治元年十月二十九日五十四歳を以て卒す。

利休筆蹟は松平直亮伯所藏に係る。

妙國寺

一隅齊紹墓

妙國寺大蘇鐵

土佐志士墓

千利久墓

かも死の宣告に服し順次武士道的古法に則り屠腹せる志士の膽に敬服し畏怖せる彼等は其中途にして去り、急遽屠腹中止を懇請し來る、以て當日の光景如何に壯

するに至れり、笹浦等茲に至りては策の施すものなく殊に隊旗を奪ふが如き、曩きの錦旗奪取と言ひ甚だ惡むべき所業なりと、激怒し我亦一齊射撃を開始し來り近づく者を一刀兩斷す、茲に一個の市街

因幡守に任せらる、後、辭して郷里に閑居し其蘊蓄せる茶法を悉く門人千宗易即ち利休に授く、弘治元年十月二十九日五十四歳を以て卒す。

利休筆蹟は松平直亮伯所藏に係る。

●大濱公園（和泉）

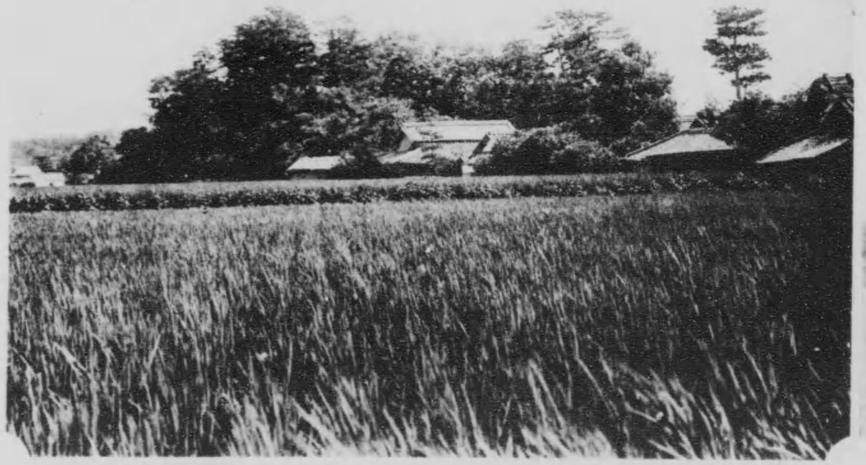
大濱公園を有する堺市は其繁華之を大阪に比すれば稍、遜色なきに非ずと雖も、

洋心一點夕雲飛　廣瀬　旭莊
舟子豫知今夜雨　風送輕帆箇々歸
　　藤井　竹外

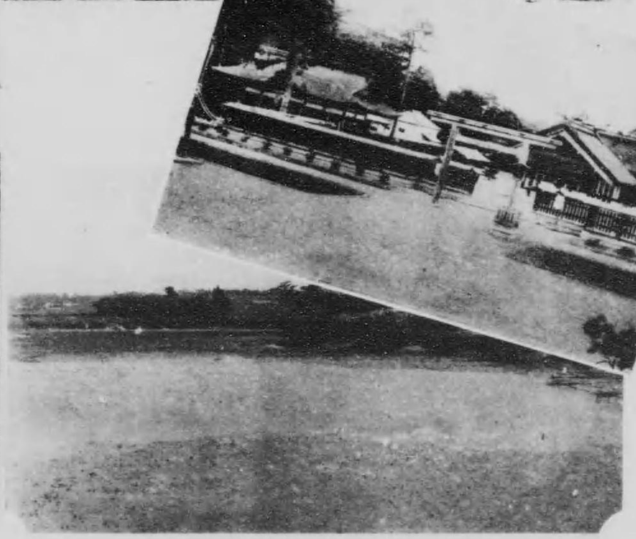
字中村にして、允恭天皇八年離宮を此に造りて衣通姫を居らしめ、天皇屢々日根野に遊獵し給ひ其度毎に幸し給ふ、皇后奏して曰く妾亦も衣通姫を妬むに非ず、

大濱公園

澁寺公園



信太の森



珍努の池

大鳥神社

●大濱公園（和泉）

大濱公園を有する堺市は其繁華之を大阪に比すれば稍、遜色なきに非ずと雖も、河泉第一の樞要地たり。

市勢良位より坤位に伸び、長二十七町横幅十四町より五町に及び、中央の横條を大小路と言ひ南莊北莊に分つ、四周圍むに壕池を以てす、西に向つて港灣を造り灣の東を戎島と稱し南を大濱と言ふ。

天正五年に在りては織田氏政所を南の莊に置き松井友閑をして吏務に任せしめ、同十三年に至りて之を北の莊に移し小西行長をして總てを掌らしむ、文祿以降は堺奉行を置き市政を爲す、是れ此地を重視せる爲めにして大阪長崎と同一の待遇を爲せるなり、此地の『堺織物』は往時最も盛を極め、遂に絹布、羅紗、綾織類を織出せるより、天正年間既に支那より職工を聘用し、紗、紋紗、金紋紗、錦、金襴、緞子、縮緬、好絹、分袴衣等の諸品を織り以て汎く内外の需求に應じ併せて土地の隆昌を期待せり、今ま錦之町絹屋町等の町名を存するは織物より生じたる記念的町名なり。

大濱の名は海口南北の舊砲臺を背後にせる沙濱一面の總稱にして、濱を分つて北大濱南大濱と稱す、昔は荒凉たる沙濱なりしも、明治十二年之を公園とせしより、形勢頓に一變し、南大濱の如きは三層五層の高樓軒を接して相連り、紅燈綠酒、絃歌波濤と和するの熱鬧地となれり。

此地眺望に富み、前は茅渟の海に臨み、淡路島と相對し、左右に攝播の翠巒を觀、波濤瀲艷として月光千里に遍きの時、高樓に登れば其快、蓋し盡くるべからざるものあらん、殊に海水淺く洲渚遠く連なるを以て、陰曆上巳の干潮には潮干狩を爲す者多く、其光景宛然として一幅の畫圖に似たり、夏時亦海水浴場に適す。

廣瀬　旭莊

洋心一點夕雲飛　風送輕帆箇々歸
舟子豫知今夜雨　摩耶山色漸依微

藤井　竹外

波戸無風漁市腥　夕陽舟過古茅渟
淡山看入浮嵐去　還自鷗邊露寸青

●大鳥神社（和泉）

日本武尊を祭神とする大鳥神社は官幣大社にして鳳村大字大鳥に鎮座す、尊は景行天皇の皇子にして同帝の四十年遠く東夷を征討して伊勢に還らせ給ひ御年三十にして能褒野に薨じ給へり、後宮殿を和泉大野の里即ち此地に創建し尊の神靈を祀れりと、華表は街道の東に在り、其左右は木竹林を爲して頗る鬱愁、社地亦廣漠にして一二の泉池あり其周圍には悉く杉林を遶らし古へより『千種の森』の名あり、本社は西面し拜殿其前に在りて三方に神籬を遶らし建築壯麗ならざれ共自ら嚴正以て威德の高きを仰がしむべし、大祭は毎歳八月之を執行して神輿の渡御あり大鳥一村は勿論堺市の如きも亦爲めに非常の般賑を極む。

鳳寺春山夕　蹤然法響傳　花飛搖返景
林靜度深煙　鴿集香臺外　僧歸清廟邊
何人驚大夢　暫此脫塵緣

平清盛

かひ子そよかへりはてなば飛かはり
はこぐみたてよ大鳥の神

大鳥神社は元神鳳寺と稱せるを改めたるものにして攝社四座あり濱寺村大字下に鎮座の大鳥鋤靱神社、高石村今在家の大鳥濱神社、及大鳥美波比神社大鳥井瀬神社共に延喜式に列す、舊址は八田村大字平岡に在り、美波比神社は鳳村字北王子に在りて美夜比若宮と稱す。

●茅渟宮址（和泉）

茅渟宮址の在りし所は泉南郡上之鄕村字中村にして、允恭天皇八年離宮を此に造りて衣通姫を居らしめ、天皇屢々日根野に遊獵し給ひ其度毎に幸し給ふ、皇后奏して曰く妾毫も衣通姫を妬むに非ず、唯だ陛下の屢々茅渟に幸し給ひ其山野を遊獵し給ふは是れ百姓の苦みのみ、以後車駕臨幸の數を減じ給はんことを、天皇其言を容れ給ひ爾後車駕の茅渟離宮に臨むこと太だ稀れなりしとぞ、今は其墟泯滅して容易に認め難し。

●濱寺公園（和泉）

濱寺は『大雄寺址』にして、大雄寺は覺明僧正の開基に係れり、僧正は由良法燈禪師の衣鉢を紹ぎ入元して天台に遊び、其歸朝するや出雲國に雲樹寺を創建し、元弘三年後醍醐天皇伯耆行在所に在はせられたる時召されて國濟禪師の號を賜はり、後、山城國長尾妙光寺に住み足利尊氏屢々招するも之れに應せざりき、而して遁れて吉野に走り後村上天皇河内攝津に巡狩の頃大雄寺を石津即ち此地に創建し三光國師の追號を賜れる高僧なりしなり

蔚然たる老松は數千株蟠屈して岸に臨み、一面の白砂は其汀の細漣に洗はれ、西に淡路島北に須磨、一の谷、舞子、鐵摺ケ峰、南に紀伊の連峰を望み、風色最も絶佳なる此地は眞に天與の仙境たり、今や大阪以南の大公園として著る。

●信太の森（和泉）

歌の名所としての信太森は泉北郡信太村字中村に在り、森は信太明神の社を謂ふにあらず、莊官たりし森田氏の宅地内に老楠在るを土人呼んで『信太森』と言へり、其老楠凡そ八丈餘枝葉繁茂して宛然森を爲す、紀氏六帖中に之を詠める所あり。

和泉なる信太の森の楠木の
千枝にわかれて物をこそ思へ

淀君墓

大融寺

●大阪城址（大阪）

一代の英雄豊太閤が偉業の片面とも見るべき大阪城は東區法圓坂町に在り。明應五年宗教界の偉僧蓮如上人、地を攝津生玉莊小阪村に相して本願寺別院を建立し名けて石山本願寺と稱せり、後、天正の初年光佐顯如上人の時に至り茲に壘壁を築き塹濠を設け一城を形成して石山城と稱す、是れ蓋し大阪城の始めなりとす。同八年織田信長顯如を攻めて該城を陥れ番衆を置きて之を守らしめたり。十一年豊臣秀吉此地を收め大に土工を起し、修築を加へ、關西諸國の大小名に命じて工事を監督せしめ、經營二年を要して竣成したるもの即是れ大阪城なり。城は本丸、山里丸、二の丸、三の丸の四大曲輪より成る、外郭は北は淀川の左岸、道頓堀以東玉造の北に達し、所謂乾濠を繞らし、東は平野川、西は東横堀を濠とし、高麗橋を次手口とし周圍約三里餘に及ぶ。壘壁は悉く巨大なる花崗石を以てし、宏壯雄大、要害堅固、且つ輪奐の美を極め、千疊敷、朱塗の櫓、利久の數寄屋等の如き、最も著しく知られ實に天下無双の稱あり。

慶長四年豊公薨去、秀頼伏見より茲に遷りて更に修築を加へ、後、德川氏と不和を生ずるに至り、其講和條件として外壕を埋めて其大部分を滅却し去れり。斯くて元和元年五月再び德川氏と隙を生じて遂に陥落し、城は擧げて德川氏の領有に歸したり。冬夏兩陣の戰役に於て大阪城は其殿館城樓多く灰燼に歸したるを以て德川秀忠、元和年間、大に修築を加へ、次で寛永年間家光將軍亦自ら工事を督して城壘を修す、其後火災に罹り、天保十四年幕府は大阪の富豪に百五十萬兩を課し十四ヶ年の長月日を費して大修築を行ひ稍舊觀に復せり。明治戊辰の役に城中火を失して尠からず燒失したるが、維新後、政府茲に第四師團本部を置き更に幾多の修築を加へたり。

●大融寺（大阪）

露天神の東北約六七町、北野寺に在り、古義眞宗にして桂本山と稱す、弘仁年中空海上人の開創に係り、當時桂本寺と號したり、後ち承和年間、源融、仁海上人に命じて大に修築を加へ今の名に改む。本堂は南面して建ち床高く屋根嶮しく、堂内に春日作の千手觀音を安置す、是れ本尊なり、別に毘沙門堂、大師堂、西國巡禮三十三所觀音堂あり。本門の左方に藤棚あり其蔓四方に延長して十數坪の廣きに亘り花時盛觀を呈し來觀者頗る多し。

因に云ふ、當寺の舊地は現今の寺地を距る西北三町餘の地に在りて荒廢に歸したりしを近世に至り快濟上人、寺を茲に再建したるなりとぞ。

●淀君の墓（大阪）

大融寺境内に在り、九重の塔にして高さ一間餘、素と大阪城内に在りしを茲に移したるなりと云ふ。墓側に淀君之墳墓と記せる標石あり。

大阪城陥落の際、淀君は城内糒倉に逃れ居りたるが、秀頼の割腹を見るや、荻野入道道善に介錯を命じ、遂に悲壯なる最期を遂げたり、享年四十三、實に是れ元和元年五月六日なりき。

●淀君の筆蹟（大阪）

原本は竪一尺一寸八分、横一尺七寸、伊勢の人慶光院利敬氏の所藏に係る。本文は左の如し。

はる〳〵とてはしゆそ被下候御うれしく候秀頼よのつねそくさゐに候まゝ御心やすく候へく候きたうのしるしと御うれしく思ひ〳〵いち〳〵たのみ入候まつ〳〵そこほと寺の事とく申つけ候はんを我〳〵こゝろあしく候てをそく申つけ候一昨日廿二日に申つけ候ふきやうの事いなは藏人ふるたひやうふに申わたし候へといちのかみにたしかに申つけ候きやくてんをくらへ又くりとへんさいてんのたうをふるたにたてさせ候へく候木はしらをもねん入候て久しくそこね候はぬやうにと大かたかたねん入候へと申つけ〳〵そのちよりもなを〳〵この文ふたりにみせ候て御たのみ候へく候こなた大さかにもそもしのやとの御事申つけ候ていまたてさせ候すなはちていしゆそにみせ候かたり申へく候夏中はこゝほとへ御出候て御入候へく候くはしくはていしゆそ申へく候なを〳〵そのちとちかく候まま兩人へ申つけ候まゝよく〳〵御申へく候猶くはしくはていしゆそ申へく候めてたく候へく候

くれ〳〵申候木のあまりにてていしゆそあんにあい候やうにこしらへ候てたて候へとこなたにて申つけ候はんとその御心へ候へく候めてたくかしこ

廿四日　大さかより

あこ

けい光院とのへ

中とのへ

●豊臣秀頼筆蹟（大阪）

原本は前者と同じく慶光院氏の所藏に係る竪一尺五寸横二尺一寸五分あり、年號を記さゞれば其年代を知るに由なきを遺憾とす。本文は左の如し

はや〳〵下りにて殘多候火事の事くるしからずやがて申つけ候はん間心やすく候べく候わが上人へもこの事申候かしく

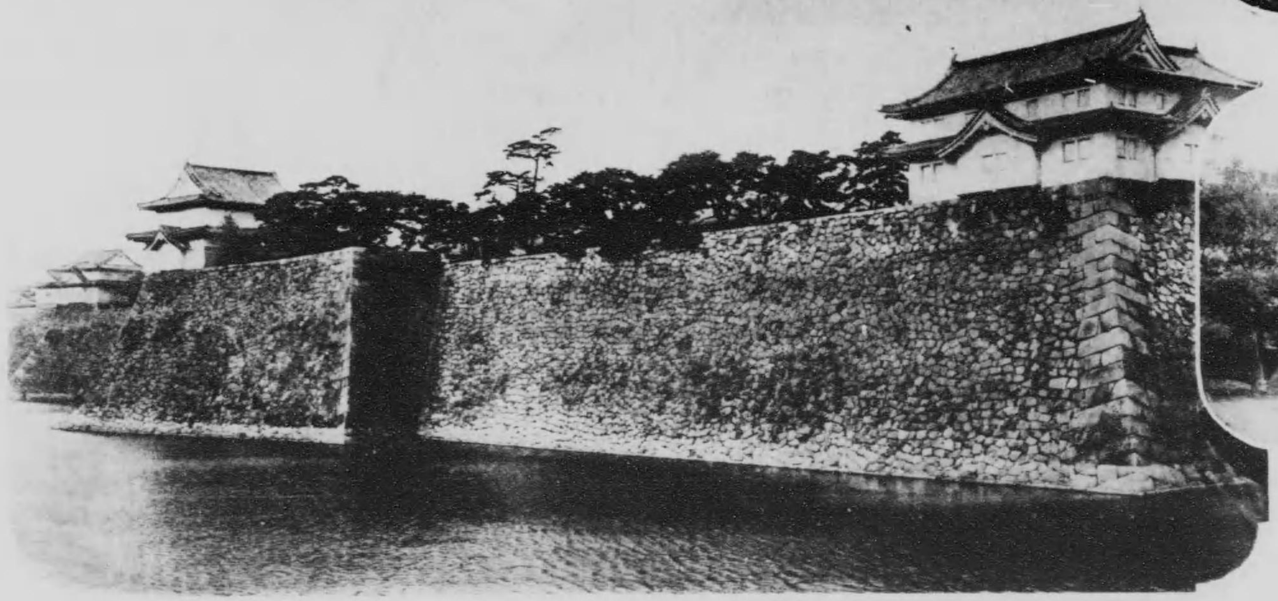
三月二日　秀頼

けい光院

豐臣秀頼筆蹟

淀君筆蹟

淀君墓



大阪城址

大融寺

大で寛永年間家光將軍亦自ら工事を督して城壘を修す、其後火災に罹り、天保十四年幕府は大阪の富豪に百五十萬兩を課し十四ヶ年の長月日を費して大修築を行ひ稍舊觀に復せり。明治戊辰の役に城中

保勢の人慶光院利敬氏の所藏に係る。本文は左の如し。

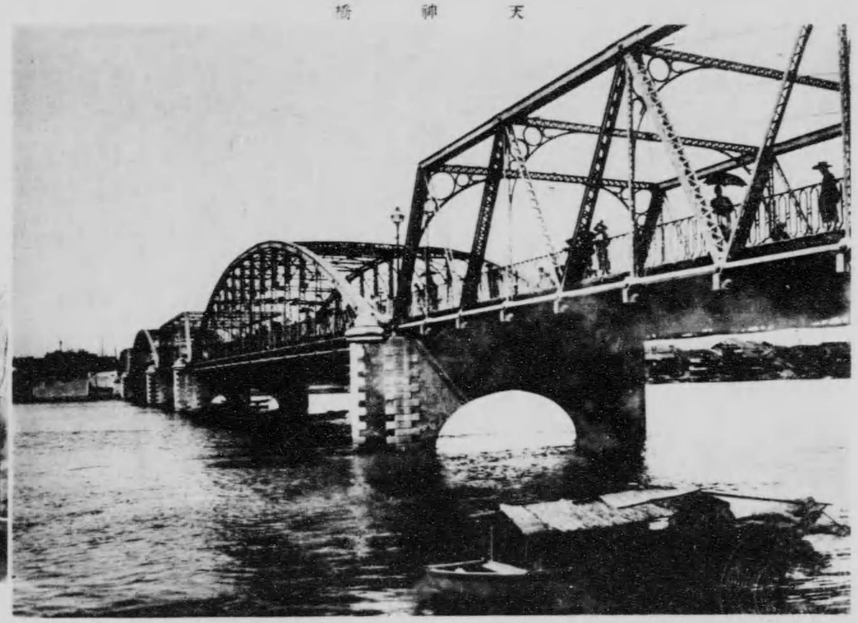
はる〳〵とてはしゆそ被下候御うれしく候秀頼よのつねそくさゐに候まゝ御心やすく候へ〳〵候きたうのしるしと御うれしく思ひ〳〵いち〳〵たのみ入はや〳〵下りにて殘多候火事の事くるしからすやがて申つけ候はん間心やすく候べく候わが上人へもこの事申候かしく

三月二日　秀頼

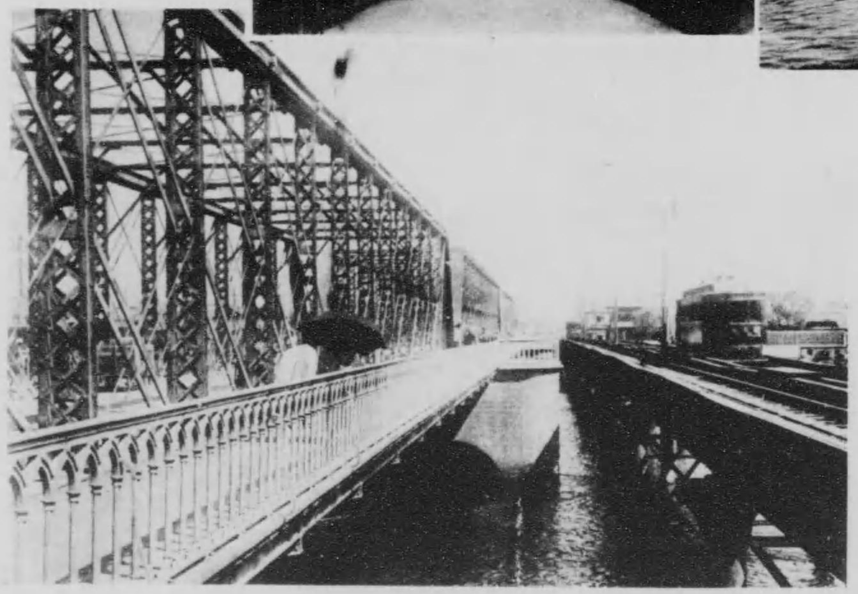
けい光院

天滿天神社

中の島公園



天神橋



天滿橋

西山宗因墓

大鹽平八郎父子墓

●天滿天神社（大阪）

北區大工町に在り、昔は是より更に北方なる明星池附近に在りしを茲に遷せるなりと云ふ。社格は府社にして天曆中の創建に係る。祭神は菅原道眞公にて、別

明治十八年洪水の爲めに流失せしを以て、以來大工事を起して鐵橋を爲し、以て大阪市の一偉觀たるに至れるなり。

●中之島公園（大阪）

屋瓦累累、煙突林立、塵埃天に沖する

十七歳なりき。

平八郎是より專ら力を學に注ぎ學堂を張つて洗心洞と號し諸生を敎ゆ。天保七年諸國大雨し、米穀豐熟せず、民飢ゆるもの極めて多し、而かも幕吏恬として之を顧みず、聚斂して知らざるもの〻如し、

●天滿天神社（大阪）

北區大工町に在り、昔は是より更に北方なる明星池附近に在りしを玆に遷せるなりと云ふ。社格は府社にして天曆中の創建に係る。祭神は菅原道眞公にて、別に大將軍祠、姪兒尊遷殿末社、神明、八幡、住吉等の神社あり。大將軍祠は上古難波に皇宮ありし時代、四隅に鎭守し給ひし一にして今地主神と崇め居れり。其他紅梅殿、老松殿、稻荷、白太夫社等數多く在り。神社の建築は本神殿を始め樓門、神樂殿等結構莊嚴にして、曩に一千年祭の際、大修繕を加へ、又曩年西方に神苑を設け更に一層の壯觀を加へたり、例祭は毎月廿五日にして大祭は毎年七月廿五日なり、此日は所謂鉾流しの神事を執行する例にて當日は夕刻より神輿本殿を出で難波橋より船にて松島の御旅所に渡御あり、奉迎の船、供奉船幾千艘の多きに達し其道筋には數萬の炬火を焚き水天輝き亘りて壯觀言ふべからず、斯て神輿は夜の中に本社に還御せらるゝなり。

●天滿橋（大阪）

大阪市に於る第二の長橋にて東區京橋二丁目より北區天滿橋筋に架設す、長さ百十七間六分幅六間、橋材は、總て鐵を用ゐたり。明治二十一年竣工せるものにて天神、浪花の二橋と共に大阪の三大橋と稱せらる。橋の中央に備前島あり、東南には大阪城の壘壁を樹林の間に望み、西方は天神、浪花の兩橋を眺め景趣頗る瀟洒たり。

●天神橋（大阪）

天滿橋の西方、大川の下流に架せらる長さ百三十一間一分、幅六間、桁、柱悉く鐵材を用ゐ、構造極めて堅牢にして大阪第一の長橋なり。以前は木橋なりしが、明治十八年洪水の爲めに流失せしを以て、以來大工事を起して鐵橋と爲し、以て大阪市の一偉觀たるに至れるなり。

●中之島公園（大阪）

屋瓦累簇、煙突林立、塵埃天に沖する煤烟の都に、超然として瀟洒たる一閑地を占むるものは中之島公園なりとす。此地北は堂島川に沿ひ、南は土佐堀川に臨む。園の中央は豐國神社あり。噴水、樹石、好配を得て景趣太だ掬すべし。園の東に大阪陣の一將木村長門守重成の巨碑あり、大阪の俠客小林佐兵衛の獨立建設に係るものなりと云ふ。

粉壁臨江渚　沙明夕照初
長橋人小立　似數水中魚

廣瀨　淡窓

●大鹽平八郎父子墓（大阪）

天保年間、大鹽騷亂の頭目たる大阪の與力大鹽平八郎及び其子格之助父子の墓は共に、天滿東寺町橋詰なる誠正寺に在り。

大鹽平八郎は、名は後素、字は子起、通稱を平八郎と云ひ、中齋と號し、其居を洗心洞と稱す。寛政五年阿波國美馬郡脇町に生る、父を眞隅市郎と云ふ、幼にして大阪天滿の與力大鹽氏の養子となる、平八郎少壯學を好み、江戸に出で林述齋の門に入り刻苦勵精、孜々として儒學を研鑽し專ら陽明學を奉ず又傍ら武藝を修め、殊に鎗術に秀でたり。後養祖父の病報に接して歸阪し、爾來與力の祖業を承繼す、平八郎、性剛直清廉にして、折獄斷訟能くその器に稱ひ、最も吏務に長じたり。是を以て當時の大阪町奉行高井山城守其の器才を愛して擢用す、平八郎深く其恩義に感ず、既にして高井老を以て奉行の職を辭す、平八郎亦老を告げて仕途を退く、是れ天保元年にして平八郎三十七歳なりき。

平八郎是より專ら力を學に注ぎ學堂を張つて洗心洞と號し諸生を敎ゆ。天保七年諸國大雨し、米穀豐熟せず、民飢ゆるもの極めて多し、而かも幕吏恬として之を顧みず、聚斂して知らざるもの、如し、平八郎之を憂ひ翌年二月上書して官穀を賑はさん事を請ひしも容るゝ所とならず、玆に於て平八郎大に怒り斷然意を決して檄を攝津、河內、和泉、播磨等に飛ばし、同志を糾合し、濟世救民の旗幟を飜へして兵を起し、二月十九日火を市中に放ち大阪城代の邸宅を攻む、城代又兵を以て之を拒ぐ、爲めに大鹽の勢稍々衰ふ、平八郎事の成らざるを見て潛かに八軒家より天滿橋下に通れ夜間上陸して乘を散じ其子格之助と共に身を京都油掛町の美吉屋五郎兵衛方に潛匿したるが三月二十六日の夜捕吏の圍む所となり、終に逃るゝ所なきを以て其子格之助を介錯し自ら火を放ちて自殺す。

●西山宗因墓（大阪）

浪華俳談林派の祖たる西山宗因の墓は天滿西寺町西福寺に在り。

宗因は諱は豐一、通稱を治郎作と云ふ肥後の人なり、初め加藤侯に仕へたるが、後ち致仕し剃髮して宗因と稱し、京都北野に住し、後轉じて大阪天滿に移り專ら俳諧に遊べり。梅翁、西翁、一幽、野梅翁、忘吾齋、向粲庵等は皆その別號なり。宗因始め連歌を昌琢に學び、次で松永貞徳に就きて俳諧を修む、爾來研鑽し從來の俳句に一種の滑稽味を加へたる談林體の一派を創興せり。天和二年三月二十八日歿す、享年七十八。宗因の吟として著名なるもの一二を揭ぐ

白露や無分別なる置き所
世の中よ蝶々とまれかくもあれ
浪花津にさくやの雨や梅の花

天滿天神社

高

本願寺北御堂

同　南御堂

●安治川（大阪）

淀川の一分流にして、中之島の西端より西南に流れて海に入る。茲處を川口と云ふ。即ち安治川、木津川の二流會合して海に注ぐ所にして、茲處に築港を設けたり。此川口は、實に大阪繁榮の咽喉にして一大樞要の地なり。安治川口に一小山あり。天保山と名く、幕府の際、大阪警備を要せし時此山に砲臺を築きたり。即ち是れ安治川砲臺なり。

安治川は貞享年間川村瑞賢なる人、幕府の命に依りて開鑿したる堀川にして、瑞賢の通稱を安治と云ひしより、取りて以て河名となしたるなり。瑞賢。安治川を開鑿せし時、其の土砂を以て波除けの爲めに積み上げたる山あり、瑞賢山と名づく、天保山附近に在り。

川村瑞賢は伊勢の人、初名を十右衛門と云ふ。幼にして江戸に出で、落魄して車戸の脚夫となりしが貧窶支へ難く、江戸を去つて歸國の途に就き、途、品川を過ぐ、折柄、盂蘭盆にて民家より抛棄せし瓜茄子の多く海邊に漂へるを見て思ふ所あり、乃ち乞丐を雇ふて之を採取せしめ鹽漬と爲し再び江戸に赴き鬻きて巨利を博したり、之を手始めとし漸次請負事業を營み着々成功を奏し遂に巨萬の富を有するに至れり。爾來幕命を奉じて諸國の荒地開拓、河川浚鑿の工事に從ふ事年あり、嘗て大阪淀川決潰せるに際し幕命を享けて新たに一道の川を開鑿す、長一千丈廣三十餘丈其泥土を積み松を植へて航行の標識とす、五年を費して工事完く成る、大阪の安治川是れなり、後ち幕府瑞賢を選んで、士籍に列し俸祿百五十俵及新地を賜ふ、元祿十三年六月歿す、享年八十三。

●阿彌陀ケ池（大阪）

西區北堀江下通り四丁目の和光寺に在り。和光寺は天台宗にして蓮池山と號し、本尊は長一尺五寸の金銅阿彌陀佛にして、伊豆走湯山の淨蓮上人自ら鑄造する所なりと傳ふ。境内に楕圓形の小池あり、是れ所謂阿彌陀ケ池にして中央に寶塔を建て橋を架す。塔を稱光閣と號く、塔中に阿彌陀三尊の像を安置す。傳へ曰ふ、推古天皇の御宇、信濃國の人本田善光偶ま堀江の岸を過ぎ、江中より閼浮檀金の佛像を拾ひ上げ、鄕里信濃に持ち歸りて之を芋井の里に安置せり。今の善光寺即ち是れなりと。尙此池は欽明天皇の朝に物部守屋佛像を投棄せし跡なりと云ふ。元祿十一年智善上人其舊地を卜して寺堂を草創し和光寺と稱せり。

●本願寺北御堂（大阪）

東區本町五丁目に在り。津村別院又は北御堂と稱す。即ち是れ西本願寺別院なり。東面せる表門を入れば、正面に本堂あり。安阿彌作の阿彌陀佛及び聖德太子、親鸞上人の二像を安置す。本堂の北に對面所あり、裝飾美を盡し、長廊を架して本堂と相通ず、其の構造の宏壯なる大阪第一と稱せらる。境内に鐘樓、三祖堂、鼓樓、轉輪藏等あり。

因に、津村は古へ「つぶら」と呼び又圖江と云へり、萬葉集に左の歌あり

雪ふればあしのうら葉も浪越へて
難波もわかぬはなのつぶら江　　顯昭

葦邊行くたつの羽風にうちなびき
螢なみよるなけのつぶら江　　兼光

●本願寺南御堂（大阪）

東區北久太郎町四丁目に在り。一に難波御堂と稱す。即ち東本願寺の別院なり、嘗寺は東本願寺第十二代の門主敎如上人、將軍家より寺地を賜はりて創建せるものにて、慶長の末年に至り今の地に移せりと云ふ。其規模の宏壯なる敢て北御堂に讓らず。本堂には本尊阿彌陀を安置し、脇壇には親鸞上人の像を置けり。本堂、對面所、鼓樓等の結構は北御堂と相似たり。寺域は總て墻壁を以て圍繞し背後に石壘を開きて門と爲せり、俗に之れを穴門と稱す。

●高麗橋（大阪）

大阪市に於ける鐵橋の嚆矢にして、東横堀に架したり。橋の長さ三十九間二分幅四間三分、明治三年九月の築造に成れり。橋の西畔を高麗橋筋一丁目と云ひ、東畔を兩替町と云ふ。

西畔南側の屋上に城樓を設く、之れを櫓屋敷と稱す。本橋は實に大阪市交通道程起算の中心點なり。

●道頓堀（大阪）

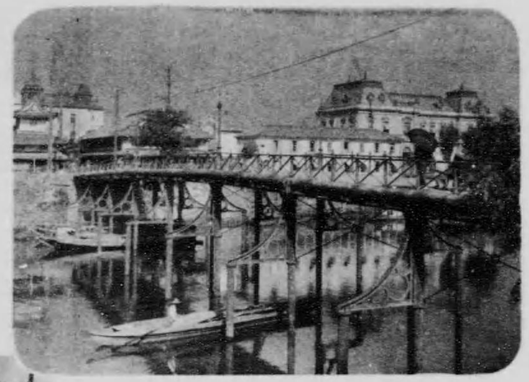
大阪市中、最も殷賑雜沓の地にして、道頓堀川の南岸十餘町に亘れる總稱なり。然れども概して西は戎橋、東は日本橋までの間を道頓堀と稱し居れり。劇場、割烹店を始めとし、諸商店及び諸種の興行場、遊戯店、飲食店等軒を並べ日夜喧噪繁盛を極め、實に大阪市享樂の中心地たり。

此地は三百年前、慶長十七年安井道頓なる人、東横堀より木津川まで、上下二十八町の間を豊臣家より申し受け、元梅津川の小溝を私費を以て開鑿し、元和に至つて竣工を告ぐ。是れ其の地名の依て起る所以なり。因に云ふ、安井道頓、名は成安、通稱は、市左衛門、道頓は其號なり。豊臣氏に仕へて大阪に籠城し、大阪落城の際戰死を遂げたりと云ふ。

貞享年間竹本義太夫此地に人形淨瑠璃を興行して繁昌し、元祿に至つて、竹本豊竹の兩座に分れ依然として隆盛なりき。

阿彌陀ケ池

道頓堀



高麗橋

安治河口

本願寺北御堂

同南御堂

航行の標識とす、五年を費して工事完く成る、大阪の安治川是れなり、後ち幕府瑞賢を選んで、士籍に列し俸祿百五十俵及新地を賜ふ、元祿十三年六月歿す、享年八十三。

●阿彌陀ケ池（大阪）

西區北堀江下通り四丁目の和光寺に在

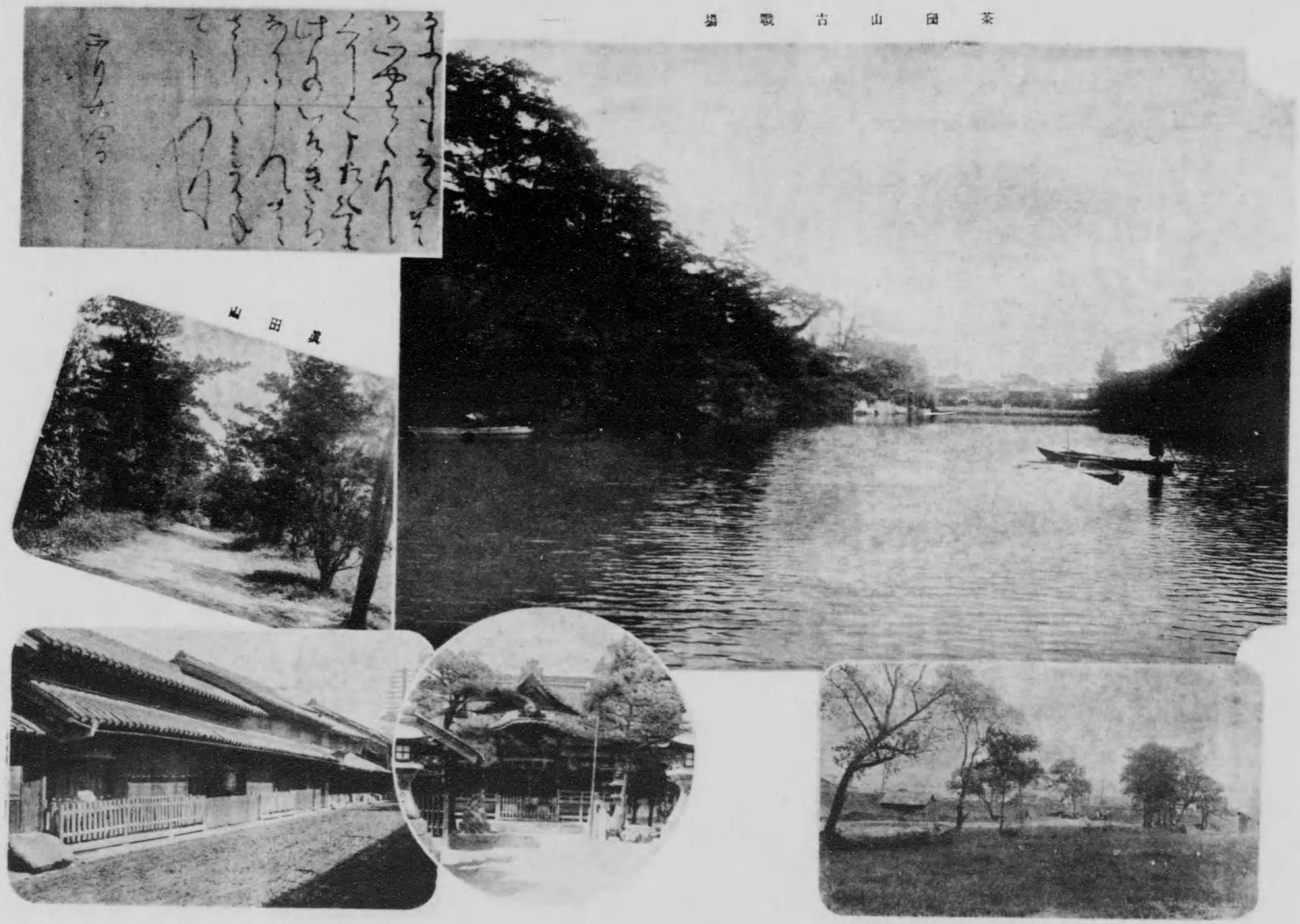
●本願寺南御堂（大阪）

東區北久太郎町四丁目に在り。一に難波御堂と稱す。即ち東本願寺の別院なり、當寺は東本願寺第十二代の門主教如上人、將軍家より寺地を賜はりて創建せる

蓋なみよるなけのつぶら江

至つて城工を偉ぐ。是れ其の地名の依て起る所以なり。因に云ふ、安井道頓、名は成安、通稱は、市左衛門、道頓は其號なり。豊臣氏に仕へて大阪に籠城し、大阪落城の際戰死を遂げたりと云ふ。

貞享年間竹本義太夫此地に人形淨瑠璃を興行して繁昌し、元祿に至つて、竹本豊竹の兩座に分れ依然として隆盛なりき。



●茶臼山（大阪）

大阪陣に於ける古戰場として著名なる茶臼山は天王寺の西南に位す。綠樹鬱蒼たる一小丘にして其形の茶臼に似たるを

大阪市郊外の勝地として富豪の別墅等多く起れり。

●眞田山（大阪）

是れ大阪の豪將眞田幸村が城壘の地と

上杉景勝、此日に當り、大和川堤を爭ひたり。

當時大和川鳴野の堤には西軍より柵三重を設き、銃隊長井上頼次及び大野治長の部下二千餘人更番之を守れり。十一月廿

●茶臼山（大阪）

大阪陣に於ける古戰場として著名なる茶臼山は天王寺の西南に位す。綠樹鬱蒼たる一小丘にして其形の茶臼に似たるを以て名く。此地古代の古墳にして荒陵と稱す。天王寺の舊記に據れば仁德天皇、初め御生前に於て茲に山陵を築き給ひしに、故ありて果さず空しく荒廢に委したるより荒陵と稱するに至れりとぞ。元和年間大阪の役に際し關東の大將德川家康茲に陣し、眞田幸村茲を衝いて激戰を演じたるより、茶臼山の名は著名なる史蹟として記憶さるゝに至れり。山麓に舊壕の址あり。明治維新後、陸軍省の用地となりたるが、後、岩崎家に拂下られ、轉じて又住友氏の所有に歸したりと云ふ。

山の東南隅に一寺あり禪刹にして邦福寺と云ふ、舊稱念佛寺と云へり、俗に雲水庵と稱す。蓋し中興雲水比丘中興せしを以ての名なり。寺内に湯屋井と稱するあり、古へ溫泉湧き出し址なりとぞ、此他遊息亭なる茶亭ありて客の需めに應じ普茶料理を出す。

●天下茶屋（大阪）

東成郡勝間村字天下茶屋村にして、住吉街道を稱して天下茶屋と云ふ、道の西側に茶亭あり、即ち是れ所謂天下茶屋なるものなり。傳へ曰ふ、古へ豐臣秀吉、堺の政所へ往來の途次、常に此の茶亭に休憩したるより其名起れりと云ふ。茶亭二軒ありて孰れも本家と稱し居れり。路傍に一祠の天滿宮あり、往昔勝間村の生產神にして菅原道眞の像を祀る、社額は寶鍵寺の宮理豐德嚴尼公の筆に係る。社頭の神籬を紹鷗杜といふ、是れ茶紹鷗（利休の師）幽棲の遺跡なりといふ。

住吉：木津川、難波潟等に接近し、夙に攝津名所の一に數へられ、近時殊に大阪市郊外の勝地として富豪の別墅等多く起れり。

●眞田山（大阪）

是れ大阪の豪將眞田幸村が城壘の地として知らる。大阪城新玉造町に在り、一名宰相山と云ふ。蓋し加賀宰相の陣屋茲に有りたるより名く、此山に嬪山稻荷の神社あり、俗に眞田稻荷と云ふ。稻荷本社には仁德天皇を祀り、側の小祠に倉稻魂命を祀れり。此地一堆の丘岡にして東は山城の叡山を望み、東南方に志貴、生駒、二上、金剛の諸峰を見る展望頗る壯快なり。

慶長十九年十一月、眞田幸村、大阪城南方の防禦固からざるを以て、一砦を穴堀の東南岡に築く、方百間、柵を四周し、壕を環らし、壕中又二重の柵を樹つ、塀柵一間毎に箭眼六個を開き、銃三挺を排置し、又櫓間に柵櫓を設け七尺の武者走りを構へて銃を列す。砦の南に密篠叢生の小高地あり、亦銃卒を出して之を守らしむ、十一月十一日以來、東軍漸次城南に薄り、柵を設け營を布く、城を距る凡そ十四五町許、十三日家康命して輕々しく接戰することなからしめ、塹壕を堀り、土壘を築き巨砲を以て射擊せしむ、幸村之を見て兵を篠山に增し之を防ぐ、東軍幾度が之を攻むれども容易に拔くこと能はざりき。

因に云ふ。眞田山の邊を清堀村と稱す。蓋し空堀に因みたるならん歟。

●鳴野古戰場（大阪市外）

大阪城の東方に在り。今、北新開莊村と稱す。大阪冬の陣の古戰場として知らる。東北に大和川の址あり、此川寶永年間の治水後、僅に一條の溝に過ぎざる細流となれり。

慶長十九年、大阪冬の陣の役に、東軍上杉景勝、此口に當り、大和川堤を爭ひたり。

當時大和川鳴野の堤には西軍より柵三重を設き、銃隊長井上頼次及び大野治長の部下二千餘人更番之を守れり。十一月廿六日、東軍之に迫る、鳴野口の戍兵支ふる能はず頼次戰死す。上杉の隊將安田能元、追擊して首百餘級を取る。直江兼續令して大和川を限りて追擊を止む。景勝旗を鳴野の堤上に建てしめ、大和川の西堤を截斷して柵を樹つ、暫くにして城兵出でゝ戰ふ、家康鳴野の戰況を聞くや上杉隊の疲勞を察し使を以て景勝に命じ速に兵を收め、其地を堀尾忠晴に讓らしむ、景勝尙ほ兵を收めず、堀尾の兵も亦迂回し大和川の嘴より射擊す、城兵終に柵を復する能はずして大に敗る、然かも其兵衆多なるを以て、退いて大和川の外堤に據り柵を修築せり。

●森の宮（大阪市外）

一名鵲の森と云ふ。玉造驛の北方五町森村に在り、即ち大阪城玉造門の前面なり。此地を難波の杜と稱す。古祠あり、森の宮といふ。用明天皇を祀る。境内に本殿、幣殿、拜殿あり。推古天皇六年、新羅產の鵲二喉を此地に飼養したるより鵲の森と呼ぶに至れり。往時本願寺御堂は茲に在りたりと、當時鷺森と稱したるが、天正八年鷺森の名稱は紀州和歌山に移しぬ。一說には此地四天王寺の舊蹟とも云へり。又攝社末社あり。往時茲處に龜井水と云へるありて、其井戸の水を汲みて湯となし、諸病平癒の爲めに浴室を設備し博く諸人に浴せしめたりと云ふ。今尙その遺址森の宮の東方に存せり。淸少納言の『枕の草子』に所謂玉造の湯と云へるは、之れを云ふものならんか。

眞田幸村筆書翰は小山田太郎氏所藏に係る。

住吉神社反橋

高燈籠

阿部野古戦場

●住吉神社（攝津）

東成郡住吉村大字住吉に在り。攝津國の一の宮にて官幣大社なり。祭神は四座にて第一神殿には底筒男命、第二神殿には中筒男命、第三神殿には表筒男命、第四神殿には神功皇后を祀れり。日本紀に載する所に據れば伊弉諾尊、筑紫日向小戸橘木原に拔除して底筒男、中筒男、表筒男の三神を生み給へり、是れ住吉大神なりと云ふ。而して此三神は海の事を掌りぬ。神功皇后三韓征伐の際、三神は皇后の軍艦を擁護して無事韓國を平定する事を得たり、依て皇后、三神の荒御魂を以て韓國の守神と爲し、凱旋後の和御魂を本國住吉に鎭祭せしめ給ふ。是れ實に皇后攝政十一年辛卯四月二十三日なりき、是の故に後世に至りても四月卯の日を以て當社の例祭を執行する事となれり。後神功皇后を合祀して四座となしたり。如上の事歴によりても當社は軍神なるを以て神殿の建築、他社と趣きを異にし、魚鱗鶴翼の意味を表して八陣の法に則れり、所謂これ住吉式なりとす。

境内の廣さ東西九町南北四町、四個の華表四面に立ち、攝社末社三十餘社あり、昔は神税二千六百石を領したり。宮司は代々津守氏にして、社家、板屋、狛、大宅、神奴、大領、高木の七氏宮司、に屬して七家と稱す。

反橋と高燈籠

住吉神社々前の反橋と、松原の高燈籠とは、古來著名なものにて、他の神社に其比を見ざる特殊の構造に屬するものなれば、一たび住吉神社に詣づるものは何人も此の二個を記念として永く印象より忘れ去る能はざるものなり。

●霰の松原（攝津）

今、安立町と云ふ、住吉村の南に接し大和川に至る一條の街道なり。古は和歌の名所として知られたるが、後世、安立と言へる僧、同地を拓きて市街となしたり。當時同地に七本の松を殘存したるも、亦畑となりて今字を七本松と呼べり。往時住吉の松原に茶店ありて柄の長き柄杓に茶碗を載せ行人に茶を侑めたりき。此茶店の女代々夫を有たぬ習ひにて小町茶屋と呼びしが、今は安立町の北端に其形式を殘せり。又安立町一丁目に笠松と稱する松ありしも今は枯死して新たなる松栽へられたり。蓋し霰の松原の俤を偲び得るものならんか。

あられ打あられ松原住の江のおとひをとめと見れどあかぬも（萬葉集）

木がらしの吹しほる色と見るばかり名にあらはるゝあられ松原（三條西實隆）

●阿部野古戰場（攝津）

天王寺村南住吉神社に至る一帶の沙丘なり、阿の字又安に作る。長三十六町幅十八町。此地今東成郡住吉村、天王寺村、今宮村及び西成郡勝間村に分屬す。然れども大字阿部野は天王寺村に在り。天王寺及今宮より住吉に通ずる二條の大路あり、此邊總て阿部野なりとす。兼好法師嘗て此地に棲みし事あり。延元元年北畠顯家、北軍と玆處に戰ひて壯烈なる戰死を遂げたる事は太平記に載せたり。

顯家の父北畠親房、顯家の戰死を傷みて

先たちし心もよしやなか〳〵に
浮世のことを思ひ忘れて

の詠あり、又顯家の妻、夫の戰死後三年を經て阿部野を過ぎ、玆處ぞ其人の消えさせ給ふ所と聞きて

亡人の形見の野邊の草枕
夢に昔の袖のしらつゆ

と詠じたりき

此邊古墳多く、小町塚、經塚、播磨塚、萱草塚、松虫塚等あり。又聖天山と云ふ觀喜天堂あり。

●阿倍野神社（攝津）

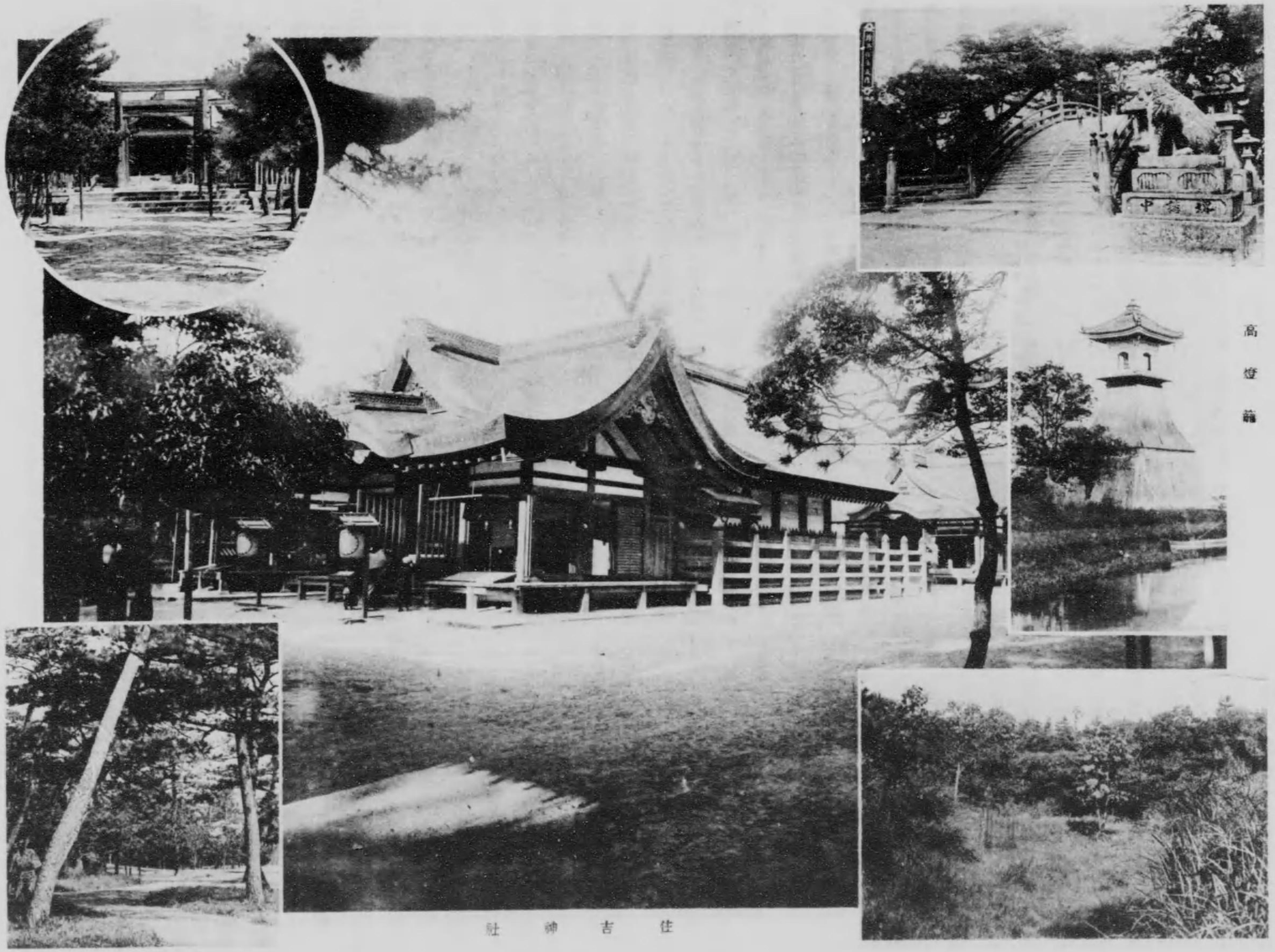
住吉街道の東、字岸野に在り。即ち天下茶屋の南端なり。別格官幣社にして贈從一位右大臣北畠顯家を祀る。

顯家は具平親王の後裔にて准三宮親房の長子なり。元弘元年十四歳にて參議左近衛中將に任じ、同三年彈正大弼を兼ぬ。此年北條高時誅に伏し、鎌倉全く滅びて天下は天皇の統一し給ふ事となり、顯家戰功を以て陸奥守に任せられ義良親王を奉じて奥羽を鎭撫する事となれり。建武元年從二位に叙す、二年足利尊氏反するに及び、顯家鎭守府將軍に任せられ西上して尊氏を討伐す、延元元年尊氏西國に遁走するに至り、又義良親王を奉じて陸奥に下り權中納言に任ず、尊氏再び西上大擧して京師を陷れ、天皇吉野に潛幸あり、此時顯家、美良親王を奉じて西上し、同三年二月賊兵と奈良及び天王寺に戰ひ京師を敵の手より奪回するを得たり。後吉野の行宮に赴かんとし、五月二十二日優勢なる賊軍と阿倍野に戰ひ、利あらずして戰死す、享年二十一。

後、顯家戰歿の所に遺骸を葬り、墓を築き、土人之を大名塚と呼べり。唯だ見る田畝の中、孤松の下、僅に一片の碑を存するのみにて何人も顯家の墓たるを知る能はざりしが、明治維新後、朝廷顯家の忠勳を追賞し同十五年二月二十四日其靈を崇奉して阿倍野神社と號し、別格官幣社に列せられ、同十九年墓側の丘陵に社殿を新營し、同二十年三月三十一日玆に鎭座して父北畠親房を合祀し毎年一月二十四日を以て祭日と定めらる。

廣瀬　旭莊

興亡千古泣英雄　虎闘龍爭夢已空
欲問南朝忠義墓　蕎花秋仆野田風



阿部野神社

住吉神社反橋

高燈籠

阿部野古戰場

住吉神社

霰の松原

（此の二句を記念として永く印象より忘れ去る能はざるものなり。

●霰の松原（摂津）

今、安立町と云ふ、住吉村の南に接し

させ給ふ所と聞きて

亡人の形見の野邊の草枕　夢に昔の袖のしらつゆ

と詠じたりき

此邊古墳多く、小町塚、經塚、播磨塚、

に鎮座して父北畠親房を合祀し毎年一月二十四日を以て祭日と定めらる。

廣瀬　旭莊

興亡千古泣英雄　虎鬪龍爭夢已空

欲問南朝忠義墓　蕎花秋仆野田風

●高津宮址（大阪）

仁德天皇即位の折造營あらせられたる宮殿跡即ち『高津宮址』は東高津餌差町の裏手に在り、大阪朝日新聞に於て此宮址に建碑すべきことを主唱せる結果、有志

樹を植へ門前の池水亦蓮華多し、社内に眺望臺在り遠く市の萬甍と茅渟の海を隔てゝ淡路の青螺を望み眺矚頗る廣濶なり

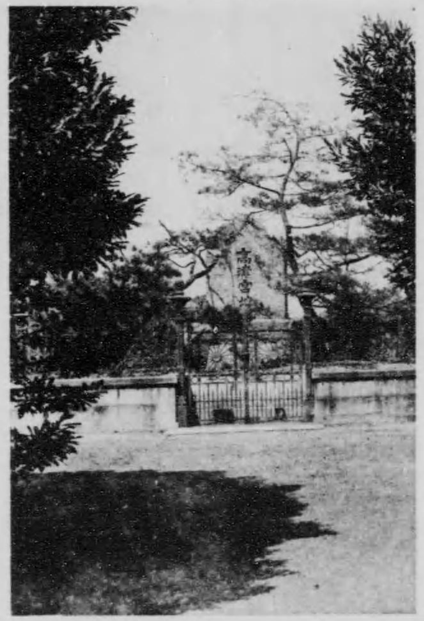
●四天王寺（大阪）

一千三百有餘年を歴たる四天王寺は、

敬中偉觀天王寺　飛勢截雲相輪圓
上宮太子活菩薩　連創伽藍度人天
象教從此方隆盛　八宗分派說因緣
法鼓僧鐘聲不斷　喧闐千有二百年
諫草謹復彈佛骨　伴宮蕭寂鎖寒煙
白首儒生飯不足　守經兀兀蓁床穿

高津神社

一心寺



高津宮址

天王寺

生國魂神社

●高津宮址（大阪）

仁德天皇即位の折造營あらせられたる宮殿跡即ち『高津宮址』は東高津餌差町の裏手に在り、大阪朝日新聞に於て此宮址に建碑すべきことを主唱せる結果、有志相謀り明治三十二年十一月三日を以て『高津宮址』とせる一碑を建てたり、題字は故小松元帥宮殿下の揮毫なり。

●高津神社（大阪）

高津神社は高津町一番地に在り、府社にして、仁德、仲哀、應神の三帝及神功皇后、葦姫皇后、並に履仲天皇の六座を鎮す、本殿は南向し華表の中に梅の橋あり、其南方を梅ヶ辻と言ふ、共に難波津の梅に基由せるものなるべし、社頭に『高臺の頌碑』在り、社殿莊嚴、境内に望煙亭あり、舞臺あり、前者は仁德天皇高臺の紀念建造物にして、明治三十二年九月同天皇一千五百年の大祭に際して建造せるものなり、後者は本社の西方に在りて頗る眺望に富み、全市の光景を双眸に收め得るは勿論、遠くは武庫、六甲の諸山を雲霞縹の間渺に望むを得。

●生國魂神社（大阪）

西高津に鎮座する生國魂神社は官幣大社にして大阪市中第一の大社たり、創建は天武天皇紀元前戊午の歳九月難波の高津の丘即ち城址内に勸請せしものと傳ふ、社は一帶の高地に在りて其廣さ七千二百餘坪を有し、壯麗なる大華表は生玉町の道衢に高く聳ゆ、正面に拜殿本殿在り、本殿の構造は檜皮葺八ッ棟にして、素樸古雅、賽者をして自ら襟を正さしむ、他に北御門、乾門、南御門在り、祭神は生國魂、足國魂の二座を祀り、六月二十八日御秡の祭を行ひ、七月九日の夏祭に次ぎ、九月九日の例祭を擧行す、近時神苑に櫻樹を植へ門前の池水亦運華多し、社内に眺望臺在り遠く市の萬甍と茅渟の海を隔て、淡路の青螺を望み眺矚頗る廣濶なり

●四天王寺（大阪）

一千三百有餘年を歷たる四天王寺は、用明天皇二年聖德太子初めて『難波寺』を東成郡玉造の岸に草創し、推古天皇元年に至り同地を距ること三十餘町荒陵の東即ち今の天王寺に移し『荒陵山難波寺』と號せり。

堂塔は創建の後數度の改修を經、近世に及び享和元年雷火に罹り金堂大塔以下四十餘宇悉く燒失し文化九年に及んで工成り舊觀に復せるも、其後天正元和の兵燹に罹りて堂塔大半を失へり、寛文四年德川家綱命じて殿堂伽藍を再築せしむ。

境内の廣さ東西八町南北六町餘、其東を本門と爲し入口に石の華表在り、夫れより一町にして東門に至り門の裡に樓門在り、之を入れば正面に五層塔在りて乾然雲表に聳ゆ、北に金堂在り桁行十間、梁間八間、本尊は如意輪觀音にして脇壇に彌勒佛、四天王、波羅門等の像を安置し又佛舍利數粒を藏む。

北に講堂在り、往昔太子の經文を講せし所なりとて講法堂とも言へり、堂の北に古梵鐘在り『無常院の鐘』と號す、又講堂と六時堂との間に一池在り、池の上に舞臺を架す長さ六間幅四間餘、昔、聖靈會の時伶人此處にて舞樂を演せり、又池の北に在る六時堂は傳敎大師の草創にして比叡山根本中堂を模せしものなり、東西の太子堂には太子十六歳の尊像を安んじ、其他皇后の宮、三昧堂、龜井水、轉輪堂等皆な境内に在り。

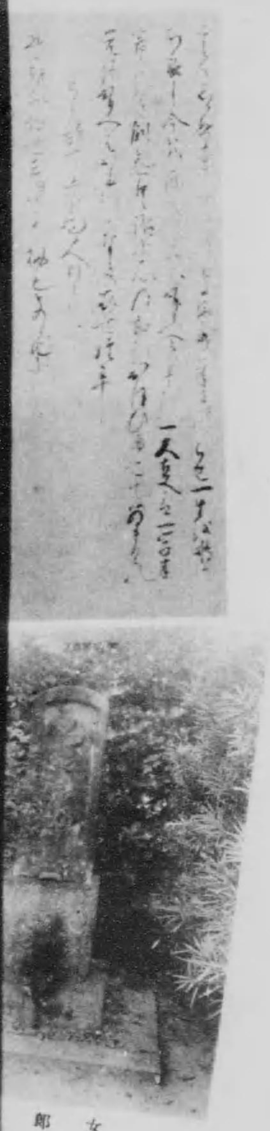
我聞阿育王發願　造塔滿八萬八千
舍利爪髮有餘層　渡河踰海到東偏
結構隨地金碧滿　晃耀城市照山川
就中偉觀天王寺　飛勢截雲相輪圓
上宮太子活菩薩　連創伽藍度人天
象教從此方隆盛　八宗分派說因緣
法鼓僧鐘聲不斷　喧闐千有二百年
諫草誰復彈佛骨　伴宮蕭寂鎖寒煙
白首儒生飯不足　守經兀兀藜床穿
嗚呼君不見　一彈指頭寶界現
鬼子鬼母飛青蓮

歷朝崇敬の名刹たる四天王寺は既に記する如く屢々燒亡せりと雖も、太子の遺されたる靈物『七星劍』及手印本願緣起一卷、扇面法華經、（紙本著色粘葉百二枚）即ち今の國寶は失はざりき、石華表の銅額は太子筆『釋迦如來轉法輪處當極樂土東門中心』の如き慈鎭和尙をして『津の國の難波の浦の大寺の額の銘こそまことなりけれ』と詠せしめたり、當寺の寶什に至りては其の數頗る多きに達すべし、今ま市の公園に編入せられ賽者常に群を爲す。

●一心寺（大阪）

一心寺は茶臼山の西北、四天王寺華表前より西方三町、逢坂下の町に在り、淨土宗にして元四天王寺の別院たりき、文治元年慈鎭和尙の開基創建、淨土宗祖二十五箇所舊跡の一なり。慶長年間參州の僧存岸之を再興して一心寺と號せり、大阪冬の役に德川家康此所に陣し、戰後台命によりて堂宇を修築せり、表門は『大阪城玉造門』を移したるものなりと言ふ、阪松山高岳院一心寺の稱も亦家康の改めて與へし所たり、本堂には毘首羯摩天作阿彌陀佛を安置し、境内に納骨堂、菩薩堂、三千佛堂、彌勒堂、御影堂等在り、東端の古墳は元和元年天王寺の戰歿者本多忠朝及其臣九名を葬れるものなり、

古建物として存するものに『遠州八窓の茶室』なるものあり。家康駒繋の松亦當年に於ける紀念の一たり。



●昆陽寺（攝津）

天平五年行基僧正が『いなの笹原』を開拓して創建せりと傳ふる昆陽寺は、伊丹町を距る十町餘豐能郡稻野村大字寺本に在り、眞言宗古義派に屬す。

寺域廣く、其本堂始め大日堂、觀音堂、主水堂、護摩堂等孰れも排置よく境内に散在す、本尊は藥師佛にして行基僧正作なりと相傳ふ、本堂の西北なる林中に古色蒼然たる塔あり、之を『開山塔』と言ひ、寺の北方凡そ五町餘に周圍三十三町に亘る大池あり、之れ行基開鑿の『昆陽の池』と稱さるゝものなり。

往昔は當寺の伽藍莊嚴を極め、堂塔の如きも現時の倍なりしを、天正の兵火に炎上し、今の堂宇は後代の再建に係る、古歌の昆陽を詠めるものを記す

夕されば木の間の月しくらければ
たどりぞわたる昆陽の松原

いかばかりいふせかるらん昆陽の池
のみくさのもとにすだく蛙は

昆陽の鐘に就ての記事は今昔物語にも見ゆ、其古鐘に勒せる鐘銘は在の如し

建立壹院敷地肆町院家總領空閑荒野壹處

肆至　東限伊丹坂　南限笠池堤
西限武庫川　北限後通墓大小池十
二所在四至内

在攝津國河邊北條武庫東條云々
天平勝寶元年二月菩薩遺弟上人初銘
鑄云々

●墨染寺（攝津）

伊丹町字寺町に在る墨染寺は曹洞宗にして、其本尊釋迦佛は定朝の作、又伏見墨染より遷したる藥師も亦同人作に係る『墨染藥師』として名あり。

●俳人鬼貫墓と女藺墓（攝津）

寺内に荒木村重の塔、俳人鬼貫墓及び村重落城の時織田勢の爲め殺戮せられた城中女子等の『女藺塚』在り、俗に女郎塚と呼ばるゝも之れ女藺を讀み誤れるものならん、其『荒木村重城址』は伊丹町の東方に在り、永祿年間村重池田伊丹の諸軍を率ゐて足利義昭を保護し此處を居城とせしが、天正七年遂に信長の陷る所となれり、地は池田停車場の前面に在る小丘にして殘墨今僅かに其面影を留む。

俳人鬼貫は通稱を上島三郎兵衛と言ひ、攝州伊丹の人なり、初め俳諧を松永重頼に學び研鑽其堂に入る嘗て郡山侯に仕へたるが『笠とりて跡カなや春の雨』の句を殘して職を辭し、爾來針療醫を以て生計と爲し一女と共に辛ふじて世を過し居りしに、人其窮を憐み其女を權貴の妾と爲ざんことを勸めたるも鬼貫頑として之に從はざりき、元文三年閏八月歿す享年七十八左に其吟の著名なるものを記す

骸骨の上粧ふて花見哉
備れて鬼になりたる祭哉
行水の捨所なし虫の聲
二百十日一日雲に心あり
見れば見る物に感じて秋の暮
棹の歌松の聲の鍬つゝみ

●近松門左衛門墓（攝津）

稀世の戲曲家近松巢林子の墓は『久々知妙見堂』に依りて名ある廣濟寺に在り、所在神崎の西方河邊郡小田村大字久知にして、妙見堂に矢文の石なるものを存し近松墳墓の寺たるが爲め訪ふ者多し。

近松門左衛門は本性杉森、名は信盛、幼名を斧四郎と言へり、後、自ら近松門左衛門と稱す、又平安堂、巢林子、不移山人等の別號あり、長門國萩の人にして少壯の頃肥前に赴き唐津の近松寺に入りて僧となる、後年近松と稱せしは蓋し茲に起因す。

後、幾干もなく還俗して京都に上り一條家に仕へて從六位に叙せらる、門左衛門夙に和漢の學を修め、神儒佛の諸典を究めざるなく、兼て最も有職故實に精通す、致仕の後歌舞伎狂言、淨瑠璃作曲に從事し、當時斯藝界の名人として知られたる井上播摩掾、宇治の加賀掾の爲に創作し、元祿三年大阪に下り竹本筑後掾の爲に『出世景清』を著し好評を博せり。

作曲中『國姓爺合戰』『雪女五枚羽子板』『曽我會稽山』を近松の三傑作と稱す、而かも近松の長所は專ら世話淨瑠璃にありて其作曲中『女殺油地獄』『心中天網島』『冥途の飛脚』『曽根崎心中』『心中重井筒』等なりとす、享保九年十一月二十一日病んで大阪に歿す享年七十二、法名を阿耨院穆炎旦具足居士と言ふ。

●近松終焉の辭

揭ぐる所の筆蹟は即ち近松終焉の辭にして、今松山米太郎氏之を藏す全文如左

代々甲冑の家に生れながら武林を離れ三槐九卿につかへ、咫尺し奉りて寸爵なく、市井に漂ふて商賈を知らず、隱に似て隱にあらず、賢に似て賢にあらず、ものしりに似て何も知らず、世のまがひもの、唐の大和のをしへある道々、技能雜藝滑稽の類まで知らぬものなげに、口にまかせ、筆を走らせ、一生を嘲りちらし、今はの際にいふべく思ふべき眞の一大事は一字半言もなき倒惑心に心の耻をおもひて七十餘りの光陰、おもへばおぼつかなき我世經畢。

もし辭世はと問ふ人あらば。

それ辭世去ほどに扨もその後に
のこるさくらの花しにほはば

享保九年仲冬上旬

入寂名阿耨院穆炎旦具足居士俟終焉

期豫自記春秋七十二歳

のこれとは思ふもおろかうづみ火の
けぬまあたなるくち木かきして

して、其本尊釋迦佛は定朝の作、又伏見墨染より遷したる藥師も亦同人作に係る『墨染藥師』として名あり。

●俳人鬼貫墓と女藺墓

（攝津）

寺内に荒木村重の塔、俳人鬼貫墓及び左衛門と稱す、又平安堂、巢林子、不移山人等の別號あり、長門國萩の人にして少壯の頃肥前に赴き唐津の近松寺に入りて僧となる、後年近松と稱せしは蓋し茲に起因す。

後、幾干もなく還俗して京都に上り一

のこるさくらの花しにほはば

享保九年仲冬上旬

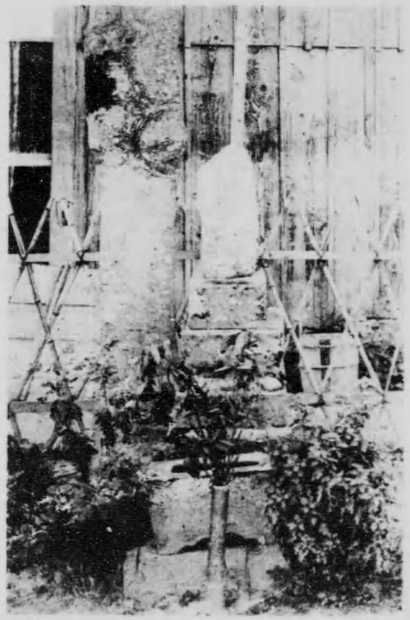
入寂名阿藺院稈矣旦具足居士俟終焉

期豫自記春秋七十二歳

のこれとは思ふもおろかうづみ火の

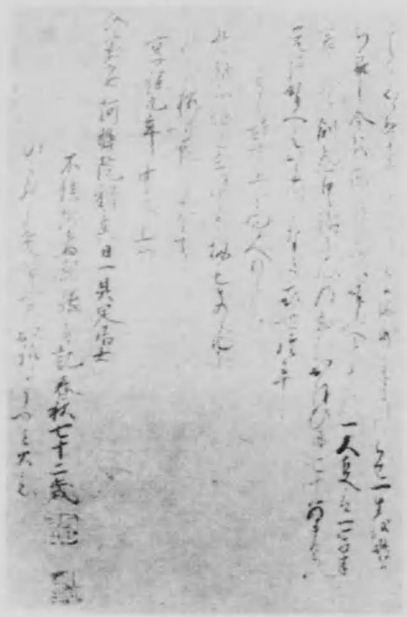
けぬまあたなるくち木かきして

近松門左衛門墓



昆陽寺開山塔

近松門左衛門筆蹟



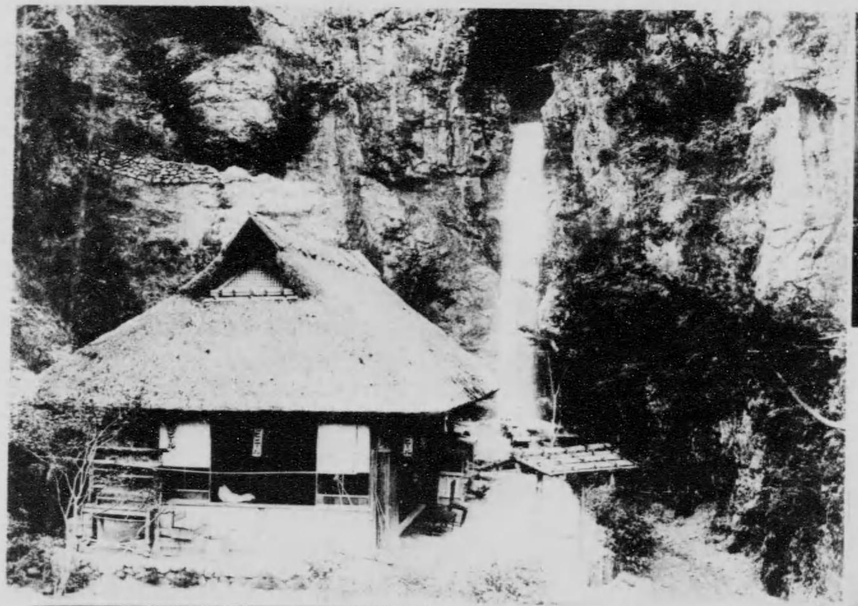
俳人鬼貫墓

（中）昆陽寺　（下）昆陽の池

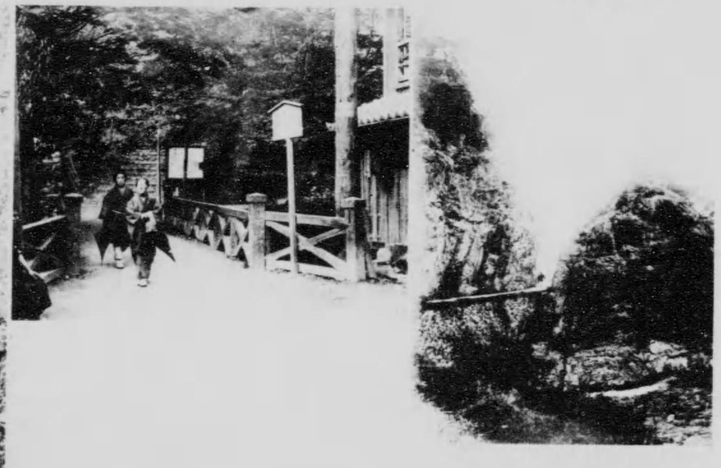
女藺石

㊂ 有馬温泉（攝津）

有馬温泉は武庫山の西北に當り海拔凡そ一千五百丈、神戸市を距る五里廿七町、山陽幹線に依れば住吉驛より六甲山を踰

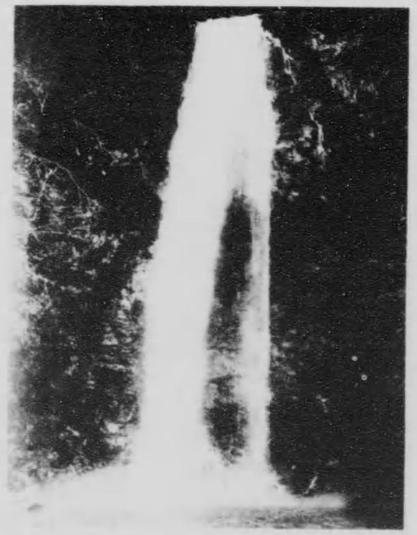


寶塚温泉



箕面公園

寶塚風景



箕面の瀧

有馬温泉全景

拙堂此所を記して『大聲轟轟山谷に震ふを聞く、徑、轉じて瀑布の絶壁に掛るを望見す、長さ二百尺許、噴沫空に飛び跳擲して而して下り、潭底に至りて復た逆上し、輙ち轟然として雷動す、一佛堂

泉旅館割烹店等武庫川の南岸に沿ふて建設せられ浴客常に多し。

此地風光に富み、後山讓葉嶽の附近は讓葉樹多く、山間奇巖珍石散在して浴客の探勝に興を添ふ、寶塚温泉の近時大に

●有馬温泉（攝津）

有馬温泉は武庫山の西北に當り海拔凡そ一千五百丈、神戸市を距る五里廿七町、山陽幹線に依れば住吉驛より六甲山を踰へて凡そ三里、阪鶴線に依れば三田驛より三里、車馬の便あり、其温泉は遠く神代より湧出し、有馬温泉の名と共に之が效果は人皆之を知る。

温泉宿としての奥の坊、二階坊、兵衛坊、池の坊、御所の坊、中の坊、尼崎坊、角坊、北の坊等の名は舊温泉寺の宿坊たりしを其儘に稱せるなり。

僧　義　堂

馬山氷雪勒春色　幾樹櫻花悶艶紅
倦鳥未還南國晚　孤雲自去北山中
栖霞觀古鶴尋宿　度月橋高馬過空
會有故人煩問信　温泉且澡黑頭蟲

●箕面公園（攝津）

攝北の一勝地たる箕面公園は大阪より凡そ六里を隔つと雖も梅田より箕面電車に乘すれば一時間餘にして其地に達す。

平尾村の一村落を離れて箕面川に架したる一鐵橋を渡れば、地は既に公園に屬せり、橋畔、一株の老楓樹在り紅葉の節は絢爛人目を奪ふ、一の華表を過れば坂路稍や險峻なり、登り盡せば一平地在り眺望廣濶、新道は溪に沿ひ崖に凭り行路屈折備さに山水の美を極む。

瀧安寺の本坊に通ずる朱欄橋の下を過ぎ前後鬼橋を渡り行くこと數町、忽ち一溪の前面に展開するを見る、巨巖矗として路に當る、傳へ言ふ往年來朝の唐使險を恐れて奥を極めずして歸り去りたる所なりと、土人は唐人の『もどり巖』と呼ぶ、楓樹の多きは此附近を以て第一とす、溪に沿ふて猶進むこと數町、其窮まる所、糧鞜として一瀑の落下するあり、飛瀧雪を蹴り噴沫球を轉ばし勝景筆紙に絶す。

抽堂此所を記して『大聲轟轟落山谷に震ふを聞く、徑、轉じて瀑布の絶壁に掛るを望見す、長さ二百尺許、噴沫空に飛び跳擲して而して下り、潭底に至りて復た逆上し、輙ち轟然として雷動す、一佛堂在りて瀑に面す、登り觀る焉、凜然魄悸久しく留まること能はずして去る、聞く近畿の瀑布那智を以て第一と爲し、此瀑之れに亞ぐと、想ふに當さに然るべし、堂の右より磴を躡んで而して上る、頂凹蓄碧方三丈、上流灌注し底深測られず蓋し瀑の源なり』と瀑上には白龍石、坐禪石、錫杖石等あり、瀑に臨んで『三鈷の松』あり瀑を去ること六町餘に奥の瀧ありて山中の寺は即ち瀧安寺にして、白雉年間役小角の草創に係る、境内本堂には辨財天を安んじ如意輪觀音を本地堂に置き、行者堂に在る小角像は其自作と傳ふ、觀音は智證大師の作、辨天は小角作にして近江の竹生島、相摸の江之島、安藝の嚴島辨天と共に日本の四辨天と稱さる。

當寺に近き北豊島村玉坂の上に在る瀬川と言ふ所は延元元年二月官軍足利黨を追擊し、新田義貞が細川和氏を破りし舊蹟なりと。

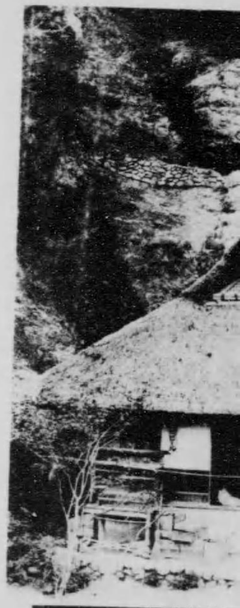
●寶塚温泉（攝津）

清少納言の枕草紙に見ゆる『峯はゆづる葉の峯』とあるは寶塚温泉の背後なる讓葉嶽を言へるなり、寶塚は『箕面有馬電車』の終端にして西の宮驛より北二里餘此地の鑛泉は久しき以前より湧出せるものなれど、其の温湯として浴用に供するに至りしは僅かに數年前なり、泉質含炭酸鹽泉にして多量の格魯兒那篤個謨を含有し之を温浴に用ゆれば皮膚薄弱なるもの即ち感冒或は脱汗の癖あるものに宜しく、且つ僂麻質斯、神經痛腺病、肋膜腔、關節腔、腹膜腔、慢性子宮病、慢性皮膚病等に效能ありとせられ、有馬以外の温泉地として名あるに至れり、今や温泉旅館割烹店等武庫川の南岸に沿ふて建設せられ浴客常に多し。

此地風光に富み、後山讓葉嶽の附近は讓葉樹多く、山間奇巖珍石散在して浴客の探勝に興を添ふ、寶塚温泉の近時大に著はれたるもの、一に風光の優れたるものあるに依る。

而して此地に接近の舊蹟『中山寺』は寶塚温泉の殷賑を扶くること少なからず、武庫郡内第一の靈場たる同寺は長尾村大字中山に在りて紫雲山と號す、香煙常に蒼虚に靄き鐘聲遙かに白雲に響く、而かも櫻花の名所にして山嶺の遠望に至りては亦郡中の甲たり。

當山は仲哀天皇の先妃大中媛を埋葬せる地なり、其所生應阪忍熊二王神功皇后に敵し軍敗るゝに及び應阪王は六甲山に葬り忍熊王は山城の宇治川に投じて薨す、後、王の屍流れて難波の浦に漂ひたること天聽に達し之を母塋の側らに葬れりと、其後聖德太子此に臨みて地相を見、其紫雲靉靆として山頭を罩み秀靈の氣四邊に充滿せるより、此所に梵刹を營み百濟僧惠聰、惠便を延き之に居らしむ、是れ實に用明天皇の御宇二年にして即ち今の奥の院は其舊址なり、斯くて養老二年大和長谷寺の德道僧正『觀音三十三所の靈場を定むるに及んで當寺を其二十四番に算し、華山後白河の二院亦之を巡禮し讓葉嶽を言へるなり、寶塚は『箕面有馬電車』の終端にして西の宮驛より北二里餘此地の鑛泉は久しき以前より湧出せるものなれど、其の温湯として浴用に供するに至りしは僅かに數年前なり、泉質含炭酸鹽泉にして多量の格魯兒那篤個謨を含有し之を温浴に用ゆれば皮膚薄弱なるもの即ち感冒或は脱汗の癖あるものに宜しく、且つ僂麻質斯、神經痛腺病、肋膜腔、關節腔、腹膜腔、慢性子宮病、慢性皮膚病等に效能ありとせられ、有馬以外の温泉地として名あるに至れり、今や温



楠公骨

湊川

●楠木正成墓（神戸）

湊川神社境域に在り、石面に題して「鳴呼忠臣楠氏之墓」と記す、是れ水戸光圀の筆なり。背面には明徴士朱之瑜の撰文に係る楠公の贊辭を勒す。碑石は青石にして竪三尺九寸、横一尺六寸、厚一尺、中段竪二尺五寸、横五尺、下段竪五尺、横一丈共に白石なり、基石は龜趺前に面す。

墓は素と街道の上方坂本村の前畠の中に在りて、墓として僅に梅松二樹を栽えありたるのみ、是れ攝州尼ヶ崎の城主青山氏の植る所なり。嘗て筑前の儒臣貝原篤信、玆を過ぎて絶代の忠臣楠氏の墳の埋沒せるを悲み、獨力建碑の企を爲したりしも果さず其後水戸黄門光圀修史の志あり、其儒をして弘く海内を探訪せしめたる際、楠氏の墳墓荒廢せるを慨して元祿四年如上の碑を玆に建設するに至りたり。

楠公墓記　　貝原　篤信

余偶泊舟於攝州兵庫、下船陸行、到湊川北、而見楠公墓、墓在平田之中、榛莽蕪穢、無挺隆、無墳封、又無碑碣、塋上唯有松二株、悲風蕭々、春艸青々

賴　山　陽

攝山逶迤海水碧　吾來下馬兵庫驛　想見訣兒呼弟來戰此　刀折矢盡臣事畢　北向再拜天日陰　七生人間滅此賊　碧血痕化五百載　茫々春蕪長大麥　君不見君臣相閲骨肉相呑　九葉十三世何所存　何如忠臣孝子萃一門　萬世之下一片石　留無數英雄之淚痕

菅　茶　山

千載恩讎兩不存　風雲長爲吊忠魂　客窓一夜聽松籟　月暗楠公墓畔村

●湊川神社（神戸）

湊川の東北二十町許、卽ち神戸市多聞通二丁目に在り。楠木正成朝臣を祀る。別格官幣社なり。本社は明治四年特に詔旨を享けて創建せるものにして、本殿、拜殿以下十七棟あり。神社の境域は方二町餘に亘り、繞らすに練塀を以てす、本社の附近諸商店軒を並べ、叢詣人雜沓し、神戸市内第一の繁盛地なり。

●廣　嚴　寺（神戸）

湊川神社を距る三町餘に在り。醫王山と稱す、臨濟宗にして南禪寺派に屬す。俗に楠寺と呼べり。本尊は藥師如來にして行基菩薩の作に係る、本寺は後醍醐天皇の御宇に來朝せし元の僧俊明極の開基せる所にして、本尊は後醍醐天皇の御寄附なりと云ふ。又本寺の毘沙門天は弘法大師の作にて楠公の守本尊なりと傳ふ。境内に一株の古梅あり、此梅素と楠氏の碑の傍に在りしを玆處に移植すと云ふ。樹下に一碑を建て藤堂龍山の撰文を刻す「楠公墳上一株梅、元祿年間此地栽、忠精猶見當時節、歲々南枝向日開」云々

寺說に據れば建武三年五月二十五日楠公及び其一族七十三人細寺に於て自盡せしを當寺の禪師其遺骸を路傍に葬りたりと、其後楠氏の菩提所となりたり尙寺什として楠公の書簡、水戸光圀卿の楠氏の碑造立當時の謝狀其他楠氏一族の遺物を藏す。

古寫本太平記の記する所に據れば「右馬頭直義の五十萬騎、正成の七百騎にかけ散らされて須磨の上野に引退く、入替て吉良、石堂、畠山、上杉の人々六千餘騎にて湊川の東へ打出て跡を切らんとぞ取卷きける、楠兄弟の兵取て返し三時計りの間に十六度まで揉合ひける、されば楠の兵皆打れて僅に七十騎にぞ成りにける、正成は打破つて落つべかりしか共、都を出しより世間の事今は是迄と思ひ定めたりければ、一足も引ず戰て已に疲れければ、湊川の北に在家の一村ある中へ走入つて腹を切んとて、楠が一族十三人手の者二十餘人六間の客殿に二行に並居て一度に腹をぞ切りたりける。」云々

●湊川古址（神戸）

武庫郡の西部に在り。建武の昔楠氏奮鬪の古戰場として著しく知らる。水源は二ありて一は神戸市の北方、山田村なる鍋蓋山の陰より發し、一は小部山鵯越の邊より出で、湊村に至り平野、夢野の間に相會して、會下山の東を左折して海に入る、流長二里餘、平時は水涸れて唯だ沙磧を見るのみ。

湊川は往時兵庫の西方を流れたりしが、壽永の亂の以前に於て其流れを改めたりと云ふ。今は其位置神戸の中央に在ると、其河床の太た高くして堤防を以て擁せられ、其堤上花樹を植えて公園と爲したるを以て、市民の絶好散策地たり。

湊川

爲　相

湊川うは波はやく且こえて
　沙まで濁る五月雨のころ

範　兼

みなと川浮寐の床に聞ゆなり
　生田の奥の小男鹿の聲

公　衡

湊川うき寐の床も今宵こそ
　秋をつけ野の鹿も鳴くなれ

賴　山　陽

酒家粉壁映晴波　言道乾沙度湊川
風景依然人欲老　楠公墓下十經過

篠崎　小竹

六龍稅駕果何州　砥柱誰人擇忽流
其奈東魚呑碧海　幸看南木護金甌
一時妙算飜韜略　三世精忠貫斗牛
熱血灑沙遲不散　染成紅蓼滿川秋

後藤　松陰

忠肝豐霤傳巖夢　一木期支大厦顚
縱敎身與湊川涸　心共金剛山勢堅

千載恩讎雨不存　風雲長爲吊忠魂
客窓一夜聽松籟　月暗楠公墓畔村

●湊川神社（神戸）

湊川の東北二十町許、卽ち神戸市多聞りの間に十六度まで採合ひける、されば楠の兵皆打れて僅に七十騎にぞ成りにける、正成は打破つて落つべかりしか共、都を出しより世間の事今は是迄と思ひ定めたりければ、一足も引ず戰て已に疲れ

一時妙算飜韜略　三世精忠貫斗牛
熱血灑沙遲不散　桑成紅蓼滿川秋

後藤　松陰

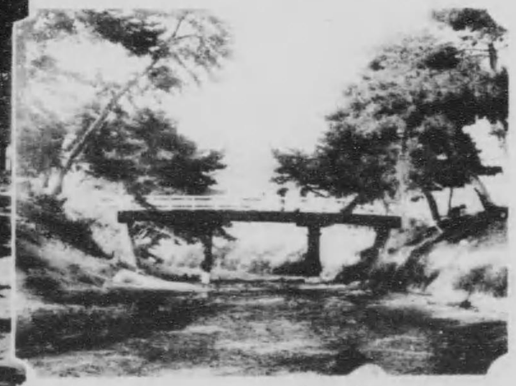
忠肝豈管傳巖夢　一木期支大厦顚
縱敎身與湊川溺　心共金剛山勢堅

湊川神社

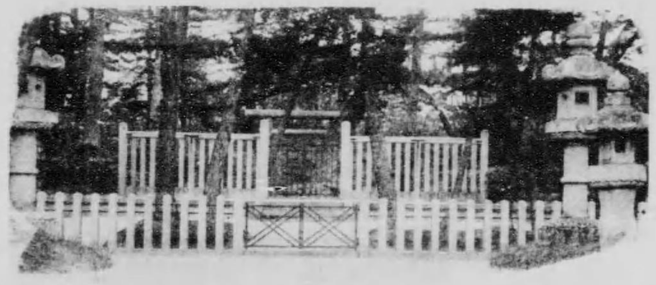
廣嚴寺

楠公肖像

楠木正成墓



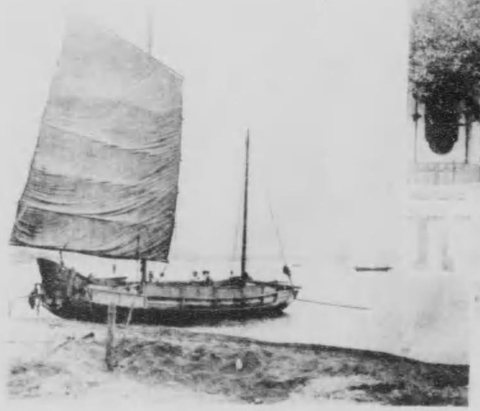
湊川古址



阿保親王御墓

和田岬

（下）布引の瀧（中・右）諏訪山（中・左）生田神社



打出の濱

梶原形見の梅

●諏訪山（神戸）

神戸第一の公園たる諏訪山は、西北摩耶山に續ける高處なるを以て、其眼界は此處に益々展けて足下に神戸の全景を統べ、動ける港頭の波に大小汽船の相交錯するを超へて、左方に紀伊の山々、右

●布引の瀧（神戸）

布引山の綠深き處、群葉を震ひて落下する七十餘の大瀑、之を布引雌瀑と稱す、瀑前の長廊を過ぎて又登ること三町、雄瀑を見るべし、鬱茂せる松樹の間より顯れば紀淡の峰巒島嶼は壯大なる一幅となし

新田義貞追懸て西の宮へ着給へば直義尙支へて湊河に陣をぞ取られける、同七日の朝なぎに遙かの澳を見渡せば大船五百餘艘順風に帆を揚げて東を指して馳せたり、何方に屬く勢にかと見る處に二百餘艘は楫を直して兵庫の島へ漕ぎ入る、是は大伴大内介が將軍方へ上りけると、伊

●諏訪山（神戸）

神戸第一の公園たる諏訪山は、西北摩耶山に續ける高處なるを以て、其眼界は此處に益々展けて足下に神戸の全甍を統べ、動ける港頭の波に大小煙船の相交錯するを超へて、左方に紀伊の山々、右には淡路島の翠影に連りて須磨舞子の地宛然弓を滿月に張れるが如し、山の西部、深く茂れる樹木の間に諏訪明神の小祠在り『金星臺』亦屹立す、昔て金星の經過を觀測せる佛人の記念として設けられたるものなり、園中又鑛泉の湧出するより旅館旗亭ありて來遊するもの少なからず。

元來神戸市は遊園地に乏しく僅かに湊川の岸及び此諏訪山を以て公園と稱すれとも、湊川の如きは風光の賞すべきものなければ諏訪山公園に浩然の氣を養はざるべからず、而して此公園を活すべき唯一の背景は摩耶山にして、該山は六甲山脈中の峻嶺たり、森然たる老樹、山を蔽ひ豁然たる山嶺四方を瞰下するに適す、遙く大阪灣十餘里の海上より之を指點し得るなり、之に登るには上野村を經べし、登ること十八町にして山頂に達す、此間石階七段百九十八級、阪路頗る嶮峻、松杉、道を挾んで聊か疲勞を感ずと雖も、其山頂に達して天上寺畔の人たるに至れば言ふべからざる壯快を覺ふ、天上寺は眞言宗の古刹にして大化元年法道上人の開基創建に係り、本堂に十一面觀音を安置し、境内に摩耶夫人堂、開山堂等あり夏季に至れば、内外の避暑客多し、寺に於て是等避暑客の爲め其客殿を開放して宿泊せしむ、山の半腹に正慶二年赤松圓心の築ける城在り、圓心此城に據りて六波羅勢五萬餘騎の大軍を七面の險阪に防ぎて大に之を破り、敵兵の屍は山麓より武庫川に至るまで累々として絶へざりしと言ふ。

●布引の瀧（神戸）

布引山の緑深き處、群葉を震ひて落下する七十餘の大瀑、之を布引雌瀑と稱す、瀑前の長廊を過ぎて又登ること三町、雄瀑を見るべし、鬱茂せる松樹の間より顧れば紀淡の峰巒島嶼は壯大なる一幅となりて眼界に入る、山上に貯水池在り、之れ神戸市一部の飲料水となる、源を摩耶山の北澗に發する此瀑は生田川に流れて海に入るなり。

●生田神社（神戸）

官幣小社生田神社は北長狹通北、即ち三の宮停車場より北四町餘の所に鎮座す、稚日女尊を祀り神功皇后攝政元年の創建に係り攝社四座あり、社後の森林を『生田の森』と稱し壽永年間源平の古戰場にして彼の梶原景季が箙に梅枝を挿みて血戰せし所なり、壯嚴なる社殿の前より老松列を爲して海岸に走り中に高き華表を隱見す、梶原井、敦盛萩等あり。

稲葉ふく風もことにぞ身に寒き
生田の里の秋の夕ぐれ　俊成

波白む沖のはやてやつよからん
生田の磯に寄するとも舟　爲家

●打出の濱（攝津）

打出の濱は西の宮町を中心として左右に翼を展げたるが如き一灣の白砂なり、武庫郡の東端河邊郡の界より蘆屋河口に至るまで、長さ凡そ三十餘町に亘る、往昔鹿阪忍熊の二王子が兵船を艤して此より打出でたるを以て『打出の濱』と傳へらる、今ま阪神間に於ける勝地の一たり。

西の宮打出の濱間も古戰場の跡にして今ま太平記の一節を摘記すれば『建武三年正月官軍勝利を得て、足利勢西へ行く、新田義貞追懸て西の宮へ着給へば直義尙支へて湊河に陣をぞ取られける、同七日の朝なぎに遙かの澳を見渡せば大船五百餘艘順風に帆を揚げて東を指して馳せたり、何方に屬く勢にかと見る處に二百餘艘は楫を直して兵庫の島へ漕ぎ入る、是は大伴大内介が將軍方へ上りけると、伊豫の土居得能が御所方へ參りけると漕ぎ連れて着きたるなり、荒手のしるしなれば大内厚東大内が勢三千餘騎一番に旗を進めたり、土居得能後へつとかけ抽けて直義の控へたる打出の宿へかけ開ひける間、左馬頭叶はじや思はれけん又兵庫を指して引き給ふ』云々とあり。

頼山陽

郊壘行末了　淡島奠將營　墨見酒家瓦
紅知商船燈　英雄迭經紀　形勢尙飛騰
自笑書生拙　征塵屢笈笠

●阿保親王の墳（攝津）

打出の濱の上方三町餘の所に松樹五六株を以て圍める小丘あり『阿保親王の墳』此に存す、親王は平城天皇第三皇子にして天長の始め兵部卿に任じ上野下野の大守たり、上の麓、打出村なる古刹阿保山親王寺は往古親王の住ませられたる殿舍址なりと。

●和田岬（攝津）

和田岬は兵庫港の西南に斗出せる砂濱を稱するものにして、岬頭に圓形の砲臺及不動赤色燈臺在り、春夏の候になれば砂濱には茶亭を設けて、遠く紀泉の山影を浮べたる海灣の風光を稱せんとして來る者を俟つ、燈臺の西二丁餘にして和樂園あり、數萬坪の海濱を圍みて遊園の地と爲し割烹店茶店勸工場其内にありて便利なる納凉地を作れり、此邊も亦古戰場の跡にして新田義貞此に奮戰せる事を追懷すれば往事茫々たり、本間孫四郎遠矢の跡は今猶ほ存す。

の濱

須磨内裏古

敦盛塚

●須磨の浦（攝津）

須磨は古來歴史上著名の地として、將た風光明媚の地として其名喧傳す。

須磨の地三區に分れ、東須磨西須磨濱須磨と言ふ、此三須磨に亘れる海濱一帶は『須磨の浦』を以て稱さる、眞に青松白沙の別天地なり、其滴るが如き老松の下に立ち、洗へるが如き白沙を踏んで前面を眺むれば、紀泉の翠巒は蜿蜒として虹の如く現はれ、呼ばゝ應へんとする淡路島亦目睫の間に見ゆ、海峽の西、播磨灘の南面に當り淼々たる海上に雲の如く搖げるものは南海に屬する對岸の巒影にして、白帆は蒼き波間に隱現出沒す、若夫れ月明の夜に此處に立たば、沖遠き水平線に映する月を眺むるを得ん、更に後を仰ぎ觀れば峨々たる鐵拐の雄姿は澄める海面に臨まんとする狀あり、山紫水明の此地も昔ては幾萬の兵を戰はしめたる古戰場たりしかを憶へば興味更に深きを覺ふ。

亂松相映白沙明　隔水青山對晩晴
鷗背無風細波動　遠帆如坐近帆行　　藤井　竹外

行盡攝山望播山　貪程夕過亂松間
一聲漁笛不知處　月白須磨灣復灣　　長　三　州

十年不到中原路　此夜孤舟感慨多
人世未須容易死　又看明月過須磨　　僧　五　岳

都思殊向暮天多　肱枕搖々臥海波
月入蓬窓人不覺　孤舟載夢過須磨　　俊　　賴

須磨の浦や渚に立る磯馴松
しつ枝は浪のうたぬ日ぞなき　　桃　　青

月はあれどるすのやう也須磨の夏

●内裏の舊蹟（攝津）

一之谷より左して山を上れば老松疎々たる所に小丘あり、是れ須磨内裏の在りし所と傳ふ、曾て鎧甲貂蟬紛として雲の如くなりし所、翠華一にび去つて澹雲微雨七百有餘年、今は唯だ松籟の昔時に似たるあるのみ。

●須磨の關址（攝津）

淡路島通ふ千鳥の啼く聲に
幾夜寢ざめの須磨の關守

其須磨の關所址は西須磨の西『源光寺』の邊なりと傳へらるゝも何等認むべきものなし源光寺の傍らを流るゝ細流を千鳥川と呼ぶは寢ざめの關守の句意より出づと、源光寺の門前には『見渡せば眺むれば見れば須磨の秋』と勒せる芭蕉の句碑を立つ。

又在原行平閑居址は東須磨西須磨間の字菖蒲小路と言ふ所なるべしと、行平此に閑居せる時松風村雨の二女に給仕せしむと相傳ふ、今は月見の松衣懸の松と號する老株存するのみ。

旅人はたもと涼しくなりにける
關吹きこゆる須磨の浦風

淡路島遙に見つる浮雲の
須磨の關屋にしぐれ來にけり

月いづるうしろの山は雲はれて
須磨のいほりに歸る浦風

此後山は須磨寺の後背なる横嶺を呼べるものにして『おはしまし後の山は柴と言ふものふすぶるなり』と源氏物語須磨の卷に見ゆるより其名著る。

故關無址白鷗飛　小謫王孫去不歸
村雨松風空一夢　暮塞併上綠蓑衣　　遠山　雲如

●敦盛塚（須磨）

敦盛塚は一の谷の西、街道の傍に在り、五輪の石塔にして高さ一丈一尺餘臺石は方四尺餘、一層毎に梵字を彫刻せり、塚の傍に一軒の蕎麥屋在り、敦盛蕎麥と言ふ。

松際旗亭蕎麥香　山當人面古城墻
分明走狗將纔兎　誰把殘杯酌九郎　　賴　山　陽

風皺潮波嚙白砂　海畿途傍翠屏斜
春深空賸王孫草　日暮誰憐刺史花　　草場　佩川

玉笛譙圖兆敗軍　梅花零落夜紛々
平家公子知多少　今日路人唯吊君　　同

谷かげに平家の人やきくの花　　田　福

●須磨寺（須磨）

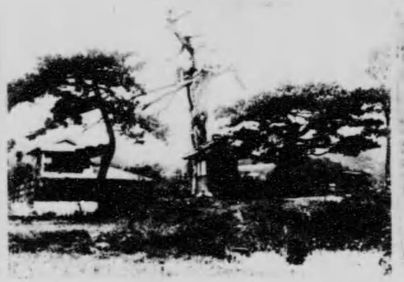
須磨寺は西須磨字上野に在り、光孝天皇仁和二年の創建、開鏡上人の開基に係る、本尊は栴檀にして丈三尺五寸の觀音なり、昔は坊舍十七を有せる巨刹たりしだけ、今ま荒廢を極むれども、傾ける甍宇、朽ちたる伽藍、自ら壯大なり、敦盛最愛の『青葉の笛』及其自筆の和歌、辨慶筆『櫻樹の制札』母衣絹の名號、敦盛赤旗の名號等を藏す、若木の櫻、義經腰掛松も境内にありて堂の左側に在原行平の侍女たりし『松風村雨の墓』及琴柱の松あり、行平謫居の址は東須磨西須磨間の菖蒲小路邊ならんと言ふ、唯だ月見松衣懸松の老樹のみ亭々として殘存す。

白浪の寄する渚に世を過す
あまの身なれば宿もさだめず　　行　平

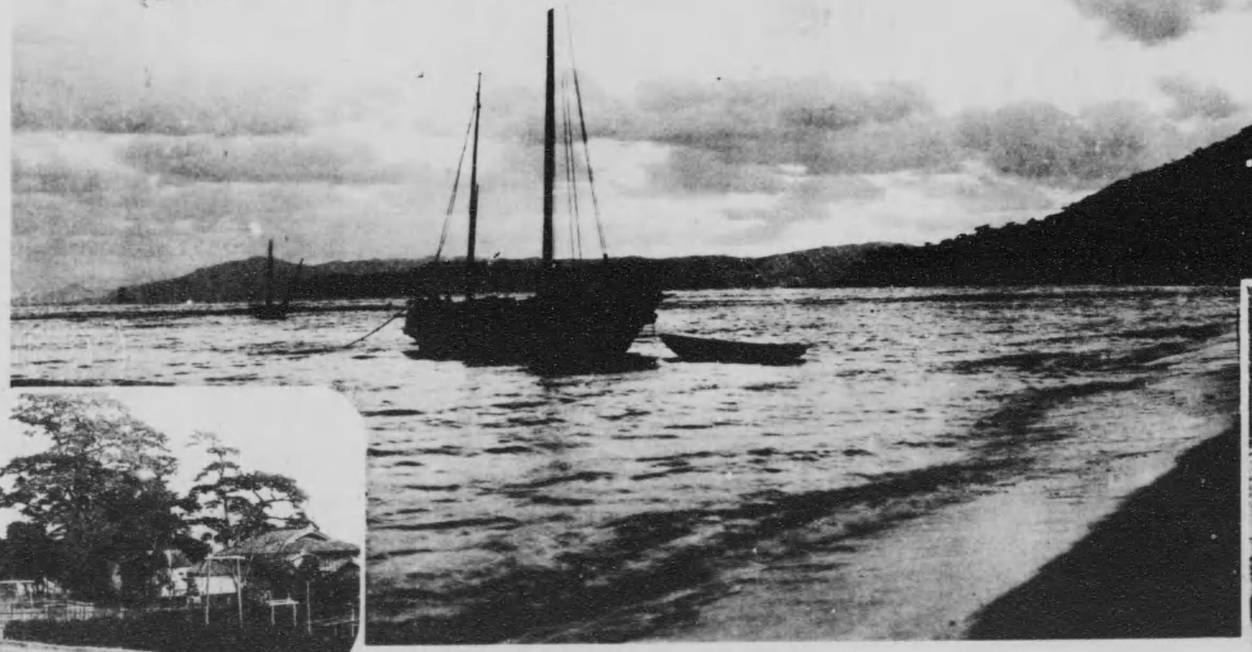
波かけぬ須磨の上野の露にだに
猶しほたるゝ旅ころもかな　　淨　阿

須磨寺

松風村雨堂



須磨内裏古跡



須磨の浦

須磨の關址

敦盛塚

須磨の浦や沿に立る磯馴松　遠山雲如
しつ枝は涙のうたぬ日ぞなき　桃青

月はあれどるすのやう也須磨の夏　行平

故關無址白鷗飛　小謫王孫去不歸
村雨松風空一夢　暮寒併上絲蓑衣　涼菟

力なう入かゝる日や須磨の秋

白浪の寄する沿に世を過す
あまの身なれば宿もさだめず　淨阿

波かけぬ須磨の上野の露にだに
猶しほたるゝ旅ころもかな

一の谷古戰場

鵯越鐵拐ヶ峯

松王人柱碑

清盛塔

琵琶塚

眞光寺

上ノ八〇

●古戰場としての鵯越及一谷（攝津）

須磨福原丹生莊間の山徑を稱して鵯越と言ふ、一之谷は千鳥川の西、堺川の東にして、後に鐵拐鉢伏の高嶺を控へ前は縹渺たる海に臨む、共幾條の三ケ道を一

掬垣伊弄笛終貽禽劉餬嘯歌亦遭
戮勝敗有機少人知繪畫徒傳娛童
兒一自貂蟬出介冑上下文恬又武
熙豈知養虎自遺患羽翼已成猶守
雌敢忘越人殺其父白旄一出誰敢
支宛如翡翠遇飢鷹不怪毛血紛離
披獨有武州能捐軀婦人群中見丈

て、平家の屋形假小屋を少時の煙と燒き拂ふ、黑煙既に押懸りければ平家の兵ども前なる海へぞ多く走り入り、助舟とも幾らもありけれども、舟一艘に四五百人千人許り乗りたらんに何かはよかるべき目前に大舟三艘沈みけり、後には良き武者を乗せども離人涙を制すべしとて、火

●古戰場としての鵯越及一谷（攝津）

須磨福原丹生莊間の山徑を稱して鵯越と言ふ、一之谷は千鳥川の西、堺川の東にして、後に鐵拐鉢伏の高嶺を控へ前は縹渺たる海に臨む、其淺溪の三ヶ處を一の谷二の谷三の谷と稱す。

壽永の昔、平家此に城廓を構へ、安德幼帝を奉じて警戒を嚴にせり、即ち東は生田の森を大手の木戸口と定め、福原兵庫板宿須磨間に兵を配置し、山陽道八ヶ國南海道六ヶ國の兵十萬餘騎を集め、赤旗を高櫓の上に翻飄たらしめ威風凜々たりき。

平家物語の記する所に依れば二月四日福原には故入道相國の忌日とて佛事式の如く行はる、此次は除目行はる、主上舊都をこそ出させ給ふと雖も、三種の神器を帶して萬乘の位に備り給へば、除目行れんも僻事に非ず、斯く平氏既に福原まで攻め上りたる由聞へしかば、正月九日都には範頼義經參院して平家の追討の爲めに發向すべき由を奏聞し、二月七日卯の刻に一の谷の東西木戸口にて矢合とぞ定めける、七日の晩に御曹子義經其勢三千餘騎鵯越に打上げて一の谷城廓遙に見下し馬ども落して見給へば、平家の城廓越中前司盛俊が館の前にこそ立たりけれ、御曹子只落せとて眞先かけて落させれば皆續きて落す、其處しも小石交りの眞砂なりければ、流れ落に二町許り颯と落し墳なる所に止まる、それより下を見渡せば大盤石釣瓶落しに十四五丈ぞ下りたる三浦の佐原十郎義連進み出で、是は三浦の方の馬場ぞとて眞先かけて落しければ大勢皆之に續き、大方の所業とは見へず唯だ鬼神の所爲とぞ見へし、落しも果てぬに関を咄とぞ作りける。

先づ村上判官代康國が手より火をかけて、平家の屋形假小屋を少時の煙と燒き拂ふ、黑煙既に押懸りければ平家の兵ども前なる海へぞ多く走り入り、助舟とも幾らもありけれども、舟一艘に四五百人千人許り乘りたらんに何かはよかるべき目前に大舟三艘沈みけり、後には良き武者を乘すとも雜人原を制すべしとて、大刀長刀にて打拂ひけり、去程に大手にも濱手にも玆を最期と攻め戰ふ、能登殿敕經如何思はれけん高砂へ落ち給ひ、生田の森の大將軍知盛の卿後を顧みあはや一の谷破れにけるとて汀の方へ逃げ延び、馬にて海の面二十町泳がせ大臣宗盛殿の御船へ參られける、薩摩守忠度は西の手の大將軍にておはせしが、控へ〳〵落ち給ふ所に岡部六彌太追かけ之を打取奉る、六彌太首を取れ共名を誰とも知らざりけるが、箙に結びたる文を見ければ旅宿花と言ふ題にて、行きくれて木の下影を宿とせば花や今宵のあるじならまし、忠度と書かれたり云々。

義經は當時鵯越突進を以て勝を制すべく期待し、東口生田の大手は範頼正面より追擊して先づ平軍の退路を塞ぎ、西の義經は軍を分ち二團と爲し、本隊は土肥實平熊谷直實等田井畑より鹽谷に出で正攻を試み、一團は義經自ら引率して鵯越より險阻を横絶し直ちに一の谷城の背を突き以て勝を制するに至れり。

頼山陽

播之首　攝之尾　吾視其地何雄偉
山勢北來迫海隈　松柏蹊根亂蘆葦
怒潮淘沙出白骨　啼小鬼哭大鬼　聞
說平氏曾此簇赤旆　崔嵬爲城澎湃爲
溝　左控王畿右甸服　舊業自期唾手
收　何料東人有機智　要害早已被敢
覩　九郎一身渾是膽　伏旗仆鼓出不
意　獨道難艱不用氈　懸崖絕壁如平
地　組練劃山訝懸瀑　蹄間三尋眞是
鹿　秦宮殿宇從一炬　晉人爭舟指可
掬　垣伊弄笛終貽禽　劉鼎嘯歌亦還
戮　勝敗有機少人知　繪畫徒傳娛童
兒　一自豹螭出介冑　上下文恬又武
熙　豈知養虎自遺患　羽翼已成猶守
雌　敢忘越人殺其父　白旄一出誰敢
支　宛如翡翠遇飢鷹　不怪毛血紛離
披　獨有武州能捐軀　婦人群中見丈
夫　吁呼諸君皆能學之子　不將寶劍
附天吳

●眞光寺（神戸）

眞光寺は兵庫東逆瀬川町に在り、時宗にして大化元年の創建に係る市内屈指の巨刹たり、阿彌陀、觀音、勢至の三尊を安置し、開山堂觀音堂等境内にあり、其山門の前なる蓮池の畔に据へられたる金銅釋迦像は眞光寺如來として著る。

●清盛の塔（神戸）

眞光寺の南方に十三層の石塔巍在り、高さ二十六尺、面に弘安九年二月云々の數字を刻す、是れ養和元年閏二月平相國清盛京都西八條に薨するや、僧圓實其遺骨を携へ來りて此に埋め、弘安九年北條貞時諸國巡察の際此十三層塔を建てたりと傳ふ、又之と街衢を隔てゝ『經盛の琵琶塚』なるもの在り、一の谷役に歿せる琵琶の妙手、即ち經盛の靈を吊すべく建てたる由傳ふ、今は名殘なく草莽に埋れり。

同じく兵庫島上町に來迎寺又築島寺と稱する淨土宗の寺在り、本堂には釋迦の畫像及平清盛鏡の影を安置す、又本堂の前に松王人柱の碑なるものあり、應保元年清盛此地を埋めて島を築かんとし、民部重能をして工を掌らしむ、堤を築くこと幾回にして而も終に其決潰を免るゝ事能はず、即ち人柱を沈めて海神を宥めんとし、關を生田の森に設けて旅人を捕ふ少年松王あり、衆に代り身を海底に沈めて工を竣へしめたりと傳ふ。

●岩屋の繪島（淡路）

津名郡岩屋港の東南海岸に在り、島は高さ十間、周圍四十間許、海岩に峙てる巖山にして、波浪に磨せられたる所、自然に赤黄黒の畫文を露せり。巖頭に二樹の古松を生じ、星霜幾百千年、海風に撓められて垂枝頗る奇狀を呈す。一説に云ふ、是れ神代の卷に記さる伊弉諾、伊弉冊の二尊、天之浮橋之上に立ち、天之瓊矛を以て下を指て之を探り滄溟を得、其矛鋒滴瀝の潮、凝つて一島となる、之を磯廬島と名くるもの、即ち此の繪島なりと、巖下に無數の巖片散布し、悉く金色を帶び、其形狀に依つて種々の名あり。古來繪島の風景を賞して古歌、物語等に繪島の磯、繪島の浦などゝ記されたるもの少なからず。

藤原　宗基

さよ千鳥ふけゐの浦に音信て
繪島が磯に月傾きぬ

藤原　俊成

明石かた繪島をかけて見渡せば
霞の上に沖津しら浪

細川　幽齋

幾重とも波路はるかにたゝみなす
山や誠の繪島なるらむ

此浦を繪島浦と稱す、西北は岩屋港にして、播州明石に相對す、海路約二十八町潮勢甚だ急なり、玆を岩屋の瀬戸と稱す所謂これ明石海峽なり。又繪島の附近に大和島あり、一名大繪島とも稱す。大和島は神靈の棲める處として古へより島上に登る人なしとぞ。萬葉集に「あまさかるひなのなかちを越へ來ればあかしの戸より大和島みゆ」とあるは、即ち此の島の事なり。

土御門院

明石潟大和島根も見えざりし
かき曇りにし旅の涙に

●伊弉諾神社（淡路）

津名郡の縣道を東に入れる多賀村字神宅に鎮座す。是れ我が大八洲を生ませ給ひたる祖神、伊弉諾尊が神功既に畢らせ給ひて玆に宮作りし、長く隱れさせたまへる宮なりとぞ傳へらる、古へは當神社を一宮、又は幽宮と稱し奉れり。日本紀神代の卷に「伊弉諾尊、神功畢、靈運當遷、是以構幽宮於淡路之洲、寂然長隱者」云々と記せるは即ち是れなりとす。華表を入れば神池ありて石橋を架す、正門を入れば拜殿あり、拜殿に面して幣殿あり次いで渡殿を經て本殿に至る、本殿は幣殿まで回らすに透垣を以てす、神域九千四百八十三坪あり、現神殿は明治に至りて改造する所なり、神殿の東に末社數社あり西方に神饌所、祭器所等を設く。明治十九年官幣社に列せられたり。大祭は四月二十二日行はる。

因に曰ふ、當神社は、多賀大明神ともいふ。

云ふ、又島神とも稱し、津名郡に鎮座するを以て津名神とも稱す。一説に岩屋浦なる繪島の石屋神社と同じく伊弉諾尊を祀れる宮にして、即ち幽宮の遺址なりと

●松帆浦（淡路）

三原郡松帆村の海濱一帶の稱なり。松帆村は昔時の飼飯野、瑞井等の數村を合併せるものにて、古へは此邊の海を飼飯の海と稱したり、萬葉集に載せられたる柿本人麿の

飼飯の海のにはよく有りし刈薦の
亂れ出づる見ゆ海人の釣船

の歌は即ち玆を詠みたるなり。此地三原川の河口なる津井港に連續せる海濱なるを以て往時は航海の船舶玆に繫泊することありたり。濱邊の長さは三十町許に亘り廣き部分は五六町あり、古松林立して連れり。往時淳和天皇當國に遷幸せさせ給ひし時の行宮址、今尚は朧ろ氣に存して「御所の松」と稱する古蹟に僅に當年を偲び得るのみ。砂松の間に多く松露を產す、見渡せば遠く讃岐の諸山、小豆島等を望み、海濱の風趣甚だ佳絶なり、中世以降この浦を松帆浦と稱するに至れり。三原川に臨みて一刹あり、松帆山威應寺と云ふ、眞言宗古義派にして、本尊は丈け八寸四分の坐像聖觀世音なり。慶長六年、加藤嘉明、宰臣石川光遠をして志知の城を玆に移し、寺を松原へ轉せしめたるが、幾くもなくして廢城となりたるを以て、再び玆に移し、樓櫓臺榭の上下に瓦字を築きて今に榮ふるに至れり。當山の鐘樓には、文明七年後土御門天皇の御宇に鑄造せる古鐘を懸く、其銘には淡洲松尾浦威應堂云々の文あり。松尾浦は蓋し今の松帆浦の古名なり。「常磐草」に此地の風景を叙して曰く。

「慶野の海濱、其の地廣平にして江を引き海に臨み、千松翠を積て、風を呼で濤を起す、江頭の臺上に大悲閣を架して雲月に攀躋すれば空を凌ぐが如し絶妙の佳境なり云々」

又威應寺より約十町を隔てたる大字瑞井に產宮神社あり、一名瑞井宮とも稱す、反正天皇及び天照皇太神を祭る、傳へて反正天皇の降誕まし〳〵たる宮の遺址とす境内古松鬱蒼たる裡に本殿、拜殿あり。又境外二町許にして清冽なる一井あり、稱して瑞井と云ふ、即ち此水を汲みて反正天皇の產湯に奉りしことは日本紀其他の書に載せられたり。毎年秋季には神社の傍なる虎杖花を執りて白湯を蔽ひて神に献るを例とす、是れ古代產湯を奉りたる式なりと傳ふ。例祭は三月十六日と九月十六日と春秋二回に行はる。尚松帆村大字七江の江善寺には文祿征韓の役に戰死せる武士の石碑を建つ。

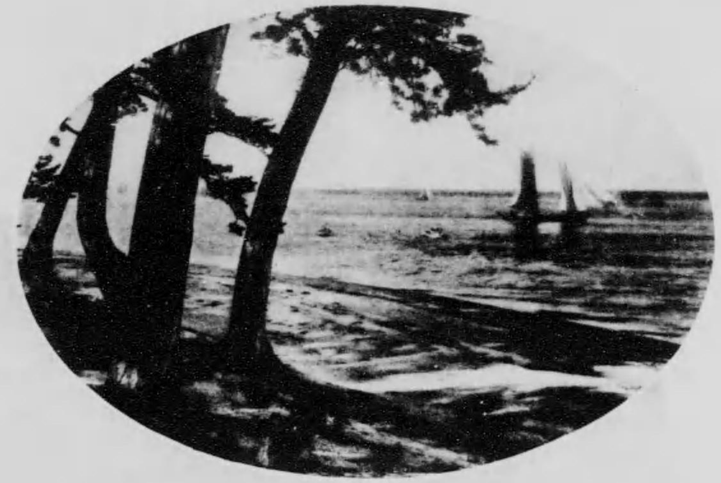
事なり。

土御門院

明石潟大和島根も見えざりし
かき曇りにし旅の涙に

川の河口なる津井港に連續せる海濱なるを以て往時は航海の船舶茲に繫泊することありたり。濱邊の長さは三十町許に亘り廣き部分は五六町あり、古松林立して式なりと傳ふ。例祭は三月十六日と九月十六日と春秋二回に行はる。尙松帆村大字七江の江善寺には文祿征韓の役に戰死せる武士の石碑を建つ。

松帆浦

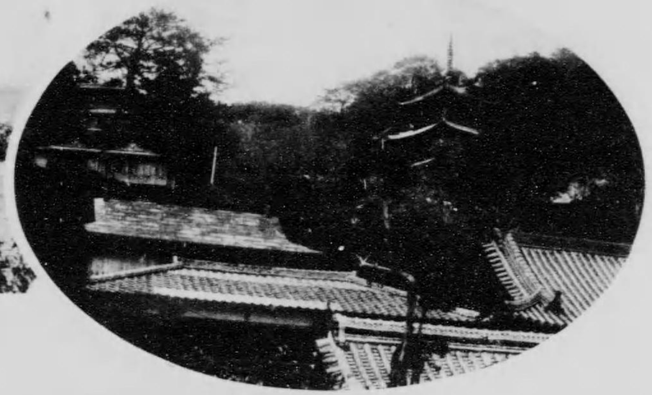


伊弉諾神社

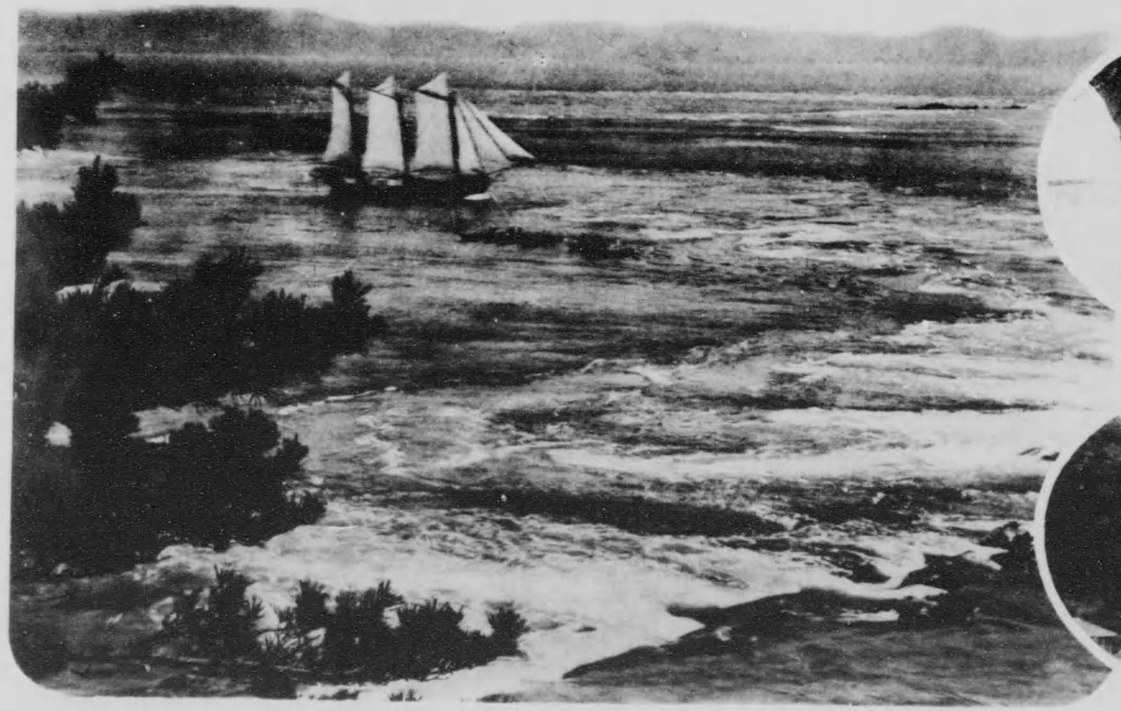
淡路稻島

鳴戸夫婦岩

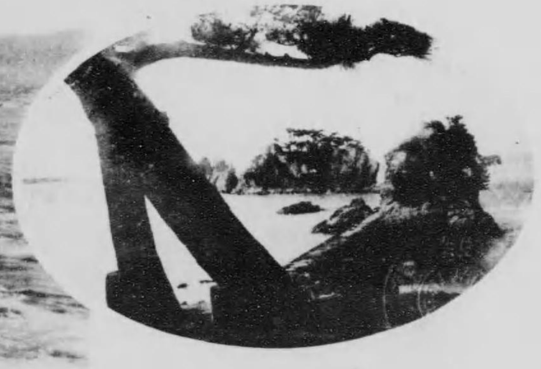
勝浦海邊



大瀧山公園



鳴戸海岸



小松島拝天峯

撫養妙見山

●大瀧山公園（阿波）

德島市新町の南方に山あり大瀧山と云ふ。前方海に瀕し三面は空濶、方拾餘里に亘るの間、勝景双眺に聚る巉巖爭出して怒るが如く笑ふが如く白練の瀑布之に懸りて飛沫五彩を欺く壯觀言ふべからず在りて鼎立の形を描き隆門二條に分れ、大鳴門は是隆門の東にして、西を小鳴門と稱す。小鳴門は一名撫養瀬戸と云ふ、兩鳴門の間を堀越と稱し往時茲を開鑿して船舶の往來に便せりと云ふ。

齋藤　竹堂

危礁横海怒潮飜　隔岸青山勢欲奔

經平氏を討たんとて軍船を攝津の浦に纜ひ颶風に屈せず、夜間に鋭意、浦を發し三日を要する船路を僅に三時間許にして着したるは即ち此の勝浦なり、着陸するや義經は直ちに當國を守れる樫間能遠の居城を襲ひて之を破り、板野郡の大阪山を越へて讃岐の屋島に攻め入りたり。『判

●大瀧山公園（阿波）

德島市新町の南方に山あり大瀧山と云ふ。前方海に瀕し三面は空濶、方拾餘里に亘るの間、勝景双眺に聚る巒巖爭出して怒るが如く笑ふが如く白練の瀑布之に懸りて飛沫五彩を欺く壯觀言ふべからず蓋し市内第一の勝地なり、今公園となりて衆庶の歡樂鄉たり、山上に招魂社、三重塔あり、山下に春日神社、藥師堂あり、藥師堂は持明院と稱す、素と勝瑞村に在りしを玆に移すと云ふ。名所圖會は大瀧山の光景を叙して曰く「春は咲く花の下に瀧の糸を繰り返し眺め、秋は八月血潮の紅葉隱れに妻呼ぶ鹿の鳴く聲を聞にも唐錦たゝまく惜き風景とて貴賤此處に詣ざるは無し、されば大塔の許より眺望すれば山下には廿餘宇の寺院、河東河西の民家、渭水の諸橋、車馬貴賤の往來絶やらず、德島福島などの島々長閑に霞み峯を繞る浪松の風は、君が千歳を呼ばふるならん、高田の渡には舟を呼びて喧しく仲洲の水鳥の群遊ぶは己が樣々世を樂み顏なる才田の濱の鹽竈の烟は賑はふ竈戸の昔おもほゆ、津田浦の釣船は永き日の暮るゝを惜み、安宅の洲の松の林、海原遠くさし出でたり」云々以て如何に其勝區なるかを知らん。

●鳴門海峽（阿波）

阿波國の東北端と淡路國の西南端との間、即ち大毛島の孫岬と淡路の行者ヶ鼻との間は、僅に十五町の海峽にして此間暗礁連續し、水底淺く、潮流迅激を極む其中央に在るを中の瀨と云ふ、長二町二十四間、幅十間、高潮には水上に現るゝ事二呎に過ぎず、即ち是れ鳴門海峽にして大鳴門と稱するもの、波濤暗礁に激して盤渦旋轉、怒號咆哮して潮音數里の外に聞ゆ。島田島、高島、大毛島の三島は玆に在りて鼎立の形を描き隆門二條に分れ、大鳴門は是隆門の東にして、西を小鳴門と稱す。小鳴門は一名撫養瀨戸と云ふ、兩鳴門の間を堀越と稱し往時玆を開鑿して船舶の往來に便せりと云ふ。

齋藤　竹堂

●小松島（阿波）

勝浦郡の海驛にして舊名を小松島浦と云ふ、德島市を距る南方二里半に在り、後に日峰の翠岳を負ひ、前は水天彷彿たる海灣を控へ風光明媚頗る爽快の地なり和田島は小松島灣の東南を蔽ふて其鼻端北方に突出し、灣の東角樹木あるも平低にして危險は殆ど水陸を見分け難し、灣の錨地は和田鼻と日峰との間に在り、灣形東北に開き其口幅一浬四鏈、灣入一浬水深三尋乃至六尋、泥底にして偏北風の外、諸風を避くべし。日峰、千代の松原は附近の勝地として知らる。灣の西岸、大字芝生に一の塚穴あり、構造甚だ奇にして窓を開き棚を設け室内に土器の破片貝殼等多し。又、旗山あり、是れ源義經八島攻めの時、上陸して旗を立てたる地なりと傳ふ。

藤井　方里

危礁横海怒潮飜　隔岸青山勢欲奔
風力滿帆人不語　一竿落日渡鳴門

後撰集

松林一帶俯汀灣　沙路迢々弓樣彎
風斂波怡海如鏡　照來天女好烟鬟

●勝浦（阿波）

勝浦郡の瀨海一帶の浦を云ふ、勝浦全郡を貫流する勝浦川の海に注ぐ處、北は隣接せる名東郡の津田浦に對し南は大崎に連り風光甚だ明媚なり。元暦二年源義經平氏を討たんとて軍船を撫津の浦に纜ひ颶風に屈せず、衣間に鋭意、浦を發し三日を要する船路を僅に三時間許にして着したるは即ち此の勝浦なり、着陸するや義經は直ちに當國を守れる櫻間能遠の居城を襲ひて之を破り、板野郡の大阪山を越へて讃岐の屋島に攻め入りたり。判官、親家を召して爰を何と云ふぞと問ひ給へば。勝浦と申し候ふ、判官笑ひて色代など宣へば、一定勝浦候ふ、下臈の申し易きまゝにかつらとは申せども文字には勝浦と書きて候ふと申しければ判官斜ならず悅び給ひて、あれ聞きたまへ殿原、軍しに向ふ義經が、勝浦に着くめでたさよ、若し此邊に平家の後矢射つべき仁は誰かあると宣へば阿波の民部重能が弟、櫻間介能遠とて候ふと申す、いざさらば蹴散らして通らんとて、近藤六が勢の百騎ばかりが中より馬や人をすぐりて三十騎ばかり我勢にこそ具せられけり、能遠が城に押し寄せて見給へば、三方は沼、一方は堀なり、堀の方より押寄せて鬪をどつとぞ作りける城の内の兵ども唯射とれや射取れとてさしつめ引つめ散々に射けれども源氏の兵ども是を事とせず堀を越、甲の鎧を傾けておめき叫びて攻ければ能遠叶はじとや思けん家子郎等共に防矢射させ我身は究竟の馬持たりければそれに打乘り希有にして落にけり云々。

●撫養の妙見山（阿波）

阿波の東北端にして北帶山脈將に海に盡きんとする所に一市街あり、之を撫養町と云ふ。妙見山は市街の海濱に峙つ。脚下に撫養港を控へ、鳴門海峽を隔てゝ近く淡路島山に對す、山上の眺望極めて佳なり。市街は德島に亞で殷賑し船舶常に來りて港内に泊し、阿波足袋、齋田鹽等此地の特產として名あり、蓋し撫養は阿波有數の一商區たり。

高松市街

栗林公園

●高松市と其港（讃岐）

高松市は讃岐國の海岸中央に位し、北は内海に面し、屋島は半島を成して其東に突出す、地勢南西に丘陵を負ひ、西に狹く東に廣し、道路は東西南の三面より來りて市に集中する四國第二の都會なり

此地は三百年前に在りては篭原の庄と稱し一箇の漁村に過ぎざりき、天正十一年豊臣秀吉讃岐全土を擧げて生駒近規を封するや、生駒氏始め引田城にあり、其地勢東に偏して統治便ならざるを以て、一度宇多津城に移り、後、玉藻の前に臨みて居城を築き、名けて高松城と言ふ、蓋し屋島古戰場なる牟禮高松の名を用ゐたるなり、其後寛永十九年松平頼重常陸下館より此地に封ぜられ、以後繼承十一世以て明治維新に至る。

市は南に琴平街道あり、東に阿波街道志度街道あり、西に伊豫街道あり、鐵路は之に沿ひて西し、高松停車場は市の西方西濱村にあり、然れ共市の重要なる交通は繫りて高松築港埠頭にありて、數隻の汽船は常に煤煙を漲らし汽笛を鳴らして近畿中國地方の交通を便ならしめつゝあり。

高松築港は明治二十八年計畫し、五年の後完成を告げたるものにして、其本突堤は西に位し、長さ三百五十間、幅五間、其外側に高さ四尺の防波堤を繞らし、之に對せる東方の突堤は長さ二百七十五間幅二間を有す、港内の面積凡そ八萬坪平均干潮十四尺の水深を保つ、本築港に臨んで長さ九十間、幅十五尺の浮槽三箇を設け、棧橋を作りて突堤に連接し、船客の上下及貨物出入の便に備ふ、其規模の大なること驚異に値す此築港を有するかが爲めに市の進展を助長し、四國四港の第二位たるを誇り得るなり、今や人口日に增加し縣廳あり區裁判所あり、銀行諸會社等あり、市街店舗の光景總て大阪式にして最も殷賑を極む。

●栗林公園（讃岐）

栗林公園は高松市の西端に在り。

常盤橋より琴平街道を一直線に北に進めば約十五町に達す、園は我國屈指の大公園として著る、今を距ること二百有餘年前藩祖松平頼重此に遊覽所を築造し、四世頼泰の時に至りて漸く完成せり、其面積凡そ十六萬千百餘坪、後に紫雲山を負ひ、六大水局と十三大山坡とを巧に布置す、六大水局とは西湖、南湖、北湖、涵養地、潺湲池、芙蓉沼之れなり、十三山坡とは飛來峯、巾子峯、旌丘、回中、浴巖、櫻山、渚山、冠松岡、鳳尾塢、會仙巖、小普陀、赤松林、修竹岡之れなり松平氏四氏の富力を以て設計せし大園ばれ、一木一岩皆な恠奇ならざるはなく、長短の泉潭縱横に通じて六大水局を結ぶ苦し夫れ北湖南湖の島に至りては殆ど仙境の趣あり、岡山の後樂園に幽致の得色あれば、此園も亦他を凌駕すべき得色あり。

園の表口は東にありて、之を入り西に向へば桃林の間、此公園の沿革と名勝とを記したる一大石碑あり、其西方「舊檜御殿址」に高尚優美なる古代建築を模したる博物館あり、石碑の前より南に向ひ又西に折るれば、右側は一帶の小堤となりて、堤上幾多の古松老幹槎芽として擧蓋鬱々たり、行き詰りたる所は丁字形を成して、路は南北に通ず、北に曲れば右に芙蓉沼あり、左に潺湲池あり、後に戻りて南に向へば梅林あり、左に橘園あり梅林橋を渡れば北湖の碧瑠璃小漣をも湛へず、中央に二小嶼の浮べるあり、東岸には芙蓉峯の翠黛屹然として倒まに画し西南の一角「翠黛」と稱する邊は綠樹翳翠碧波と相映ず、細谷沙に架したる石橋を渡れば、其處には又黑松林、百花園、修竹園の勝地あり、是等を總稱して通山と言ふ、通山の西に藤花架あり左方は廣庭にして往昔藩主の武藝を講せしめたる講武樹なるものあり。

講武樹を過ぎ小峰起伏せる旌丘の裾を廻りて、尙ほ南に進めば左に掬月亭あり右に初篁館あり、掬月亭は南湖の碧波に臨み、棟低く簷深けれ共三重に曲折せる各字の簾を捲く時は、紫雲山の嵐翠を抱るに足るべく、南湖の沈璧を掬することを得べし、碧波の上に浮べる三個の島嶼は、一を社鵜嶼と言ひ他を天女嶼楓嶼と稱す、之より紫紆して北に向ひ、南湖の岸に沿ふて更に東に折れ、又南に曲り或は西に、或は北に再び初篁館の西側に出づるまで、玉湖、迎春橋、飛猿岩、回中東畏、南畏、假月、飛來峯、考槃亭、冠松岡、楓岸、巾子峰、太皷橋、玉蘭、到岸築、睡龍潭、慈航嶼、津筏築、涵翠池瑤島、赤松林、鹿鳴原、石壁、鳳尾塢、其子瀬、青溪、斷虹橋、會仙岩の奇勝あり。

岡山の後樂園、金澤の兼六公園、水戸の常盤公園を以て我國三大公園と稱するも、後樂園に就ては如上言へる如く幽致の得色ありて、其地域に於て林泉亭榭の配置に於て而も亦清淨の點に於て、一大公園として缺くる所なし、兼六公園の如きは園形他と撰を異にし、小丘、樹林、亭榭、其他に於て觀者の目を新にするもの多きのみならず、最も得色とする所は流水の東西南北に能く繞りて、奇石怪巖に富める事は誇りとする所ならん、常盤公園に至りては、前二者と趣を同ふせず、一種特得の考案に出づ、其梅樹の多き、其文武南道に於ける遺館の如き、他に求むべからざる得色たり、而かも栗林公園の山容水態頗る韻致に富めるは決して前掲三大公園に遜らざるなり。

上下及貨物出入の便に備ふ、其規模の大なること驚異に値す此築港を有するかが爲めに市の進展を助長し、四國四港の第二位たるを誇り得るなり、今や人口日に殖加し縣廳あり區裁判所あり、銀行諸會

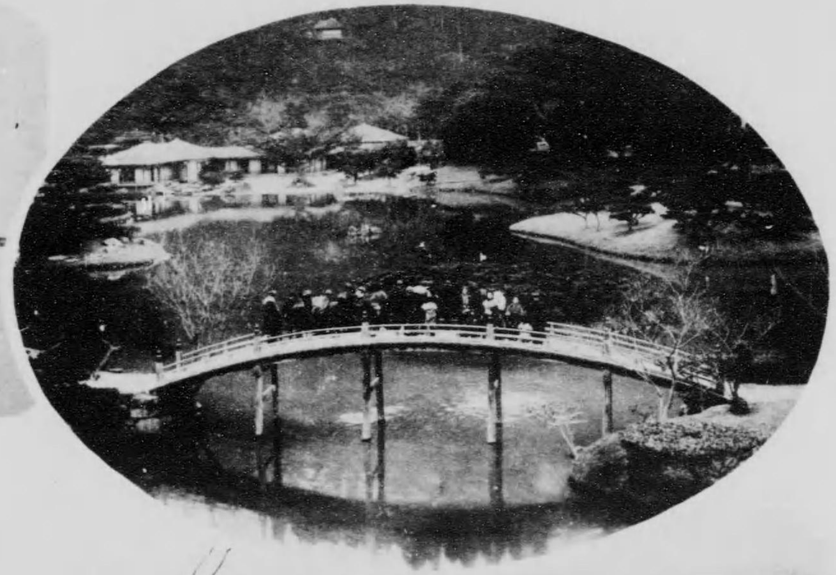
高松市街

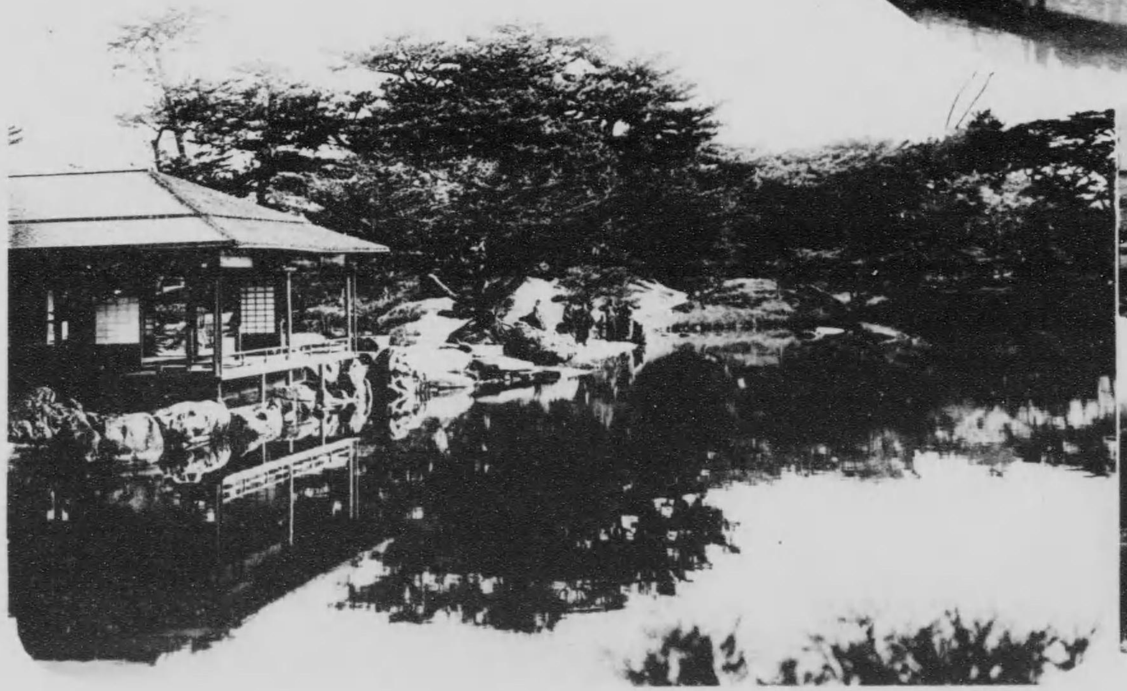
梅林橋を渡れば北湖の碧瑠璃小蓮をも湛へず、中央に二小嶼の浮べるあり、東岸には芙蓉峯の翠黛屹然として倒まに醸し西南の一角「翠黛」と稱する邊は綠樹翳翠碧波と相映す、細谷沙に架したる石橋を

一種特得の考案に出づ、其梅樹の多き、其文武兩道に於ける遺館の如き、他に求むべからざる得色たり、而かも栗林公園の山容水態頗る韻致に富めるは決して前揭三大公園に遜らざるなり。

高松港

栗林公園（二）

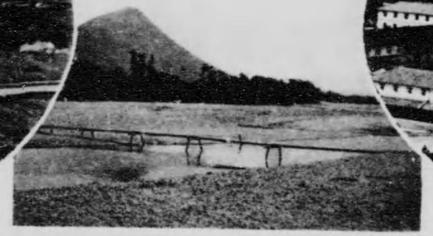




栗林公園（一）

栗林公園（三）

五劔山八栗寺



欲の山

丸龜市街

屋島の浦古戰場

善通寺

●屋島と壇の浦（讃岐）

壽永の昔、源平二氏の決戰せる所は、高松市を距る東二里の地、南北に長く尾梁を成せる屋島山と、巨劔倒まに天漢を刺すが如き五劔山と相對するの處なり。

屋島山と梁を隔てゝ高松市の東部郊外にあり、靈峯は寺の西方約一町にある懸崖之を他に比すべきものなし、春光駘蕩の候、秋天寥廓の節、之に登臨せば殆ど忘我の境に遊ぶの思あるべし、壇の浦に平軍の源氏を迎へて決戰せる所、今日猶ほ當年鬨鼓の聲を聞くの思あり、又山上の名勝最も多き中に血の泡あり、獅子靈巖

村なりしが、慶長二年生駒親正此に城き、宇多津の住民を移せしを始めとし、寛永十八年山崎桑治入城以來商工の移り住む者多く、萬治元年京極高和入府後繁榮に趣き、七世二百年間に地を開き海を埋めて遂に一都會を成すに至れり。

市は四國街道の起點に當り、中國四國

●屋島と壇の浦（讃岐）

壽永の昔、源平二氏の決戰せる所は、高松市を距る東二里の地、南北に長く尾梁を成せる屋島山と、巨劍倒まに天漢を剌すが如き五劍山と相對するの處なり。

屋島山に登躋するには高松市の東郊御坊川に架せる新橋を渡り、志度街道を東に進むこと一里にして春日驛に達す、古高松驛は其東方十町餘にあり、先づ屋島寺に賽し西潟元に至りて之より山に登るを順路とす、西潟元と山との間は約十町餘を隔つ、山頂の屋島寺は南面山千光院と號し、弘法大師一刀三禮の千手千眼觀音を以て本尊とす、地、平らかなること方數百歩、石礎を登り石柵に行き、仁王門を入れば長松落落として寂寞たる伽藍を護る、松聲鐘聲梵唄の音は都て是れ七百有餘年前の餘韻なり、山麓の長松一路は古の牟禮高松の松にして、田疇を右にし海灣を左にし、灣を隔て、峻嶮たる五劍山と相對す、海は即ち壇の浦、濱に安德天皇社あり、此社の南に屋島内裏の古址ありて小樹扶疎たり。翠華一たび去つて七百有餘年、今は唯だ棲鴉の夜啼くあるのみ、州崎堂の南なる田疇の中に内裏總門の址を存す、昔は海濱、今は尙呼んで總門の渚、又は總門の汀と言ふ、近傍に那須與一祈石なるものあり、與一の插日扇を射んとして馬を立て軍神を祈りし所と相傳ふ、壽永三年、平氏太宰府に在りて、緒方惟義の爲めに追はれ、逃れて此地に來る、菊池胤益材を阿波に取り、内裏及大臣公卿の居所を造營し、元暦二年に及んで源義經の燒く所となれり。

此山頂の眺望は頗る絶雅にして容易に狀すべからず、西方弓絃を引ける間には高松市の瓦甍粉壁の築港石堰を擁して宛然畫くが如きあり、大小幾多の島嶼美し〳〵碧瑠璃盤上に浮び、其氣象濶大なる、之を他に比すべきものなし、春光駘蕩の候、秋天寥廓の節、之に登臨せば殆ど忘我の境に遊ぶの思あるべし、壇の浦に平軍の源氏を迎へて決戰せる所、今日猶ほ當年鬨鼓の聲を聞くの思あり、又山上の名勝最も多き中に血の池あり、獅子靈巖あり、靈巖は寺の西方約一町にある懸崖にして其狀獅子に似たる巨巖崖上より突出す、屋島の全景を望觀するに適好の地として名あり。

屋島寺は天平勝寶六年唐僧鑑眞の草創に係り、後、弘仁元年弘法大師之を再營せり、寺寶中に唐僧善導大師作阿彌陀佛、景清所持の銅佛、源氏白旗、源平合戰圖、屋島合戰緣起を始め古文書等尠からず。

桂山　彩巖

海門風浪怒難平　此地曾屯十萬兵
金鋪頻藏魚鼈窟　樓船空保鳳凰城
遲憐朱紱結纓死　無復青衣行酒生
不識英魂何處所　月明波上夜吹笙

●五劍山（讃岐）

讃岐の名山たる五劍山は、八栗山又は八國山と稱され、牟禮村の北に聳立す。海拔壹千五百三十餘尺、其形鋸齒の如し、山麓より山頂に至る凡そ二十四町、中腹に至るまでは松樹多きも、上部は惟巖突起、數峰に分れ蒼穹を摩す、山腹に一寺あり、八栗寺と稱し一に五劍山千手院とも言ふ、眞言宗にして延暦年弘法大師の開創に係る、境内に本堂、聖天祠、大師堂、通夜堂、中將堂、藏王堂、鐘樓、二天門等あり、大聖觀喜雙身天王を安置する四國八十五番の靈場たり。

●丸龜市（讃岐）

讃岐海岸の中央に位する丸龜市は、高松市に亞げる繁華地なり、昔は今の米屋町を限り、其以東は舊鵜足郡津野鄕に屬し、以西は舊那賀郡柞原鄕に屬する一小村なりしが、慶長二年生駒親正此に城き、宇多津の住民を移せしを始めとし、寛永十八年山崎桑治入城以來商工の移り住む者多く、萬治元年京極高和入府後繁榮に趨き、七世二百年間に地を開き海を埋めて遂に一都會を成すに至れり。

市は四國街道の起點に當り、中國四國交通の連絡點を成し、百貨輻輳人烟稠密なり、國道二條、一は東高松を經て阿波に通じ一は西南仲多度郡龍川村に至り、岐れて二となり、南するものは琴平を經て阿波に入り、西するものは三豐郡を貫きて伊豫國に通ず、鐵道は市の北部を過ぎて多度津町に向ふ。

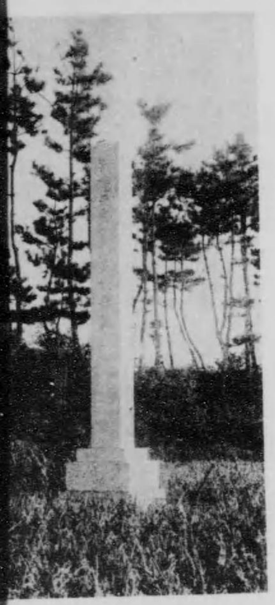
伊豫街道は市の東端土器川橋より沙入橋を渡り、北平山町、西山町を過ぎて南に向ひ、通町なる繁華の街道を過ぎ、本町一丁目の角を西に折れて西に向ふ、本町一丁目角より南を撞するものは琴平街道にして、上通町より堀端を過ぎ、餌差町を經て南に向ふ、此二大路の分岐せる附近即ち通町の一區は市の最も繁華なる所なり。

●善通寺（讃岐）

第十一師團所在地としての善通寺町は多度津の南方二里餘、町は巨刹善通寺あるが爲めに往昔より多少の繁華を有したれど、今日の如き繁華を來したるは師團設置に由る、町の西方に善通寺あり五岳山誕生院と號す、即ち弘法大師誕生の地たり。

●飯の山（讃岐）

讃岐富士の名ある飯の山は、香川郡坂本村大字東坂本に峙立する標高二千四百尺の雄嶽なり、平野の間にあるを以て遠くより之を望むことを得、往昔飯依產命の據れる地と傳ふ、西麓に式内讃岐國二十四座の一に位する飯神社鎭座す、其山容富士に似たるより讃岐富士と稱さる。



長命寺址

●金刀比羅宮（讃岐）

伸多度郡琴平町に在り。同幣中社にして祭神は大物主大神なり。神社は琴平山の中腹平地に構造せられ。本殿は規模宏壯にして頗る壯觀を極む。社記に據れば正殿大神の鎮座は太古に屬し、永萬元年に至り崇德天皇を合祀すと云ふ。明治維新前は象頭山金比羅大權現と稱し、金光院之が別當となり桃園天皇の御宇に勅願所に仰出され日本一社の綸旨を賜ひしが明治元年神祭に改められ事比羅神社と稱し二十七年更に金刀比羅宮と改稱せり。今の本殿は明治十一年に造營せしものにて木材は悉く檜の無節を用ゐ壁天井には櫻樹の蒔繪を施し金光燦爛たりき、境内建物の重なるものは、本宮、樂殿、崇敬講社本部、大鼓樓、神籠大門、神馬舍、社務所、本馬舍、祓戸社、火雷社、旭社、寶木門、遙拜所眞須賀神社、御年神社、事知神社、嚴魂神社、睦魂神社、神庫、神輿庫、三穗津姫神社、秘舍、常盤神社菅原神社、家所、繪馬堂、大山神居社等なり。一書に據れば當山を象頭山と稱するは其山形の象頭に似たるより名く、古來諸人の崇拜厚くして賽者四時絶ゆる事なく關東の族客は大抵大阪より乘船して丸龜に航ずる事なるが是等の旅宿を俗に金毘羅宿と稱し此の旅客の乘船を金毘羅船と云ふ、而して瀬戸内海の舟夫は海上の安全を金毘羅宮に祈り海上難風に逢ふ時は必ず金毘羅大權現の題目を唱へて祈禱するを常とせり。又天狗は金毘羅の神使と稱せられしより賽者は多く大なる天狗の假面を背に負ひて詣づるを例とせり例祭は三月、六月、十月の三回にて十日十一日の兩日に亘りて神事を行ふ。

○　森春濤

澄江如練散餘霞　水木蕩然清且華
自古謝家傳絶唱　象頭山上月磨牙

●櫻の馬場（讃岐）

金刀比羅宮境内、崇敬講本部の西の方壹丁餘に亘る一帶を稱して櫻の馬場と云ふ。左右兩側に玉垣を設け其内には數十株の櫻樹を植え其間無數の石燈籠を羅列す。中央の通路には石を畳みて敷きたり花季爛熳の候は艶妍を競ひて頗る美觀なり。

○　森春濤

祠事豔稱三月盛　國家長禱泰山安
春風滿殿花吹雪　人袂如雲上石壇
花を世にもてはやさるゝ象山の春の盛に逢にけるかな　高崎正風

●雲井の御所（長命寺址）

綾歌郡林田村に在り。保元の昔、崇德天皇讃岐に播遷の時、松田に御着船ありしに國司未だ天皇を迎ふべき御所を造營せざりし爲め、在廳野太夫高任が林田郷の宅を以て假りに御館となし、斯くて天皇は茲に三年のいぶせき月日を送り給へり其時天皇は「こゝもまたあらぬ雲井となりにけり空行く月のすむに任せて」との御製を柱に記し給ひしより、茲處を雲井の御所とは呼びたり高任の宅といへるは其の檀那寺にて長命寺と稱したる巨刹なりしが後ち廢寺となれり、御製を記し給へる柱は數百年來依然として存したるも天正年間の兵燹に罹りて燒失せるは惜むべき限なり。

因に云ふ、西行法師の山家集に曰ふ、讃岐に詣でゝ松山と申す所に院おはしましけむ御跡たづねけれどもかたもなかりければ「松山の波のけしきはかはらじをかたなく君はなりましにけり」とあり。

●松ケ浦崇德院舊蹟

阿野郡の東北隅松山村大字高屋なる白峰山北麓の海岸を松ケ浦と云ふ。崇德院の舊蹟は茲に存す。保元元年七月二十三日崇德院讃岐に遷されたまふべき宣下あり越へて八月三日松山の津に着御あり、そゞろに都戀しく思ぼされ

濱千鳥あとは都に通へども身は松山に昔をのみぞなく。

と詠み給ひしは即ち此松ケ浦なり、古へより松山の松ケ浦と呼べり。

松ケ浦の背後に峰つ白峰は松山の高峰にして一名を綾の松山と稱す。崇德天皇の御陵及び眞言宗の名刹白峰寺とあるを以て世に聞ゆ、又頓證寺洞林院とも稱し四國八十一番の札所たり、弘法大師の開基にして本尊は千證大師自作の千手觀音を安置す、長寛三年崇德天皇此地に崩御後天皇の廟を茲に創建せり、當寺の境内には崇德天皇の御廟所頓證寺殿を始め官庫十一面堂、金堂、行者堂、千體阿彌陀堂本堂、大師堂、本坊等並び建ち、勅使門内には玉章の樹、頓證寺形と稱する古燈籠あり、十一面堂には崇德天皇の御持佛十一面觀世音の木像を安置す。

崇德天皇の御陵たる白峰山陵は、白峰山の絶頂千兒ケ嶽の上に在り。一に讃岐陵と云ふ、近世勅して京都に白峰宮を造營して祀られ、明治十一年山上に在る頓證寺の陵廟を白峰神社と改稱して縣社となし崇德天皇を祭神となせり、神社は山の半腹に位し殿宇宏莊にうて域内神々しく賽者をして敬畏の念を起さしむ崇德天皇は鳥羽天皇の皇子にして諱は顯仁と申し保安四年五歳の時御即位あり、永治元年十二月御讓位あらせられ保元々年の亂に當國に遷らせ給ひ八年餘の日月を松嶺藩邸の僻地に過させ長寛二年寶算四十六を以て崩御あらせられたり。

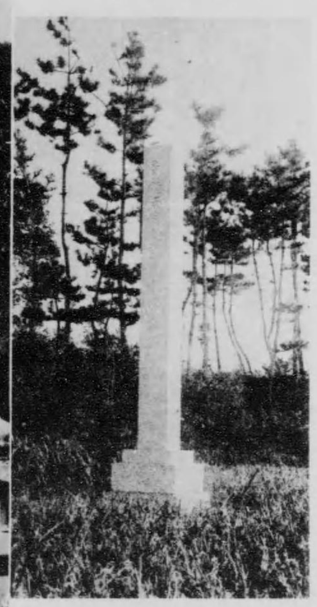
○　江村宗珉

認險探幽不厭遙　碧元石徑轉山腰
蒼松雲深心初靜　青壁途窮魂欲消
拍岸潮聲聽梵唄　生風澗口弄仙簫
君王遺廟無人掃　黄葉綠苔任驚凋

琴平神社

崇徳院遺蹟

長命寺址



雲井御所址

琴平神社標の馬場

使と稱せられしより賽者は多く大なる天狗の假面を背に負ひて詣づるを例とせり例祭は三月、六月、十月の三回にて十日十一日の兩日に亘りて神事を行ふ。

○　森春濤

澄江如練散餘霞　水木落然清且華
自古謝家傳絶唱　象頭山上月磨牙

●松ケ浦崇徳院舊蹟

阿野郡の東北隅松山村大字高屋なる白峰山北麓の海岸を松ケ浦と云ふ。崇徳院の舊蹟は玆に存す。保元元年七月二十三日讃岐の僻地に遷されて八年餘の日月を松籟ければ「松山の波のけしきはかはらじをかたなく君はなりましにけり」とあり。

○　江村宗珉

認險探幽不厭遙　替元石徑轉山腰
蒼松雲深心初靜　青壁途窮魂欲消
拍岸潮聲聽梵唄　生風洞口弄仙簫
君王遺廟無人掃　黄葉綠苔任露凋

●小豆島寒霞溪（讃岐）

藤澤　南岳

寒川郡に屬する一小島、小豆島の島内　應暦三年佐々木三郎左兵衛尉信胤の城廓を構へたる古址なり。

徑穿護国佐巖斜　仰看葛羅紅勝花
雨々三々訪秋客　嗌寒落日一溪霞

成島　柳北

草壁郷の艮隅に方りて一峯あり、神懸山と云ふ、怪石奇巖突兀として千狀萬態、神斧鬼鑿を極め、加ふるに秋冬の候は紅葉錦を彩り霧霜繡を綴りて滿山是れ天然の一大畫圖たるを疑ふ。古來文人騷客の

●同蟾蜍巖（讃岐）

雲岫千重又萬重　紅楓如錦映青松
他年栖息斯鄉好　笑指星城第一峰

是れ寒霞溪十二景中の一勝にして、老杉洞の東方細流を渡り石逕數十步を辿りたる所にあり、左側に峙てる巖石悉く奇

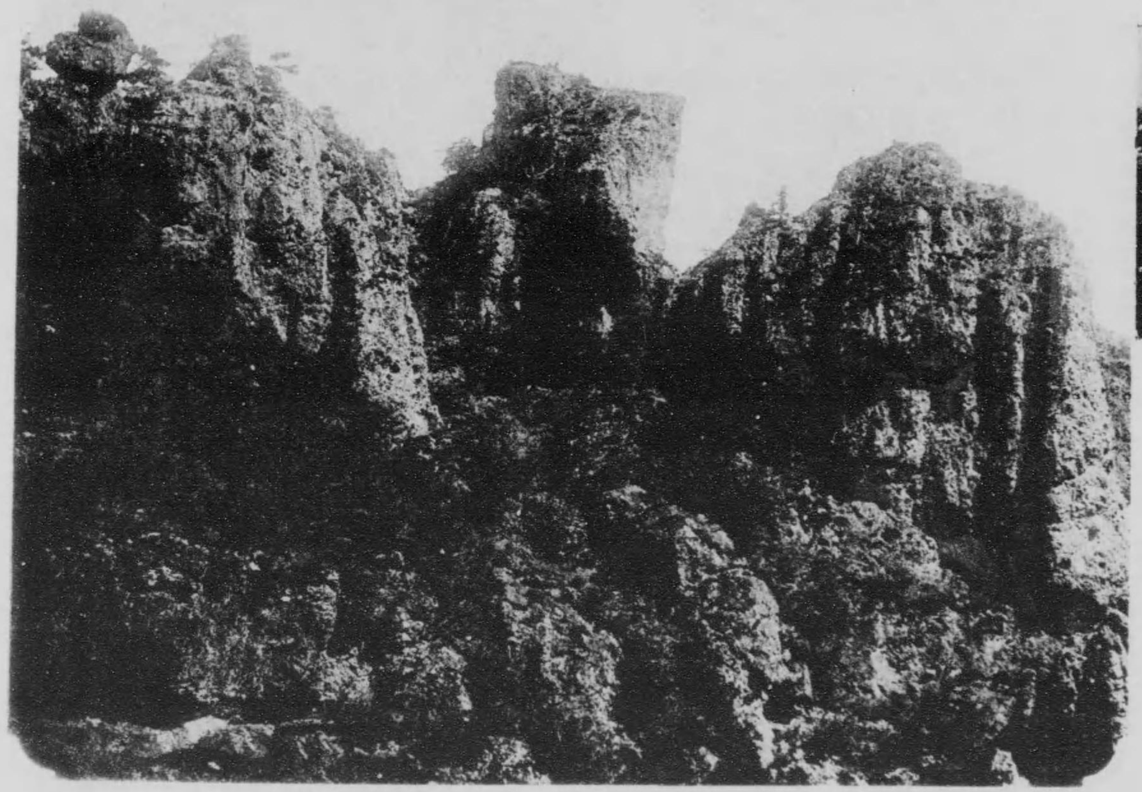
●琴林公園（讃岐）

大川郡津田町と鶴羽町との間に於ける

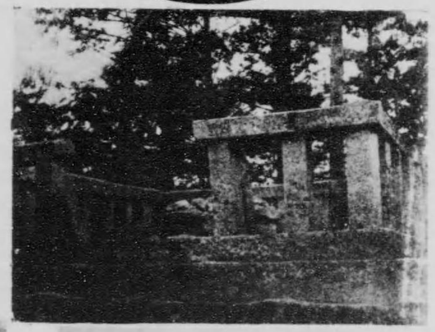
水主神社

琴林公園

寒霞溪の内蟾蜍巖



寒霞溪の内錦屏風



百鳥姫命神殿

寒霞溪の内

●小豆島寒霞溪（讃岐）

寒川郡に屬する一小島、小豆島の島内草壁郷の艮隅に方りて一峯あり、神懸山と云ふ、怪石奇巖突兀として千狀萬態、神斧鬼鑿を極め、加ふるに秋冬の候は紅葉錦を彩り蘿霜繡を綴りて滿山是れ天然の一大畫圖たるを疑ふ。古來文人騷客の間、此山を稱して寒霞溪と稱す。寒霞溪に登らんとする者は瀬戸内海灣より草壁村に上陸し、同村より途を北に採りて行くを順路とす。十餘丁にして大字上村に達す。同村を出づれば直ちに阪路にして是れ即ち寒霞溪の山麓なり、磴道は悉く盤石を刻みて自然の階を作すものにして一歩々々登るに隨つて風趣次第に幽邃を極め水清く石滑かなり、進む事半里許にして。溪路少く開き四顧すれば斷崖絶壁屏風の如くに立ち或は龍蟠し或は虎踞す忽ちにして洞門を迎へ、忽ちにして瀑布を透り、五歩に奇趣、十歩に異觀、絶勝筆舌の能く及ぶ所にあらず。溪中十二勝と稱するものあり曰く、通天窓、紅雲亭錦屏風、老杉洞、蟾蜍巖、玉筍峯、書帖石、層雲壇、荷葉岳、帽子石、女蘿壁、四望頂とす。當山は往時、應神天皇嘗て此地に遊び給ひし時鉤を岩角に掛けて攀ぢ登らせ給へるより、神懸と稱し又一に鍵掛に作る。即ち神懸けの音訓を採りて後世寒霞溪と稱するに至れり。天保二年貫名海屋此に遊び杜少陵の古典を引いて浣花溪と稱し大に當山の絶勝を紹介せり以來帆足萬里、藤本鐵石等續々茲に遊び明治に至りて成島柳北の遊記現はれ、次で片山冲堂、藤澤南岳等の士の紀行詩文世に出でゝ寒霞溪の奇勝は著しく知らるゝに至れり。

成島　柳北

絶勝始疑天有松　丹青難寫況文詞
半生憐我烟霞癖　未識溪山若個有
徑穿霞壁怪巖斜　仰看鳥蘿紅勝花
雨々三々訪秋客　嗑寒落日一溪霞

藤澤　南岳

●同蟾蜍巖（讃岐）

是れ寒霞溪十二景中の一勝にして、老杉洞の東方細流を渡り石逕數十歩を辿りたる所にあり、左側に峙てる巖石悉く奇異の狀を示せるが中に、宛然蟾蜍の蹲踞するが如きもの、之れを蟾蜍巖となす。悠然たる態容、一躍して月を呑まんとするの趣きあり、而して此邊楓樹雜木其の間に點綴し、且つ山蘭の幽香、石斛等の芬々として香ふあり、路傍の右側に又別に蟾蜍に似たる怪巖あり、土人其左方にあるを雌とし、右方にあるを雄と呼べり。

●同錦屏風（讃岐）

亦是れ十二勝中の一景なり、紅雲亭の北方、右に登る二三十歩にして左顧すれば削如せる絶壁、滿目悉く錦繡を著けて溪流其麓を繞る、之を錦屏風と稱す。恰も是れ一幅の横卷繪畫を展觀するに似たり、秋半ばを過ぐるに至れば巖壁に纏へる蔦蘿は悉く紅葉し、錦綺絢爛、美觀言ふべからざるものあり。

寒霞溪の山巓に達すれば、展望千里、南には阿波、讃岐の山水を瞰め、北には播磨、備前の城市を望み、瀬戸内海の蒼波は渺茫として幾千の島嶼、双眸に來り來る、眞に天下の壯觀にして、覺えず快哉を呼ばしむ。寒霞溪に遊ぶもの亦必ず星ヶ城に杖を曳かざるもなし。記事の序を以て左に之を記す。

星ヶ城は寒霞溪の四望頂より道を東北に躡ること約二十町に在り。蓋し本島第一の高嶺にして海拔四百五十五間、頂上の展望、一物の眼界を遮るものなし、寒霞溪の秀峯も脚下柱底に在り。八邑に跨り、中古は二十七ヶ村の共有野山にして應暦三年佐々木三郎左兵衛尉信胤の城廓を構へたる古址なり。

成島　柳北

雲軸千重又萬重　紅楓如錦映青松
他年栖息斯鄉好　笑指星城第一峰

●琴林公園（讃岐）

大川郡津田町と鶴羽町との間に於ける一帶、積翠滴らんとする長沙を名けて琴林公園と稱す、一名琴の松原、舊稱を津田松原と云ふ。長さ一里に亘り、沙濱平滑にして碧松之を彩りて風景畫圖も及ばず、青松の間東方を望めば淡路島山雲煙の間に隱見し、北方は播磨洋に瀕し、爽快言はん方なし、蓋し東讃屈指の勝地なりとす。林中に八幡神社あり、往時宇佐より迎へて建つる祠なりと傳ふ、享和年間此地の儒者皆川淇園琴林の記を作り里人之が碑を建んとして止みたる事あり。其記の一節に曰く「津田邑南有八幡祠廟、廟東松林長三里餘、其勢逶迤連東南、而前枕於海、其松樹無慮數千株、狀皆危詭、白沙綠蔭、離騷不如也、清風入之、聲有似琴奏、因稱之曰琴林、

●大水主神社（讃岐）

興田川の畔にして大川郡寒水村大字水主にあり、里俗正一位水主大明神と云ふ讃岐國式内二十四座の一にして、往時は大内一郡の總鎮守たりき。當社の創始は上古に屬し其詳細を知るを得ず。祭神は孝靈天皇皇女倭迹々日百襲姫命にして、正殿に祀り、孝靈天皇を配祀し奉る、神社の前面丘上に百襲姫命の墓あり。當社の社寶中、木造御神像三軀、木造狛大一對、木造男神座像一軀、同女神座像四軀書蹟紙本墨書大般若經入白木面塗函六十個は國寶に列せられたるものなり、尙此他に區額、神像、器物、古文書等の貴重なるもの尠少ならずと云ふ。

星ケ岡表忠碑　別子銅山　宇和島港

●松山城址（伊豫）

松山市に在り。素と勝山城と稱す。昔は四國第一の名城と稱せられたり。城は勝山々上に峙ち高さ五十二間、周圍三拾町餘、老樹鬱蒼として城を圍む、慶長年間加藤嘉明二十萬石を以て當國に封せられ、同八年當城を築きて居り、寛永三年陸奥に移封するに及び翌年蒲生忠知代りて入國したるも十一年卒後嗣なくして除封され、十二年松平定行伊勢より徙りて入城し五萬石を領し爾後世襲して明治維新に至れり、戊辰の役官軍の收むる所となりたるが維新後廢城となり、其本丸を聚樂園と稱し公園となしたるも明治二十年に至り松山分營を設置するに及び城内悉く陸軍省の所轄に歸し城樓、櫓等に修理を加へ、今歩兵第二十二聯隊を置けり。

●和靈神社（伊豫）

宇和島町の北、下村の鎌江に在り。祠宇敢て宏壯ならざるも極めて修潔自ら崇敬の念を起さしむ。賽者常に陸續として香火一日も絶ゆる事なし。社記の一節に曰く「元和元年伊達政宗の男秀宗宇和島城を賜ふて封に就くや政宗山家公頼（通稱清兵衛）を家老となし秀宗が上を懇囑す、秀宗常に長れ一身を檢束せらるゝに依て心竊に澤はず、奸臣機を得て公頼を讒す、秀宗之を信じ命じて公頼を殺さしむ享年四十二實に元和六年六月三十日なり、然るに公頼の忠魂、秀宗の左右を離れず主君を護る事愈よ厚く爲に奸臣斃るゝ者少からず上下敬畏せざるなし。是に於て秀宗、城北森安なる荒神の境内に小祠を營み神靈を祁り私に兒玉明神と稱す四方來拜する者引きも斷らず、秀宗更に使臣を京都に遣し吉田家に賴りて神社の創立を請ひ承應二年神靈を檜皮の森に移し山賴和靈神社と號して鎮祭す。蓋し山家公頼の靈を和慰するの義に取れるなりと云ふ。

●石槌山（伊豫）

新居、周桑の二郡に跨る。一名を石鐵石、伊豫の高根、面河山とも云ふ、高さ六千四百尺の四國第一の高峰と稱さらるる其の半面は上浮穴郡に屬し、支峯は四方に連亘す。山上に石槌神社あり。間口二尺四寸六分、奥行一尺九寸素と銅造なりしも明治十四年眞鍮造となしたり。祭神は石土毘古神にして藏王權現と稱す、祭典所は常什と稱し二反二畝の平地に殿堂參詣人の休所を建つ。毎年六月二十五日より七月一日に至る間諸國より參詣する者數萬人に及ぶと云ふ。登路極めて險難なるも諸種の設備ありて登攀に便せり、風景情趣を極め登攀昇天の想ひあり。

●高濱港（伊豫）

松山の前港にして伊豫鐵道の終點たり風景極めて明媚にして興居島前面に横はり畫ける如き伊豫富士は其の秀姿を碧水に映じ、海風面を撫して轉た旅客をして快哉を叫ばしめずんば措かず。港内甚だ大ならざるも、旅客の出入、貨の呑吐頗る盛にして國内主要の商港を以て目せらる。本港の東北九町に太山寺あり四國五十二番の札所にして、其十間四方の本堂は楔と貫とを用ひざる建築として有名なり。本尊は行基作の觀音にして、大門の額は弘法大師の筆なりと云ふ。

●星ケ岡表忠碑（伊豫）

松山の南、温泉郡なる石井村の丘陵、星岡に在り。星岡は高十丈二尺周圍十八町東北より西南に長し。元弘三年河野氏の一族、土居通治、得能通言相議りて義兵を擧げ以て官軍に應じ長門探題北條時直の軍を破り勇名を轟し功を以て通治は備後守に任じ通言は伊豫權介に補せらる後足利尊氏の叛するや二將又兵船を發して直義を走らし次で新田義貞皇太子を奉じて北國に赴くに際し二將之に屬し通言大雪に遭ひて士馬凍死し兵を操る能はず通言遂に衆と共に自ら貫て死す、通治は金ヶ崎城陷落に際し力盡て自ら屠腹して死す、二將忠節始終變せず、驍勇比なし明治時代に至りて贈位の祭に浴し、有志相議して碑を此丘陵に建つ。表忠碑即ち之れなり。

●別子銅山（伊豫）

宇摩郡別子山村に屬す、新居濱の海岸を距る五里の地に峠つ、四國中央山脈の一高嶺にして高四千三百尺、銅山鑛業所は山頂より約六百尺の下に在り、本邦屈指の銅山として知らる。銅山事業は大阪の豪商住友氏の經營に屬し規模頗る宏壯なり。

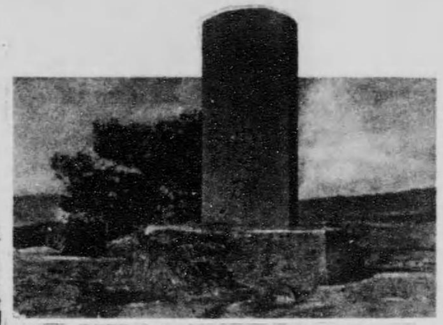
當銅山は元祿三年の發見に係り住友氏幕府の許可を得て翌年四月鑛業を創始せり鑛石は主として黄銅鑛と黄鐵鑛と密着混合せるものにして成分比率は平均銅四乃至六鐵四〇、硫黄五〇其他硅酸、亞鉛等なり交通機關は山麓三川山より國道を横斷して海岸新居濱港に出る七哩餘の鐵道を敷設す、又新居濱には埠頭を設け事務所製煉所を建て且つ附近の四阪島には壯大なる製錬所を設けたり。

●宇和島港（伊豫）

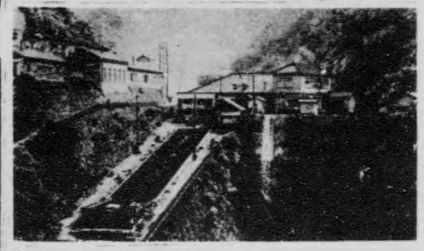
南豫宇和四郡の中心たる宇和島町の海岸、宇和島灣に在り。港内大船巨船を泊すべく、市街の中央に御殿山の翠峰を圍み、宇和島城は屹として簇がる屋甍の中に聳ゆ、港内常に船舶の出入繁く市街殷賑、國中松山に亞ぐの繁市にして、三津ケ濱を距る約七十浬、土佐の宿毛を距る五十浬。海南の有數の一良港たり。

四方來拜する者引きも斷らず、秀宗更に使臣を京都に遣し吉田家に賴りて神社の創立を請ひ承應二年神靈を檜皮の森に移し山顆和靈神社と號して鎭祭す。蓋し山町東北より西南に長し。元弘三年河野氏の一族、土居通治、得能通言相議りて義兵を擧げ以て官軍に應じ長門探題北條時直の軍を破り勇名を轟し功を以て通治は に發ゆ、港内常に船舶の出入繁く市街殷賑、國中松山に亞ぐの繁市にして、三津ケ濱を距る約七十浬、土佐の宿毛を距る五十浬。海南の有數の一良港たり。

和靈神社



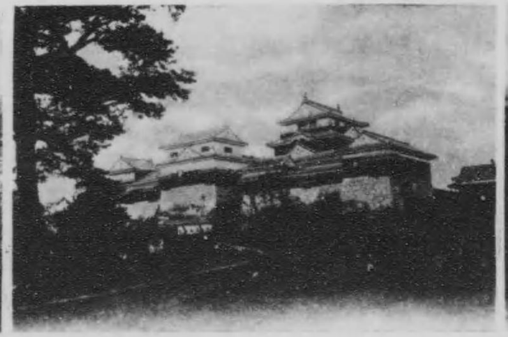
星ヶ岡表忠碑



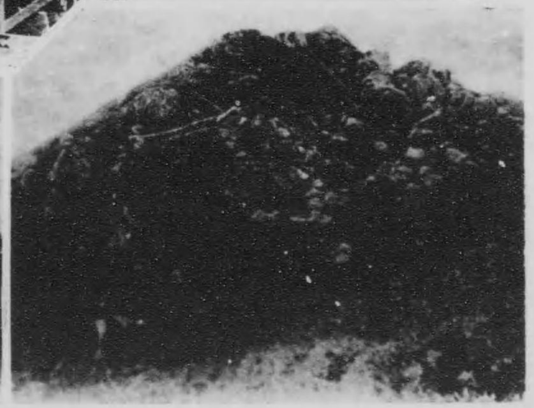
別子銅山

宇和島港

高濱港

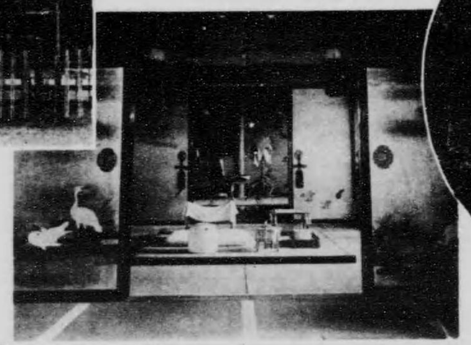


松山城址

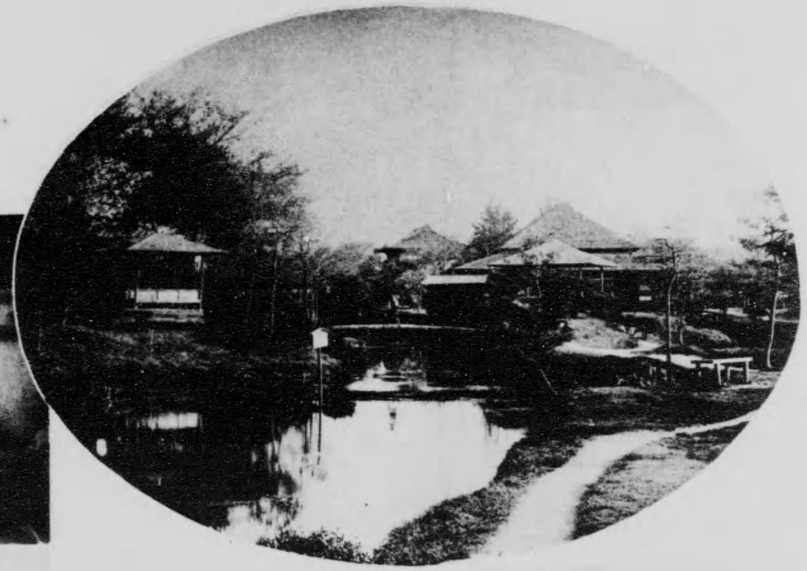


石槌山

道後公園頂上



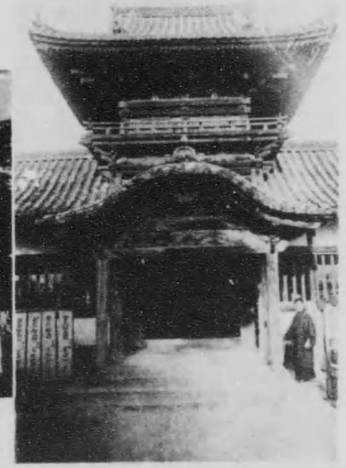
道後温泉内部又新殿



道後公園

道後温泉

伊佐庭神社



圓満寺

●道後温泉（伊豫）

温泉郡に在りて松山市を距る十五町、道後山の麓に沿へる温泉市街なり、土地高燥にして東北には山巒を負ひ、西南は田圃に面す市街は旅館と雜貨店大部分を占む、浴場は一湯より六湯まで六區に分

傳へ曰ふ、是れ太古少彦名命の蹉みて立ち給へる石なりと。

玉の石玉散る影に碎かれて月も湯の數ぞうつらふ。

●道後公園（伊豫）

温泉市街より南方二町許りに在り。境

兩陛下を奉祀し八幡大神とも稱するに至りたりと。湯築は今や湯月に作る、一名伊作爾波の岡と云ふ、後ち建武中河野通治此丘に湯月城を築き當社を以て鎮守と爲し神領を寄進せり、神域千七百二十二坪、百二十階の磴道を登りて社殿に達す境内の眺望頗る佳にして遠近の勝景指呼

●道後温泉（伊豫）

温泉郡に在りて松山市を距る十五町、道後山の麓に沿へる温泉市街なり、土地高燥にして東北には山巒を負ひ、西南は田圃に面す市街は旅館と雜貨店大部分を占む、浴場は一湯より六湯まで六區に分ち泉源は一の湯の東北隅より湧出す、當地の溫泉は其發見遠く太古に在りて大己貴命、少彦名命入浴ありしと傳ふ、其後孝靈、景行、仲哀、舒明、齋明、天智、天武の諸帝、神功皇后の行幸ありしと云ふ往時は伊豫の湯又は石湯と稱し、溫泉場の附近まで海なりしとも云へり、泉質は單純泉にして溫度は八十度乃至百十度の間にあり、浴場は三階建にして浴槽は總て花崗石を以て造り湯は常に浴槽より流出して新陳代謝せり。又この內部なる又新殿の如きは構造甚だ華麗にして頗る清潔を極め、一浴精神頓に爽快を覺ゆ。萬葉集に山部の赤人が伊豫の溫泉に至る作歌といへるを載す、左に之を掲ぐ。

山部赤人

皇神祖之神乃御言乃、敷坐國乃盡湯者霜、左波爾雖有島山之、宜國跡、極此疑伊與能、高根乃、伊狹庭乃國爾立而歌思辭思爲師王湯之上乃、樹村乎見禮者臣能木毛、生繼爾家里、鳴鳥乃、音毛不更遠代爾、神左備將行、行幸處、

季經卿

神さふる伊豫の湯桁のそれならで我老らくの數も知らず。

役小角

伊豫の湯の湯行の數は左八ッ右は九ッ中は十六

●玉の石（伊豫）

道後溫泉一の湯の側に在り。石の玉垣を作りて其中に二個の石を置く、名けて玉の石と稱す。一は其形平たく、一は圓し其平たき石には足形様のものを印せり傳へ曰ふ、是れ太古少彦名命の踐みて立ち給へる石なりと。

玉の石玉散る影に碎かれて月も湯の數ぞうつらふ。

●道後公園（伊豫）

溫泉市街より南方二町許りに在り。境域甚だ宏壯ならざるも瀟洒清楚の景趣あり、丘麓には勤王の志士得能淡雲の遺烈碑建てり。若し夫れ頂上に登らんか四望曠豁にして遠く硫黃灘、興居島を指呼し近く城山に相對して松山の市景双眸に入る、且つ全園櫻樹多く花季は遊人雜沓を極む。此地素と伊豫の豪族河野通治の湯月城址にして、昔時は堅城强壘嚴めしく二重の濠を繞らし、土居外廻り五百二十間、內廻り四百六十間、本壇の高さ四十五間なりしと云ふ。今や城櫓臺閣消て跡なく、漫ろに當年の歷史を偲ぶの情に堪へざらしむ。

●伊佐庭神社（伊豫）

道後村大字道後、小字湯月谷の御假屋山に鎭座す、舊稱を湯月八幡宮と云ひ縣社にして比賣大神を本殿に、應神天皇を中殿に仲哀天皇を左殿に神功皇后を右殿に奉祀す、尙ほ中殿には田心姫命、湯津姫命市杵島姫命をも合祀し、右殿には東照大神を合祀せり。本殿中殿とも七間一尺に二間二尺の造營にて拜殿及び渡廊を有し三間二間の樓門を起し七十六間の廻廊を通せり。寛文七年松山城主久松宣長の再造に係り其構造石清水八幡宮の社殿に模倣す、靑丹相映じ甚だ壯麗を極む。

傳へ云ふ、當神社は素と湯築の丘に在りて該丘岡は一名を御假屋山と稱し往時諸帝の溫泉に行幸ありし當時行宮を造らしめ給ひたる所にして仲哀天皇、神功皇后と共に此地の溫泉に浴し給ひて皇后懷姙あらせられ御安產ありしを以て後世此の兩陛下を奉祀し八幡大神とも稱するに至りたりと。湯築は今や湯月に作る、一名伊作爾波の岡と云ふ、後ち建武中河野通治此丘に湯月城を築き當社を以て鎭守と爲し神領を寄進せり、神域千七百二十二坪、百二十階の磴道を登りて社殿に達す境內の眺望頗る佳にして遠近の勝景指呼の間に收め得べし、古歌に當社を詠じたるものあり、曰く今朝見れば雪降りしきぬいさにはの淸めいそくな神の宮つ子。

●圓福寺（伊豫）

溫泉郡湯山村の內なる河中村字東岡を距る八町許、一刹あり、圓福寺と云ふ。當寺は嘗て得能通範が新田義宗、脇屋義治二公の香華堂となしたる所なりと傳ふ。寺に二公の位碑を安置す、即ち其法名は左の如し。

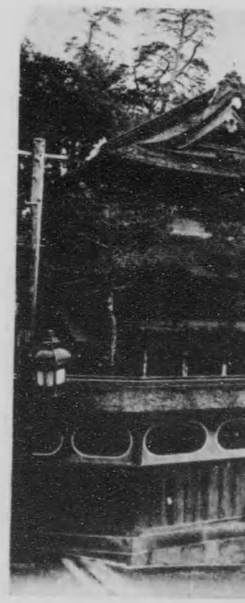
永尊院殿前武州刺史朝散大夫旭山法光大居士　高靈

應永十二乙酉天十一月五日新田左中將源義貞公三男少將義宗公

德王院殿故右衛佐朝散大夫源朝臣道玄舜山大禪定門

應永十二乙酉天八月七日脇屋源義助公嫡男脇屋義治公

因に、當寺は傳敎大師の開基に係り天台宗にして素と神宮寺と稱したりしが得能氏當寺を前二公の香火堂として寺號を圓福寺と改めたり。二公の遺物なる鎧、太刀、馬具等今尙ほ當寺の什寶として所藏す。尙東岡に兩新田靈社なるものあり上下の兩社に分ち、上社は新田義宗を祀り、下社は脇屋義治を奉祀す。史を按ずるに義宗は正平二十三年上杉憲將等と戰ふて勝たず遂に之に死し、義治は軍を武藏、上野に出し上杉朝房と戰ふて敗れ信濃に走りて終る所を知らずと云ふ。蓋し當時二公は伊豫に來り河野氏百方之を掩護して知らしめざりしものゝ如し。



尾長雞

桂

●高知城址（土佐）

高知市の中央に在り。小高き丘陵の上に峙ち繞らすに濠渠を以てし老樹鬱蒼たり、城門の傍に藤並神社あり、藩主山内氏祖先の靈を祀る。城は明治五年廢毀されて今は公園となり、僅に城樓のみを存し、成臨閣と名く。當城は素と大高坂城と稱し、後ち河内山又は高智山と云へり。天正年間長曾我部元親の創築する所なるか、慶長五年長曾我部氏西軍に屬して戰利あらず、德川家康長曾我部氏の封二十二萬三千石を奪ひ之を山内一豊に與へたり、茲に於て一豊は遠州掛川より高知に移封し、爾後累代茲に居城し二十二萬石を領せり。幕末に際し、藩主山内豊信は實明の名あり、夙に勤王の大義を唱え、退隱して容堂と稱し、奔走活動して明治維新の大業を翼賛し諸藩に先んじて版籍を奉還し王政復古の實を擧げたり。南路志に曰く、高智城は慶長六年初秋、繩張惣廻十六町、八年二郭普請、十六年三郭普請成る、初め河内山と稱す、寶永中に及び高智を以て名字と爲す云々。城下唐人町は長曾我部氏高麗陣の時韓人三十人を召捕、居宅せしめられしも。

●桂の濱（土佐）

吾川郡浦戸灣の一部、南岸の稱にして月の名稱地として有名なり。龍頭岬其南に突出し、岬上に燈臺を設く背後の山上に長曾我部氏の城址あり。東南遙に大平洋に面し、雪の如き白砂の一帶は青松に彩られて、怒濤岸を洗ふ碧波と相映ず、名匠の畫圖も遠く及ぶ所にあらず。夏季納涼に適し冬時觀雪に佳なり、殊に觀月の景趣に至つては美觀言ふべからず、俚謠あり、曰く

みなせ（三櫂瀬）見せましよ浦戸を明けて月の名所の桂濱

以て如何に夏の勝地なるかを知るべし。文學士大町桂月氏は土佐の人、其の雅號は蓋し此地の桂濱月下漁郎の語を約したるものなり。往時此地に野中兼山の觀海亭なるもの在りしが、寶永年間の震災に罹りて破壞せりと云ふ。又其後藩主山内氏の別亭莅に設けられ、亭名を觀海と號したりき。近年此地に海水浴場を建設するに至れり。

南天回首耐躊躇　桂浦秋光氷雪如
誰取滄溟無限色　冷然洗出玉蟾蜍
ながめては歸らんものを此夕月と波との飽かぬ光を　山内豊房

因に曰ふ、桂濱は、今、浦戸村と稱す。此地天正年間、長曾我部元親築城して別館となせる所にして浦戸城と云へり。慶長元年葡萄牙商船漂流し來りて此地に着したる事あり、同五年元親西軍に應じて戰敗れしを以て、德川氏の爲めに封土を收められたるも其遺臣等尙浦戸城に據りて、一時德川氏に抗したるも幾くもなく離散し、同年十二月城は遂に德川氏の有に歸したり。

●山内一豊筆蹟（土佐）

是れ侯爵山内豊景氏の所藏に係る土佐藩祖山内一豊自筆の書狀なりとす。一豊は尾張の人にして通稱は猪右衞門、父を盛豊といふ。一豊始め織田信長に仕へ、信長の薨後、豊臣秀吉に從ふ、嘗て妻の爲に金を得て良馬を購ひ擢でられて若狹に封せらる、天正十一年高濱城に移り、同十三年長濱城に、同十八年遠州掛川城に移封し、五萬石を領す。秀吉薨後德川氏に仕へ慶長五年關ヶ原の役に際し、家康に從ひて奥州に出征し、中途歸りて美濃に戰ひ、功を以て土佐二十四萬石を賜り、遠州掛川より移りて高知に居城し、從四位下土佐守となる、慶長十九年卒す、享年六十。

●山内一豊夫人筆蹟（土佐）

是れ亦山内侯爵の所藏に係る。原本は竪一尺横一尺四寸にして一豊夫人自筆の書狀なり。

夫人は江州淺井氏の臣若宮友興の女、山内一豊に嫁して賢婦人の聞えあり、一豊信長に仕へたる當時家貧にして良馬を購ふの資に窮するに當り夫人は嫁せる時父母の與へし金を鏡奩の裡より把出して一豊をして良馬を購はしめ以て其榮進を翼けたり後年關ヶ原の役起るに際し一豊は家康に從ひて上杉景勝を討すべく征途に在りたるが石田三成其虛に乘じ兵を擧げて伏見城を乘取りたり、是時一豊夫人は三成が擧兵の次第を詳細書狀に具し細剪して之を紙縒となし使者の笠紐に作りて出征中の一豊に急遽事變を報じたり、是れ戰國武將の妻として千古の美談と歎稱せらる。元和三年十二月四日享年六十一を以て京都に發す。謚號して見性院と云ふ。

●長尾雞（土佐）

長尾雞は我が日本の特產鳥にして、一種の愛翫用鷄なり。其の體形は總て普通の雞に似たるが、其尾羽は著るしく發達し、長け壹丈五尺に延長す。是を以て常に二間以上の高き架木に憩はしむ、數條の尾羽婀々として風に搖ぎつゝ悠然垂下せる光景、頗る優美の觀を呈す。而して其體量は大抵五百目位、單冠白耳にして色澤甚だ美なり、羽色は銀灰、白、褐色の三種あり、其尾羽の積極的に長垂せるは最も特色とする所にして、其の長尾雞の名稱ある所以なりとす。土佐特殊の產鳥にして他に產する地方あるを聞かず、蓋し天然紀念物の一種として須らく保存すべき物に屬すといふべし。

匠の畫圖も遠く及ぶ所にあらず。夏季納涼に適し冬時觀雪に佳なり、殊に觀月の景趣に至つては美觀言ふべからず、俚謠あり、曰く

みなせ(三疊瀬)見せましよ浦戸を明けて月の名所の桂濱

し、五萬石を領す。秀吉薨後德川氏に仕へ慶長五年關ヶ原の役に際し、家康に從ひて奥州に出征し、中途歸りて美濃に戰ひ、功を以て土佐二十四萬石を賜り、遠州掛川より移りて高知に居城し、從四位下土佐守となる、慶長十九年卒す、享年六十。

三種あり、其尾羽の積極的に長垂せるは最も特色とする所にして、其の長尾雞の名稱ある所以なりとす。土佐特殊の產鳥にして他に產する地方あるを聞かず、蓋し天然紀念物の一種として須らく保存すべき物に屬すといふべし。

桂濱海邊（一）

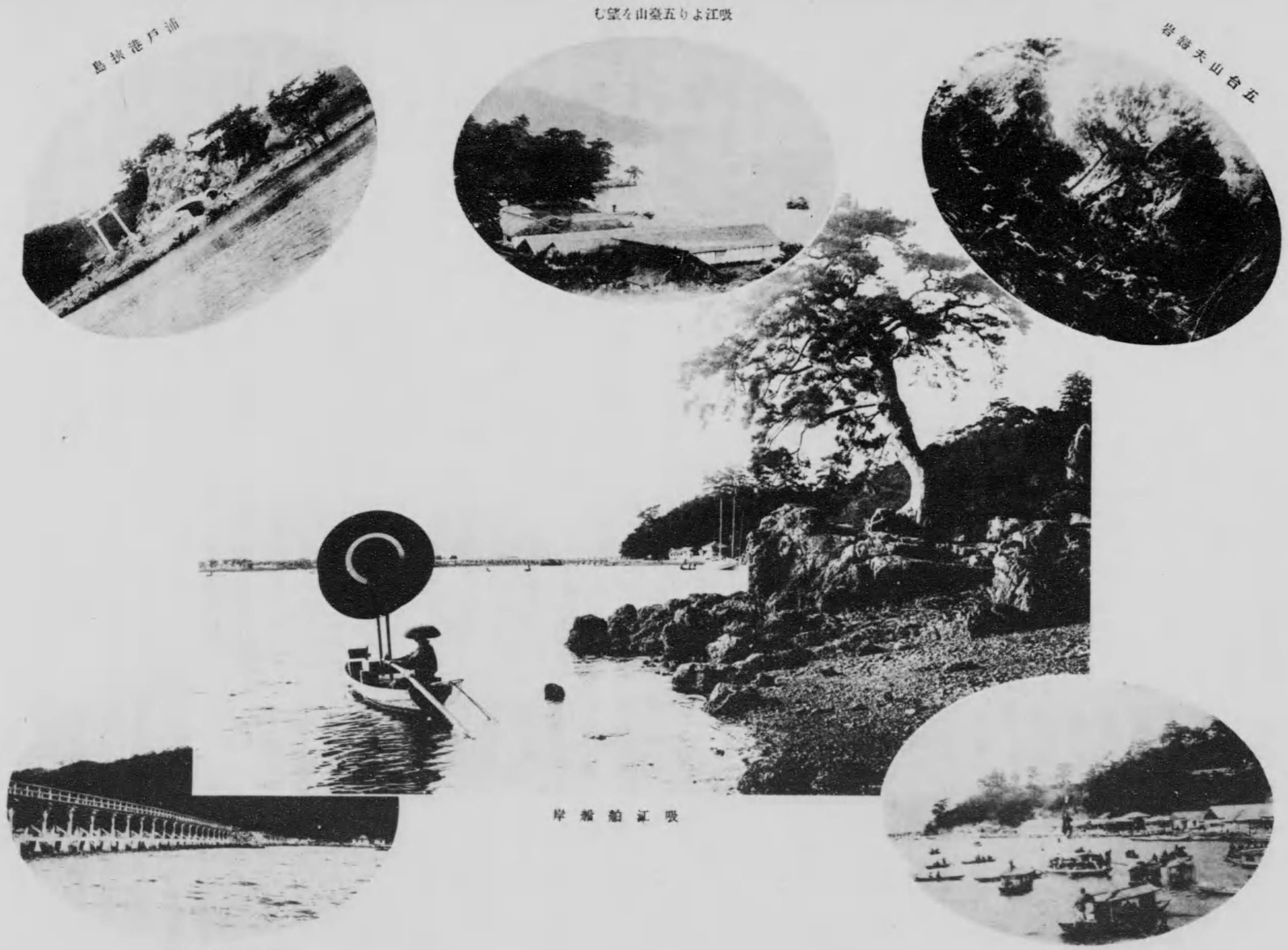
山内一豐筆蹟

山内一豐夫人筆蹟

尾長雞

高知城址

桂濱海邊（二）



●吸江の泊船岸（土佐）

土佐沿岸の勝地中、最も著名なるものは浦戸灣内なる吸江灣なりとす。昔て夢窓國師玆に禪庵を結ひて其風光を掬し吸江十勝なるものを選みたり。泊船岸は即

●浦戸港狹島の景（土佐）

浦戸港は土佐南岸の中央部にして長沙濱に在り、狹島ば同港内に所在する青螺にして頗る風景に富む。浦戸の灣口は北東より伸出せる種崎と、西方より斗出せ

寫眞を掲ぐると共に、更に十景の所在を詳記して探勝家の參考に供す。

其一、呑海亭は五臺山の西麓吸江寺の直下なる道路の南に在り、海岸を距る僅に數間の水中に築かれたる佛堂にして前面に小橋を架す、恰も近江堅田の浮御堂

●吸江の泊船岸（土佐）

土佐沿岸の勝地中、最も著名なるものは浦戸灣内なる吸江灣なりとす。昔て夢窓國師玆に禪庵を結びて其風光を掬し吸江十勝なるものを選みたり。泊船岸は即ち其の一勝區たり。吸江灣の北端に隆起する一山あり、之を五臺山と云ふ、泊船岸は此の山端の海中に斗出する一岬阜にして、俗に法師ヶ鼻と呼べり、大小商船常に玆に碇泊して帆檣の林立するを見る、是れ蓋し其名稱ある所以なり。其の岬端岸上の一孤松姿態老雅にして亦勝地に一彩を加ふるものと謂ふべし。

因に吸江十景とは左の勝區を云ふなり曰く呑海亭、曰く粹適庵、曰く磨甎堂、曰く獨鈷水、曰く國見嶺、曰く泊船岸、曰く雨華岳、曰く潮音洞、曰く玄夫島、曰く白鷺洲なり。

●青柳橋（土佐）

吸江灣上五臺山の青螺は宛然畫圖の如く拭ふが如き灣水の鏡面に映じ、一架長蛇の如き橋を隔てゝ稻荷新地と相對す之を青柳橋となす。橋は浦戸灣に瀉ぐ布師田河の河口に架せるものにして、其長さ二百十八間、宛然これ水上の虹とも謂ふべき一大長橋なり。橋上の展望頗る佳絶にして、所謂吸江十景なるものは、悉く指呼の裡に收めらる。蓋し土佐名勝中の隨一と謂ふべし。

●同舟遊（土佐）

青柳橋下、船を泛べて景勝を賞す素より快心事に屬す。

花雲搖曳柳絲飄　十里春風兩岸喧
點破錦波重疊際　白帆斜過孕兒門

僧月曉

因に曰ふ、吸江の西北岸は潮江にして其の窄小部の兩岬を東孕西孕と云ふ

●浦戸港狹島の景（土佐）

浦戸港は土佐南岸の中央部にして長沙濱に在り、狹島は同港内に所在する背螺にして頗る風景に富む。浦戸の灣口は北東より伸出せる種崎と、西方より斗出せる龍頭崎とを以て門戸を形成す、即ち是れ浦戸口にして、其水道は長くして且つ狹く。水亦淺くして、高潮時に非ざれば素より大船巨舶を容る能はざるも、其港口灣頭の景趣は明媚にして、眺望太だ爽快を覺ゆ。

●五臺山夫婦岩（土佐）

五臺山は吸江灣の北端に屹として立てること前述の如し、玆に建立せる一刹を竹林寺と云ふ、山號は五臺山なり、西籠にも亦一刹あり吸江寺と云ふ。竹林寺は眞言宗にして、神龜年間行基菩薩聖武天皇の勅を奉じて創建せらるゝ所に係る。境内廣濶にして堂宇頗る宏壯なり。登路八丁にして頂上本堂に達す、本尊は行基作の文珠菩薩なり、伽藍は數百年の星霜を經過せるも未だ完く頽廢せず蒼然たる古色の雅趣は自ら敬虔の念を喚起せしむ山中名勝少からず。夫婦岩は其一にして奇異なる兩岩相對して立つ、恰も二見浦の双石の如し、名けて夫婦岩と云ふ、亦五臺山の一景勝たり。由來五臺山は四國八十八ヶ所の道場中に於ても著名なる靈地にして、文殊菩薩を安置せる本堂の外大師堂、愛染堂、鐘樓、護摩堂、鎮守堂、山王權現堂、子安權現堂、開山堂、位牌堂、客殿、庫裡等あり。

●五臺山より吸江を望む（土佐）

五臺山が勝景に富めるは主として其の山上より吸江灣を眺望するに在り吸江の景勝は之を前項に掲記したるが、今此の寫眞を掲ぐると共に、更に十景の所在を詳記して探勝家の參考に供す。

其一、呑海亭は五臺山の西麓吸江寺の直下なる道路の南に在り、海岸を距る僅に數間の水中に築かれたる佛堂にして前面に小橋を架す、恰も近江堅田の浮御堂と相似たり。其亭に呑海の名を命じたるは。蜀の金山々頂にある呑海亭より下瞰すれば巨海を呑み盡すの風あるより夢窓國師其亭名を玆に假りて命じたりと云ふ其二、粹適庵は吸江寺の右方、阪路を登りたる林間にあり。方三間許の小堂にて金毘羅天滿宮の小祠あり、堂は國師の書齋として築造せらるゝもの、堂内は國師の木像を置く。其三、磨甎堂は適粹庵より更に東に小阪を上りたる處に在り、老樹鬱蒼幽邃を極めたるも西南は眼界展開して灣の全面を望むことを得。其四、獨鈷水は吸江寺の背後、林樹の間にありて清泉滾々として湧出す、傍に嚴島神を祀れり。水質清冽にして茶を烹るに適す。其五、見國嶺は五臺山頂に在て巨巖突出して自然の眺望臺を爲す、之に坐して一望せんか高知全府は雙眸の裡に收むを得遠くは虛空佛鴻の峰雪光の諸山歷々として指點すべし。其六、泊船岸は前掲既に之を盡せり。其七、雨華巖は呑海亭北方の一岬にして青柳橋の東畔にあり、巖壁削れる如く綠樹其間に點綴す、昔時此地を大崎と稱し舟の城下に入る要津たりき其八、潮音洞は雨華嵓を北に曲りたる岸に在りて奇岩怪石點々起伏し海潮來る時は水勢岩に激し轟響を發す、岸上に土佐神社を祀る。其九、玄夫島は呑海亭の西方數百歩の海中にある岩礁にして其形巨鼇の如し。其十、白鷺洲は泊船岸の南方の沙洲にして白鷺常に來りて群を爲す。

五臺層岳望蒼然　朱閣珠樓畫裡鮮
花雨別兼風葉動　紛々吹逐下江船

僧高陽

●龍串の景（土佐）

幡多郡の南端、蹉跎岬の西方に當る三崎村の海岸に在り、當麻の濱より櫻濱に至る約半里に亘る海濱一帶は、奇岩怪石起伏して千態萬狀悉く其形を異にす、之を龍串の奇景となす、右來有名の勝區とし知らる、其の屏風山に初まり面向不背山に終る間に、三十六景、四十八景、七十二景、八十景等の目あり、其著名なるものを擧ぐれば、兩岬端に在りて龍口を開けるが如き狀を爲す阿門龍石を始め鯨石、馬の鞍石、鰐口石、手水石、玉水石、鳥形石、渦石、鹿落角石、大竹小竹石、絞幕石、大師姿石、蛇石、布引石、猿石、月兎石、天人舞台石、仙人碁盤石、胃中梅石、蛙石、獨鈷石、月形石、額石、仙人洞石、唐獅子石、龍門瀑石、胄石、手鞠石、千疊敷石、逵棚石、蹴鞠石、座頭書寢石、馬足跡石、瓢石、梅枯木石、礫石、紺屋石、不動行光石、面向不背石、中將姫化粧石、夢浮橋石、狆石、秋の月石、根曳石、男體石、女體石、五百羅漢石等とす、今其二三に就て形狀を記さんに馬の鞍石は岩上に附着せる巨石にして高さ五尺幅二間許、岩面に波紋あり、狆石は大さ牛の如く耳目鼻口悉く備はり波濤其背を洗ひて海中に游泳するが如し、秋の月石は斷巖斜に傾きて壁を爲し壁面に徑尺餘圓形二十許り凸起し滿月の中空に懸るに似たり、根曳竹石は徑五六尺、長七八間、圓柱の如き奇石にして根あり節あり、宛然巨竹を根曳にして海中に横へたるが如し、男體石、女體石は共に屏風山の海中に突出せる岩壁にして左右に分れて各々西に向へり、碁盤石は平らかなる長方形の奇石にして岩面に縱横の線を存し且盤上に突起せる七個の碁石あり面向不背山は一に蓬萊島と稱す、海中に立てる一青螺にして島上に二三株の松あり島腹には無數の小孔を穿ちて蜂巣の如く極めて奇觀なり。龍串の西端、水莖濱に面する沙濱を櫻の濱と云ふ、一帶の白砂汀に連り、砂上には櫻貝散布し、且つ桃色珊瑚の碎片は波に打ち寄せられて白砂に混じ、燦然として美觀言ふべからず。

●清水港（土佐）

幡多郡の一港にして、此附近は古來土佐節の原料たる鰹の漁場として知らる。沿岸の漁村處として鰹節の製造に從事せざるなく、清水港は實に之れが製造の中心地たり。港日南西に面し幅約二鏈、灣入一里三鏈、兩側の海岸は高岩崖にして港内水深く、錨地は五六尋、附近に於ける良港なれども大船の碇泊に適せず。此地山腹に清泉湧き出づ、是れ其の地名の起れる原因なるべし。港灣に沿ふて青松村あり、鰹節及び酒盞の產地として知らる。

●紀貫之舊蹟（土佐）

長岡郡後免町の北方約一里、國比左村大字比江村に在り。此地往時國府を置きたる所にして、承永年間紀貫之國司として此地に赴任せる事あり。其任期滿ちて都へ歸る際の紀行は有名なる土佐日記なり。貫之の館址は里俗内裏の田と稱し此地より多く古瓦を發掘せし事あるより又瓦畑とも呼べり。天明年間尾池春水なる人、碑石を其址に建設し、國主山内豐雍之が篆額を書し、權大納言日野資枝の和歌、清原宣條の銘辭を刻し、題して紀氏舊蹟と云ふ。今其の舊址に存立せり。舊址の東方二町、字鶴豆畑の中に一大礎石を存す、長九尺四寸、幅四尺四寸餘中央に方形の凹みあり蓋し柱穴なるべし。昔時同形の礎石多く在りしも維新の際、之を石垣等に使用して今は唯だ僅に此一石を殘すのみなりと。土佐日記には『大津に出でゝ船に乘る』とあり、大津は國比佐村を距る西南一里餘の所にして、今は海に遠き陸地となれり、桑海の變轉た驚嘆に耐えず。

●野中兼山墓（土佐）

宿毛町安東寺に在り。同寺は舊東福寺址にして、昔時野中兼山此に謫せられたり。當寺の山上に兼山一族の墳墓あり。

兼山は幼名左八郎、通稱を傳右衛門と云ふ、名は良繼、兼山は其號なり、土佐藩祖山内一豐の姪なる良明の子にして、寛永十三年家老職に任せらる、兼山事理に明敏にして經營の才に富み、職に就くや山林伐採の法を制定し、商賈をして之を大阪に輸送せしめ、其輸出稅を以て藩の財政を補ひ、剩餘金を貯へて不時の用に備へ、又國内酒店の數を制限し養蠶を勸め、蜜蜂を飼養し、藥草染草を栽培せしめ、捕鯨方法を確定し、開墾築港河川を整理し、且つ長曾我部の子孫を優遇して耕作に從事せしめ、治績大に擧り、兼て文學に意を傾け山崎闇齋等と共に朱子學を鼓吹し大に一藩の學風を振興せり、其施政方針に就き往々非難する者あるより寛文五年職を辭し、以來又政治を談せず風月を友とし同年十一月五日憂鬱病を發し終に四十九歲を以て歿す。

●野中兼山筆蹟（土佐）

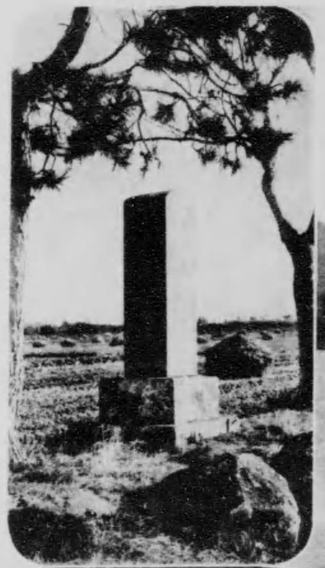
是れ兼山が自筆の書簡にして、其署名を伯耆と記せるは兼山が中頃用ひたる通稱なり、兼山は初め通稱を傳右衛門と云ひ後ち主計と改め次いで伯耆と稱し更に傳右衛門に復したり。原本は沼田頼輔氏の所藏に係る

●山内容堂筆蹟（土佐）

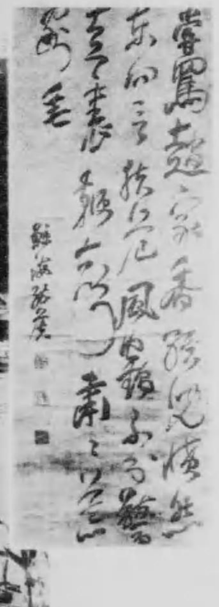
原本は侯爵山内豐景氏の所藏に係る藩款の鯨海醉詹は容堂の別號なり。容堂は高知藩主として明治維新の際、王事に竭したる事蹟は昔く人の知る所なれば玆に贅せず。

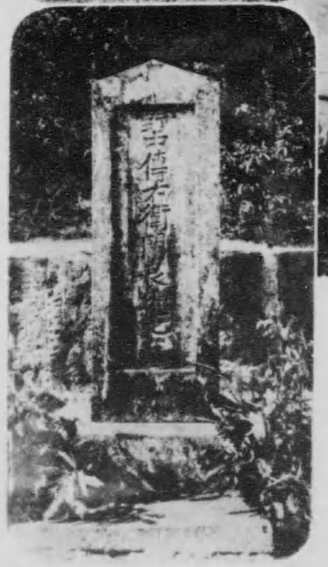
清水港

紀貫之舊蹟



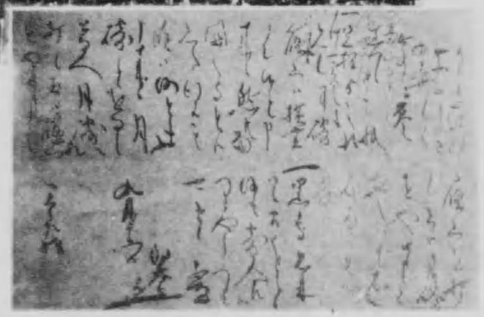
山内容堂筆





墓山蒙中野

龍串奇景



蹟筆山蒙中野

みなりと。土佐日記には『大津に出でゝ船に乘る』とあり、大津は國比佐村を距る西南一里餘の所にして、今は海に遠き陸地

高知藩主として明治維新の際、王事に竭したる事蹟は普く人の知る所なれば茲に贅せず。

觀海閣

和歌東照宮

和歌の浦

想上り松

不老橋

●和歌の浦（紀伊）

和歌山市の南方一里の海灣にして古來風光明媚の勝地として其名高し。一條の砂嘴南方に向つて延ぶること二十町之を出島と稱し、砂嘴の東は雑賀川の河口に

●東照宮（紀伊）

玉津島の北方、伽羅山一名おぼろ山の西に連接せる丘上に在り。元和七年舊和歌山藩祖德川頼宣の創建する所にして、俗に一の權現と稱せり。所謂これ「和歌の

たり。因て雄石には養珠院の法號を刻して塔中に安置し、雌石には七字の梵語を記して山下に建てたり、即ち此の雌雄の奇石によりて山名を號けしと云ふ。

●不老橋（紀伊）

和歌の浦の名勝地は屈指に過あらずし

●和歌の浦（紀伊）

和歌山市の南方一里の海灣にして古來風光明媚の勝地として其名高し。一條の砂嘴南方に向つて延ぶること二十町之を出島と稱し、砂嘴の東は雑賀川の河口にして一小灣を形成す灣面甚だ廣し。和歌の浦は即ち此灣内にして内外の二灣に分つ、見渡せば江水洋々として波濤穏かに水や空なる浦わに點々たる白帆を望み、東には名草山紀三井寺を微かなる翠の間に眺め、南は鹽津浦、地の島、沖の島、北は双子島、雑賀崎等を展望すべく、而して一帶の白砂は青松に彩られて海水に映ずる處、妙趣絶景筆舌の能く盡す所にあらず。此の天然の絶勝を背景として仙禽時に大空に長鳴するを聞く、古歌に所謂「和歌の浦に潮滿ち來れば潟男波蘆邊を指して田鶴啼き渡る」もの是れなり、在昔聖武天皇紀伊に幸し給ひし時此地の景を賞し給ひ勅して宜く登山望海、此間最好、不勞遠行足以遊覽、故改弱濱名爲明光之浦、宜置守戸勿令荒穢、云々、爾來此地を明光之浦と稱す、蓋し河と和と古へ通ひ用ひたり、後世、若浦又は和歌浦に作るに至れり。古來此の浦の景勝を賞して詠せるもの擧げて數ふべからず、左に其一二を掲ぐ。

寂蓮

若の浦を松の葉越しに眺むれば
　梢によするあまの釣り舟

家隆

和歌の浦や入江の蘆のしもの鶴
　かゝる光りにあはんとや見し

西行

和歌の浦に鹽木かさぬる契をば
　かける燒藻の跡にてぞ見る

相模

濁りなき玉津島江の小松原
　あらはに千代のかけて見えける

●東照宮（紀伊）

玉津島の北方、伽羅山一名おぼろ山の西に連接せる丘上に在り。元和七年舊和歌山藩祖德川頼宣の創建する所にして、俗に一の權現と稱せり。所謂これ「和歌の浦には名所がござる一に權現」と謠はるゝものにして、結構華麗を極め、金碧燦然として目を驚かす、昔時神佛混淆せしを以て或は東照寺とも稱したり。慈眼大師の開基に係り三重塔屹然として境内に聳へ、護摩堂には常に護摩の煙絶ゆる事なかりしが、明治維新後供僧坊（天曜寺）及び三重塔を撤去し、爲めに稍々舊觀を失ひしと雖も祠殿壯麗にして石槃左右に立並び、朱橋丹雘林巒の蒼翠に映じて一段の幽邃を加へ、神威自から尊嚴を添ふるものあり。社格は縣社にして、毎年四月十七日の祭典は頗る壯觀にして遠近より賽者群集し非常なる盛況を呈すと云ふ

●觀海閣（紀伊）

玉津島神社の前なる江中に一小島山あり、之を妹脊山と名づく、往時は郭公山又は玉出島とも呼びたり、三斷橋と稱する石橋を架して之に通ず。山上に多寶塔を建つ、本尊は加藤清正が征韓役の際、持ち歸りたる釋迦佛、阿難、伽葉の三尊にして、其軀中には德川頼宣の母堂養珠院の遺骨を納むと云ふ。慶安二年頼宣の創建する所にして、日護僧都の開基に係る、觀海閣は該塔の石階下なる拜殿の稱にして、閣は海水に臨み、風景佳絶、南は和歌の浦を望み、東は名草山に對し、頗る眺望の勝に富む。蓋し閣名の依つて基く所以なり。傳ふる所に依れば往時寶塔創建の際、海濱に二個の奇石ありしを其一個々茲に移さんとせしに動かず土人名けて夫婦石と稱する由奉行の者聞きて二個ともに動かせしに容易に移す事を得たり。因て雄石には養珠院の法號を刻して塔中に安置し、雌石には七字の梵語を記して山下に建てたり、即ち此の雌雄の奇石によりて山名を號けしと云ふ。

●不老橋（紀伊）

和歌の浦の名勝地は屈指に違あらずして、限りある紙面の詳細を盡さんとするは到底不可能事たるを免れず。茲には只だ其秀景の一二に止むるのみ。不老橋亦和歌の浦風景の一勝にして、玉津島神社の南に在り。是れ輿の窟と共に名所として知らる。此附近は往時神護元年十月聖武天皇茲に幸し玉津島神社に詣で給ひ、望海樓を創建せられたる地にして、樓は神社の背後なる奠供山なり。山の西方に千疊敷と稱する所あり。

祇南海

望海樓樓何處求　玉津島北石巖頭
翠葉不返煙波渺　沙鳥雲帆神護秋

●根上り松（紀伊）

蒼樹の間に隱見する和歌山城を左に望みつゝ和歌山市より南に向つて一里二十町を辿れば和歌の浦の勝地に達す。此間一路平らかなること砥の如く、途中路傍に老松の並列するを見る、中に一株の根柢高く地上に抽んずるものあり。號けて「根上り松」と云ふ。古來著しく其名を知らる。亦是れ和歌の浦景趣中の一勝たるを失はざるものなり。附近に五百羅漢寺あり、列置せる羅漢像の奇古なるを以て著名なりとす。

（續後選集）

雪つもる和歌の松原ふりにけり
　幾世經ぬらん玉津しま守

祇南海

東南山水美　未有若明光　惜哉數千載
奇語無一章　吾今傲雲月　斗酒搜枯腸
安得李太白　百篇共商量